斐川町文化財調査報告第24集

平成11・12年度斐川中央工業団地造成に伴う

杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

――本文及び図版編――

2 0 0 1

斐 川 町 教 育 委 員 会

斐川町文化財調査報告第24集

平成11・12年度斐川中央工業団地造成に伴う

杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

── 本文及び図版編 ──

2 0 0 1

斐 川 町 教 育 委 員 会

御井神社（西から）

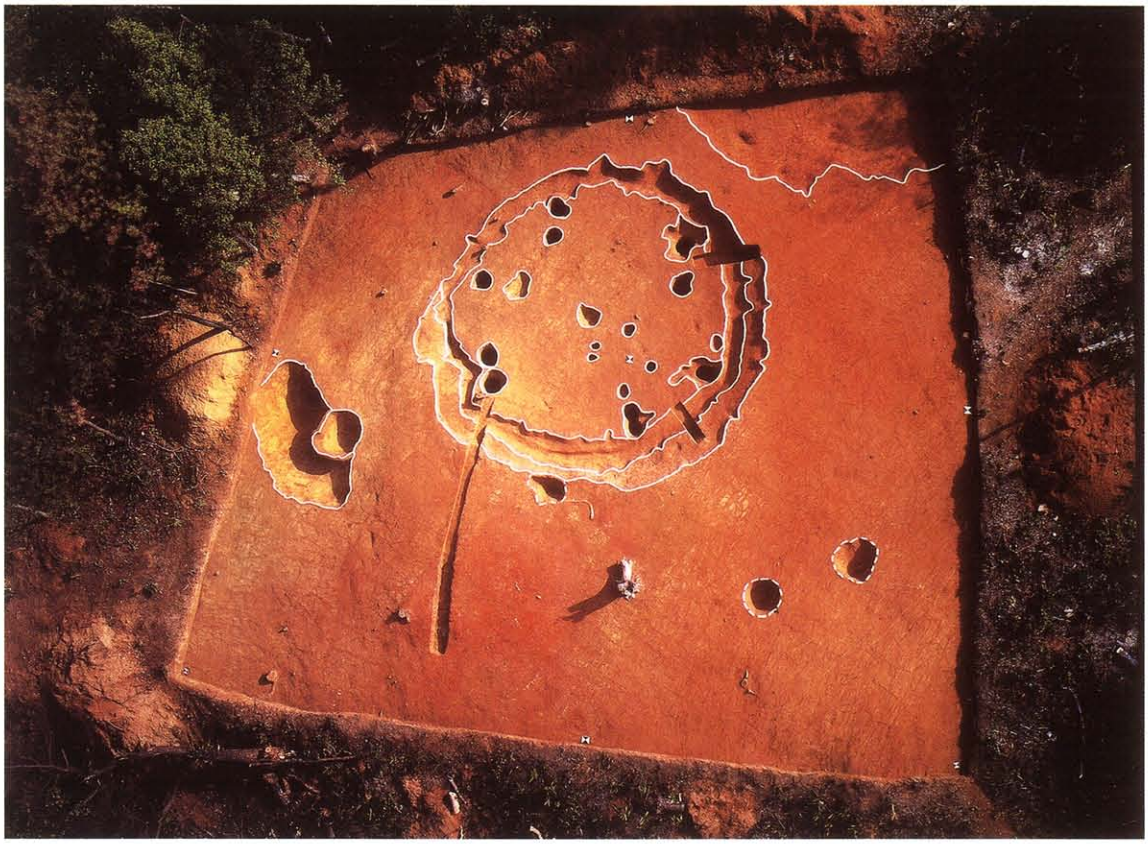
生（いく）　井（い）（西から）

福（さく）　井（い）（南西から）

綱長井（東北東から）

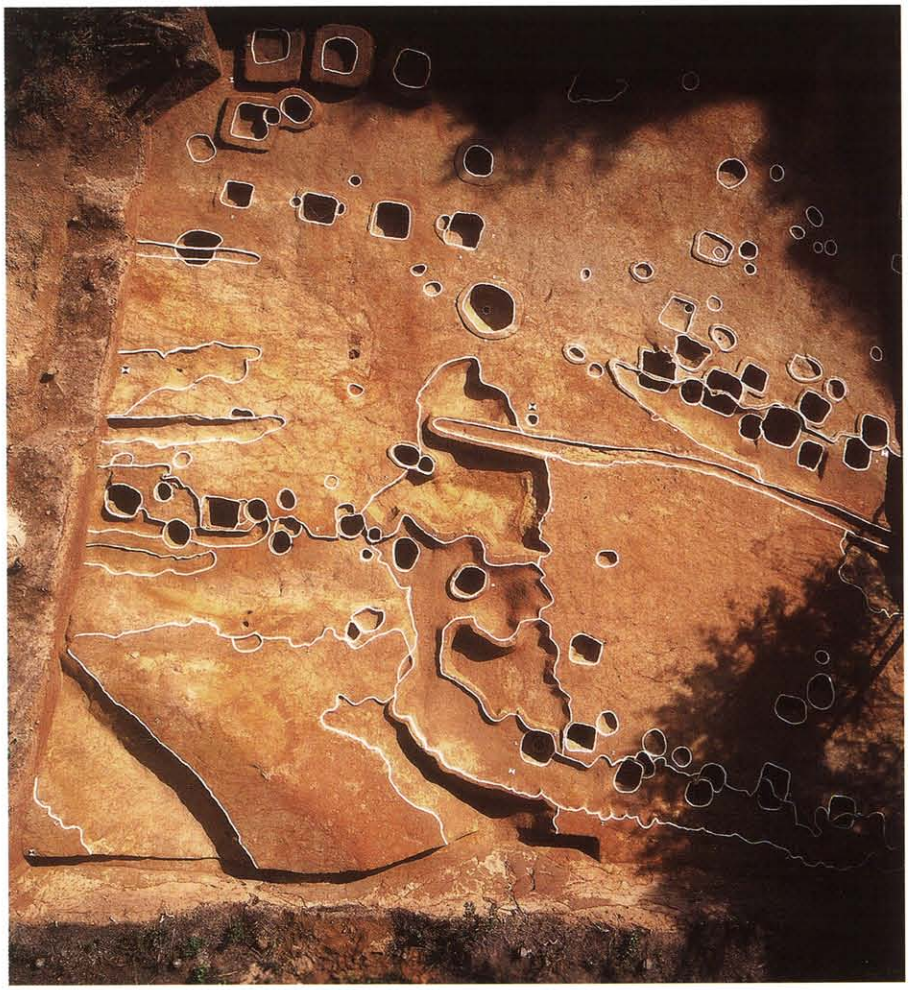
横口式炭焼窯（北西から）

墨書土器「三井」



杉沢Ⅲ遺跡 00－1区

堀切Ⅰ遺跡 00－1区



堀切Ⅰ遺跡00－2区

三井Ⅱ遺跡00－1区

序　　文

島根県東部の宍道湖西岸に所在いたします斐川町では、島根県の玄関口ともなる出雲空港を抱えております。この交通便利な立地を生かし、近年、町東部ではゴルフ場や農業公園などの観光開発、また、町西部では、企業誘致に伴う工業団地の造成や流通の効率化をはかるための道路の新設・改良などの開発が急激に進んでおります。

しかし、その一方で私たちの先人が残した貴重な文化遺産が、確実に破壊される危機に瀕しているのも事実であります。

開発に伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数もこれに比例して増加しておりますが、私たちはこのような文化財を守り、後世に伝えていかなければなりません。

この発掘調査によって得られる「人類が現代に至る発展の足跡」を皆様にご理解いただき、私たちのまち斐川町の過去の姿に思いをはせていただければ幸いと存じます。

末筆ではございますが、この調査にご指導・ご協力・ご理解をいただきました皆様に対して、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも文化財行政になお一層のご協力とご理解を賜りますようにお願い申し上げます。

平成13年３月

斐川町教育委員会

教育長　村　上　家　次

例　　言

1．本書は、斐川町土地開発公社より委託を受けて平成11・12年度に実施した斐川中央工業団地造成に伴う発掘調査報告書である。

2．本書は、本文及び図版編と別冊図版編の２冊により構成される。

3．調査期間は下記のとおり。

杉沢Ⅲ遺跡　　平成12年９月６日～平成12年11月25日
堀切Ⅰ遺跡　　平成12年５月18日～平成12年12月28日
三井Ⅱ遺跡　　平成11年５月12日～平成13年２月15日

4．調査地は下記のとおり。

杉沢Ⅲ遺跡　　島根県簸川郡斐川町大字直江町３７５３番地外
堀切Ⅰ遺跡　　島根県簸川郡斐川町大字直江町２４９３番地外
三井Ⅱ遺跡　　島根県簸川郡斐川町大字直江町２５２４－１番地外

5．調査組織は下記のとおり。

事務局　陰山　昇（斐川町教育委員会文化課　課長）・昌子裕江（同　係長　平成11年７月迄）・勝部節子（同　係長　平成11年７月～）・竹下真由美（同　職員）
調査員　松本堅吾（斐川町教育委員会文化課　主事）・陰山真樹（同　主事）・原　賢二（同　主事）・江角　健（同　主事　平成12年度）・伊藤歩美（同　嘱託　平成12年度）
調査員補助　阿部賢治（平成12年度）・大田晴美（平成12年度）
遺物整理　内田久美子・高木和子・大田晴美・錦田充子・青木由美（平成11年度）
調査指導　島根県教育委員会

6．調査の実施にあたっては、福間　敏・池田　透（以上　斐川町役場商工観光課）・北村　隆（斐川町土地開発公社）・宍道年弘（現　斐川町役場ふるさとデザイン課）・四方田三己（現　斐川町役場建設課）・江角修大・江角秀幸・谷口哲也・和田守敬介・飯塚康之・竹下菜穂・高橋優希・石川裕治（以上　斐川町立斐川東中学校）・北村隆明・錦織広司・阿川陽一・足立裕介・池田裕哉・釜田倫幸・佐次田大祐・手銭嗣人・春木　亮・川田浩之・内田拓央・高橋秀典・西谷　拓・宍戸歩・細川雄矢（以上　斐川町立斐川西中学校）・斎藤　学（法政大学）・山下　澪（千葉大学）・Boy.J.M.Akkermans　（Leiden Universitiy）・Remco Rijkhof　（Leiden Universitiy）・頃常久夫・栂　幸夫・錦織明郎・梶谷　亮・伊藤義郎・高根正春・樋野富義・土江一雄・玉木保郎・樋野定雄・黒田倶子・北脇チエコ・田村弓子・伊藤千代美・多久和一二三・福間立身・昌子芳夫・昌

子安正・昌子守蔵・小松原　茂・原　健信・古川定夫・上野　饒・岡田　實・池淵一夫・福島元義・原　　透・高木善郎・錦織武志・富田　清・昌子都子・原　輝子・昌子滝市・池田　良・昌子健二郎・遠藤繁雄・野津大吉・嘉藤文吉・小松原信吉・栂　　清・陰山正道・高木寿昭・金山次夫・佐藤倭和子・梶谷松代・黒田和恵・建部陽子・黒田　薫・田村勘一・土江文子諸氏らの協力を得た。

また、山中敏史（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室　室長）・佐藤　信（東京大学　教授）・金田章裕（京都大学　教授）・高橋美久二（滋賀県立大学　助教授）・澤田順弘（島根大学　教授）・木本雅康（長崎外国語短期大学　助教授）・椙山林継（國學院大学　教授）・平川　南（国立歴史民俗博物館　教授）・関　和彦（共立女子第二高等学校　教諭）・平野卓治（横浜市歴史博物館　学芸員）・篠原祐一（栃木県埋蔵文化財センター　主任）・菊地照夫（都立牛込高等学校　教諭）・木下　良（古代交通研究会　会長）・石井　悠（島根県文化財保護指導員）・川島芙美子（大東高等学校　教諭）・穴澤義功（房総風土記の丘　研究員）・伊藤瑞章（斐川砿業株式会社）・中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）・藤村　尚（鳥取大学　助教授）・野坂俊之（湖陵町教育委員会　主事）・川上昭一（八雲村教育委員会　主事）・池橋達雄（斐川町文化財保護審議会委員）・池田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）・多々納弘光（斐川町文化財保護審議会委員）・石川　功（ふるさと史研究会）・足立克己・椿　真治・池淵俊一をはじめとする島根県教育委員会文化財課ならびに西尾克己・内田律雄・平石　充・錦田剛志・林　健亮をはじめ島根県埋蔵文化財調査センターの方々からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。（順不同　、敬称略）

7．付篇として玉稿を賜った、池橋達雄先生、木本雅康先生、ならびに著書よりの抜粋掲載のお許しを賜った、池田敏雄先生に対しまして、記して厚く感謝の意を表する次第である。

8．木製品の樹種鑑定は、（財）元興寺研究所保存科学センターに委託し、協力を得た。

9．本調査にあたっては、用地周辺住民の方々には、多大なご迷惑をおかけする一方、格別なるご協力・ご配慮も賜った。ここに、記して感謝の意を表する次第である。

10．本書の編集は松本が、執筆は松本、三井Ⅱ遺跡00－４区の大半を阿部が、遺物実測は松本、阿部高木・錦田が、図版トレースは松本、阿部、高木がそれぞれ行なった。

凡　　例

1．図中の方位は基本的に座標北をあらわしている。ただし、図版 PL.23・24 は磁北を表している。

2．本文および図版中の示したレベル高は、すべて T.P.＋値（m）であるが T.P.＋は省略している。

3．遺物番号は、各調査区ごとに通し番号を付し、挿図・実測図版と写真図版で統一している。

4．文化財所在地名一覧表と PL.1 の番号は一致させた。

5．遺構の名称は、下記のとおりアルファベットの組み合わせによって表しているが、一部適当な呼称が見当たらないものは、そのまま日本語の名称によって呼称している遺構もある。また、遺構番号は 2 桁を原則として、1 桁の数字には前に 0 を付している。ただし、建物を構成するピットについてはその限りではない。

ＳＢ　建物　　ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　ＳＸ　性格不明遺構　　Ｐｉｔ　柱穴

6．本書で使用した土壌色は、小山正忠・竹原秀夫編著『新版標準土色帖』1988を用いて命名しているが、本文中は色相・明度・彩度の数値を省略している。

7．遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器・陶磁器－白抜き、須恵器－黒塗りに塗り分けた。

8．遺物の出土量をあらわすために用いたコンテナは、内容積27.5ℓのものである。

目　　次

巻頭カラー図版

序　文

例　言

凡　例

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　位置と環境 …… 2

第３章　杉沢Ⅲ遺跡の調査 …… 4

第１節　既往の調査 …… 4

第２節　00－１区の調査 …… 4

第４章　堀切Ⅰ遺跡の調査 …… 6

第１節　既往の調査 …… 6

第２節　00－１区の調査 …… 6

第３節　00－２区の調査 …… 8

第５章　三井Ⅱ遺跡の調査 …… 13

第１節　既往の調査 …… 13

第２節　99－１区の調査 …… 13

第３節　99－２区の調査 …… 22

第４節　99－３区の調査 …… 24

第５節　00－１区の調査 …… 25

第６節　00－２区の調査 …… 30

第７節　00－３区の調査 …… 33

第８節　00－４区の調査 …… 35

第６章　ま　と　め …… 55

付　　篇

「筑紫街道」についての一考察　――「出雲国風土記」駅路記事および地籍図遺称地名との関連から―― ……池橋　達雄… 97

出雲国宍道・狭結両駅間の古代駅路 ……木本　雅康… 111

古道と新道 ……池田　敏雄… 119

報告書抄録 …… 巻末

挿　図　目　次

第１図　杉沢Ⅲ遺跡00－１区出土の遺物 …… 5
第２図　堀切Ⅱ遺跡00－２区出土の鉄製品 …… 12
第３図　三井Ⅱ遺跡99－１区出土の石製品 …… 17
第４図　三井Ⅱ遺跡99－１区出土の鉄製品 …… 19
第５図　三井Ⅱ遺跡99－１区出土の銅製品 …… 19

第６図　三井Ⅱ遺跡99－２区出土の石製品 …… 24
第７図　三井Ⅱ遺跡00－１区出土の石製品 …… 29
第８図　三井Ⅱ遺跡00－２区出土の石製品 …… 33
第９図　三井Ⅱ遺跡00－３区出土の遺物 …… 34
第10図　三井Ⅱ遺跡00－４区２トレンチ１号窯検出時平面図 …… 45
第11図　三井Ⅱ遺跡00－４区２－３トレンチ出土の製錬滓 …… 51
第12図　三井Ⅱ遺跡00－４区３トレンチ出土の鉄製品 …… 52
第13図　三井Ⅱ遺跡00－４区９トレンチ出土の石製品 …… 52
第14図　福井付近出土の軒丸瓦 …… 56
第15図　『正倉院文書』優婆塞貢進状 …… 57

表　目　次

第１表　杉沢Ⅲ遺跡00－１区出土遺物観察表 …… 59
第２表　堀切Ⅰ遺跡00－１区出土遺物観察表 …… 60
第３表　堀切Ⅰ遺跡00－２区出土遺物観察表 …… 62
第４表　三井Ⅱ遺跡99－１区出土遺物観察表 …… 66
第５表　三井Ⅱ遺跡99－２区出土遺物観察表 …… 75
第６表　三井Ⅱ遺跡00－１区出土遺物観察表 …… 76
第７表　三井Ⅱ遺跡00－２区出土遺物観察表 …… 81
第８表　三井Ⅱ遺跡00－３区出土遺物観察表 …… 83
第９表　三井Ⅱ遺跡00－４区出土遺物観察表 …… 84
第10表　文化財所在地名一覧表 …… 86

巻頭カラー写真目次

巻頭カラー①　御井神社・生井・福井
巻頭カラー②　綱長井・横口式炭焼窯・墨書土器「三井」
巻頭カラー③　杉沢Ⅲ遺跡00－１区・堀切Ⅰ遺跡00－１区
巻頭カラー④　堀切Ⅰ遺跡00－２区・三井Ⅱ遺跡00－１区

別 冊 図 版 目 次

PL.　1　斐川町の文化財
PL.　2　漆沼郷　下直江村繪圖
PL.　3　調査区位置図
PL.　4　三井Ⅱ遺跡00－４区トレンチ位置図
PL.　5　杉沢Ⅲ遺跡00－１区平面図・断面図
PL.　6　杉沢Ⅲ遺跡00－１区SB01断面図
PL.　7　堀切Ⅰ遺跡00－１区平面図
PL.　8　堀切Ⅰ遺跡00－１区断面図
PL.　9　堀切Ⅰ遺跡00－１区SB01平面図・断面図
PL.　10　堀切Ⅰ遺跡00－２区平面図
PL.　11　堀切Ⅰ遺跡00－２区断面図
PL.　12　堀切Ⅰ遺跡00－２区SB01～04断面図
PL.　13　堀切Ⅰ遺跡00－２区SB05平面図・断面図
PL.　14　堀切Ⅰ遺跡00－２区遺構断面図①
PL.　15　堀切Ⅰ遺跡00－２区遺構断面図②
PL.　16　三井Ⅱ遺跡99－１区地区割平面図
PL.　17　三井Ⅱ遺跡99－１区平面図
PL.　18　三井Ⅱ遺跡99－１区断面図①
PL.　19　三井Ⅱ遺跡99－１区断面図②
PL.　20　三井Ⅱ遺跡99－１区断面図③
PL.　21　三井Ⅱ遺跡99－１区SK01～03断面図
PL.　22　三井Ⅱ遺跡99－１区遺構断面図
PL.　23　三井Ⅱ遺跡99－２区平面図・断面図
PL.　24　三井Ⅱ遺跡99－３区平面図・断面図
PL.　25　三井Ⅱ遺跡00－１区平面図
PL.　26　三井Ⅱ遺跡00－１区断面図
PL.　27　三井Ⅱ遺跡00－１区SB01・02断面図
PL.　28　三井Ⅱ遺跡00－１区SB03平面図・断面図
PL.　29　三井Ⅱ遺跡00－１区SB04平面図・断面図
PL.　30　三井Ⅱ遺跡00－１区SB05平面図・断面図
PL.　31　三井Ⅱ遺跡00－１区遺構断面図①
PL.　32　三井Ⅱ遺跡00－１区遺構断面図②
PL.　33　三井Ⅱ遺跡00－２区平面図

PL. 34　三井Ⅱ遺跡00－2区断面図
PL. 35　三井Ⅱ遺跡00－3区平面図・断面図
PL. 36　三井Ⅱ遺跡00－4区1トレンチ平面図・断面図
PL. 37　三井Ⅱ遺跡00－4区1トレンチ遺構断面図
PL. 38　三井Ⅱ遺跡00－4区2トレンチ平面図・断面図
PL. 39　三井Ⅱ遺跡00－4区2－2・2－3トレンチ平面図・断面図
PL. 40　三井Ⅱ遺跡00－4区2－2・2－3トレンチ遺構検出時平面図・断面図
PL. 41　三井Ⅱ遺跡00－4区3・4トレンチ断面図
PL. 42　三井Ⅱ遺跡00－4区6トレンチ平面図・断面図
PL. 43　三井Ⅱ遺跡00－4区7トレンチ断面図
PL. 44　三井Ⅱ遺跡00－4区8トレンチ平面図・断面図
PL. 45　三井Ⅱ遺跡00－4区9トレンチ平面図・断面図
PL. 46　三井Ⅱ遺跡00－4区10トレンチ断面図
PL. 47　三井Ⅱ遺跡00－4区11トレンチ断面図
PL. 48　三井Ⅱ遺跡00－4区12トレンチ平面図・断面図
PL. 49　三井Ⅱ遺跡00－4区12トレンチ遺構断面図・13トレンチ断面図

図　版　目　次

PL. 50　堀切Ⅰ遺跡00－1区出土の遺物
PL. 51　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物①
PL. 52　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物②
PL. 53　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物①
PL. 54　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物②
PL. 55　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物③
PL. 56　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物④
PL. 57　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑤
PL. 58　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑥
PL. 59　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑦
PL. 60　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑧
PL. 61　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑨
PL. 62　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑩
PL. 63　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑪
PL. 64　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑫

PL.　65　三井Ⅱ遺跡99－１区出土の遺物⑬
PL.　66　三井Ⅱ遺跡99－１区出土の遺物⑭
PL.　67　三井Ⅱ遺跡99－２区出土の遺物
PL.　68　三井Ⅱ遺跡00－１区出土の遺物①
PL.　69　三井Ⅱ遺跡00－１区出土の遺物②
PL.　70　三井Ⅱ遺跡00－１区出土の遺物③
PL.　71　三井Ⅱ遺跡00－２区出土の遺物
PL.　72　三井Ⅱ遺跡00－４区出土の遺物①
PL.　73　三井Ⅱ遺跡00－４区出土の遺物②
PL.　74　三井Ⅱ遺跡00－４区出土の遺物③
PL.　75　杉沢Ⅲ遺跡00－１区①
PL.　76　杉沢Ⅲ遺跡00－１区②
PL.　77　堀切Ⅰ遺跡00－１区①
PL.　78　堀切Ⅰ遺跡00－１区②
PL.　79　堀切Ⅰ遺跡00－１区③
PL.　80　堀切Ⅰ遺跡00－２区①
PL.　81　堀切Ⅰ遺跡00－２区②
PL.　82　三井Ⅱ遺跡99－１区①
PL.　83　三井Ⅱ遺跡99－１区②
PL.　84　三井Ⅱ遺跡99－１区③
PL.　85　三井Ⅱ遺跡99－１区④
PL.　86　三井Ⅱ遺跡99－１区⑤
PL.　87　三井Ⅱ遺跡99－２区
PL.　88　三井Ⅱ遺跡99－３区
PL.　89　三井Ⅱ遺跡00－１区①
PL.　90　三井Ⅱ遺跡00－１区②
PL.　91　三井Ⅱ遺跡00－１区③
PL.　92　三井Ⅱ遺跡00－１区④
PL.　93　三井Ⅱ遺跡00－１区⑤
PL.　94　三井Ⅱ遺跡00－１区⑥
PL.　95　三井Ⅱ遺跡00－１区⑦
PL.　96　三井Ⅱ遺跡00－１区⑧
PL.　97　三井Ⅱ遺跡00－２区
PL.　98　三井Ⅱ遺跡00－３区①
PL.　99　三井Ⅱ遺跡00－３区②
PL.　100　三井Ⅱ遺跡00－３区③

PL. 101　三井Ⅱ遺跡00－4区①
PL. 102　三井Ⅱ遺跡00－4区②
PL. 103　三井Ⅱ遺跡00－4区③
PL. 104　三井Ⅱ遺跡00－4区④
PL. 105　三井Ⅱ遺跡00－4区⑤
PL. 106　三井Ⅱ遺跡00－4区⑥
PL. 107　三井Ⅱ遺跡00－4区⑦
PL. 108　三井Ⅱ遺跡00－4区⑧
PL. 109　三井Ⅱ遺跡00－4区⑨
PL. 110　三井Ⅱ遺跡00－4区⑩
PL. 111　三井Ⅱ遺跡00－4区⑪
PL. 112　三井Ⅱ遺跡00－4区⑫
PL. 113　三井Ⅱ遺跡00－4区⑬
PL. 114　三井Ⅱ遺跡00－4区⑭
PL. 115　三井Ⅱ遺跡00－4区⑮
PL. 116　三井Ⅱ遺跡00－4区⑯
PL. 117　三井Ⅱ遺跡00－4区⑰
PL. 118　三井Ⅱ遺跡00－4区⑱
PL. 119　三井Ⅱ遺跡00－4区⑲
PL. 120　三井Ⅱ遺跡　石燈籠
PL. 121　杉沢Ⅲ遺跡00－1区出土の遺物
PL. 122　堀切Ⅰ遺跡00－1区出土の遺物
PL. 123　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物①
PL. 124　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物②
PL. 125　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物③
PL. 126　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物④
PL. 127　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物⑤
PL. 128　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の遺物⑥
PL. 129　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物①
PL. 130　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物②
PL. 131　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物③
PL. 132　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物④
PL. 133　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑤
PL. 134　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑥
PL. 135　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑦
PL. 136　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑧

PL. 137　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑨
PL. 138　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑩
PL. 139　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑪
PL. 140　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑫
PL. 141　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑬
PL. 142　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑭
PL. 143　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑮
PL. 144　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の遺物⑯
PL. 145　三井Ⅱ遺跡99－2区出土の遺物①
PL. 146　三井Ⅱ遺跡99－2区出土の遺物②
PL. 147　三井Ⅱ遺跡99－2区出土の遺物③
PL. 148　三井Ⅱ遺跡00－1区出土の遺物①
PL. 149　三井Ⅱ遺跡00－1区出土の遺物②
PL. 150　三井Ⅱ遺跡00－1区出土の遺物③
PL. 151　三井Ⅱ遺跡00－1区出土の遺物④
PL. 152　三井Ⅱ遺跡00－2区出土の遺物①
PL. 153　三井Ⅱ遺跡00－2区出土の遺物②
PL. 154　三井Ⅱ遺跡00－3区出土の遺物
PL. 155　三井Ⅱ遺跡00－4区出土の遺物①
PL. 156　三井Ⅱ遺跡00－4区出土の遺物②
PL. 157　三井Ⅱ遺跡00－4区出土の遺物③
PL. 158　三井Ⅱ遺跡00－4区出土の遺物④
PL. 159　三井Ⅱ遺跡00－4区出土の遺物⑤
PL. 160　三井Ⅱ遺跡00－4区出土の遺物⑥
PL. 161　三井Ⅱ遺跡00－4区出土の遺物⑦

第１章　調査に至る経緯と経過

島根県簸川郡斐川町は、県内市町村の中でも比較的大きな人口規模をもっている。また、恵まれた立地条件を生かして産業の振興を図るために企業誘致を推進し、近年ではハイテク産業の大手企業の進出が著しい。これに伴い工業団地の造成や幹線道路へのアプローチ道路の新設、既存道路の拡幅、山陰自動車道の建設など、交通網の整備も急務となってきている。このようななか、大型工場用地の不足によって、用地確保のために新たな工業団地の造成が計画された。

着工に先立ち、平成９年８月26日付けで斐川町長より斐川町教育委員会教育長宛に埋蔵文化財の有無を確認する分布調査の依頼が提出された。教育委員会は周知の遺跡を含む18.8haを対象に分布調査を行ない、試掘調査実施箇所の絞り込みを行なった。

平成11年４月より試掘調査を実施した結果、新たに杉沢Ⅲ遺跡や三井Ⅱ遺跡が発見され、造成工事予定地内での面的な遺跡の拡がりが認められた。

当初、トレンチ調査によって確認されたものは拡張によって本調査（発掘調査）に切替えて実施したが、トレンチ拡張があまりにも広範囲に拡がる可能性が出てきたために、調査方針を遺構の性格がある程度判断できる範囲でトレンチ拡張を止める確認調査に転換した。そのため、一部に遺構を完掘しなかった調査区も存在する。

平成12年５月、遺跡が想像以上に拡がりを見せ、なおかつ、かなり貴重な遺構や遺物が確認され始めたために、早い段階での開発側との調整の必要性が認められ、第１回目の開発側との協議を設定した。開発側との協議に先立ち、５月９日に島根県教育委員会の指導を仰ぐための調整会議を開き、これまでの試掘調査データから全面発掘の必要性があるとの見解に至った。６月６日には、この調整会議を受けて、斐川中央工業団地予定地内の遺跡の取り扱いを開発側の土地開発公社と町教育委員会文化課に町長と助役を含めて協議した。しかし、第１回目の協議はこれまでの試掘調査および確認調査の結果の概要説明で終わり、取り敢えずは面積が狭い部分の町道杉沢線より西側のみの開発を見込み、優先して杉沢線西側の試掘調査に入ることとなった。

平成12年９月、町道杉沢線より西側も含め、遺跡は造成で破壊される予定の丘陵部分の大半に拡がりを見せた。そのため、第２回目の開発側との協議が予定された。前回と同様、協議に先立ち、９月26日に県教育委員会との調整会議を設定した。この調整会議でも、かなり貴重な遺跡であるという認識がなされたが、試掘調査面積の不足から、この段階での判断は困難であり、第１回目の指導内容と概ね同じであった。また、開発側から全面調査の期間、予算などの見積りを提示してほしいという依頼があり、近年に大規模開発の調査を実施した松江市の田和山遺跡や鳥取県淀江町・大山町の妻木晩田遺跡の調査期間、調査体制、調査費などを参考に積算し、提示した。11月６日に第２回目の開発側との協議が行なわれたが、具体的な今後の取り扱いや方針についての検討までには至らなかった。

結局、この後に数回の協議を実施したが、斐川中央工業団地予定地内の遺跡の取り扱いについては平成13年度以降に持ち越すこととなった。そのため、本書は今後の遺跡の取り扱いについて判断するためのデータをまとめた中間報告的な確認調査の報告書である。

報告書作成のための整理作業は、平成11・12年度の調査と並行して行ない、本書の刊行に至る。

第２章　位置と環境（第10表、PL.１・２）

まず、斐川町全体を地形的に概観してみることにする。当町は島根県東部の宍道湖西岸に位置し、西から北にかけては、天井川といわれる第１級河川の斐伊川によって境を成し、南側については標高 366mの仏経山（神名火山）を中心とした標高 300m級の城平山、高瀬山、大黒山などの東西に連なる山地によって仕切られている。町面積の概ね50％は、斐伊川によって形成された沖積地で、斐伊川右岸に立地する町北部に展開する。残りの南側約50％は、山地を含め、山地から派生する低丘陵によって構成されている。

遺跡の分布では、北側の沖積地にはほとんど存在せず、その大半が南側の山地や低丘陵地帯あるいは低丘陵に挟まれた谷部に集中している。

主要な遺跡の分布をみてみると、昭和59年に 358本の銅剣が、翌年の昭和60年には６個の銅鐸と16本の銅矛が、それぞれ出土した荒神谷遺跡（国史跡指定）、全長48m以上の前方後円墳である神庭岩船山古墳（県指定文化財）や直径32m、高さ５ｍの円墳である小丸子山古墳（町指定文化財）、もともとは前方後円墳であったと考えられる軍原古墳などの古墳時代中期の古墳、正倉跡が確認されたことから、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』にみられる出雲郡の郡家と推定される後谷遺跡[1]、16世紀頃に出雲で勢力をふるっていた尼子氏の家臣で、出雲十旗の一つに数えられる米原氏が居城とした高瀬山の高瀬城も、この南部の山地から低丘陵地帯に立地する。

当該調査地周辺の遺跡分布をみてみると、多くの遺跡が確認されている。北側には須恵器、石鏃がみつかった堀切Ⅲ遺跡、東側では須恵器、磁器の散布地の八斗蒔Ⅰ遺跡や結西谷Ⅰ遺跡、土師器、須恵器の散布地である八斗蒔Ⅱ遺跡、奈良時代頃の軒丸瓦が発見された堀切瓦出土地、須恵器の散布地である堀切Ⅱ遺跡、須恵器、土師器の散布地の結本谷Ⅱ・直江石橋Ⅱの両遺跡が確認されている。南には、円墳４基、方墳３基が確認され、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、須恵器、土師器などが出土した三斗蒔遺跡、住居跡が検出された三井Ⅰ遺跡、結西谷Ⅲ遺跡、須恵器、磁器が認められた結西谷Ⅱ遺跡や２基の古墳が確認された結西谷古墳群や神氷三メ田古墳群があり、西側には、平成７年度の試掘調査で発見された杉沢Ⅱ遺跡、平成10年度の中国電力の特別高圧送電線直江川跡線の５号塔建設に伴う試掘調査で発見された三メ田遺跡[2]では奈良時代頃の掘立柱建物が３棟検出された。

今回の調査予定地には周知の遺跡として、一辺７ｍの方墳と思われる三井古墳、円墳１基と墳形不明の古墳１基が確認されている堀切古墳群、須恵器の散布地として知られる堀切Ⅰ遺跡が含まれる。また、平成４年度より実施された町道杉沢線改良工事に伴う試掘調査で発見された杉沢遺跡[3]も一部含まれる。この杉沢遺跡では、弥生時代の竪穴住居１棟、古墳時代前期から中期にかけての土壙墓５基と土器棺墓１基などが確認され、さらには、同事業で３穴以上の横穴が認められた杉沢横穴群も見つかっている。

史料[4]でみてみると、この辺りは出雲郡漆治郷に比定されている。『出雲国風土記』には漆治郷が三里からなると記載され、『正倉院文書』「出雲国大税賑給歴名帳」では漆治郷に、深江里、工田里、犬上里の三つの里名がみられる。今回の調査地東側には『出雲国風土記』に登場する御井社があり、その周辺には御（三）井社の由来である生井（いくい）、福井（さくい）、綱長井（つながい）の三つの

井戸も現存する。また、近世絵図として「文政六年漆治郷下直江村繪圖」（斐川町大字直江町　原弘氏　所蔵）が存在し、地方としては古い時代から鮮明な史料が残っている稀な地域である。

このように、周辺には主に古墳時代以降の遺跡がかなり密集した状態で立地し、また、文献でもその痕跡を伺い知ることができるため、同時代このあたりも人々の生活圏であったことは間違いないと思われる。周辺の遺跡の分布状況から判断して、今回の調査では古墳、横穴墓、住居跡、寺院跡、窯跡など何が検出されても不思議ではない場所である。

当該調査対象地は斐川町のほぼ中央部に位置し、南の神名火山である仏経山から派生する標高35～45m程度の低丘陵および低丘陵に挟まれた谷部分であり、現況は主に山林または水田である。

註　①　斐川町教育委員会『斐川町文化財調査報告15　後谷Ⅴ遺跡』1996

②　中国電力㈱島根支店・斐川町教育委員会『斐川町文化財調査報告第22集　三メ田遺跡　中国電力㈱特別高圧送電線路直江川跡線５号塔建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1999

③　斐川町教育委員会『斐川町文化財調査報告13　町道杉沢線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報（杉沢遺跡）』1995

④　斐川町史編纂委員会『斐川町史』1972

第３章　杉沢Ⅲ遺跡の調査（第１図、第１・10表、PL.1・3・5・6・75・76・121）

第１節　既往の調査（第10表、PL.1）

杉沢Ⅲ遺跡は、当該事業で平成11年４月より実施した試掘調査によって発見された遺跡である。この調査によって、遺構は掘立柱建物２棟や土壙など、遺物としては須恵器、土師器などがそれぞれ確認された。今回の報文は平成12年度のみにとどめ、２間×３間の側柱建物や２間×２間の総柱建物が検出された調査区を含む平成11年度調査の報告は今後の機会としたい。

第２節　00－１区の調査（第１図、第１・10表、PL.1・3・5・6・75・76・121）

１．位　置（第10表、PL.1・3・75）

調査区は、標高34m程度の低丘陵上である。尾根上は全体的に、いわゆるやせ尾根で面的な拡がりはほとんど認められないが、調査区設定場所については、わずかに平坦面が拡がっている。

２．層　位（PL.5・76）

基本的な層位は、暗赤褐色の表土を剥ぐと第２層の砂っぽい橙色土あるいは明赤褐色の層を介在して、地山に至る。

３．遺　構（PL.5・6・75・76）

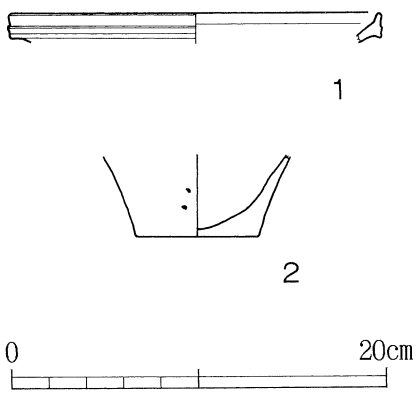
当該調査区では竪穴住居、ピット、土坑、性格不明遺構などが検出された。

SB01は直径約7.6mの円形を呈する竪穴住居である。埋土は炭を微量含んだ明褐色まじりの明褐灰色土、あるいはにぶい赤褐色シルトで、いずれも密度が非常に低い。東側の壁体はほとんど残っていないが、西側の残りが良好な部分で約50cmを測り、壁の立ち上がりは角度は45～50°である。床面は地形的な要素もあるが、東側に向けてわずかに傾斜している。また、床面では小さいもので直径20cmのものから、大きいもので直径60cmの規模をもつものまで、大小合わせてピットが17ヵ所検出された。主柱穴は周壁溝に沿って、対角線上に６ヵ所と中央に一つの計七つであったと思われる。周壁溝沿いの６ヵ所については同規模のピットが一つ接しているものもあるため、建て替えがあったものと思われる。形は楕円形で長径が40～60cm、深さは50～105cmを測る。

Ｐit01・Ｐit02はSB01の西側で検出された。埋土である赤褐色まじりの橙色土は密度が非常に低く、木の幹が入り込んでいたために、当初は比較的新しいものと判断したが、SB01埋土の密度がかなり低かったことを考慮するとSB01と同時期のものである可能性も否定できない。Ｐit01は長径92cm、短径88cmの楕円形で深さは約40cmを測る。Ｐit02は長径が80cm、短径は72cmの楕円形で、深さは約50cmである。いずれも埋土より遺物は検出されなかった。

SK01は長径120cm、短径が100cmの楕円形である。深さは約50cmを測り、埋土はにぶい褐色土で炭を少量含む。遺構内より遺物は確認されなかった。

SX01はSK01に切られる形で確認された。長径3.6m、短径2mのほぼ楕円形を呈する。深さは最深部で約50cmを測る。埋土は炭を微量含んだ明赤褐色土であり、埋土中に遺物は含まれていなかった。



第1図　杉沢Ⅲ遺跡00－1区出土の遺物

4．遺　物（第1図、第1表、PL.121）

遺物はすべてＳＢ01から出土している。いずれも細片であったため、実測に耐えうるものはわずかであった。

1～2は弥生土器である。1は磨滅が著しいが、甕の口縁部と思われる。復元口径は19.6cmを測り色調は浅黄橙色を呈する。胎土は1mm以下の砂粒を少量含む。口縁端部は上下にわずかにのび、2条の凹線が施されている。2は甕の底部と考えられ、胴部に向かっては、急に立ち上がる。わずかではあるが、刺突文の様な痕跡が2点認められる。色調は内面が浅黄橙色から橙色で、外面が橙色から黒褐色を呈する。胎土は1mm以下の砂粒を多量に含む。

第４章　堀切Ｉ遺跡の調査（第２図、第２・３・10表、PL.1・3・7～15・50～52・77～81・122～128）

第１節　既往の調査（第10表、PL.1）

堀切Ｉ遺跡は、昭和58年11月の分布調査で古墳から奈良時代頃の杯、壺、甕などの須恵器片が採取されたことにより周知された遺跡であり、遺跡範囲は主に低丘陵の緩やかな斜面である。分布調査の際に、地元の聞き取り調査で近くに横穴墓があったという話が記録されている。しかし、場所などの詳細については明らかではない。遺跡が周知された後に発掘調査が実施されたのは今回が初めてである。

第２節　00－１区の調査（第２・10表、PL.1・3・7～9・50・77～79・122）

１．位　置（第10表、PL.1・3・77）

調査区は低丘陵の裾部分に位置し、標高は９ｍ程度である。平坦な地形であり、削平されたものと思われる。過去に水田が営まれていたようであるが、現況は原野である。

２．層　位（PL.7・8・78）

基本的な層位は、表土を除去すると第２層は旧耕作土と考えられる灰褐色シルトが露呈する。第３層は第２層の床土で、第４層の炭を微量と２～５㎜大の礫を多量に含んだ明褐灰色まじり明赤褐色シルトに至る。遺構検出は安定した状態で行なうことを目的として、この第４層の直下層上面で行なった。調査区東側については時期は明らかではないが、一度削られ、その後に盛土が施されている。

17～19層はピットと思われ、18層は柱痕と考えられる。位置的に判断して、SB01の南側で検出された柱穴列の延長であると思われる。

３．遺　構（PL.7～9・77～79）

遺構として掘立柱建物、溝状遺構、建物として確認されなかったピットなどが検出された。

側柱建物であるSB01は、奈良時代後半～平安時代前期頃の建物と思われる。梁行２間（４ｍ）、桁行５間（11ｍ）で、柱間は梁行が2.0ｍ、桁行は2.2～ 2.4ｍである。面積は44㎡を測り、柱筋はほぼ東西軸に平行する。南側の桁行に平行するピット列についてはSB01の南面庇になるのか、別の建物を構成するものか、現段階では判然としない。また、Pit25辺りのピットとPit37がSB01の棟持ち柱になり、屋内棟持ち柱をもつ可能性も否定できない。SB01を構成するピットについては全体的に残りが悪く、西側のものほどピットの深さが比較的浅くなることから判断して、SB01が建てられた当時はもともと東側に下りる緩やかな斜面であったものと考えられ、後世にかなりの削平を受けたものと思われる。

SD01は調査区外へ展開するため、全長は明らかではない。枝分かれして検出されたが、切り合い関係が不明のため、一つのものとして扱った。北側の方は最大幅2.4ｍ、深さは約50㎝を測る。南側

のものは最大幅が約２ｍで、深さは最大で70㎝を測る。いずれも人為的な掘削による溝というよりも自然流路的な溝と考えられる。遺構内埋土から遺物は確認されなかった。

４．遺　物（第２表、PL.50・122）

遺物は調査区全体から縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。

１は縄文土器である。貼り付けの突帯に刻み目が施されている。色調は内面がにぶい橙色で、外面はにぶい赤褐色である。胎土は粗く、３㎜以下の砂粒を多量に含む。表土層から出土したため、２次堆積したものと考えられる。

２は弥生土器の壺あるいは甕の底部と思われる。復元底部径は8.4㎝、色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい橙色で部分的ににぶい赤褐色を呈する。胎土は粗く、２㎜以下の砂粒を多量に含む。１と同様に表土層から出土した。

３は土師器の壺で復元口径は18.2㎝を測る。胴部から頸部はまっすぐに立ち上がり、口縁部は屈曲して外に拡がる。口縁端部は段をつけて先細りし、端部先端は面取りされ、わずかに凹みをもつ。口縁部内面と胴部外面には縦方向のナデが認められる。色調は大部分が褐色で、一部に黒褐色の部分もある。胎土は２㎜以下の砂粒を微量含む。第２層～第４層で出土した。

４～７は須恵器の蓋である。いずれもつまみが付くものと思われる。

４は復元口径が18.6㎝を測るものと思われる。口縁端部付近で屈曲し、端部へ向けてわずかに外反してのびる。色調は内面が灰色、外面は灰白色を呈し、胎土は砂粒を微量含む。第２層～第４層で出土した。

５は復元口径が15.9㎝で、口縁端部付近で一旦外側へ拡がり、すぐに内側へ屈曲して端部へ向けてまっすぐのびる。色調は内外面ともに青灰色を呈し、胎土は１㎜以下の砂粒を微量含む。Pit25より検出された。

６は復元口径が13.9㎝を測り、口縁端部付近で屈曲し、端部は非常に短い。色調は内外面とも褐灰色で、胎土は１㎜以下の砂粒を微量含む。Pit51より出土した。

７は細片のため、口径は計測できなかった。口縁端部付近で外反してのびる。色調は内外面ともに青灰色で、胎土は0.5㎜以下の白色の砂粒を少量含む。Pit25より出土した。

８～20は須恵器の杯と思われる。

８は復元口径が12.2㎝である。底部から口縁部に向かって内湾してのび、口縁端部付近でごくわずかに屈曲して微妙に外側へ開き、端部は非常に丸みを帯びている。色調は内外面とも灰色で、胎土は0.2㎜以下の砂粒を極微量含む。地山直上より出土した。

９は復元口径が10.4㎝である。底部から口縁端部に向かってまっすぐにのびる。色調は主に灰色を呈し、胎土は0.5㎜以下の砂粒を極微量含む。第２層～第４層より出土した。

10は復元口径が11.2㎝で、平らな底部から口縁部に向かってまっすぐのび、口縁端部付近でわずかに外傾する。色調は灰色で、胎土には白色あるいは黒色の粒を微量含んでいる。第２層～第４層で検出された。

11～14は細片のため、口径は計測できなかった。いずれもピット内より出土し、11・12はSB01を

構成するピットから出土している。11は底部から口縁端部に向かって内湾しながらのびる。12～14は底部から口縁端部に向かって内湾しながらのび、端部付近でわずかに外反するものである。

15は復元口径が18.0cmを測る。底部から口縁部に向かってわずかに内湾してのび、口縁端部は丸みを帯びている。色調は灰色で、胎土は0.5mm以下の砂粒を微量含む。遺構面精査時に検出された。

16～19は高台の付く杯底部と考えられる。

16は復元底部径が 7.7cmであり、底部には糸きり痕が認められる。焼成はやや不良で、色調は内面が明オリーブ灰色、外面は灰色である。胎土は0.5mm以下の砂粒を多量に含む。SB01のPit 9 より出土した。

17は復元底部径が7.0cmを測る。色調は内面が淡青灰色、外面は青灰色である。胎土は0.5mm以下の砂粒をやや多く含む。SB01のPit 5 より出土した。

18は壺の底部である可能性もある。復元底部径は8.2cmを測り、焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色を呈する。Pit51から出土した。

19は復元底部径が7.6cmであり、底部には糸きり痕が認められる。焼成はやや不良で、色調は内面が暗灰色、外面は灰色である。胎土は 1 mm以下の白色の砂粒を微量含む。北側部分の第 4 層より検出された。

20は平らな底部に糸きり痕が認められ、復元底部径は5.7cmを測る。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色を呈する。胎土には0.5mm以下の砂粒を微量含む。Pit25より出土した。

21は須恵器壺の口縁部と思われる。復元口径は21.6cmを測り、口縁端部付近に 2 条の沈線をもつ。端部先端は平らで、外側に拡がる。焼成は良好で、色調は内面は灰色、外面は暗褐色である。胎土は白色の砂粒を微量含む。南東部分の第 3 層～第 4 層上面で検出された。

22は脚部は欠損しているが須恵器の高杯杯部である。復元口径は16.0cmを測り、底部から口縁部に向かってわずかに内湾しながらのびる。口縁端部は先細りし、丸味を帯びている。焼成は良好で、色調は内面が灰白色～灰褐色、外面は灰赤色を呈する。胎土は 2 mm以下の砂粒を少量含む。南東部分の第 3 層～第 4 層上面より出土した。

第 3 節　00－ 2 区の調査（第 2 図、第 3 ・10表、PL. 1・3・10～15・51・52・80・81・123～128）

1．位　置（第10表、PL. 1・3）

調査区は00－ 1 区の西側に位置する標高約38mの低丘陵の斜面である。調査区の標高は10～17mを測り、現況は山林になっている。調査区も含め周辺の斜面には、人為的につくられたと思われる獣道のようなテラスが帯状にのびている。これは現況で認められるが、いつ築かれたものなのか明らかではない。

2．層　位（PL. 10・11・81）

表土を除去すると数層の堆積層を介在して、橙色の地山が露呈する。遺構検出はこの地山上面で試みた。遺構検出をした地山面で、建物を建てるために斜面を切り盛りしたと思われる痕跡が認められ

たが、先述したとおり、現地形でも帯状のテラスが確認され、地表面のテラスとほぼ同じ部分で検出されている。そのため、現在までその痕跡のなごりが残っているのかもしれない。

3．遺　構（PL.10～15・80・81）

遺構は、テラス状遺構が2ヵ所、掘立柱建物8棟、溝状遺構が6条、性格不明遺構3基が検出された。いずれも奈良時代後半～平安時代前期以降の時期に築かれたものと考えられる。

テラス状遺構01・02は緩やかな斜面を「L」字状に削って平坦面を形成したものである。調査区外に展開するために全長は明らかではない。おそらく削り出した土を前に出して盛土し、もともと形成時の平坦面は検出した面積の2～3倍の規模があったかもしれない。また、平坦面には円形あるいは方形の柱穴列がみとめられ、掘立柱建物を建てるために、切り盛りしたものと考えられる。

テラス状遺構01は調査区中央部でズレが生じているが、検出時に切り合い関係が確認されなかったために一つのものとして捉え、西側と東側に分類した。西側は最大幅が1.2m、深さが10㎝程度である。東側は最大幅が2.0mで、深さが約30㎝を測る。西側部分ではSB01・02が検出され、東側ではSB07・08、SD01・02がそれぞれ確認された。埋土中より土師器、須恵器が出土している。

テラス状遺構02は調査区の西側で確認された。最大幅が1.8mで、深さは20㎝程度を測る。遺構内ではSB03・04・06が検出された。埋土より土師器片、須恵器片が出土している。

SB01～08は掘立柱建物である。切り合い関係をもつものはわずかで、前後関係が明らかなものとして、テラス状遺構01東側で検出された建物群のSB01はSB02より新しい。また、テラス状遺構02で確認されたSB06はSB03よりも新しい建物である。

SB01は桁行4間（6.4m）の掘立柱建物と思われる。柱間は1.6m、柱筋はほぼW－82°－Eを示す。ピットは一辺が50～60㎝の隅丸の方形で、深さは50～60㎝程度を測る。

SB02は梁行1間以上（1.6m以上）、桁行3間（4.0m）の建物と思われる。梁行の柱間は1.6m、桁行の柱間は1.3～1.6m、柱筋はほぼW－84°－Eを示す。ピットは一辺が50～60㎝の隅丸の方形で、深さは20～65㎝程度である。

SB03は梁行1間以上（1.6m以上）、桁行3間（5.4m）の建物と思われる。梁行の柱間は1.6m、桁行の柱間は1.8m、柱筋はほぼ東西軸に平行する。ピットは一辺が60～90㎝の隅丸の方形で、深さは60～80㎝を測る。

SB04は梁行2間以上（2.4m以上）、桁行3間（4.8m）の建物と思われる。梁行の柱間は1.2m、桁行の柱間は1.6m、柱筋はほぼ東西軸に平行する。ピットは一辺が60～70㎝の隅丸の方形で、深さは40～70㎝程度を測る。

SB05は南西角のピットが一つ欠落しているが、梁行2間（3.6m）、桁行3間（5.4m）の建物である。梁行の柱間は1.8m、桁行の柱間は1.8m、床面積は19.44㎡を測る。柱筋はほぼW－78°－Eを示す。ピットは一辺が60～80㎝の隅丸の方形で、深さは南側柱穴列が10～20㎝と比較的浅く、北側のものは40～55㎝である。

SB06は梁行1間以上（1.6m以上）、桁行2間（3.2m）の建物と思われる。梁行の柱間は1.6m、桁行の柱間は1.6m、柱筋はほぼW－84°－Eを示す。ピットは一辺が50㎝程度の隅丸方形で、深さは

桁行のものが70～80㎝程度を測り、梁行の一つについては約10㎝と非常に浅い。

SB07は梁行１間以上（1.6m以上）、桁行２間（4.0m）の建物と思われる。梁行の柱間は1.6m、桁行の柱間は2.0m、柱筋はほぼW－75°－Eを示す。ピットは直径が20～60㎝の円形で、深さは35～80㎝程度を測る。

SB08は桁行２間以上（6.4m以上）の建物と思われる。柱間は1.6m、柱筋はほぼW－79°－Eを示す。ピットは直径が50㎝程度の円形で、深さは桁行のものが40～45㎝程度を測り、梁行の一つについては約10㎝と、非常に浅い。

SD01はテラス状遺構01東側内で検出された。全長は2.7m以上で、幅は約40㎝、深さは最深部で15㎝を測る。埋土は単層で、炭を少量含む、にぶい赤褐色土である。

SD02もテラス状遺構01東側内で検出された。全長は3.7m以上で、最大幅は約48㎝、深さは最深部で15～20㎝を測る。埋土は２層で構成され、上層から、炭を少量含む、にぶい橙色土で、下層は灰褐色まじりの橙色土である。

SD03は全長は3.2m以上で、最大幅は約135㎝、深さは最深部で45㎝を測る。溝状遺構というよりも、むしろテラス状遺構といえるかもしれない。しかし、テラス状遺構01・02のように遺構内でピットや溝状遺構などは検出されなかった。

SD04は全長が5.6m以上で、幅は約2.2m、深さは最深部で40㎝を測る。断面形は「V」字状を呈し、埋土中より須恵器片が出土した。

SD05は調査区中央部で分断されるが、位置や幅、深さなどの規模、埋土から判断して、一連のものと考えられる。幅は25～40㎝で、深さは約20㎝を測る。埋土は、ぼそぼそという感じで比較的密度が低いために、新しいものかもしれない。また、埋土中に遺物は確認されなかった。

SD06は全長が2.8m以上で、幅は約30㎝、深さは最深部で８㎝を測る。断面形は「U」字状を呈する。SD05と同様に埋土の密度は低く、遺物は認められなかった。

SX01は長径1.2m，短径1.1mの楕円形を呈し、深さは最深部で約40㎝を測る。遺構底部では直径約20㎝、深さが20㎝の柱痕状のものが確認された。また、遺構の埋土上面より土師器片が出土している。

SX02は谷地形の上面で検出された。長径75㎝、短径55㎝の楕円形を呈し、深さは約50㎝である。埋土には炭を多量に含んでいるが、遺物は検出されなかった。

SX03は側溝で切られたために全体の形は不明であるが、現状では、長径1.6m，短径1.1mの不定型を呈する。深さは10㎝程度と比較的に浅い。遺構内より土師器片や須恵器片がわずかではあるが出土した。

谷地形は調査区の中央部で調査区を東西に分断するように確認された。全長は9.6m以上、最大幅は４mで、深さは最深部で50㎝を測る。埋土中に遺物は含まれていなかった。

４．遺　物（第２図、第３表、PL.51・52・123～128）

遺物としては、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、瓦質土器、鉄製品、炉壁片などが検出された。時期は主に古墳時代後期以降の所産のものであると思われる。なお、土器などの土製品について個々

の詳細は遺物観察表に譲ることにする。

1～7は土師器の甕口縁部と思われる。1・2ともに口縁部が外反してのび、口縁端部は丸い。1の頸部以下の内面には横方向のヘラケズリの痕跡が認められる。3は口縁部がほぼまっすぐにのび、断面で形成時における粘土帯の接合痕が見られる。4・5は口縁部が外反してのび、口縁端部はやや肥厚する。4の頸部以下の内面には横方向のヘラケズリが、外面にはハケメがそれぞれ残っている。6は復元口径が16.6cmと小型で、口縁部は外反し、口縁端部はわずかに先細りする。7も口縁部は外反してのび、頸部以下の内面には横方向のヘラケズリが認められる。

8～15は須恵器の蓋である。すべてつまみが付くものと思われる。8は天井部から屈曲し、やや外反気味に口縁部へのびる。口縁端部は尖っている。9は天井部から内湾してのび、口縁端部付近で屈曲してやや外反気味に端部へ至る。10は器壁が厚く、天井部から口縁部へほぼまっすぐ下り、口縁端部は屈曲して短くのびる。11は天井部から口縁部へやや外傾気味に下り、10と同様に口縁端部付近で屈曲して短くのびる。12～15は輪状つまみがつく天井部である。15は焼成が不良で、輪状つまみの内側にはカキ目状の調整痕が残っている。

16～42は須恵器の杯である。16は短い立ち上がりをもつものであり、受け部はやや上方にのびる。17～20は底部に糸きりが認められる。17は底部から内湾して口縁部にのび、口縁端部はわずかに内傾している。18もやや内湾気味に口縁部へのびるが、口縁端部は外反する。19は平らな底部から口縁部に向かってまっすぐにのび、口縁端部付近でわずかに外反する。20は底部の中心あたりでやや上げ底になる底部から口縁部に内湾してのび、口縁端部は外反する。21はやや変形している。ヘラ切りと思われる底部から内湾し、口縁部に至り、口縁端部は外反する。22はやや上げ底の底部から口縁部に向かってほぼまっすぐにのび、口縁端部はわずかに肥厚する。23は復元口径が12.0cmを測るやや大型の杯である。回転糸きりの痕跡が残る底部から内湾して口縁部に向かい、口縁端部は外反する。24は底部からやや内傾してのび、口縁端部は「く」の字状を呈する。25は平らで、26はやや上げ底の、いずれも糸きり痕の残る底部である。27～34は杯の口縁部である。27～30は口縁部に向かって内傾してのび、口縁端部は肥厚する。31・32も口縁部に向かって内傾してのびるが、口縁端部はわずかに外反する。33・34は口縁部に向かってほぼまっすぐにのびる。33については口縁端部がわずかに肥厚する。35～42は底部に高台がつくものである。35・36は高台がつく底部から内湾して口縁部にのびる。37はやや高めの高台がつく底部である。38は糸きりの痕跡が認められる底部から高台がのびる。高台は段を有し、先端は尖っている。39は糸きり痕跡が残る底部から斜め方向に高台がまっすぐのびる。40は底部から斜め方向に高台がのび、高台の先端はわずかに外反する。41は糸きり痕が認められる底部からほぼ垂直に高台が下り、高台の先端はわずかに外側へ拡がる。42は底部径が 7.4cmとやや小型で、平らな底部から短い高台がつく。42についてはコップ形の可能性もある。

43～45は須恵器の皿と思われる。43は底部から口縁部に向かって内湾してのびる。44は口縁端部で外側に屈曲する。45は糸きり痕跡が残る底部から口縁部に向かって外反してのびる。

46は須恵器の高杯である。口径は22.2cm、器高が11.8cmと大型の高杯で、杯部は比較的浅く、脚部には透し窓をもたない。

47・48は須恵器壺の底部と思われる。47は糸きり痕の残る平らな底部から高台がほぼ垂直に下り、

高台の先端は平坦である。48は高台が外反してのび、先端は斜め上方に拡がる。

49・50は須恵器の甑と思われる。いずれも内面は当て具痕をナデで消そうとした痕が見られ、外面にはタタキ痕と2条の沈線が認められる。

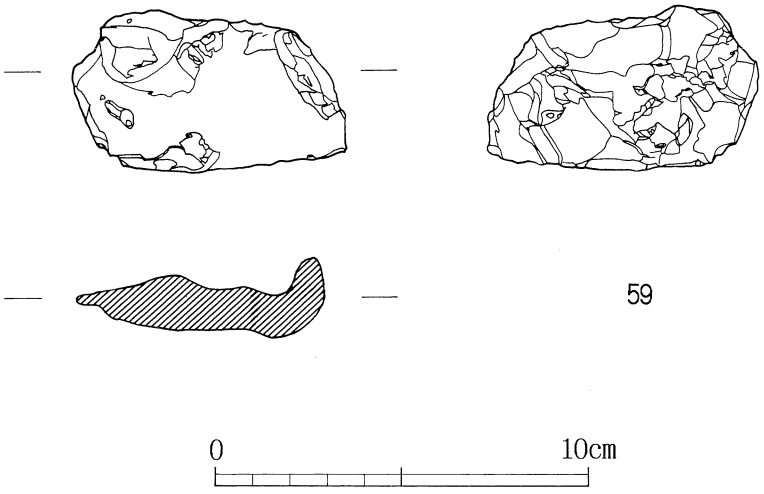
51～55は土師質土器の皿と考えられる。51は高台が欠損しているが、底部から外反して口縁部にのびる。52は短い高台がつく底部から口縁部に向かってほぼまっすぐにのびる。53は高台をもたないものである。平らな底部からほぼまっすぐにのび、口縁端部はやや外側に拡がる。54は底部から外反してのびる高台をもつものである。55は底部からやや長めに外反してのびる高台をもつ。高台の形と径がやや小さいことから判断して杯である可能性も否定できない。

56は陶器の丸型碗で、高台から丸味を帯びて立ち上がる。見込みには小さい目跡が残る。透明釉を施し、表面には細かな貫入がはいる。高台内見込みは施釉される。推定産地は布志名系。胎土は布志名系の特徴である薄い黄褐色を呈し、「三代おち」と呼ばれる木次町より産出する生地原料を使う。年代観は幕末・明治頃を推定する①。

57は土製支脚である。高さは20.4cmを測り、上部は二つに分岐し爪状に突出する。また反対側には手捏ねによって形成されたと思われる耳のような突起を一つ有する。

58は瓦質の五徳である。胴部には一条の沈線が入り、上面には半月状の切り込みがある。外面は直立するが、内面は口唇部から若干内湾して外へはらむ。器壁外周には磨きがかかり、燻されているのか黒く発色する。支えは貼付けてあり、接地面は足とつながる。貼付け部分の観察から、支え部分と足部分は別パーツになるものと考える。支えは円錐形で、僅かに上方に反る。胎土の色調は褐灰色を呈し、若干の雲母と多量の白色粒子（1mm以下）を含む。使用時の二次焼成を強く受けている。推定される産地は在地系大津である。「大津焼」では燻し焼物が量産され、五徳・各種のコンロ・コンロ台なども主要な産品にあげられる②。

59は鉄斧で、方形の鉄板状のものの二つの角を曲げて形成したと考えられる。曲げた部分での断面は、もともと「U」字状をしていたものと思われるが、錆化が著しいため、欠損によって「L」字状を呈している。テラス状遺構01東側埋土から出土した。



第2図　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土の鉄製品

註　①　多々納弘光氏の御教示による。

②　永田鉄雄「最盛期の素陶器」『出雲大津窯業誌』1990

第５章　三井Ⅱ遺跡の調査（第３～13図、第４～10表、PL.1～4・16～49・53～74・82～120・129～161）

第１節　既往の調査（第10表、PL.1）

三井Ⅱ遺跡は、平成11年５月の試掘調査によって新規に周知された遺跡で、堀切Ⅰ遺跡・杉沢遺跡の東側に位置し、今回の調査で最も拡がりをもつこととなった遺跡である。

第２節　99－１区の調査（第３～５図、第４・10表、PL.1～3・16～22・53～66・82～86・129～144）

１．位　置（第10表、PL.1～3・82）

当該調査区は、標高35～37mの低丘陵に挟まれた幅50m程度の谷であり、地表面の標高は７～８ｍを測る。水田が営まれていたこの谷は「文政六年下直江村繪圖」に三井谷と記されているが、地元では通称薬師谷（ヤクシダ）と呼ばれている。これは、ヤクシダニが訛ったものと思われる。

２．層　位（PL.16～20・85）

基本的な層序は、部分的に存在しない層もあるが、灰褐色の現代耕作土の下に第２層として床土と思われる炭・マンガンを微量含んだ赤褐色まじりの褐灰色シルト、第３層は旧耕土と考えられ、粘性が強く、炭を微量含んだ明赤褐色まじり灰褐色粘質土である。第４層は炭を微量含み、粘性が強い黒褐色粘質土で、第５層は有機物を微量含んだ粘性が強い褐灰色粘質土であり、この第４層と第５層から主に遺物が出土している。第５層の下は、遺物があまり含まれない数層の堆積層を介在して、灰色の地山に至る。ただし、谷部ということから、地形は谷中央部への傾きによって、調査区東半部では地山を確認することが出来なかった。

３．遺　構（PL.16・17・21・22・82～86）

調査区内で検出された遺構は、土坑が３基、溝状遺構は大きく区分して５条、性格不明遺構が２基である。

SK01は長辺1.4m、短辺１ｍの方形を呈する。深さは約70㎝を測る。埋土は上から概ね黒褐色粘質土、褐灰色粘質土である。埋土中より土師器片が２点ほど出土したが、細片のため、時期決定の根拠となりうるものはなかった。

SK02はSK01の北側約２ｍの地点で検出された。平面は長径1.4m、短径１ｍの不整形である。深さは検出面から約20㎝と比較的浅い。埋土は主に褐灰色の粘質土であり、埋土中から木製品や古墳時代後期頃の所産と思われる須恵器の杯、高杯、甕などが出土した。出土遺物や出土状況から判断して、土壙墓である可能性もある。

SK03はSD05を切る形で検出された。長径約 1.2m、短径約１ｍの不定型を呈する。深さは最深部で約50㎝を測る。埋土は基本的に上層から黒褐色粘質土、褐灰色粘質土、灰褐色粘質土で構成されている。一部に砂やシルトで層序を成している部分もあるが、これに関してはSD05の埋土と考えられ

る。また、埋土中より縄文土器と思われる土器が出土している。

溝状遺構は調査区全体で５条確認された。より細分化されるものと思われるが、切り合い関係について判然としないため、まとまりとして大きく捉えた。いずれも様相から判断して、人為的な遺構というよりは、むしろ自然流路的なものであると思われる。

SD01は調査区の北端で検出された。幅は10～75㎝で深さは約10㎝を測る。埋土は褐灰色の粘質土である。遺構内より遺物は確認されなかった。

SD02は概ねではあるが、細かいものも含めて、北方向への流れと東方向の流れの時期があると思われる。北方向のものは幅80～ 380㎝、深さは50～ 120㎝程度で、東方向のものは幅80～200㎝、深さは50～70㎝を測る。埋土内から細片ではあるが、縄文土器、土師器、須恵器、黒曜石片が出土している。

SD03は調査区中央部よりやや南側で確認された。全てが東方向への流れである。数条の溝状遺構が切り合っていると思われ、中央部分の幅1.5～３ｍ程度のものと、周辺部の幅10～40㎝程度のものとは、はっきりと様相が異なるのは明らかであるが、切り合い関係が明確ではないために、一つのものとして扱った。C10区の埋土上層から黒曜石片が１点検出された。

SD04は下層で検出された溝状遺構である。幅120㎝程度で、深さは最深部で80㎝を測る。遺構内より縄文土器と思われる軟質の土器片と黒曜石片がわずかに出土した。

SD05もSD04と同様に下層で検出された溝状遺構で、SK03によって分断されている。全長約８ｍで、やや蛇行し、深さは６～20㎝である。埋土はやや粗い砂で、埋土中より縄文時代後期のものと思われる土器片が多数出土した。

SX01は長径48㎝、短径44㎝の不定型である。深さは20㎝程度を測り、埋土は黒褐色の粘質土である。遺構内より遺物は確認されなかった。

SX02は側溝によって切られたため、全体の形は不明であるが、長径48㎝以上、短径40㎝の不定型を呈すると思われる。深さは10㎝程度と比較的浅い。埋土は黒褐色のシルトである。SX02もSX01と同様に遺構内から遺物は検出されなかった。

４．遺　物（第３～５図、第４表、PL.53～66・129～144）

遺物としては調査区全体から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、磁器、古代瓦、銅製品、鉄製品、石製品、木製品、炉壁片などが検出された。なお、土器などの土製品についての詳細な情報は遺物観察表に譲ることにする。

１～47は縄文土器である。細片が多いために時期については判然としないものもあるが、主に縄文時代中期以降の時期の所産であると考えられる。

１～14は沈線をもつものである。１は波状口縁である深鉢の口縁部と考えられる。波状になった口縁部と平行に沈線が施されるものと思われる。２はフラットな口縁部に平行して、沈線が施されている。３も口縁部に沈線が施され、内面には条痕が認められる。５は口縁部をやや肥厚させて、沈線文が施されている。７は波状口縁になると思われ、縄文に沈線が加えられている。12・13・14は口縁部の端部に縄文が充填され、沈線によって画されている。また、12・13については口縁部がやや肥厚し

て段状になっている。

15は無文で、口縁部がやや肥厚するものである。

16・17は縄文のみが認められるものである。16は口縁部でやや内湾してのびている。

18・19は刻み目が施されている突帯をもつものである。

20～26は条痕がみられるものである。25・26は内面のみに、20・22・24は外面だけ、21・23・25は内外面において条痕がみとめられる。また、20・21・23・25は口縁部である。20は口縁部が直立してのび、段をもって先細りする。21は口縁部が外傾し、口縁端部付近で内湾する。23は口縁部がほぼ直立し、端部は平らである。25は口縁部が内湾してのび、先細りする。

27は口縁部と思われるが、磨滅によって調整は明らかではない。直径6㎜程度の円孔が一つ開けられている。

28も口縁部で内側に屈曲するものである。口縁部の端部付近には縦横に刻み目をもつ突帯文が施されている。

29～47は底部である。底は平らなもの、底が上げ底のもの、低い高台状になるものの三つに分けられ、さらに、底部端が外方へ張り出すものと、そうでないものにも分類できる。31・33・39・47は底が平らで、底部端が外方へ張り出さないものである。29・35・36・38・40～42・46は平らな底で、底部端が外方へ張り出すものである。30・37・43は底が上げ底で、外側へ張り出さないものである。32・34・44・45は底が低い高台状になり、底部端が外方へ拡張しないものである。

48は弥生土器の壺または甕の口縁部である。口縁端部は上方に直立気味に拡張し、外面には2条の凹線が施されている。

49は土師器の壺と考えられる。口縁部はわずかに外反気味に直立し、口縁端部は段を有して内傾する。

50～55は土師器の甕と思われる。50は口縁部が外湾してのび、口縁端部は丸い。内面の頸部以下には横方向のヘラケズリの痕跡が認められる。51・52は口縁部が外反する。51は口縁端部が丸く、52は端部先端が微妙に内傾する。53・54は口縁部が短く外反し、口縁端部は尖り気味である。54の内面頸部以下には斜め方向のヘラケズリが認められ、外面の頸部以下には縦方向のハケメが施されている。55は頸部の窪みが認められず、胴部から口縁部に向かってまっすぐにのびる。口縁部は短く外傾してのび、口縁端部は丸味を帯びている。内面頸部以下には横方向のヘラケズリが認められ、外面の胴部上半には縦方向のハケメが施されている。

56～62は須恵器の蓋である。56～58は天井部から口縁部に向かって内湾して下りるものである。59～62はつまみがつくものと思われる。60は天井部から口縁部に向かって内湾して下り、口縁部は内側に屈曲する。61・62は口縁部先端が欠損している。61は天井部に宝珠つまみを、62は擬宝珠つまみをそれぞれ有する。

63～97は須恵器の杯である。63～82はたちあがりを有するものである。63はたちあがりが高く、外反気味に直立する。受け部は極めて短くのびる。64～82はたちあがりが低く内傾してのびるものである。なかには71～73のような、たちあがりの先端と受け部の先端がほぼ水平なものも見受けられる。83～90は糸きりの痕跡を有する平らな底部である。83～88は口縁部が直立するもので、83の内面には

樹液のようなものが付着している。87・88は口縁端部がわずかに外傾する。89・90は口縁部が外反気味にのび、口縁端部は外傾する。91～93は底部が欠損しているため、底部が平らなものか、高台がつくものか明らかではない。91は口縁部が内湾してのび、口縁端部も内傾する。92は口縁部が直立し、93は口縁部が外反する。92・93ともに口縁端部はやや肥厚し、丸みを帯びている。

94～97は高台を有する杯と考えられる。94は回転糸きりと思われる底部にわずかに「ハ」の字状に開く低い高台が付く。95・96も回転糸きりと思われる底部に「ハ」の字状に開く高台が付き、高台の先端は外側に拡張する。95の口縁部はやや内湾気味にのびる。97は糸きりと思われる底部に高台が直立するように付き、口縁部もほぼ直立してのびる。

98～104は須恵器の皿と思われる。98～102は高台を有しない平らな底部の皿である。98は口縁部は欠損しているが、底部は糸きりで、ヘラ記号の「×」が記されている。99はヘラ切りと思われる底部から口縁部は外湾してのびる。100は静止糸きりと思われる底部から口縁部は外傾する。101・102は糸きりの底部で、口縁部は101が内湾し、102は外湾してのびる。103・104は高台をもつものである。いずれも「ハ」の字状に開く高台で、103は非常に高く、104は低い。口縁部は103 ・104ともに短く外傾してのびる。また、104は底部外面が磨滅し、墨のような付着物があることから判断して、転用硯である可能性が高い。

105～107は須恵器のやや大型の杯である。いずれも糸きりの痕跡が残る底部に「ハ」の字状の短い高台が付く。口縁部は外傾してのびる。口縁端部は106が丸く、107は先細りする。

108～110は須恵器の高杯である。108・109は杯部と思われ、108は口縁部がまっすぐにのび、口縁端部がやや肥厚する。109は口縁部が内湾気味にのび、口縁端部が先細りする。110は脚部である。脚端部に向かって外反してのび、脚端部は上方へわずかに拡張する。

111は瓶である。口縁部は欠損しているが、ラッパ状に開く、やや高めの口頸部が付くものと思われる。体部は球形を呈し、円孔周辺には文様をもたない。

112～114は須恵器の壺と思われる。112は口縁部である。口縁部は直立し、口縁端部はわずかに内傾する。113・114は底部で、113は回転糸きりの底部に「ハ」の字状の短い高台が付く。114は糸きりの底部から直立して体部へのびる。

115～119は須恵器の甕と考えられる。115は口縁部と思われ、外面には沈線で区画される波状文の文様帯を有する。116～119は口縁部が短く外湾してのびるものである。口縁端部は116が丸く、118はやや外側に拡張し、119はわずかに先細りする。117については口縁端部付近に１条の凸線を有し、口縁端部は先細りする。

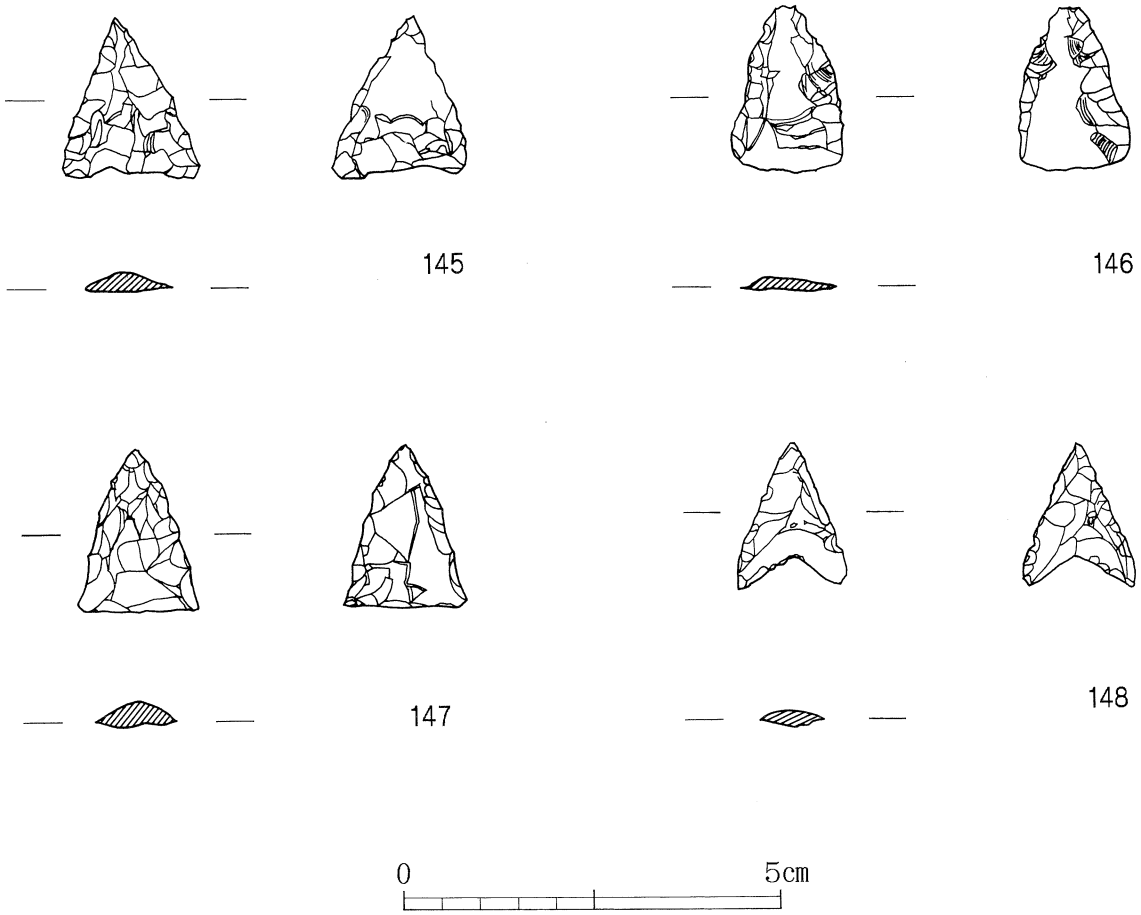
120～134は須恵器の墨書土器である。全部で15点検出された。120・121には「三井」と記されている。120は底部外面に糸切りの痕跡をもつ杯であり、121はつまみが付く蓋である。墨書はいずれも内面で認められる。122は「□〔三ヵ〕井」と読み取ることができる。おそらくは120・121と同様に「三井」と思われるが、一字目の「三」と考えられる部分の大半が欠損しているため、判然としない。底部に糸切りの痕跡が残る杯で、墨書は底部内面で見られる。123～128は「井」と書かれたものと考えられる。器種はいずれも杯と思われ、123～127は底部の内面に書かれているが、128のみ糸きりが認められる底部の外面に記されている。129・130には「総」と記されている。いずれも器種は杯で、

文字は回転糸きりの痕跡が残る平坦な底部外面に書かれている。129は回転糸きりの痕跡が残る平らな底部から口縁部は外反してのび、130は底部から口縁部がほぼ直立し、口縁端部で外反する。131・132は「両」[1] の草書体であると考えられる。いずれも器種は杯で、糸きりが認められる平らな底部外面に記されている。133も131・132と同様に書体の異なる「両」で「市」、あるいは則天文字の「朮」[2] という見方もあるが、欠損によって判然とはしない。器種は杯で、墨書は糸きりが残る底部内面に認められる。134は「□〔三ヵ〕井□」としか明らかではないが、糸きりが見られる杯の底部外面に記されている。

135～140は土師質土器の杯である。135～138・140は糸きりによって形成されたと思われる平らな底部のもので、135・136は口縁部がやや外反気味に、137は口縁部がほぼまっすぐにのびる。138はわずかに上げ底の底部から口縁部は内湾する。139は高台をもつものであり、底部から高台はやや長めに外反してのびる。高台が高めであることから、低脚杯といってもよいかもしれない。

141は染付桶型猪口の口縁部分である。文様は外面に「矢羽根文」、口縁裏には「二重圏線」がはいる。広瀬向2号窯出土遺物の中に同様な猪口が掲載されていることを参考として、推定される産地は肥前系。年代観として18世紀中頃から19世紀中頃までを推定する。

142～144は古代の瓦である。いずれも平瓦と思われ、凹面には布目痕が、凸面には格子タタキが認められる。



第3図　三井Ⅱ遺跡99－1区出土の石製品

145～148は石鏃である。145は黒曜石製で、全長が2.1㎝、基部径は1.8㎝、最大厚３㎜、重量は1.2gを測る。基辺には１㎜の凹みをもち、側辺は基部に向かって直線的にのびる。C11区の褐灰色土上層より出土した。146も黒曜石製の石鏃で、全長が2.2㎝、基部径は1.4㎝、最大厚２㎜、重量は0.85ｇを測る。基辺はほぼ平らで、側辺は基部に向かって内湾気味にのびる。調査区西側北部の黒色土下層～褐灰色土上面で検出された。147は安山岩質の石材③で、全長が2.2㎝、基部径は1.6㎝、最大厚３㎜、重量は0.9ｇを測る。基辺はほぼ平らで、側辺は基部に向かってほぼ直線的にのびる。Ｃ11区の褐灰色土上層より出土した。148も安山岩質の石材④で、全長が2.9㎝、基部径は1.4㎝、最大厚２㎜、重量は0.4ｇを測る。基辺は４㎜の凹みをもち、側辺は基部に向かってほぼ直線的にのびる。Ｂ11区の谷地形埋土上面から出土した。

149～151は石錘である。149は長径5.5㎝、短径4.5㎝の楕円形で、厚さ1.6㎝の河原石と思われる扁平な石の両端を打ち欠いてつくられている。石材は頁岩⑤で、重量は58.5ｇを測る。Ｅ10区の褐灰色土上層で検出された。150も長径8.0㎝、短径6.5㎝の楕円形で、厚さ2.0㎝の河原石と思われる扁平な石の両端を打ち欠いてつくられている。石材は黄灰色を呈する安山岩質の石材⑥で、重量は153ｇを測る。Ｆ10区の遺構面精査時に確認された。151は灰色の頁岩製⑦で長辺11.2㎝、短辺５㎝の不定型を呈し、厚さは最大厚で1.6㎝、重量は130ｇを測る。向かい合う短辺部分の一部を打ち欠いている。また、長辺も内湾し、わずかではあるが打ち欠いたと思われる痕跡も認められる。Ｂ10区の褐灰色土上層より出土した。

152・153は磨製石斧である。152は色調が灰色で、欠損していると思われるため、全長は５㎝以上としかわからないが、最大幅は3.7㎝、最大厚が１㎝で、断面はレンズ状を呈する。重量は34.85ｇを測り、石材は頁岩⑧である。Ｅ９区SD05埋土中から出土した。153は全長10.5㎝以上、最大幅は5.7㎝、最大厚が2.8㎝を測るやや大型の磨製石斧で、安山岩質の石材⑨である。色調は灰色で、重量は320ｇを測る。C10区の褐灰色土上層で検出された。

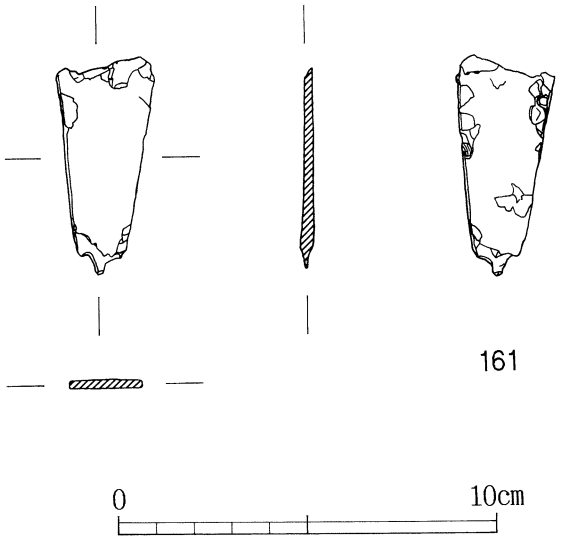
154～157は砥石である。154は平面が長辺4.5㎝、短辺3.0㎝の方形で、断面形も厚さ９㎜の方形を呈し、重量は27ｇを測る。色調は黄灰色で、石材は頁岩⑩である。調査区南東部の黒褐色下層～褐灰色土上面で確認された。155は全長12.3㎝、最大幅が6.4㎝、厚さは最大で４㎝を測り、重量は508ｇである。断面形は方形で、石材は淡黄色～黄褐色を呈する頁岩⑪である。Ｃ８区の褐灰色土最下層で検出された。156は灰黄色の砂岩製⑫で、重量が132ｇである。平面形は長径が９㎝、短径6.5㎝のいびつな菱形で、厚さは最大で1.8㎝を測る。調査区北西側の黒褐色下層～褐灰色土上面より出土した。157は平面形が長辺7.4㎝、短辺3.5㎝の長方形である。厚さは最大で3.5㎝を測り、断面形はＬ字形を呈する。石材は安山岩質⑬である。調査区南東部の黒褐色下層～褐灰色土上面で確認された。158は大型の紡錘車と考えられる。直径は8.2㎝、最大厚は3.4㎝、中央部の円孔は直径８㎜を測る。材質は灰白色～灰色の玄武岩質の石材⑭である。揚げ土より出土した。

159は装飾石製品と思われる。全長４㎝で、直径７㎜の円孔をもつ三角形の上部から牙状に２本下部へのびる。石材は軟玉⑮である。Ｃ９区の遺構面精査時に確認された。

160は石英である。大きさは３㎝×２㎝程度で、重量は10.95ｇを測り、加工痕は特に認められない。Ｄ７区の褐灰色土上層で検出された。

161 は不明鉄製品である。厚さは2～4㎜程度で、何らかの工具か、鉄鏃かもしれないが、劣化によって欠損しているために、判然としない。東側南部分の褐灰色土上層から出土した。

162 は銅製品である。状態は非常に良好で、劣化はほとんど認められない。直径が 5.4cm、厚さは最大の中心部分で 2.5㎜、最も薄い先端部で 1.0㎜、重量は27.2ｇを測る。三方に直径 2.0㎜程度の円孔が開けられ、断面形はゆるやかな逆「U」字状を呈する。凸面の中心部分はわずかにふくらみをもち、凸面凹面ともに、同心円状に毛彫りで彫られたと考えられる溝を有する。形態は、経筒の蓋のような様相を呈するが、明らかではない。Ｇ７区の褐灰色土下層で検出された。

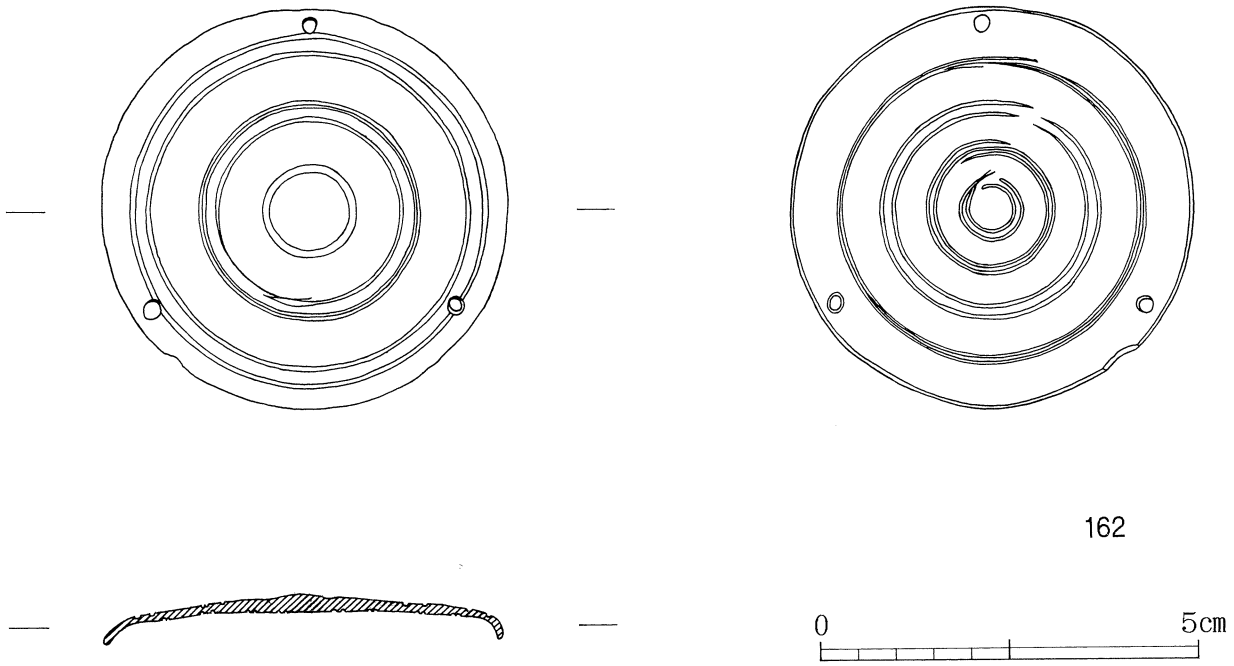


第４図　三井Ⅱ遺跡99－１区出土の鉄製品

163～199は木製品である[16]。調査区全体からコンテナ６箱程度の量が検出され、その大半が褐灰色土層から出土した。

163は鍬の身で、長径35.2cm、短径20.0cm、最大厚1.8cmを測る。長辺6.0cm、短辺3.4cmの長方形である柄孔をもつ。樹種はアカガシ亜属に属する樹種で、Ｅ８区の褐灰色土中層から出土した。

164は鍬の未製品と思われ、柄孔は開けられていない。長径35.4cm、短径20.4cm、最大厚2.2cmの規



第５図　三井Ⅱ遺跡99－１区出土の銅製品

模をもち、樹種はアカガシ亜属に属する樹種である。Ｅ６区の褐灰色土中層で検出された。

165～169は木錘である。いずれも端から１／４あたりを削り込む加工がなされている。165は長さ11.4㎝、厚さ3.2㎝を測り、樹種はグミ科に属する樹種である。Ｇ６区の褐灰色土上層から出土した。166は長さ10.0㎝、厚さ3.0㎝の規模をもち、樹種はグミ科に属する樹種である。Ｇ６区の褐灰色土上層で確認された。167は長さ9.4㎝、厚さ3.0㎝で、樹種はグミ科に属する樹種と思われる。Ｇ６区の褐灰色土上層より出土した。168は長さ10.0㎝、厚さ3.2㎝を測る。樹種はコシアブラである。Ｇ６区の褐灰色土上層で検出された。169は長さ10.6㎝、厚さ3.0㎝を測り、樹種はグミ科に属する樹種である。Ｆ８区の褐灰色土上層より検出された。

170は横槌形の木製品である。非常に小型で、長さは10.6㎝、厚さが3.0㎝を測る。樹種はヒノキ科に属する樹種である。Ｅ６区の褐灰色土上層より出土した。

171は半分程度欠損しているが、組み合わせ式の糸巻と思われる。樹種はヒノキである。B10区の褐灰色土上層で確認された。

172・173は下駄である。緒孔の配置から判断して、いずれも右足のものと思われる。172は長径26.0㎝、短径9.6㎝、厚さは台が1.2㎝、歯の部分で3.6㎝を測り、指の部分に磨滅の痕跡が認められる。樹種はスギである。Ｃ８区の褐灰色土最下層で検出された。173は半分程欠損している。長径は不明であるが、短径は9.6㎝、厚さは台が1.4㎝、歯の部分で2.6㎝を測り、樹種はスギである。Ｆ７区の褐灰色土上層で確認された。

174～179は曲物の底板あるいは蓋板である。174～178は円形のもので、いずれも４ヵ所を樺皮紐で結合したものと思われる。174はもともとの直径が17.2㎝、厚さは0.6㎝を測り、樹種はスギである。D11区の褐灰色土上層から出土した。175は直径が17.0㎝、厚さは0.8㎝で、樹種はヒノキである。Ｆ８区の褐灰色土上層で検出された。176は直径が30.8㎝、厚さは最大1.0㎝を測り、樹種はヒノキである。SK02埋土上層より出土した。177はもともとの直径が17.2㎝、厚さは0.8㎝で樹種はスギである。Ｅ９区の褐灰色土上層で確認された。178は直径が18.8㎝、厚さは0.8㎝を測り、樹種はヒノキである。Ｆ７区の褐灰色土上層から検出された。179は欠損によって、規模は不明であるが、方形あるいは楕円形のものと思われ、樺皮紐の結合痕が１ヵ所だけ残る。樹種はヒノキである。Ｆ８区の褐灰色土上層より出土した。

180 は火鑽臼である。全長13.0㎝、幅が2.8㎝、厚さは0.8㎝で、直径0.8㎝程度の火鑽穴を三つ有し、樹種はスギである。揚げ土で検出された。

181～183は串状木製品である。いずれも一方の先端は両側面を削り、尖らせている。181は一方の端が欠損しているため、もともとの長さは26.0㎝以上としかわからないが、幅が1.4㎝、厚さは0.8㎝で、断面形は長方形を呈する。樹種はヒノキである。Ｆ８区の褐灰色土中層より出土した。182も一方の端が欠損し、長さは27.4㎝以上としかわからないが、幅が2.4 ㎝、厚さは1.0㎝で、断面形は長方形を呈する。両側面が削られた方の先端はやや丸みを帯びている。樹種はスギである。Ｆ６区の褐灰色土上層で確認された。183も一方の端が欠損しているために、長さは12.4㎝以上としかわからないが、幅が1.4㎝、厚さは0.4㎝で、断面形は平行四辺形を呈し、樹種はヒノキである。C11区の褐灰色土上層から検出された。

184・185は刀形の木製品であると思われる。形あるいは断面形の違いによって、串状木製品と分類した。184は両端が欠損しているために、全長は不明であるが、幅は2.4㎝、最大厚は1.0㎝を測り、断面形はレンズ状を呈する。樹種はスギである。F４区の褐灰色土中層で確認された。185は尖った方とは逆の端の一方の側面を削り込み、やや幅細にしている。長さが40.6㎝、幅は2.0㎝、最大厚は1.4㎝を測り、断面形は台形を呈する。樹種はスギで、C９区の遺構面精査時に検出された。

186は明確には判断しがたいが、把手、あるいは枠木に使われたと思われる木製品である。全長が13.2㎝、幅が1.6㎝、厚さは0.8㎝で、断面形は方形を呈する。両端は、両側面を刳りこみ、突起をつくる。樹種はスギである。D12区の褐灰色土下層より出土した。

187は角柱状の木製品で、長さが10.6㎝、幅が2.0㎝、厚さは1.2㎝で、断面形は方形を呈する。樹種はヒノキと思われる。D11区の褐灰色土上層で確認された。

188～192は棒状の木製品である。188はやや先細りし、全長が34.0㎝、径は最大で2.0㎝で、細くなった先端では0.8㎝を測る。樹種はスギである。C９区の遺構面精査時に検出された。189は長さが18.0㎝、径は最大で2.4㎝を測る。一方の端はやや丸く仕上げられ、もう一方は、中心をずらした部分に長さと径が0.6㎝の突起をもつ。樹種はスギである。D７区の遺構面直上層から出土した。190は長さが10.2㎝以上、径は最大で2.6㎝を測る。直径0.8㎝の円穴を一つ有し、中央部付近には幅0.4㎝程度の溝が彫り込まれ、一方の端は削りだして突起状につくられている。形態から何かの栓かもしれない。樹種はスギである。調査区南東側の褐灰色土上層で確認された。191は全長が50.8㎝以上で、径は3.4㎝を測る。一方の先端は拡張して斜め方向の面をもち、柄としての機能が想定される。樹種はアカガシ亜属に属する樹種である。C８区の褐灰色土最下層から出土した。192は全長が24.0㎝、径は1.0㎝で湾曲している。一方の先端付近には直径0.4㎝程度の円孔を一つもつ。用途については明らかではない。樹種はカヤである。F７区の褐灰色土上層で検出された。

193～199は形態が不定型の不明木製品である。193は長さが32.6㎝で、最大幅が6.0㎝、厚さは3.4㎝を測る。断面は方形を呈し、中央部分に直径3.0㎝程の円孔を一つもつ。組み合わせ式の糸巻かもしれないが判然としない。樹種はアカガシ亜属に属する樹種である。C８区のSK02埋土内より出土した。194はもともと長さが17.2㎝以上で、最大幅が6.4㎝、厚さは1.0㎝を測る。一方の幅広になった方の端には、「V」字状の切り込みが施され、樹種はアカガシ亜属に属する樹種である。F６区の褐灰色土上層で確認された。195は長径17.6㎝、短径8.0㎝、厚さは最大で2.4㎝を測る。外側はやや湾曲して、内側はわずかに屈曲する様相を呈し、内側は一方の面側から削り込んで、尖らせている。樹種はモミである。F７区の褐灰色土上層から出土した。196は平面形が長辺9.0㎝、短辺8.0㎝の方形で、厚さは5.2㎝を測る。一方の縁を上面と下面の両方から削り尖らせて、断面形は五角形を呈する。樹種はスギである。E７区の褐灰色土上層で確認された。197は長さ42.0㎝、幅9.0㎝、厚さは2.2㎝の板状で、中央部付近のやや縁寄りに長辺2.4㎝、短辺1.4㎝の方形の孔を一つ有する。樹種はスギである。F６区の褐灰色土上層で検出された。198は長径32.8㎝、短径21.0㎝、厚さは5.2㎝を測るややいびつな方形の盤状を呈する。樹種はアカガシ亜属に属する樹種である。F６区の褐灰色土中層で確認された。199は長径5.8㎝、短径1.8㎝、厚さは0.3㎝を測り、一方の側面には鋸歯状に削りだした加工痕が認められ、樹種はヒノキと思われる。E８区の褐灰色土上層より出土した。

第３節　99－２区の調査（第６図、第５・10表、PL.23・67・87・145～147）

１．位　置（第10表、PL.１・３・87）

標高38m程度の丘陵に囲まれた調査区は、谷部であり、堀切Ⅰ遺跡00－２区の下に位置する。現況は原野であり、南側の丘陵斜面は崩落した痕跡が認められた。標高は地表面で10m程度である。

２．層　位（PL.23・87）

谷部ということもあり、基本層序といえるものではないが、概ねでは、表土の下は、第２層灰褐色土、第３層黄褐色土、第４層褐灰色、第５層黒色、第６層褐灰色、第７層暗灰褐色土に分かれる。一部分で南側丘陵の地すべりで流れ込んだと思われる明黄褐色の真砂土が検出された。

３．遺　構（PL.23・87）

遺構としては、谷部でよく確認される自然流路が検出された。検出面での幅は2.4～４ｍを測る。掘削は側溝掘削時に遺物が確認された層までで止めたため、自然流路の完掘はしなかった。

４．遺　物（第６図、第５表、PL.67・145～147）

遺物としては調査区全体から弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、古代瓦、砥石、炉壁片などが検出された。

１・２は弥生土器である。

１は甕と思われる。復元口径は18.0cmを測り、口縁部外面には４条の凹線が施されている。この凹線は純粋な凹線文かあるいは擬凹線文といえるものか判然としない。内面の頸部以下はヘラケズリが認められ、口縁部から頸部にかけてはナデが施されているようである。色調は内面が灰黄褐色、外面は暗灰黄色を呈し、胎土は１～２mm程度の白色砂粒を含む。第７層より出土した。

２は甕または壺の底部と思われる。復元底部径は6.2cmで、平らな底から胴部に向かってまっすぐ立ち上がり、徐々に外傾してのびる。色調は内外面ともに褐色を呈し、胎土は３mm以下の砂粒を少量含む。第４層中より検出された。

３・４は須恵器の蓋である。いずれもつまみが付くものと考えられる。

３は復元口径が16.8cmを測り、口縁端部あたりで屈曲し、端部先端に向かってわずかに外反する。色調は灰色で、胎土には２mm以下の砂粒を含む。西側の第６層より出土した。

４は口径を復元できない程の細片である。口縁端部あたりでわずかに外反し、端部先端に向かう。また、外反する部分の内面には短いかえりをもっている。色調は灰色で、胎土には0.5mm以下の白色砂粒を含んでいる。第６層より検出された。

５～12は須恵器の杯と思われる。

５は口縁部である。復元口径は13.4cmで、高台が付くものか明らかではないが、底部から口縁部に向かって内湾してのび、口縁端部でわずかに外反する。色調は内外面ともに灰色を呈し、胎土は1.5

mm以下の砂粒を極微量含む。第4層より出土した。

6は口径が計測できないほどの細片のため蓋である可能性もある。口縁端部に向かって内湾してのび、端部先端付近の外面にわずかな凹みをもつ。色調は灰色を呈し、胎土は0.5mm以下の白色砂粒を含む。第6層より出土した。

7はやや浅いものである。復元口径は11.2cmを測り、焼成はやや不良で、内外面ともに灰色を呈する。胎土には1mm以下の白色砂粒を多量に含んでいる。第4層下層より出土した。

8は復元底部径が7.6cmを測り、ヘラ切りの痕跡が認められる底部から高台が斜め下方向へまっすぐにのびる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土には1mm以下の白色砂粒を含んでいる。南側の第6層より出土した。

9はヘラ切りの痕跡が認められる底部から高台が外反してのびる。復元底部径は8.4cmを測り、焼成は良好で、内面は灰黄色、外面は灰色である。胎土には1mm以下の砂粒を少量含む。第5層より出土した。

10はヘラ切りの痕跡が認められる底部から高台が斜め下方向へまっすぐにのび、先端は外側に拡がる。復元底部径は8.6cmを測り、焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土には2mm以下の砂粒を微量含む。第4層下層で検出された。

11は回転糸きりの痕跡が見られる底部から短い高台が段をもってのび、先端はかなり先細りする。復元底部径は8.0cmを測り、焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土には1mm以下の黒色砂粒を含んでいる。第6層上面より出土した。

12は底部から高台が斜め下方向へまっすぐにのび、先端は平坦になっている。復元底部径は8.8cmを測り、焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土には1mm以下の砂粒を少量含む。第5層より検出された。

13は須恵器甕と思われる。復元口径は17.8cmで、頸部から口縁端部に向かって外反してのびる。口縁端部は肥厚して断面形状が三角形を呈するように端部先端に向かって先細りする。焼成は良好で、口縁部には自然釉がかかり、全体的に淡灰色をしている。胎土には2mm以下の白色砂粒が多量に認められ、なかには4mm程度のものも含まれる。第4層から検出された。

14・15は須恵器の壺と思われる。出土状況や、色調、胎土などから判断して、同一固体である可能性が非常に高い。形としては骨蔵器のようなスタイルになると考えられる。いずれも第4層～第5層で検出されたものと第6層より出土したものが接合された。

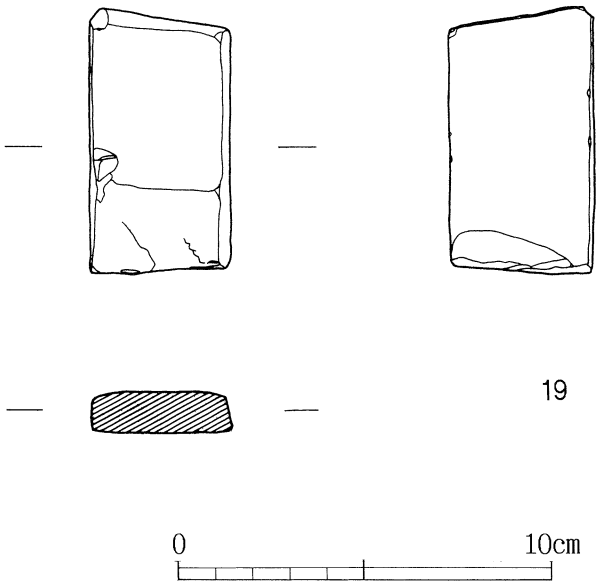
14は短い口頸部がわずかに外反してのびる。口縁端部は丸みを帯びている。復元口径は10.6cmを測り、焼成は良好で、内面が灰白色、外面は灰色を呈している。胎土はやや粗く、1mm以下の砂粒を多量に含み、なかには3mm程度のものも認められる。

15は欠損しているものの、三足をもつものと考えられる。焼成は良好で、内外面ともに灰色～褐灰色を呈している。胎土はやや粗く、1mm以下の砂粒を多量に含み、なかには3mm程度のものも認められる。

16・17は土師質土器の杯と考えられる。

16は高台をもつ底部で、糸きりの後にナデが施された痕跡が認められる。高台は外反してのび、復元底部径が13.2cmを測る。焼成は良好で、内面はにぶい黄橙色〜褐色で、外面はにぶい黄橙色を呈する。胎土には1mm以下の黒色砂粒を微量含む。第6層より出土した。

17も16と同様に高台をもつ底部で、高台は外反してのびる。復元底部径は12.0cmを測り、焼成は不良で、内面は明褐色、外面は茶褐色を呈する。胎土には1mm以下の砂粒を極微量含む。第5層より検出された。



第6図　三井Ⅱ遺跡99－2区出土の石製品

18は須恵質の平瓦である。厚さは約3cmで、凹面には布目痕が、凸面には格子状のタタキがそれぞれ認められる。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土には1mm以下の白色砂粒を極微量含んでいる。第4層から出土しているが、当該調査区の北側に位置する堀切Ⅰ遺跡00－2区第3層から出土した細片と接合された。

19は砥石である。平面形が長辺 7.2cm、短辺 3.7cmの方形で、厚さは約1cmの大きさをもつ。重量は48.9gを測り、石材は灰白色を呈する頁岩[17]である。第4層下層より出土した。

また、炉壁片が多数出土しているが、出土状況から判断して、周辺部から転落したものと考えられる。

第4節　99－3区の調査（第10表、PL.1・3・24・88）

1．位　置（第10表、PL.1・3）

当該調査区は、三井Ⅱ遺跡99－1区を設定した谷の奥に位置し、南側には農業用の溜め池が存在する。標高約37mの丘陵裾部分にわずかに平坦面があったために、調査区を設定したが、すぐ北側にある農業用水路をつくった際に掘削した土を盛ったことが明らかになった。

2．層　位（PL.24・88）

基本層序は暗赤褐色の表土を除去すると、先述したとおり、農業用水路を掘削した際の盛土が検出された。その下のにぶい赤褐色土を介在して橙色の地山に至る。遺構検出は地山上面で試みた。

3．遺　構（PL.24・88）

遺構としては、建物を構成しない小さなピットが三つ、土坑が一つ、性格不明遺構が三つ検出された。いずれも時期は不明である。

Pit01は、平面が直径10cmの円形で埋土は炭を微量含むにぶい赤褐色シルトである。Pit02は、直径

14cmの円形で埋土は灰褐色シルトである。Pit03は、直径10cmの円形で埋土は炭を微量含むにぶい赤褐色シルトである。

SK01は、調査区の中央部で検出された。平面形は長径40cm、短径30cmの不定型で、埋土は炭を微量と5mm大の礫を少量含む明赤褐色土である。

SX01は、調査区西端で確認されたために平面形は不明であるが、埋土は炭と1cm大の礫を微量含む明赤褐色粘質土で粘性は強い。SX02もSX01と同様に、調査区西端で確認されたために平面形は不明であるが、埋土は粘性が強い赤褐色粘質土で炭を微量含む。SX03はSX02を切る形で検出された。プランは長径40cm、短径10cmの不定型で、埋土は粘性が強い明赤褐色粘質土で炭を微量含む。

4．遺　物

遺物は須恵器片がわずかに検出されたが、いずれも細片のため実測に耐えうるものはなかった。

第5節　00－1区の調査（第7図、第6・10表、PL.1・3・25～32・68～70・89～96・148～151）

1．位　置（第10表、PL.1・3・89）

調査区は三井谷の東側丘陵裾部分に立地し、現地形でも、かなり平坦面が谷伝いに拡がっているのがわかる。明らかに人為的なものと思われ、畑として使用していた時期があるという情報を得たが、いつの時代に削平されたものか不明である。現況は山林で、標高は約9mを測る。

2．層　位（PL.25・26・95）

基本的な層位は調査区の山側で表土を除去すると2層程度の赤褐色の堆積層を介在して橙色の地山に至る。調査の結果、谷部に向けては、当然のことながら地形の傾きが認められるものの、調査区の谷側半分程度は土が非常によく締まっていて、弥生土器と須恵器が共伴して出土することから、整地されたものと考えられる。また、調査区中央部についても、もともと谷筋が横断していたものと思われるが、この部分も整地によって埋められたものと考えられる。第4層、第5層についてはこの整地土の上層が第4層、下層が第5層に分類する。整地の時期は、整地土の上面からSB03のピットが切り込んでいることによって、SB03を建てるために施されたものか、あるいはそれ以前に整地されたものと思われる。また、SB02の谷側が山側に比べて残りが良くないことから判断して、平坦面を形成するために、一部は削平されたのかもしれない。

3．遺　構（PL.25・27～32・89～96）

SB01は直径が約7.6mの円形竪穴住居で、弥生時代中期頃のものと思われる。北側については残存状態があまり良好ではない。壁体は残りが良い部分で20～30cmを測る。壁の立ち上がり角度は55～60°であり、床面は北東側に向かって傾斜している。ピットは直径が40cm程度の円形あるいは楕円形のもので深さは50～70cm程度と比較的深い。主柱穴は11本と想定されるが、判然としない。

SB02は方形の竪穴住居と考えられる。南東側の壁面は5.4mを測るが、西側は削平を受けたと思わ

れ、北西側の壁体はもちろん、周壁溝も検出されなかった。壁体は残りが良い南東側部分で50㎝を測り、立ち上がり角度は60～75°である。ピットは数カ所で検出されているが、主柱穴は４本と考えられる。SB01との切り合い関係があり、SB01よりは新しいものと思われるが、周壁溝の埋土より弥生土器片が検出されたことと、埋土上面で古墳時代中期頃の所産と思われる土器が出土していることから判断して、弥生時代後期～古墳時代前期のいずれかの時期に機能したものと考えられる。

SB03は梁行が２間（4.0m）、桁行が４間（7.2m）の当該調査区で確認された最も大型の掘立柱建物である。柱間は梁行が2.0m、桁行が1.8mで、床面積は28.8㎡を測る。柱筋はN－16°－Eを示す。ピットは不整形状のものも見受けられるが、概ね隅丸の方形である。規模は小さいもので一辺が約60㎝のものから、大きいものでは長辺100㎝、短辺60㎝程度のものがあり、深さは30～40㎝である。柱痕は直径16～20㎝程度のものが検出されている。Pit２・９・11・12以外のピットより土師器片、須恵器片がわずかに検出されているが、いずれも図化に耐えないほどの細片であった。

SB04は梁行２間（3.6m）、桁行３間（4.8m）の掘立柱建物で、柱間は梁行が1.8m、桁行が1.6mで床面積は17.28㎡を測る。柱筋はN－70°－Wを示す。建物を構成するピットは直径30～40㎝の円形あるいは楕円形で、深さは30～50㎝程度である。Pit１・４・７・10より土師器片、須恵器片などが検出されたが、実測に耐えうるものはわずか２点であった。Pit４・７から出土した遺物番号64の壺の口縁部と思われる須恵器片については、同一個体であり接合された。

SB05は梁行が２間（4.0m）、桁行は３間（4.8m）の掘立柱建物である。柱間は梁行が2.0mで、桁行が1.6m、床面積は18.2㎡を測る。柱筋はN－18°－Eを示す。ピットは直径30～40㎝のほぼ円形で、深さは20～50㎝程度である。Pit１・３埋土より土師器片、須恵器片がそれぞれ出土しているが、図化に耐えうるものはなかった。

掘立柱建物であるSB03～SB05の時期については、明確には判断しがたいが、SB04とSB05はピットの規模やピット埋土の出土遺物、主軸方向から判断して、ほぼ同時期のものと思われる。SB03については、周辺からの出土遺物と、谷を挟んで立地する堀切Ⅰ遺跡00－２区検出の掘立柱建物とピットの様相が比較的似ていることから奈良時代後半～平安時代前期頃の建物と想定できる。SB04・05の建物の時期と多少の時期差があるものと考えられるが、前後関係については明らかではない。SB03・SB05の北側で、直径20～30㎝程度の円形ピットが２列ないし３列で北東に向かってのびる。一見すると、杭列あるいは柵列のようであるが、SB03・SB05との関係や時期については判然としない。

SD01はSB02の東側で検出された。一方の先端が屈曲し、全長8.8m、幅は最大で１mで、深さは約20㎝を測る。埋土中より土師器片がわずかに出土した。

SD02はSB05の東側で検出された。先端でやや湾曲し、全長3.6m、幅40㎝程度で、深さは20㎝を測る。埋土からの遺物は確認されなかった。

SD03はSB03の北側で検出された。全長3.2m、幅20～30㎝程度で、深さは10㎝を測る。遺構内より遺物は出土しなかった。

SD04もSD03と同様にSB03の北側で検出された。また、SD03とSD04は40㎝程度の幅で平行してのびている。全長約３m、幅30～40㎝程度で、深さは約10㎝を測る。埋土中に遺物は認められなかった。

SD05はやや蛇行している。最大幅は約１mで深さは比較的浅く10㎝程度である。SD06と調査区外

で交わるかもしれない。埋土よりの遺物は確認されなかった。

SD06は西方向に向かい、北側には最大で80㎝程度のテラスを有する。調査区外へのびるために、全長は不明であるが、最大幅が２ｍで深さは最深部で約50㎝を測る。遺構内で遺物は確認されなかった。

SX01は2.4ｍの長さで幅60㎝程度の平坦面を削り出した様相である。際でピットが一つ検出されているが、性格や時期は明らかではない。

SX02は焼土痕の下で検出された。長径4.8ｍ，短径２ｍの不定型を呈する。深さは10～30㎝程度で、埋土には炭を多量に含んでいる。遺構内に遺物は認られなかった。

焼土痕は長径1.4ｍ、短径１ｍの不定型を呈する。かなりの高温の火を受けたと思われ、赤色で非常に固く焼けている。周辺部でわずかではあるが鉄製品と鉄滓が出土していることから、SX02も含めて製鉄遺構であるかもしれない。

４．遺　物（第７図、第６表、PL.68～70・148～151）

調査区全体から弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、磁器、石鏃、鉄鏃、鉄釘、鉄滓などが出土している。土器や土製品についての詳細なデータは出土遺物観察表に譲ることにする。

１～９は弥生土器である。１・２は頸部に突帯が貼付けられ、その上に刻目が施されている。口縁部は上下に拡張し、外面には凹線が認められる。３は口縁部が上方に拡張し、口縁部外面には４条の凹線が施されている。４は口径が復元できないほどの細片である。３と同様に口縁部が上方に拡張して、口縁部外面には３条の凹線が施されている。５は口縁部が上方に屈曲し、口縁端部外面に１条の凹線が見られる。６は甕の底部と思われる。平らな底部から胴部に向かって急に立ち上がり、かなり細身のスタイルになるものと思われる。７・８は壺または甕の底部と考えられる。平坦な底部から胴部へ外傾してのびる。８の外面には縦方向のハケメが見られ、ハケ調整ののちに磨きが施されたかもしれない。９は口縁部が直立する複合口縁の甕である。内面の頸部上に１条の竹管文と、外面の胴部上半に２条の竹管文をそれぞれ有する。

10～17は土師器と思われる。10は土師器壺または甕の複合口縁の口縁部で、口縁部の屈曲する部分はゆるやかである。11～17は単純口縁の甕と考えられる。11の口縁部は内傾してのび、口縁端部は尖り気味である。12は口縁部がわずかに蛇行するようにのびる。内面の頸部以下には横方向のヘラケズリの痕跡が認められる。13は口縁部外面の中央あたりでわずかにふくらむ。口縁端部は左右に拡張して、先端は平坦である。14～17は口縁部が外反してのびる。14は口縁端部が丸く、頸部外面には縦方向のハケメが認められる。15～17は口縁端部が先細りしている。

18～22は土師器の高杯と思われる。18～20は杯部である。18は口縁端部に向かって、逆「く」字状にのび、口縁端部は外反する。19は口縁端部に向かってほぼまっすぐにのび、口縁端部は外反する。20はやや器壁が厚いが、口縁端部に向かってわずかに屈曲気味にのびる。口縁端部は外反し、先細りする。21・22は脚部である。21は脚端部が「く」字状に屈曲し、先端は先細りする。22は脚端部がわずかに「く」字状に屈曲し、先端は丸い。

23は土師器の低脚杯の脚部と考えられる。器壁はやや厚く、脚端部は先端に向かって外反してのび

る。脚端部先端は先細りして、外側に拡がる。

24〜34は須恵器の蓋である。24〜32は天井部から口縁部に向かって内湾して下りる。33は稜をもつもので、天井部から口縁部に向かって内湾し、稜からのびる口縁部はまっすぐ下方に下りる。34はつまみがつくタイプと思われる。

35〜49は須恵器の杯である。35〜44はたちあがりを有するものである。35はたちあがりがほぼ直立してのびる。受け部は非常に短い。36〜44はたちあがりが内傾する。36・37のたちあがりはやや高めであるが、38〜44のたちあがりは非常に低く、44はたちあがりの先端と受け部の先端が水平である。45〜47は平らな底部から内湾してのびるものであり、45・47は底部外面に糸きりの痕跡が見られる。48・49は高台をもつものである。48は高台がやや外反してのび、49はは高台がまっすぐに下りる。

50〜62は須恵器の高杯と思われる。50〜53は杯部と考えられ、いずれも口縁端部に向かって内湾気味にのびる。54〜62は脚部であり、いずれも透し窓をもたない。54〜58は脚端部が「く」字状に屈曲するものである。54・55は脚端部先端が上下に、56・57は脚端部先端が下方に、58は脚端部先端が斜め上方にそれぞれ拡がる。59〜62は脚端部が外反してのび、脚端部先端は上下に拡張する。

63は須恵器壺または甕の口縁部と思われる。短い口縁部は大きく開き、口縁端部に向かってまっすぐにのびる。口縁端部は平坦で凹みを有する。

64・65は須恵器壺の口縁部と思われ、いずれも口縁端部へ向けてまっすぐに上がる。64は器壁が薄く、口縁端部は外側にのびる。65は口縁端部が先細りし、先端は丸みを帯びている。

66・67は須恵器甕の口縁部と思われる。口縁部外面には沈線によって界された波状文から構成される文様帯を有する。

68は土師質土器の杯である。糸きりがわずかに認められる平らな底部から大きく開いて口縁部に向かってほぼまっすぐにのびるものと思われる。

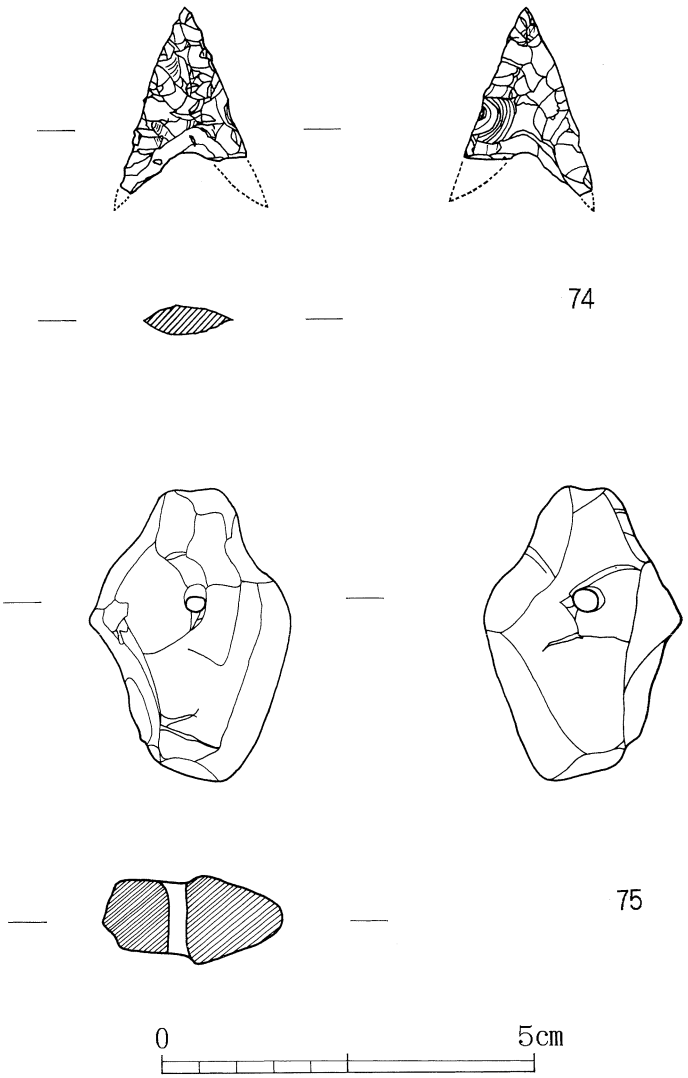
69は土師器のミニュチュアである。口径が2.9㎝、器高は2.2㎝を測る。丸い底部から口縁部に向かって内湾してのび、口縁端部は尖り気味である。

70は土器製の焙烙である。外面は黒色を呈して瓦質的でもある。胎土は薄い褐色を呈し、若干の長石と多量の雲母を含み、やや粗密である。外面はナデ成形によるものか中央部分が僅かに盛上る。胴部と底部の境目には面取りが施されている。当地方における近世以降の焙烙に関する様相が不明であるが、この遺物に関しては、体部下端が張り出しやや口縁が内湾化する傾向にあるといえる。体部にはある程度しっかりと高さがある。耳の有無は不明。口径は残存部位により、大きい復元となったきらいがある。推定される産地は在地系大津である[18]。

71は染付磁器－浅丸型紅猪口の口縁部分である。器型として他に仏飯器が考えられた。仏飯器の場合は、腰部から底部にかけて器壁が肥圧する傾向が著しくなる傾向を有すると考え、当遺物の法量と器壁の厚さおよび腰の張り具合から、紅猪口の可能性の方がより高いものと判断した。文様も「笹文」や「松文」等を考えたが、「松文」の場合は概して葉を点状に離して描くケースが多く、当遺物の文様は筆勢が上から下に根元を重ねて描かれているので「笹文」ないし「草花文」の可能性が高いと考える。推定産地は肥前系である。二次焼成を受けたか、もしくは焼成温度が著しく高過ぎたのか、胎土と器壁は褐色を呈している。

72は磁器の丸型皿である。見込み部分の釉薬は、重ね焼き用に蛇ノ目釉剥ぎされている。高台は無釉で、削り出しは雑に行われて器壁との境目に段がついたまま調整されない。高台内には兜巾と呼ばれる円錐状の削り残しがあり、砂が多く付着している。染付による文様は見当たらない。このタイプの皿には、「折松葉文」や「格子文」などを配する場合があるので白磁になるかどうかは判らない。器壁の外面には、箆削りとみられる調整痕が、釉薬越しにうっすらと残る。こうした痕跡は、内面にはみられない。推定される産地は肥前系で、底部の厚い量産品である。このタイプの製品は17世紀中頃から18世紀前葉にかけての消費遺跡より数多く出土している。

73はクロム青磁の端反輪花皿である。見込みには釉下彩で「竹笹」などが描かれ、畳付部分の釉薬を剥いでいる。高台裏にはゴム判で生産者別表示記号（統制番号）「岐 985」が押される[19]。この統制番号から、昭和５年に設立された「岐阜県輸出陶磁器工業工業組合連合会」加盟「駄知陶磁器工業組合」（同６年設立）に所属した、土岐郡駄知町の南波錠之助によって製作されたと推測する[20]。統制番号は、昭和16年の「陶磁器工業整備要綱」に製品への表示が義務づけられている。しかし、翌17年の「陶磁器工業整備要綱」によって大半の工場は整理され、岐阜では190工場に統合する。73は「岐 985」と附されるので、統合以前に生産された可能性が高い。但し、昭和23年の設けられた「工業記号番号」となる可能性も残る。土地区画を示す傍示として埋められた食器類の中から、とくに年代を絞れる遺物として掲載した。



第７図　三井Ⅱ遺跡00－１区出土の石製品

74は黒曜石製の凹基式石鏃である。全長が2.7cmで、基部先端は欠損しているが、基部径約２cm、基辺の凹みは７～８mm、重量が1.0ｇを測ると思われる。最大厚は４mmで断面は菱形を呈する。調査区中央部の第４層より出土した。

75はかなり欠損し、磨滅していると思われ、もともとの形態は明らかではないが、直径が４mm程度の円孔を持ち、石材は安山岩[21]である。調査区中央部の第５層上層より出土した。

76・77は鉄鏃である。いずれも錆化が著しい。76は全長が9.9cmで、棘状突起をもつと思われる。第２層から出土した。77は茎の部分が欠損しているため、全長は不明であるが、身の部分は6.0cmを

測る。東側の第3層下層で検出された。

78はかなり錆化が進行しているが、鉄釘と思われる。全長が6.5㎝、頭部径は2㎝程度、厚さが1㎝程度と考えられ、重量は32.65ｇを測る。東側の第2層から出土した。

79～81は鉄滓と思われる。79は東側の第2層、80は第2層～第3層、81は第4層からそれぞれ検出された。

第6節　00－2区の調査（第8図、第7・10表、PL.1・3・33・34・71・97・152・153）

1．位　置（第10表、PL.1・3・97）

現況が山林の当該調査区は三井Ⅱ遺跡00－1区の南側に位置し、尾根上からのびるやや広い谷筋の末端である。谷筋にもかかわらず、地表面では平坦な地形で、標高は9ｍを測る。

2．層　位（PL.33・34・97）

尾根からのびる谷筋のため当然ではあるが、直交する土層断面は緩やかなＶ字状を呈する。丘陵側は，表土の下に4層ないし5層の堆積土を介在して橙色の地山に至る。谷中央部では地山は地表下約1.4mで露呈する。遺物は表土下から地山までの各層より出土している。

3．遺　構（PL.33・34・97）

遺構としては溝状遺構、性格不明遺構、ピットが認められた。ピットは直径20㎝のものから長径60㎝、短径48㎝の楕円形のものまで35個が検出されたが、残念ながら建物を構成するものとしては確認されなかった。

SD01は調査区外へ延びるために全長は不明であるが、最大幅は2ｍ、深さは約20㎝を測る。遺構内より土師器片がわずかに出土している。

SD02は調査区北側で南方向へ検出された。幅30㎝程度で深さは約20㎝を測る。埋土中より遺物は検出されなかった。

SX01は、平面形が長径約1ｍ、短径は約80㎝の不定型である。深さは最深部で40㎝を測る。埋土は8層で構成されているが、埋土中に遺物は認められなかった。

この他に立地的な要因から、谷地形が検出された。検出面での幅は4.4m～9ｍで、検出面から下の埋土より遺物は確認されなかった。

4．遺　物（第8図、第7表、PL.71・152・153）

遺物は調査区全体から弥生土器、土師器、須恵器、石鏃などが検出された。その大半が包含層より出土している。

1～7は弥生土器である。

1は壺と思われる。復元口径は34.2㎝を測り、口縁部は大きく外湾してのびる。口縁端部は上方に拡張し、拡張した口縁部の外面には3条の凹線文が施されている。また、頸部外面には縦方向のハケ

目が認められる。色調は褐色で、胎土には1.5㎜以下の砂粒を比較的多く含む。第3層下層より出土した。

2は甕である。復元口径は22.0㎝で、口縁部は「く」字状に屈曲し、口縁端部は上下に拡張する。また、口縁端部には2条の凹線文が施されている。色調は内外面ともににぶい橙色を呈し、胎土には1㎜以下の砂粒を多量に含む。第5層より出土した。

3～6は壺あるいは甕の底部と思われる。

3は復元底部径が5.2㎝で、平らな底部から胴部に向かって外反してのびる。色調は内面が浅黄橙色で、外面は黒褐色である。胎土には1㎜以下の白色砂粒を多量に含む。第3層下層より出土した。

4も平らな底部から胴部に向かって外反してのびる。復元底部径は7.0㎝を測り、色調は内面がにぶい褐色で、外面は黒褐色を呈する。胎土には1㎜以下の砂粒を多量に含む。第5層より出土した。

5は復元底部径が4.6㎝を測る平坦な底部から胴部へ向かってまっすぐにのび、途中から外反するものと思われる。色調は内外面ともに黄橙色で、胎土には1㎜以下の砂粒を少量含む。揚げ土より検出された。

6は平らな底部から胴部に向かって外反してのびるものと思われる。復元底部径は8.0㎝を測り、色調は内外面ともに褐色を呈する。胎土には1㎜以下の砂粒を少量含んでいる。第4層～第5層で検出された。

7は高杯の脚部である。脚部端部での復元底部径は11.0㎝を測り、内面にはケズリの痕跡が認められ、外面は凹線が施されている。色調は内面がにぶい褐色～黒褐色で、外面は橙色～黒褐色を呈している。胎土には1㎜程度の砂粒を多量に含む。第5層より出土した。

8～12は土師器である。

8は複合口縁の壺である。復元口径が20.0㎝を測る口縁端部は平坦でわずかな凹みをもっている。色調は内外面とも褐色を呈し、胎土には1.5㎜以下の砂粒を少量含む。第4層～第5層で出土した。

9～12は甕である。

9は微妙に屈曲してのびる単純口縁であり、復元口径は16.6㎝を測る。色調は内外面ともに褐色を呈し、胎土には1㎜以下の砂粒を少量含む。第4層より出土した。

10も単純口縁の甕である。口縁端部付近でわずかに内傾する。復元口径は16.0㎝を測り、色調は内内外面ともに暗褐色で、胎土には2㎜以下の砂粒を微量含む。第4層より検出された。

11は復元口径が16.4㎝を測る口縁部はわずかに内傾しながらのびる。頸部以下の内面にはヘラケズリが、外面にはハケメが認められる。色調は内外面ともに薄い褐色で、胎土には0.5㎜以下の砂粒を少量含む。第3層下層より出土した。

12はやや小型の甕である。復元口径は11.6㎝を測る口縁部はわずかに外反しながらのびる。頸部から胴上半部にかけての内面は横方向のヘラケズリが、外面にはハケメが認められる。色調は内外面ともに淡黄色を呈し、胎土には2㎜以下の白色砂粒を極微量含む。第4層より出土した。

13～15は須恵器の蓋である。いずれもつまみがつくものと思われる。

13は天井部から内湾してのび、口縁端部付近で内側に屈曲して、口縁端部に向かって外反する。復元口径は12.8㎝を測り、色調は内外面ともに暗褐色を呈する。胎土には1㎜以下の砂粒を微量含む。

北側の第３層より出土した。

14は天井部からやや外湾してのび、口縁端部付近で内側に屈曲する。復元口径は19.4cmを測り、色調は内外面ともに灰色を呈している。胎土には 0.5mm以下の砂粒を微量含む。北側の第３層より検出された。

15は天井部から口縁部に向かってほぼまっすぐにのびて、口縁端部付近で一旦外反し、すぐに内側に屈曲する。復元口径は16.4cmを測り、色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土には１mm以下の砂粒を微量含む。南側の第３層下層より出土した。

16～24は須恵器の杯である。

16は復元口径が10.4cmを測り、受け部は上方にのびて、立ち上がりは短く内傾する。色調は内外面ともに灰色を呈し、胎土は密である。北側の第３層下層より検出された。

17は復元口径が11.4cmを測る。口縁部はやや肥厚し、端部は丸みを帯びている。色調は内外面ともに灰色で、胎土には1.2mm以下の砂粒を少量含む。揚げ土で検出された。

18は底部からやや内湾気味に口縁部に向かってのびる。復元口径は11.2cmを測り、焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色を呈している。胎土には1.5mm以下の砂粒を微量含む。南側の第４層から出土した。

19は回転糸きりの痕跡が残る底部からわずかに内湾気味に口縁部へのびる。復元口径が11.8cmを測る口縁端部はやや尖り気味である。焼成はおおむね良好で、色調は内外面ともに灰色を呈し、胎土には２mm以下の砂粒を少量含む。第４層から検出された。

20も底部からわずかに内傾気味に口縁部へのびる。復元口径は16.4cmとやや大型で、口縁端部は先細りする。色調は内外面ともに灰色で、胎土には２mm以下の砂粒を少量含んでいる。北側の第３層下層から出土した。

21も糸きりの痕跡が残る底部からわずかに内湾気味に口縁部へのびるものと思われる。焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈し、胎土には2.5mm以下の砂粒を微量含む。第２層～第３層で出土した。

22は平らな底部から短い高台が外反気味にのびる。復元底部径が7.0cmを測り、焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。胎土には１mm以下の砂粒を少量含む。北側の第３層下層で検出された。

23は高めの高台がつくものである。復元底部径が8.5cmを測り、焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色を呈し、胎土には0.5mm以下の砂粒を微量含む。第２層～第３層で出土した。

24は回転糸きりと思われる痕跡が残る底部から、肥厚した短い高台がまっすぐにのびる。復元底部径は10.8cmを測り、焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。胎土には２mm以下の砂粒を少量含む。北側の第３層から検出された。

25は須恵器の皿で、復元口径は17.4cmを測る。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色を呈している。胎土には 2.5mm以下の砂粒を微量含む。北側の第４層より出土した。

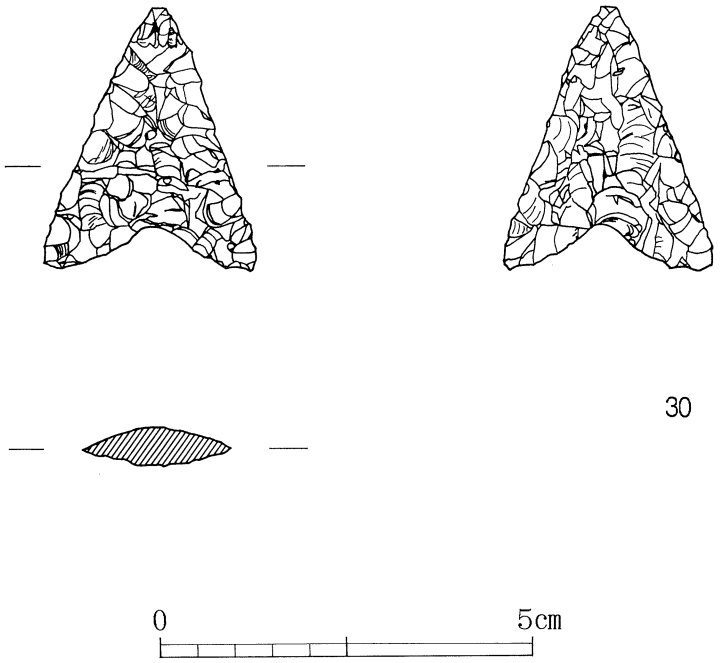
26は須恵器の壺または甕の口縁部と思われる。外面には１条の沈線とそれ以下に波状文が認められる。復元口径は35.2cm測り、焼成はやや不良で、色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土には１mm以下の白色砂粒を微量含む。第２層～第３層で検出された。

27は須恵器のコップ形である。復元口径が7.8cm、器高は5.0cmと小型で、復元底部径が6.0cmを測る

底部には段を有する高台をもつ。色調は内外面ともに灰色を呈している。胎土には2㎜以下の砂粒を少量含む。南壁の第5層で検出された。

28は陸と脚の部分は欠損して存在しないが、円面硯と考えられる。復元口径は15.8㎝を測り、色調は内面が灰白色、外面が灰白色～緑灰色を呈する。胎土には1㎜以下の砂粒を微量含む。第4層より出土した。

29は染付見込部分の破片である。高台は蛇ノ目凹型高台で見込みにはハリ痕が残る。高台径から復元される大きさは五寸程度のものと推測する。見込み部分の主文様が一枚絵となり、魚鱗のような文様がみられる。高台は低く比較的しっかりと立ち上がり、高台脇には二重圏線が入る。推定される産地は肥前系である。18世紀末から19世紀初頭の年代観を推定する。表土層で検出された。



第8図　三井Ⅱ遺跡00－2区出土の石製品

30は黒曜石製の凹基式石鏃である。全長が3.5㎝とやや大型で、基部径約2.7㎝、基辺の凹みは6㎜、重量が3.05ｇを測る。最大厚は5㎜で断面は菱形を呈する。調査区の第5層下より出土した。

第7節　00－3区の調査（第9図、第8・10表、PL.1・3・35・98～100・154）

1．位　置（第10表、PL.1・3・98）

当調査区は、標高が約35ｍの尾根上に立地し、現況は山林である。調査区の北約50ｍには周知遺跡の三井古墳が存在する。筑紫街道の推定ルートであり、道路遺構の確認を目的に調査区を設定した。

2．層　位（PL.35・99・100）

調査区の層位は、中央部では尾根上という地形から、赤褐色の表土の下にやや砂っぽい明褐色土があり、その下に黄橙色まじりの灰白色次の地山が露呈する。谷側に向けての調査区両端では表土と橙色あるいは黄橙色の地山との間に4層ないし5層程度の堆積層が介在する。また、調査区西側では、橙色とにぶい橙色で層厚1～2㎝程度で互層状を呈し、他の自然堆積層とは異なる非常によく締まった人為的なものと考えられる層（以下、便宜的に版築状の層と呼称する。）が確認されている。

この版築状の層は、不明瞭なものも含めると、36・43・44・46・47・51・52・52・53・56・58の各層であり、後述する三井Ⅱ遺跡00－4区でも全く同様のものが確認されている。この層から遺物が検出されなかったために施工された時期は判然としない。厳密いえば、古代寺院の基壇などで認められ

る版築とは明確に異なった様相を呈することで、版築工法かどうか明らかではないが、調査区南壁の西端にみられる39・40・43・44層の関係で工法の一部が推測される。40層は縦に入り込んでいるため木の根の攪乱とも考えられるが、にぶい赤褐色の土でよく締まっていることによって、これまでに検出された木の根の攪乱との違いは明らかである。この40層の左右で版築状を呈するものとそうでないものに区分ができ、さらに層位のずれが生じている。このことから判断して、杭あるいは板状のもので仕切り、版築状の層を形成したと考えることができる。

3．遺　構（PL.35・98～100）

当該調査区において平面で確認された遺構としては、溝状遺構が4条である。SD01・SD02・SD03は調査区の北西端で重なった状態で検出された。

SD01は調査区端で確認されたため、全長、幅ともに不明であるが、中段でテラス状の平坦面を有する。深さは最深部で約50cmを測る。また、テラス状から下段の部分は別の溝状遺構である可能性もある。遺構内より須恵器片がわずかに出土した。

SD02はSD03を切る形で検出された。わずかに蛇行しているが、幅は最大で1.6mを測り、深さは約30cmである。埋土中より遺物は確認されなかった。

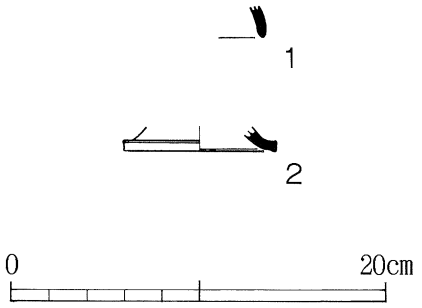
SD03は幅が最大で1.2mを測り、深さは浅く最大で約20cmを測る。遺構内から遺物は検出されなかった。

SD04は調査区の中央部で検出された。全長は調査区外へのびるために72cm以上としかわからないが、幅が最大で28mを測り、深さは浅く約20cmである。遺構内より実測に耐えない程の細片ではあるが、土師器片、須恵器片がわずかに出土している。

4．遺　物（第9図、第8表、PL.154）

遺物としては土師器片、須恵器片がわずかに出土した。いずれも細片のため、実測に耐えうる遺物は、ほんのわずかであった。

1は口径が復元できない程の細片であるが、須恵器の蓋と思われる。焼成は良好で、色調は内面が灰オリーブ色外面は暗灰黄色を呈する。胎土には直径 0.5mm程度の砂粒を含む。中央部の第3層より出土した。



第9図　三井Ⅱ遺跡00－3区出土の遺物

2は須恵器の高杯と考えられる。復元底部径は8.2cmを測り、焼成は良好で、色調は青灰色を呈し、胎土には直径0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。SD01の黒色土内より出土した。

第８節　00―４区の調査（第10～13図、第９・10表、PL.1～4・36～49・72～74・101～119・155～161）

１．位　置（第10表、PL.1～4・101～119）

当該調査区は標高37m程度の低丘陵上に立地している。現況は主に山林であるが、尾根上南側の一部については開拓によって削平され、その部分は茶畑が営まれている。

２．層　位（PL.36～49・101～119）

１トレンチ

１層は表土層であるが、2－3層の落ち込みは現地表面からも観察できる。2－3層は黒褐色土。３層には若干の褐色土が含まれる。4－6層は褐色土層で、６層は若干緑味を帯びる。７層は黄味を帯び、やや硬化した層である。2－7層直下の地山面は非常に固い岩盤である 。この切通し下面が近世絵図に記載される「筑紫海（街）道」に相当するものと推測した。2－3層の落ち込みが路面南側の側溝に相当する位置をしめる。６層底面付近はゆるやかなＶ字状に落ち込み、北側の側溝的な働きもする。雨天時には、この２個所に集中して滞水する様子が窺えた。筑紫海（街）道の路面を地山に想定すると傾斜がついているのが疑問点として残る。これを解消するために７層を盛った可能性も考えられた。後述する３・６・７・８トレンチからは縞目互層の版築状硬化面を検出したことから、７層も類した機能を有していたのかもしれない。

8－11層は北側斜面に堆積した土壌である。８層（暗）→９層（明）→10層（暗）→11層（明）のパターンで、暗褐色土の８層と10層が地表面であった時期と捉えると、大きく二時期に分かれる。隣接する2－3トレンチでは、横口式炭焼窯２号窯の操業時に北側斜面が削平を受けて堆積がなかったことが窺えた。当トレンチにおいても同様な傾向を指摘できる。北側斜面に堆積した時期は切通しに伴う施行と推測する。

12－14層は若干緑味を帯びた層である。現地表面においても、落ち込みが東西に続く様子が観察できる。15－19層は褐色を呈する土層である。18・19層が黄味を帯びて相対的に硬い。トレンチ幅での観察であるが、地山底面に残る掘り肩痕跡と堆積層序（12－19層）を対比させると数本程度の溝状遺構が存在した可能性が考えられた。

20－30層は台形状の掘り込みに伴う堆積土である。２・３・７トレンチにおいて、やや蛇行するものの尾根下の軸線からも同様な断面箱型の遺構を検出し、一本の溝遺構であると認識した（SD01）。規模の大きい溝遺構である。20－22層は黄味を帯びた褐色土層でやや締まりがある。厚みの割に比較的均質な土壌から、短時間に堆積したことを思わせる。23層は黒褐色土層である。26層には水成土壌を思わせる白色粘土および鉄分を含む。27層は26層の両脇に堆積する土壌である。30層はやや黒色を帯びた褐色土層で、SD01開口時に表土などの流れ込みによる自然堆積と考える。断面にはかからなかったが、検出時には剥落した地山塊片が少なからず堆積していた。

31－39層は南側部分の堆積土壌である。やや黒色を帯びた33層を境に、34層以下とは時期差がある。35－37層からは弥生土器破片の出土をみた。38－39層はやや青味を帯びた土層である。地山面に円弧を描くようなプランで堆積し、後の拡張によりSB01の外周をめぐる溝の覆土であることが判った。

2トレンチ

1層は表土層である。2トレンチは推定「筑紫海（街）道」の切通し端部に位置し、SD01と炭1号窯の間の平坦部は路面に当たると思われるが、堆積土がなく表土層を剥がすと地山となる。

2－3層は南谷斜面に堆積し若干粘性のある暗褐色土層である。層位を2－3層としているが、4－6層、7－9層とほぼ並列する時間を想定する。4－6層は浅手の窪みの存在を示す堆積である。トレンチ東側壁面にも対となる堆積が確認できる。

7層は明褐色土層、8層は黒褐色土層、9層は若干緑味がかかった褐色土である。7－9 層の半月状の堆積プランが、1トレンチのSD01北隣の溝状遺構に対応する可能性がある。7層は比較的短時間で埋められた客土と思わせる。

10－15層がSD01に伴う堆積土である。10層がやや赤みを帯びた褐色土、11層が黄色を帯びた褐色土層である。12層は灰色を帯びた粘性土壌で、1トレンチの26層に近似している。14－15層は黒色がかった暗褐色土層で、1トレンチの30層と対応する。断面プランおよび堆積土壌に一様性がみられることも同一遺構と判断した根拠である。

16－20層は北側斜面の堆積土である。黒褐色土層の18層は2－2トレンチ東壁面6層に対応する。16－17は若干暗系であるが、2－2トレンチ7層に対応し1トレンチ東壁面10層とも層序関係が対応する。19層はやや暗系の褐色土層で2－2トレンチ東壁面8層と対応する。20層は21層と同時に流れ込んだ層序と判断した。

21－22層は横口式炭焼窯1号窯のを穿った地山が落盤した層序と判断した。21層は赤味を帯びた粘質土で劣化が激しい地山遷移層。22層は落盤・風化によって破砕された地山塊と判断した。23層は窯体内の堆積土であり粗密な褐色土である。1号窯廃棄の後、21・22層が落盤する時点にはすでに窯体内の過半に土砂が堆積している。時間をかけて窯体内に自然堆積を推定すると、覆土が均一で締りがない。近接した位置に横口式炭焼窯2号窯が築造されている。2つの窯の前後関係は不明であるが、廃棄窯を放置しておくと、周辺で作業をする上で陥没などの不都合が生じることが予想される。1号窯も落盤を怖れた工人達の手によって故意に埋められたことも想像できる。24層は横口から掻き出された灰原の端部である。断面にはかからなかったが、窯体底部には部分的に薄く炭化材の分布がみられ、操業時に関わる堆積と考える。

2－2トレンチ

北壁における第2層はやや暗褐色系の土壌である。第3層は近くにあった櫻木によって地山面が侵食を受け、地山より剥離したブロックと考える。

2－3トレンチ

西壁は炭－2号窯から北側に下降する斜面に設けた調査区断面である。炭－2号窯は現在比較的平坦な面で検出されているが、炭－1号窯同様に本来はこのような急傾斜の法面に開口していたものと考える。足立氏によると炭窯の操業に谷から吹き上げる風を利用するため、このような勾配のきつい斜面を選んで設けられるという。基本的な層位は、隣接する1トレンチの北側同様に、暗（1層）→

明（2層）→暗（6層）→明（8層）のパターンとなる。ただ暫位的に変化しているため、層序を細分化している。4層は1トレンチにはなかった層位であるが、東側にむけて堆積する様子を追える。7層は黒褐色系の6層が黄褐色系の8層上面と混ざるように流れ落ちた土質である。8層は周囲（上部）の地山を削平した際の排土と推測する。8－11層は炭－2号窯の掘り肩を埋めており、炭焼以後の堆積と考えた。

2－3トレンチ

南壁は炭－2号窯主軸に沿った横口外の土層断面である。2層は西壁でも観察された褐色土層である。3層は2層より若干暗色系の褐色土層で、4層以下より新しい。4－5層はSK03の覆土である。土壌のきめが荒く、周囲の黒褐色系の土層と地山の明褐色土を引掻き混ぜたような色調である。SK03の両脇に2基の土坑が存在し、平面プランからSK03が周囲を切っていたので相対的に新しい土坑であることがわかる。6層は黄褐色土層で西壁4層と一連の流れをもって堆積する。SK03の覆土を越えて7層とも繋がる可能性がある。おそらく、SK03を挟んで8層と9層、10層と11層とが層序的には対応すると思われるが、東側層序は比較的硬く締まっているが、西側層序は軟らかい傾向がある。10層と16層は灰と炭化物を多量に含んでおり、炭－2号窯の灰原になるものと考えた。11層は若干黄色味を帯びている。17層と18層は溝状遺構の覆土となる層序である。検出面での溝の大きさは上幅45cm×下幅30cm×長さ100cmで断面箱型を呈する。17層には少なからず炭化物が含まれるので、炭－2号窯操業と同時期かそれ以降に掘られたものと判断した。18層にはほとんど炭化物が含まれずに、ほぼ14層と同じ色調である。

3トレンチ

長軸9m30cm×短軸1cmの小規模トレンチである。堆積は複雑な様相を示したため、樹木による撹乱の激しい北壁半分を除き四面の測量を行った。

調査以前の地表面は橡や樫などの雑木林に覆われていた。1層は表土層であるが、2層以下にも樹木の細かな根が入り込む状況であった。2－3層はやや広めの断面半月状の落ち込みである。樹木根の撹乱が激しい北壁面にも、規模の小さい半月状の立ち上がりがみられることから何らかの遺構となる可能性をもつ。遺物の出土はみていないが、切り合いからみて相対的に新しい掘り込みといえる。

4－6層は順を追って流れ込んだ土砂が堆積したような様相を示す。北側に盛り上げた土砂が雨水等によって流されたものか。6層は2－3層によって切られている。

7－11層は浅手の掘り込みを構成する層序で、この面は非常に硬化している。8－9層は水成堆積層的な感じを受ける。とくに灰色粘土質土層である9層を中心に、鉄分を含んでいる。10層は黒色系土層の非常に薄い堆積で、非常に硬く締まっており、一時は路面として地表に現れていた時期があった可能性も考えられる。

トレンチ底面に溝状の平面プランが見出され、試みに壁際を掘削したところ僅か1.5cm程度の深さしかなかった。ついで土層断面と連続性を検討したところ、12－16層が自然なつながりを持つように観察されたので、これらは溝状遺構の覆土となる可能性もある。隣接する8トレンチで縦方向から溝

遺構確認を行った。溝らしきプランは確認できたが断面形がやや不定形なので断定はできない。これは周辺地形が非常に脆いことが影響しているものとみられる。今後、さらなる検討が必要である。

17－20層は版築状の硬化層である。西壁断面において前後3回にわたる築造が行われたことを窺わせる。17層は縞目状の薄い堆積が互層をなして堆積する状況が確認でき、最も版築工法的な様相を示している。17層と18層は近似した層であるが、南壁面で間に堆積している状況が観察され、時間差が存在した可能性が高い。18層は17層ほど明確ではないがごく薄の縞目状の堆積が見られ、これも版築的な工法を用いて硬化整地されたものと考える。19層は硬く締まった土層であるが、縞目状の堆積はみられない。20層は18層と同様なごく薄の縞目が入る硬化整地層である。26層は黒色系の旧表土と考えるが、20層の下部にはこの旧表土が混ざるような状況で硬く締められていた。

22層は先に述べた溝状遺構とみられる覆土の16層に切られる層序である。23－24層は地山を穿った横穴に堆積した覆土である。2－2トレンチで検出した横口式炭焼窯の横口の一つとなる可能性が高い。層中には窯壁の一部であったとみられる赤色に変色した地山ブロック片が入る。8トレンチでさらに2個の横口が検出し、3トレンチの横口とほぼ等間隔に並び、窯跡があったことをより強く推測させる。

24層は炭化物を多く含んでいて、25層も同様な様相を示す。窯体の内外に残った灰残土と考える。26－29層は緩やかに下降する谷地形の端部に堆積した土層と考える。7トレンチで確認された谷地形とその上に乗る硬化層との関係とも一致する。27層中に入った茶褐色ブロックは31層中に確認された鉄分を多く含む層の断片である。

4トレンチ

緩斜面に沿った縦方向に設けたトレンチで、このトレンチ南端よりは急斜面となる。調査以前の地目は雑木林で、3トレンチに隣接する。2層と3層は表土層からの切り込みにより、層位の順序は明確とならない。4－5層はそれぞれ浅い掘り込みとみるが、両者は別のプランになるものと考える堆積土も比較的似かよっており、近い時期に埋没した可能性がある。5層中より弥生時代とみられる土器砕片数点が出土し、土層断面にも同様な土器片3点を認めた。6－7層は谷に向かって堆積する層序である。8層は地山とみられるが、風化している。この3・4トレンチ周辺の地山には、若干軟質適な傾向がある。

6トレンチ

西壁の1－3層は南壁面と同様である。4層は表土層直下の褐色土層で3層に近い色調を呈するが、締りは軟らかい。5・7・10層は硬化層であり、赤褐色－灰白色－黄色の互層パターンが基本である。とくに5層には鮮明に縞目互層がみられ、版築状の積層工法が認められる。積層ではない6・8層が版築状硬化層の間にくいこむように堆積する状況が気がかりである。とくに8層を観察すると積層ではないものの非常に硬く硬化している点は版築状硬化層と同じである。5・7・10層は工法的に土を交互に入れて築き固められているが、6・8層には念入りに土入れ処理はなされず、ならされた土砂が脇に落ち、築かれたか後に踏み固められて硬化した工程を想像する。この6・8層の上場ラインを

もって版築状硬化層を形成する一工程のラインを示すものと捉えた。７層と10層の間には若干の暗褐色土砂が挟まれることも、時間差があったことを示しているように考えた。版築状硬化層は、「筑紫海（街）道」が復元される尾根筋ルートに設けられたトレンチから、広範囲にわたって確認された。この硬化面が、同街道ないしそれに前後して重複した道に関わる路面ではないかと想像する。土塁となる可能性もあるが、切通しとセットになる点などを考慮すると疑問点が残る。11層を観察すると、かって13層を若干穿った窪地があった堆積プランを示す。15－17層はSD01覆土である。１・２トレンチ同様に断面箱型を呈し、15層が２トレンチ14層、16層が同15層と対応する。SD01は東側に向けて深さを減じ、７トレンチは断面プランのみが確認できる。15層は基本的には14層と同一の流れで捉えられるが、黒褐色土層の17層からの染込みを受けたのかやや暗系である。14層は層序としては17層以前の可能性がある。層底面より、にぶい赤褐色土の半円形プランが検出された。隣接する２トレンチ炭－１号窯の東側端部となる可能性がある。現段階では検出にとどめて掘削は行っていない。

南壁において、２層は１・２トレンチで確認されたやや緑味を帯びた粒子の細かい土層に似る。３層も同様な土層であるが、相対的に若干黄色味を帯びてやや硬い。４層は2－3層より茶色を強めた褐色土層である。４層は東部分と西部分に分かれるが、細い東側部分は５層の影響を受けてわずかに暗色を帯びている。５層は暗褐色土層で東側にかけて堆積し西側には及ばない。7－9層は硬化している層で、一見すると地山であるが７トレンチ断面の23層と対応する硬化層と判断した。

７トレンチ

１層は現地表面下の植生土壌である。この７トレンチの約1m80cm奥に「賽ノ神」が祭られている。２層は16－19層・硬化層を切って掘られた窪地に堆積した層である。この２層の土壌に近似した層が８トレンチ1－2層であり、ここからはビニール製土嚢袋や鉄製レンチが出土している。位置関係や層位順と土壌から判断して、２層は三井開拓以後の層位になる可能性が高いと考える。

３層は粗密な層で植生による撹乱層。４層は表土層と地山に挟まれた褐色土層で粗密である。部分的には踏み固められた硬化している個所もあるが、概して植生の影響を受けて脆くきめが荒くなっている。５層もほぼ同じような層位である。6－7層はやや緑味を帯びた緻密な土壌で、１・２・３・６・８トレンチでも同様な層位が認められた。層位的には比較的新しいという点でも一致をみる。８層は７層に比べてやや赤味がかった緻密な層位で、７層より粘性が高い。この層も１・２・６トレンチで同様な層位を確認した。

９層は縞目互層が鮮やかな版築状硬化層で、３・６・８トレンチにおいても検出している。茶褐色－灰白色－黄色の互層パターンが基本である。10層は若干、赤味を帯びた褐色土層で粘性がある。この層は９・11層の硬化層の間に割り込むように堆積しているが、３・６・８トレンチでも同様に硬化層間に堆積する層位がある。11層も縞目硬化層である。10層の存在によって９層との間に時間差があったことを窺わせる。

13－16層は半月状の断面プランの覆土となる土壌で、周囲の地山然とした褐色系土壌に対して明らかに粗密で色調も黒褐色系である。このプランに対応しそうなのが、近接する６トレンチにおいて検出したSD01であり、堆積する土壌および状況も相関する。平面検出による確認は得ていないが、

SD01覆土としての共通性が指摘できる。この7トレンチの16層中より僅かながらも須恵器破片が出土している。13層は明系の褐色土で極めて硬い。11層の硬化層を築く際に、窪みに土を入れてならし固めた層序ではなかろうか。14層はやや暗系の褐色土層で、6トレンチ19層に対応。15層は暗系と明系の褐色土が混在する。明系土壌は6トレンチ20層に対応する。16層はやや暗系の褐色土で、6トレンチの21層に対応する。SD01覆土に関し、6トレンチと7トレンチ間に共通する要素が多いが、7トレンチ覆土の方がやや明度が高い。13－16層の存在によって21層硬化面と11層硬化面との間に一画期のあったことを予想した。同時に版築状硬化層にはさまれてSD01のプランが現出することは、同遺構の年代観を得る上で非常に示唆的である。

第21層は版築状の硬化層である。縞目互層をなす硬化層のなかでは全体的にやや赤味が強い。また灰白色系と茶褐色系の縞目パターンの他よりも太く明確である特徴を持つ。22層は21層と面を一にするが、21層よりも層全体が褐色系であり、灰白色系の縞目パターンが細く明度が高い。22層はより整然と土層を叩きならした形跡を示し、その点では、むしろ24層にちかいともいえる。23層は若干赤味がかった版築状硬化層で、灰白色の縞目パターンの整然性は22層より落ちる。24層は灰白色の縞目パターンは明確とはいえないが、均整のとれた褐色土の縞目トーンが折り重なり、硬く叩きしめられたことが読み取れる硬化層である。同系色縞目が整然と折り重なっているためか安定感がある。25層は24層に似た堆積状況を呈する土層であるが、色調がやや明度を落とし、叩きしめの整然さを欠く。27－28層は客土を一括して入れて叩きしめられたとみられる硬化層である。縞目互層の堆積はみられず、層中に含まれるブロックは大きい。かたく叩きしめられているので、硬度は充分である。

上記の堆積状況から、埋立て工程を復元すると。谷地形を埋立てる際の土砂は、比較的目が粗く分量も多い、工程的に捉えると27－30層は縞目の一本分に相当する。25層の土砂が谷地形を覆った段階から、築き固める作業を繰り返して縞目互層を形成し水平レベルに近づける。22層より色調および土質感の相違する土砂を、均質的に盛っては築き固める作業を繰り返す。使われる土砂も細かく砕かれたものでブロック状のものは含まれない。SD01を挟んで一画期が存在する。埋没したSD01上面を均した後、11層がやや土台的に9層が仕上様に築かれている。工程を分け、段階を追って仕上げる過程において、硬化層の間には割り込むような10層の堆積が生じたのであろうか。

版築状硬化層を掘削する際、一気に掘ることはできず、一鍬毎に縞目の一単位が剥離した。これは同じ硬化層でも版築状ではない27－30層を掘削よりはるかに労力を要した。縞目互層にすることによって硬度を高めて、盛土硬化層を維持させることが可能であったのであろう。分析を行っていないが、強度を維持する何らかの成分が含まれている可能性は充分と考えられる。

31層は黒褐色系の土壌で埋立て以前の旧地表面と思われる。この層からは現在のところ弥生土器が出土している。32層は暗褐色土壌である。

8トレンチ

尾根上に位置するトレンチで、諸要素を記録する必要から四面の測量を行った。西壁面を基本に記述する。他の壁面の土層を述べる際は層位順の前に方角を表記する。

1層は表土層で植生土壌である。南側半分は最近まで茶畑利用されていた個所である。2層は非常

に硬くしまっていて、層中よりビニール製土嚢袋と鉄製レンチが出土した。昭和30年代より始まる三井開拓以降の堆積土と判断する。3層は茶畑耕作のために掘り起こした層である。茶畑以前はハウス葡萄が栽培されており、周辺には板線やコンクリート支柱がある。5層は褐色系の土壌で、削平した地山を盛った堆積と考えられるが、三井開拓に伴うものかは判らない。7－8層は黒褐色系の土壌で一時期地表面であった可能性がある。9層は若干炭化物を含む褐色系土壌である。隣接する3トレンチ－16層がほぼ似たような土質で、対面の東－8層にもつながる。

11層は版築状硬化層である。3・6・7トレンチで確認された硬化層と一連なものと考える。縞目が鮮やかな硬化層とやや不鮮明な硬化層とに分かれる構造も他のトレンチと同様である。ただし当トレンチで確認された版築状硬化層は2層から撹乱を受けているために確認が難しい。また2層自体も締りのある層位であるため、土質の明らかに異なる硬化層として範囲を出している。6層は11層に近い色調の粒子が拡散したような土層で、恐らくは劣化した硬化層から流れ落ちた堆積土であろう。

13－14層は縞目互層の11層と地山に挟まれた土層で非常に硬い。北側の地山面は浅く波打つ。トレンチ幅でしか確認できないが、複数の浅手溝遺構状に伺えた。

15－17層は3トレンチ－9・10層と同様な土層で地山を穿った穴に堆積した土層である。東－15・16・17層も同じである。壁面に遮られるが、推定される平面プランは円形と考えた（北側壁面図）。東－19層は地山が赤く変色した土層で、東－20層は劣化した地山である。北側にも赤色が延びる様子を確認できる。北－4層には比較的大きな地山ブロックが確認された。これらの要素を組み合わせて考えると、横口式炭焼窯の存在が想像される。3トレンチを含めて、確認された横口は3基。東－18層から北壁に延びる赤色は窯体である可能性が高い。北－4層に認められたブロックは天井部分の地山が崩落したものではなかろうか。ただ地山が非常に脆弱で崩れやすく、炭－1・2号窯と異なって横口が南向きである点が気がかりである。現段階では横口式炭焼窯が存在する可能性を指摘するに留める。

9トレンチ

東壁において、2層は四面で確認されている。3層は西壁5層と対応し、4層は西壁9層と対応する。西壁にくらべ東壁のほうが堆積層序の浅く少ないことは、東側が谷頭となることによる。

5－6層は半月状の溝SD08に伴う覆土である。調査区を横断しており、西壁よりも東壁において断面形が明確なものとなる。

7－9層は浅手の溝遺構SD07にともなう覆土で、SD08に切られて片身しか残っていないが断面は箱型になるものと考える。西側約1m30cmのところでSD08と完全に重なって掘り肩は消失する。SD07底面の9層は若干赤味を帯びた暗褐色土で、粒子が粗い。

10－28層は一層一層が薄く板状に折り重なった堆積をみせる層序である。3・6・7・8トレンチで検出された縞目互層の硬化層とは様相を異にしていて、締まりの緩い層序もみられ、特に硬化層といった様相を呈しない。本来は他の硬化層同様に硬く締められていたものが、谷底である地形的条件により軟化したものであることも考えられる。しかし、人為的に盛られたという観察が得られず、範囲も偏在的であることから、尾根上の硬化層とは違う層序と捉えている。一連の層序としたが、14－

15層をもって時期的に分かれることも考えられる。22層と28層の堆積が異質的であるが、これは法面に堆積した土砂を示すものと考えられ、踏み固められたのか硬化している。

29層はV字型溝の覆土であるが、平面のプランは緩やかにS字状に蛇行し、雨水による侵食谷か。

30－36層はSD06の覆土である。西壁は灰色－19層の単層であったが、東壁の方が掘り肩もしっかりしていて層序も細分化できる。断面プランに違いはあるものの東高西低となり、雨水は溝を流れて下降する。34－35層が堆積したのち、30－34層が折り重なるように順次堆積したようである。SD06が山盛り状に埋没している状況を観察すると、元々はSD06を底辺とする微地形の時期があり、その後南側が侵食・削平をうけたものではないかと想像される。

37層は赤味の強い層序で、東壁36層と対応する。赤褐色土の堆積範囲は、この層をもって検出面としているが、東側には37層のような鋭敏な形状で堆積を示す個所が少なからず見受けられた。38層は西壁38層と対応する層序である。54層は周囲の地表面から確実な地山面として捉えられるが、39－53層はやや暗色系の非常に硬く締まった層序である。37－38層同様に地山か堆積層かの判別が困難である。

西壁における2層は表土直下のやや光沢を帯びた暗褐色土である。調査区の四周にその堆積が確認できた。3層は2層よりやや明度の高い褐色土で、谷上から南側斜面より流れこんだ堆積と考える。4－9層は北側斜面からの堆積土で、4・6・8層がやや黄色を帯び、5・9層がやや赤味を帯びる。7層は黄橙色の褐色土である。これらの4－9層はSD05・SD06の上面を覆っているが、SD06から古代瓦片が出土しているので、これらの堆積が少なくとも古代以降になるものと判断された。比較的フラット面であること、堆積層が谷地形の割に浅い点、複数の溝遺構が検出されたことを合わせて、この面が何らかの開削を受けていると考えている。

10－12層はそれぞれ暗褐色の土壌で、飛び地状に残った同一層序となる可能性がある。13－14はやや黄色味を帯びた褐色土で、これも同一層序が分かれたものであるかもしれない。15層は南側斜面より流れ込んだ堆積土である。粒子の細かい土壌で若干緑味を帯びている。16－17層はやや赤味を帯びた褐色土壌である。

17層は浅半月状の断面形を呈するSD08の覆土である。谷頭である東側から続くもので調査区を横断する。掘削を受けていると予想するが、西側にかけて明確なプランを示さない。流路として当を得ているためであろう、雨天時には雨水や谷頭からの地下水がここを流れてくる。

18層は真上の15層より若干明系で、図化していない南壁面では15－18層相当の層序間に、16－17層と似た赤味をおびた土壌が挟まれていることから17層より先行する堆積を考えた。

19層はSD06に伴う覆土で、調査区を横断する。土壌は異なるものの東壁にも断面プランが認められた。この面の覆土は灰色を呈し、非常に固く硬化しており、SD03最下層の26層に近似する。

20－23層は、断面箱型のSD05に伴う覆土である。約東側2m30cmのところから掘り始め、西側にむけて深さを増す。21層はやや暗灰色地味ており、最下層の23層は明褐色の砂質土壌である。

24－26層はSD03の覆土である。基本的にSD05同様に断面箱型を呈するが、角を失いややU字形に近い。約3m10cm東側の地点から掘り始め、西側にむけて深くなる様相をみせる。25層が若干赤味を帯びており、26層が非常に硬化した灰色土壌である。

27－34層はSD02にともなう覆土である。これも形が崩れているが基本的には断面箱型を呈する。約5m30cm東側の地点から掘り始められて段階的に深くなり、手前側約1m20cmの地点から急に深さを増す。北側から堆積したと見られる27・29・30層は若干赤味を帯びて光沢性があり、南側から堆積した28・30・32層は粒子が細かく黄色味を帯びている。優勢的に北側斜面から土砂が流れ、間をおいて谷頭や南側から堆積作用が働く傾向を示すものであろうか。33・34層は相対的に若干赤味を帯びた層で非常に硬い。35層は若干赤味を帯びた褐色土壌である。プラン的にはSD02の先行する溝覆土となる可能性がある。

36－38層は赤味を帯びた土壌で、地山か盛土か判断が困難である。

10トレンチ

暗赤褐色の表土の下に2層ないし3層の堆積層を介在して橙色のやや砂っぽい地山に至る。表土層および第2層より平瓦が出土した。

11トレンチ

にぶい赤褐色土である表土の下で、部分的には存在しないが1層ないし2層の堆積層があり、橙色で砂質のよくしまった地山が露呈する。

12トレンチ

暗赤褐色の表土の下に1層から3層の堆積層を介在して灰白色の砂っぽい地山に至る。また、斜面を削平し人工的に平坦面をつくった痕跡が認められた。

13トレンチ

表土を除去すると第2層の炭を微量含んだやや砂っぽい明赤褐色土が露呈する。その下層の第3層は主に砂質で炭を少量含むにぶい赤褐色土があるが、炭を多量に含んだ黒褐色土が部分的に認められる。軒丸瓦や丸瓦、平瓦などの遺物はすべてこの第2層と第3層で確認された。第3層下では、密度の高い明赤褐色土までに遺物を含まない3層ないし4層の堆積層が介在し、第3層までには見られなかった西側への地形的な傾きが認められた。

3．遺　構（第10図、PL.36～39・101～119）

1・2・6・7トレンチ

SD01

1・2・6・7トレンチで検出された溝遺構である。トレンチ調査段階なので確実な平面的なプランを確認できないが、地形面に沿って若干蛇行している様子である。7トレンチより東側は三井開拓に伴う開墾によって失われている可能性が高く、1トレンチより西側にはさらに延長しているものとみられる。地表面は東から西側にむけて徐々に下降するが、溝底も基本的には地形に従うが西側に向かうにつれて相乗的に深さをます。

1トレンチ

現地表面からは溝の存在を窺わせる地形的な窪みはなく、むしろ段丘状の平場をなす。調査の結果、この平場が溝遺構の上に客土が堆積したものであったことが判明した。

1トレンチでは溝底部で約148cm長を検出し、底部の幅は約24cmである。主軸はN－89°－E。確認できる溝の上幅は約408cmを計るが、北側が失われているので実際の規模は不明。底部にむけてやや丸みを帯びて下降し、底面から約50cm付近のところで漏斗状に幅を減じて（約64cm）急角度に落ち込む。南側面は急峻な崖地形となって、上端と溝底との比高差は約438cmを計る。尾根上から溝底を覗き込むと、相当な勾配となる。この南側面には地層の境目に大きなクランクが入る。壁面が波打つのはこうしたクランクから地山がブロック状に剥落したものである。溝の覆土には、少なからず落盤した地山ブロックの堆積する様子が観察できた。北側面は、溝底までの深さは約168cmを計る。おそらくは隣接する溝状遺構に切られているのであろう、北壁上端部分は屹立している。溝北側の上端は別遺構に切られたために著しく低くなり、南北の比高差は約270cmともなる。溝底面の標高は海抜約31.80mである。

北側に隣接して溝状遺構らしきプランが観察され、断面からSD01より相対的に新しい遺構になる。

2トレンチ

現地形は尾根から降る傾斜地であった。2トレンチでは溝底部で約248cm長を検出し、底部の幅は約26cmである。主軸はN－66°－E。溝の上幅は約212cmを計測するが、北側上部は「筑紫街（海）道」の切通しによって失われている。断面形はややU字型をなす。1トレンチほど顕著ではないが、溝底面にむけてやや幅を減じて落ち込む。溝の側壁は比較的平滑な起伏をみせている。深さは北端を基準とした場合は約106cm、南端を基準とした場合は約178cmとなる。南側は尾根筋にあたり、平場となる。溝底面の標高は海抜約34mとなり、1トレンチにおける溝底との比高差は約2mを計る。

壁面に小規模な掘り込み（約12×30cm）が3ケ所確認でき、それぞれ直角に並ぶ。さらに一ケ所の掘り肩が調査区外に埋まっているものとみられ、合わせて板材などを掛け渡した可能性が考えられた。

溝底部から寡少な土師質の土器細片が出土している。

十層断面中にはSD01覆土上面に半月状の堆積プランがある、これが1トレンチにみられた溝状遺構に相当する可能性が考えられる。

6トレンチ

「賽ノ神」祠の北側に位置する尾根上に設けたトレンチ。

6トレンチでは溝底部で約200cmを検出し、底部の幅は24cm－53cmを計る。植栽の影響を受けてやや広がる個所があるので、基本的には約24cm前後が溝底の幅だと考える。断面形は箱型を呈する。尾根上に位置することから南北の比高差は小さく、上幅は約94cmを計る。深さは減じて約55cm程度となり、1トレンチに向けて相乗的に深くなる様子が窺える。溝底面の標高は海抜34.70mを計る。

SD01覆土上面には「筑紫海（街）道」に伴うとみられる版築硬化層が堆積する様子が確認できた。

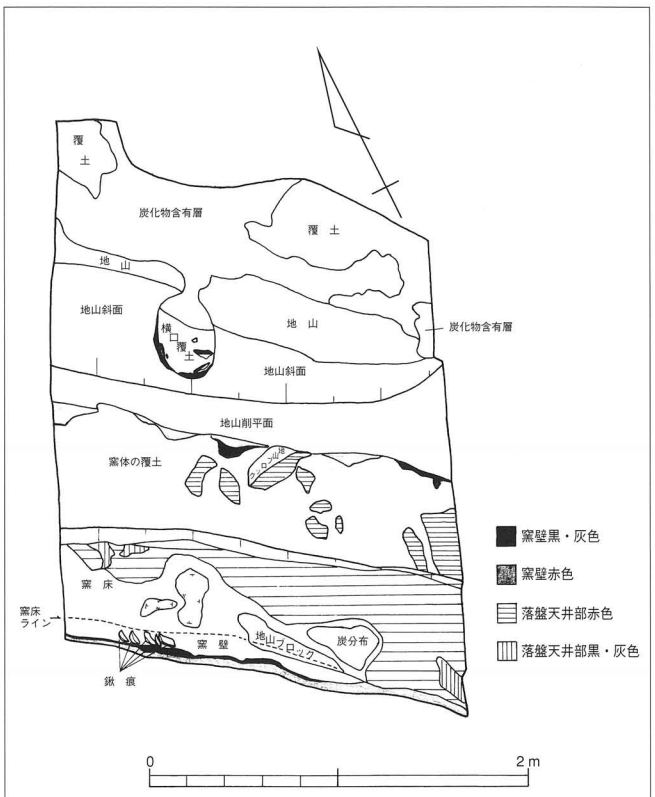
7トレンチは三井開拓面を生かしたトレンチなので、平面プランを伴わない断面のみの確認である。

断面形は基本的に箱型を呈すると思われるが、遺構主軸に対して斜めの断面なので見た目では半月状をなす。この覆土からは須恵器の破片が出土している。

2トレンチ

横口式炭焼窯1号窯

2トレンチの北端から赤色に変色した地山層およびブロック塊が検出されたことにより、調査区の延長を行い存在を確認した。全体を検出していないので確かなプランを確認できないものの、状況が近接する横口式炭焼窯2号窯と酷似しており、同型の炭焼窯に伴う一部分と判断した。検出したのは窯本体の一部とそれにとりつく横口一本である。堆積する覆土は完全に掘り抜かず、確認のために主軸方向に半裁した状態で留めている。北側に下る斜面に対して平行に窯本体を配し、斜面に対して横口が開口している。詰め出し口および煙道は検出していない。地山を穿って窯体が築かれており、火力を直接強く受けた部分が黒灰色、全般的には赤色に変化している。横口の天井部分は薄く黒灰色に変じている。検出範囲で天井は崩落しているが、アーチ状の形を復元できる。窯体底部および覆土中には落盤した天井部分とみられる赤色の地山ブロックが堆積する。窯体底部には若干量の炭化物が分布し、横口から斜面に向けて掃き出されたような灰原の層が分布する。窯体の壁面に僅かな鍬痕列が確認された。検出した窯体は約212cm、確認できる幅は約100cmを計る。窯体は調査区外の東西に延び、窯体の覆土は北側半分を抜いていないので実値はさらに大きくなる可能性がある。崩落している現況であるが、窯底から天井までの高さは約54cmを計る。横口は幅約31cmを計り、窯体から開口部分までの長さは中心部分で約60cmとなる。窯体の主軸はN－64°－W。横口はこれに直角に接続しているものと思われる。



第10図　三井Ⅱ遺跡00-4区　2トレンチ1号窯検出時平面図

2－2・2－3トレンチ

横口式炭焼窯2号窯

1号窯が検出された後、同遺構の広がりを確認するために設けたトレンチより確認した。

1号窯底部の標高は海抜32m60cm、2号窯底面は海抜33m40cmとなり、約80cmの比高差がある。1号窯の全貌はまだつかめていないが、両窯跡は近接しているので一部分は立体的に交差していることも予想される。

検出面は筑紫海道（街道）の切通しの内側に位置し、窯体の上半分は裁断されてオープンカットの

状態で検出した。１号窯と同様、山の法面に平行して円筒状の窯体が築かれており、六本の横口が窯体に直角にとりつく。詰め出し口は窯体と山肌とを斜めにつないで開口する。煙道および煙出し部分は失われていた。横口の前面には地山を削り残したテラスが設けられ、三基の土坑（SK01・02・03）が検出された。このテラス面が地山の削り出しであることから、逆に周囲の斜面地形が人為的に掘り下げたものであることを窺わせる。テラス自体は作業場として機能していたとみられるが、三基の土坑との関係は不明。ただし、SK01・02は壁面が加熱されて赤色化しており、さらに覆土には灰や炭を多量に含む。

詰め出し口付近には無数の鍬痕が残るが、窯体内は剥落摩滅によりそのほとんどを失っている。焚口西端を基準として窯体内の約30cm奥までは窯体内の地山に変化は生じていない。約30cm奥から先はラインを引いたように窯体内が赤色化し、特に約160～250cmの間は上面が黒色化している。裁断された窯壁を観察すると、横口のある北壁側は厚さ約14cm程度が赤色に変じ、直接火を受ける内壁の２～４cm程度は黒色化している。南壁側は約6cm 幅の地山が赤色化している。横口側から酸素が入り火熱が高かったことを窺わせる。窯体側壁は最奥部まで赤・黒色に変化しているのに対し、熱が上昇して与える影響が小さかったのか、窯底面は約250cmより奥は地山に顕著な色調の変化がみられなかった。南東側の壁面はその多くが植栽の撹乱によって分離剥落している。山肌に開口する横口は窯体側の約40cm間の内壁は赤色化していたが、開口部付近は地山色のままである。

覆土は１層（以下、長軸断面）に窯体内壁が剥落したと見られる赤色ブロックが多く含まれる層が堆積するが、天井に相当する量は認められない。１号窯と同様に天井がある段階ですでに1－9層までの覆土が堆積したものと考える。堆積する過程において１層にみられるような部分的に天井壁の崩落が起こったのであろう。1－6層にはこのような赤色窯壁片を含んでおり、窯廃棄後の堆積の可能性が高い。炭化物はほとんど含まない。7－9層は炭と灰が混ざったような土壌である。窯の中央から焚口にかけて窯底を薄く堆積する。おそらく操業にかかわる残土と考えるが、これらの層に含まれる炭化物はこなごなの破片ばかりで、まとまった量の炭化材が出土するということはない。

窯体は中心軸で全長約964cm、剥落のない内壁の計測値は約94～102cmをはかる。残存状態のよい窯壁の高さは約15～32cm程度にすぎない。横口は幅約36～44cmを計り、窯体から開口部分までの長さは中心部分で約70cmとなる。窯体の主軸はN－64°－W。焚口より約300cm奥付近が最も深く、標高は海抜33m40cm前後。熱効率を上げるためか、約400cm奥から傾斜角２～６°でスライドして約15～20cm程度上昇する。

焚口から３番目の横口内開口部付近から真っ赤に変じた布目平瓦一点が出土した。横口式炭焼窯２号窯と瓦窯１号窯は南側に位置するが、出土した瓦はおそらくこの瓦窯址の製品と推定する。瓦窯１号窯の灰原から出土した軒丸瓦片には８世紀前半頃の年代観が与えられるという。他にも横口付近からは、白炭という名称が許されるのか分からないが、約10cm程度の非常に硬質感のある炭が若干出土している。炭窯に抱いていたイメージのわりに、出土した炭の量は意外と少ない印象を受ける。

SK01・02・03

横口式炭焼窯２号窯の横口外に位置する。山の斜面に設けられたテラスの平場より三基の土坑を検

出した。テラス上面は長方形を呈している。何れの土坑からも遺物の出土はなかった。

SK01

東端に位置する土坑、平面プランは隅丸方形である。側壁面は熱を受けて赤色に変化するが、底面はほとんど変色していない。断面形は底部にむけて末広がりのフラスコ状を呈する。底面はほぼフラット面となるが小さな凹凸を生じている。覆土は、1層は炭化物を多量に含む層。3層は炭と灰が混ざった状態であった。南北約72cm×東西約86cm。深さは中央部分で約34cmを計る。

SK02

西端に位置する土坑、平面プランは隅丸方形である。SK01同様に側壁面のみ赤色化している。底面は凹凸が激しく、不定形となる。1層はSK01－1層と同様に、炭化物を多量に含む層。2層は灰を多量に含む層であった。南北約84cm×東西約116cm。深さは中央部分で約20cmである。SK01と同02は底面に違いが見られるものの、壁面が赤色化している点や覆土の様相など共通する点がある。

SK03

中央に位置する土坑である。SK01とSK02を切っており、三基の土坑中では相対的に新しい遺構。SK01・02のように壁面が赤色化していないという違いもある。第2－3トレンチ南壁断面では、比較的上層の位置から掘り込まれていることがわかる。覆土は粗密であり、黒色土を呈するものの炭化物の量は少ない。東西軸約176cmで、中央部分の深さは32cmを計る。

9トレンチ

SD02～08

9トレンチは谷底に設けられた調査区で、溝遺構が複数確認されたので拡張を行った。中～小規模な溝遺構が7（8）本検出された。何れの溝遺構も谷地形に沿っており東から西に向けて下降する。

SD02

調査区の南端から検出した溝遺構で、調査区内で掘り始められて調査区外へ抜ける。基本的には断面箱型を呈するが、掘り肩は西側が深く明確であるのに対し、東側は浅くあいまいとなる傾向がある。検出した長さは約512cm。掘削開始点から約60cm地点、約180cm地点のところでそれぞれ段をもって下降する。特に約390cm地点では比高差約65cmを計る。掘削開始点より若干扇形に末広がりの平面プランをみせ、掘削開始地点は上幅約40cmであるが西側壁面では約126cmとなる。覆土の土層断面に新旧関係がみられることから西壁付近で掘り返しが行われたことを推測する。主軸方向はN－56°－Eである。

SD03

調査区の西側から検出した溝遺構である。検出した長さは約324cmを計り、途中SD04と接する。調査区の東西中央付近から掘り始め、下降するにつれ扇形の末広がりとなる。上端は開始地点で40cm、調査区西端で160cmをはかる。掘り始めは海抜28.10m、最下層は海抜27.18mとなり比高差は約1m。断面はU字型を呈し、最下層に硬化した灰色層が堆積するのが特徴である。若干の屈折をみせるが、主軸の方向性はN－75°－Eである。

SD04

SD03と合流する溝遺構で調査区のほぼ中央に位置する。SD04にともなう覆土はSD03に切られており、相対的に古いことが判る。遺跡中央に分布する小山地形斜面に開削している。掘削地点から約364cmのところでSD03に切られる。上幅は28～44cm、深さは22～34cmである。断面はU字型を呈する。最下層の5層からは炭材と瓦破片が出土した。主軸はN－70°－Eを計る。

SD05

調査区の西端、南北軸の中央付近に位置する。浅い掘り始めに相当する。断面箱型を呈する。上幅は約50cm、深さ約38cmを計る。最下層は明褐色の砂質土壌である。

SD06

調査区を東西に横断する溝遺構。断面は箱型を呈するが、西側に向かうにつれて浅く断面プランも緩くなる。上幅は東西の壁付近で約40～50cm、小山地形を通る個所では掘り肩が広がり約90cmとなる。底部の幅は比較的安定して、17～22cmを計る。東側より赤色化した瓦破片一点が出土した。若干蛇行しているが、直線距離で約304cmを計る。東側半分の主軸がN－68°－E。調査区の中央途中で角度を変え、西側半分の主軸がN－88°－Eとなる。

SD07

調査区の東南隅より検出した溝遺構。断面は箱型を呈する。隣接するSD08に、ほとんどを切られて溝の片身しかプランを残さない。長さ約128cmを検出した。上幅は約50cm、下幅約28cmを計る。深さは約12cmである。

SD08

調査区を東西に横断する溝遺構である。断面は浅半月状を呈する。ほぼ直線状に、長さ約764cmを検出した。上幅は約172～180cm、深さは20～40cmで西側に向かって浅くなる。断面では最も新しい遺構となり、表土層の直下から検出された。遺構の主軸はN－56°－E。

1・2・3・6・7・8トレンチ

筑紫街道

文政六年銘「漆沼郷下直江村絵図」に描かれる「筑紫海道」の比定地。絵図中には「賽神」が記載され、現存する「賽ノ神」の祠を参考にしてトレンチを設定した。現在の「賽ノ神」の位置に就いては、聞き取り調査によると、少なくとも、昭和30年代よりはじまる三井開拓事業によって西側の畑端に遷宮したといわれており、厳密に絵図中の位置を示すものではない。現在、尾根上の地目は茶畑である、この近傍に「賽ノ神」祠が鎮座している。

1・2トレンチからは開削された切通し、6・7・3・8トレンチからは版築状硬化層を検出した。山の斜面を切通し、谷地形を埋めて道路を敷いた様子を窺い得た。また、杉沢線を越えた三井Ⅱ遺跡00—3区からも版築状が検出され、同様な様相が三井地塁の尾根上に細長く分布することも予想される。

1トレンチ

原地形には尾根ともう一段の平場があり、切通し状の浅い窪地がみられる。SD01と溝状の掘り肩に並んで、切通しが検出された。近接する横口式炭焼窯2号窯がオープンカット状態で検出されたこ

とから、山の斜面を切通した可能性はきわめて高い。地山の形状は大枠でとらえると、台形状というよりもむしろ浅半月状という表現に近い。土層断面からはSD01埋没後も切通しは機能していたと考えられるが、同遺構が埋められた後に土砂が盛られて平場の段を形成している。

切通しの底面南端には、浅半月状の溝が掘られており排水路の機能を果していたものと考える。位置的には路面に伴う側溝の片身に比定できる。ただ層位的には、切通し底面に堆積する４・５層を切り込んで掘られているので、相対的に新しい時代に整備を受けたことが判る。溝の壁面は水流による影響を受けたものとみられ、なだらかに摩滅して若干黒ずんでいた。この溝肩を頂点として北側約２m30cmの間はなだらかに下降し、対面はＶ字状に緩やかに立ちあがる。この地山面を路面としてみた場合は、平坦にはならない様相がある。歩行上の支障はないが、荷車などはＶ字状の落ち込みを跨いで登板しないと路幅と安定は確保できない。この切通し底面の落ち込みは雨天時には排水機能を立派に果すものの、側溝という形称はふさわしくない。地山直上の７層がやや硬化しており、ここが路面となる可能性もある。SD01を含めた切通しの上幅は約1,710cm、SD01と溝状遺構を除いた値は約996cmを計る。下幅は溝部分を含めると約344cm、想定される地山の路面部分は228cm（７層上面は244cm）となる。深さは南岸を基準とした場合は約492cm、北岸を基準とした場合は約283cmとなる。この１トレンチから未調査域の西側を踏査すると、断続的に切通しや陸橋状を呈する小地形の続く様子を観察できた。

２トレンチ

現地形は１トレンチでみられた尾根と平場の二面が接する上手の位置で、切通し地形の端緒となる位置である。北側斜面をカットし、路面を想定する平場の段を形成する。表土層を剥ぐと地山が現出する。路肩は地形的制約によって不定形で、東側で約140cm、西側に向けて約240cmと広くなる。ただこの数値は地山部分の計測値で、堆積土をふくめると東側でも約315cmを計る。この堆積土の上面は硬化していない。１トレンチと異なり、推定される路面の傾斜は小さい。東側は尾根に向けて登り、トレンチ西側との比高差は約20cmである。１トレンチの浅半月状溝の延長線上となる可能性が考えられた。北岸と下底との比高差は約176cmを計るが、断面形から復元される旧地形はなだらかな緩斜面である。

６トレンチ

版築状硬化層の堆積が確認された。地山面にはSD01が掘り込まれ、２トレンチから続く平坦面が失われている。SD01は「筑紫海道」とおそらくは関係ないものと思われるので、地山面に道路址を比定することはできない。版築は幅約244cm、高さ約58cmを計る。断面形は広義の台形をなすが、特に上層部の摩耗・崩壊が激しい。版築状硬化層から須恵器破片が出土している。２トレンチから通してみたときは切通しと版築硬化層と平面的なつながりを有する。

８トレンチ

尾根からやや南側に降った位置。６トレンチから東側に向けて、版築状硬化層を検出している。基本的な地形として南側に下降していることを考えられ、尾根筋を削平した排土を盛り開拓面を拡張していることを予想する。三井開拓に伴う開墾によって、版築硬化層も相当な削平をうけたものと予想されるが、現在確認できる幅は約250～260cm、高さ約28～30cmを計る。地山面はほぼフラットであ

る。このフラット面と北側法面との境目に幅約30～52cm、深さ８～21cm程度の浅手溝状掘り肩が二条走る。地山フラット面は、南端に位置する溝の路肩を基準とすると約300～320cmを計り、北端に位置する溝の路肩を基準とした場合は約370～410cmを計る。しかし残存部分の計測地に過ぎず、南側は茶畑によって失われている。

３・７トレンチは断面による版築状硬化層の堆積が確認されたが平面プランは伴っていない。７トレンチの版築状の層中から須恵質土器片が出土しているが、６トレンチと同様に年代観を提示できない破片であった。これら破片は版築用の採土から混入した経緯が考えられるので、版築状硬化層の築造年代を示すものかは現段階では疑問が残る。

現状の切通しについては、少なくとも横口式炭焼窯２号窯が廃棄された後に開削されたことを指摘できる。

１トレンチ

SB01

SB01は直径5.2mの円形を呈する竪穴住居である。丘陵上で検出され、南側の部分については残っていない。壁体は約20～30cmを測る。壁の立ち上がり角度は最も残りが良好な部分で60～70°であり、床面は南に向かって少し傾斜している。ピットは数カ所検出されているが、主柱穴は４本であったと考えられる。北側の二つは長径64cm、短径56cm程度の扇形を呈し、深さは約30cmである。南側の二つは長径70～90cm、短径40～50cmの楕円形で、深さは約50cmを測る。柱穴間の距離は北側2.4m、南側2.4m、東側1.6m、西側1.4mを測る。

１層は表土層である。2－7層はSB01を若干穿った窪みに堆積した土層と考える。後述する北側の谷地形には人の手が加えられているが、その造作の影響を受けた可能性もある。2－3層は褐色形の覆土で客土の雰囲気をもつ。４・７層は周囲に対して黒味かかっている。６層は灰色味を帯びた薄い堆積層であるが、広く堆積する様子が窺えた。５層は薄褐色系の覆土である。４層の周囲に円弧を描くのように堆積していた。８層以下はSB01に伴う覆土である。もともと北側に傾斜する堆積の様相を示すが、７層以上の堆積と二分されるので、時期差があるものと判断した。これは先行した１トレンチの壁面の様相と一致する。9－11層はやや褐色がかった堆積土。12層はやや暗系である。13－15層は灰色を呈する覆土で、南側壁面沿いに分布する。16・17層はSB01周溝に堆積した土層で明度の高い褐色土層であった。18層はSB01の中心に位置する柱穴に伴う覆土で炭化物を含む黒色系土であった。

SD09

SD09はSB01の東側で、尾根を分断するように検出された。幅は1.3m～1.4mで、深さは最大で40cmを測る。埋土は明黄色褐色粘質土であり、埋土内より弥生土器と思われる土器片が出土した。SB01の周囲を回る様相であることから、SB01とほぼ同時期のものと思われる。

12トレンチ

瓦窯１号窯

瓦窯１号窯は12トレンチの南端で検出された南西に開口する地下式の登り窯である。天井部は完全に崩落している。崩落土のみの掘削で、床面まで完掘しなかったために、窯内部よりの出土遺物は検出できなかった。しかし、灰原推定付近に設定した13トレンチから多量の瓦が出土したことによって瓦窯址と判断した。現段階は焼成部までの検出で、燃焼部や焚口までの確認に至っていないため、全長は不明である。平面形態は検出面で扇形になったが、最終的な窯体の形態は長紡錘形を呈すると思われる。煙道部での幅は約１ｍで、壁面遺存高は80cm以上を測り、主軸はN—48°—E を示す。

５・10・11・13トレンチ

遺構は確認されなかった。

４．遺　物（第11～13図、第９表、PL.72～74・155～161）

１トレンチ

１から４は弥生土器と考えられる。１は甕の口縁部である。口縁端部は上下へ僅かに拡張し、２条の凹線文が施されている。２も甕の口縁部と思われ、復元口径は13.4cmを測る。口縁端部は上方へ僅かに拡張されるが、下方へはほとんど認められない。また端部には１条の凹線が認められる。３・４は底部である。３は復元底部径は6.6cmを測り、底部から大きく外反する。４は復元底部径が4.0cmで底部から僅かに外反しながらのびる。

２トレンチ

５は弥生土器の底部と考えられる。復元底部径は6.6cmを測り、底部から僅かに外反しながらのびる。

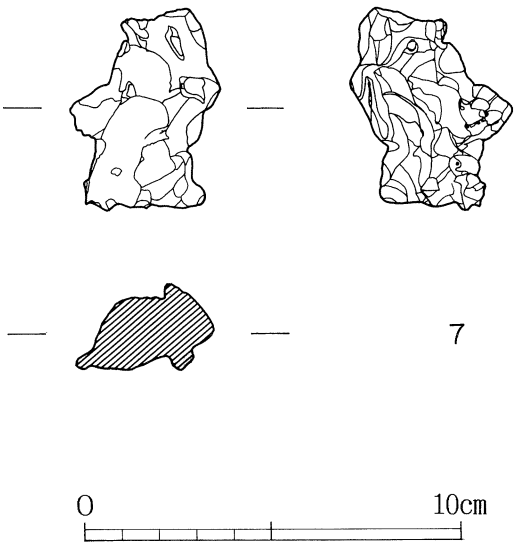
２－２トレンチ

遺物としては須恵器片が僅かに出土したが、細片のため実測に耐えうるものはなかった。

２－３トレンチ

６は平瓦である。軟質で赤褐色を呈し、かなり磨滅している。凸面は格子タタキが施され、凹面は布目痕を有し、粘土板の合わせ目の痕跡が認められる。

７は製錬滓と思われる。大きさは最大で５cm程度で、重量は25.8gを測る。



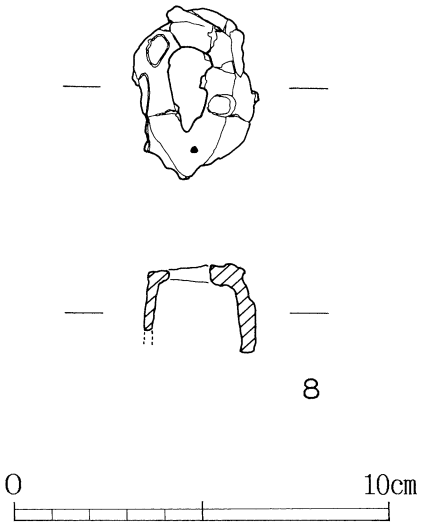
第11図　三井Ⅱ遺跡00－４区２－３トレンチ出土の製錬滓

3トレンチ

8は鉄製品である。平面の外形が紡錘形で、内側に同形の穴が開いている。また、直径1mm程度の円孔を一つ持つ。断面はU字型を呈する。かなり錆化が進行し、用途や時期は不明である。第2層より出土していることから、比較的新しいものかもしれない。

4トレンチ

9・10は弥生土器である。9は甕の口縁部と思われ、復元口径は18.2cmを測る。口縁端部で上下に拡張し、3条の凹線を有する。10は底部で復元底部径は8.0cmを測り、僅かに外反してのびる。

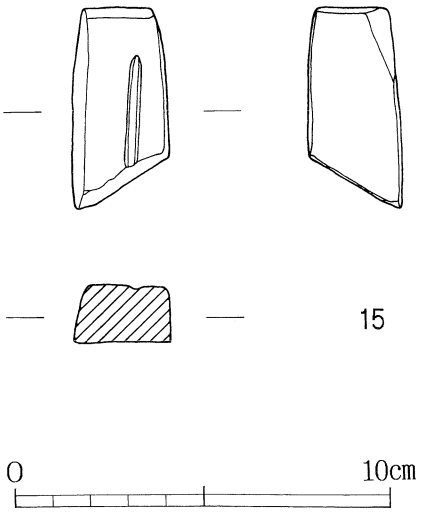


第12図　三井Ⅱ遺跡00－4区3トレンチ出土の鉄製品

7トレンチ

11は弥生土器の高杯である。復元口径は16.4cmを測り、口縁部外面には凹線文の間に、刺突による刻目が施されている。この文様形態の特徴は備後北部のⅣ様式の標式である塩町式と酷似している。

12は須恵器蓋と考えられるが、細片のため判然としない。



第13図　三井Ⅱ遺跡00－4区9トレンチ出土の石製品

9トレンチ

13は外面に銅緑釉を施釉した筒型火入である。見込みの器壁は著しく薄い。胎土は灰褐色を呈し、長石（1mm以下）を微量含む。底部は無釉で箆削りとみられる調整痕が残る。高台は面取りされる。施釉されない内面には、成形時の轆轤目が残り、見込み部分には重ね焼きをした環状の付着痕跡がつく。釉薬は籾灰釉に長石釉・緑青を加えて、酸化焼成したものである。釉薬の表面には目立たない程度の細かな貫入が入る。推定される産地は布志名系である。幕末から近代にかけて、この銅緑釉製品が布志名諸窯でもよく焼かれたといわれている[22]。

14は平瓦である。磨滅が著しく、凸面に僅かな格子タタキ痕が認められる。

15は全長5.3cm、幅が最大で2.5cm、厚さは1.5cmを測るやや小型の砥石である。断面は台形を呈し、上面には最大幅3mmの溝を1条もつ。石材は頁岩[23]である。SD06埋土下層より出土した。

10トレンチ

16～18は須恵質の平瓦である。いずれも凸面は格子タタキが施されている。凹面は布目痕を有し、17の凹面には粘土板の合わせ目の痕跡が認められる。

12トレンチ

19・20は須恵質で器種は判然としない。当該トレンチで瓦窯址が確認されていることから、道具瓦の一部あるいは窯道具である可能性も考えられる。19は轆轤による成形がなされているが、底面は剥離したものか、調整がされていないのか、凸凹である。20は残存部分で上からみると円形というよりもむしろ方形になる様相を呈する。

21は軟質の平瓦である。磨滅が著しく、凸面に僅かな格子タタキ痕が認められる。

22は欠損が著しく、もともとの形は不明であるが塼と思われる。断面は台形を呈し、上面にヘラ削りの痕跡が認められる。

13トレンチ

23は須恵器の杯と思われるが、細片のため、蓋である可能性もある。

24は土師質でつくりが荒く、手捏ねで成形されている。単なる器かどうかは判然としない。

25は複子葉弁の蓮華文軒丸瓦である。おそらく8弁で中房には1＋4の蓮子が配されるものと思われる。瓦当面をみるとかなり丁寧につくられたという印象を受ける。

26～27は軟質の丸瓦である。27の凸面は磨滅によって不明であるが、26は格子タタキが施されている。凹面はいずれも布目痕を有し、粘土板の合わせ目の痕跡が認められる。

28～32は平瓦で、29は須恵質であるが、その他は軟質である。いずれも凸面格子タタキが施されている。凹面はいずれも布目痕を有し、28・31・32には粘土板の合わせ目の痕跡が認められる。

33・34は土師質である。33は凸面が屈曲し、凹面はヘラ削りの痕跡が認められる。34はもともと円柱状のものであった可能性があるが、断面はかまぼこ形を呈している。ともに欠損が著しいために器種や用途は不明であり、窯道具か道具瓦の一部かもしれない。

5・6・8・11トレンチ

遺物は確認されなかった。

註 ① 平川　南氏の御教示による。
② ①に同じ。
③ 伊藤瑞章氏の御教示による。
④ ③に同じ。
⑤ ③に同じ。
⑥ ③に同じ。
⑦ ③に同じ。
⑧ ③に同じ。
⑨ ③に同じ。
⑩ ③に同じ。
⑪ ③に同じ。

⑫　③に同じ。

⑬　③に同じ。

⑭　③に同じ。

⑮　澤田順弘氏の御教示による。

⑯　奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始篇』1993

⑰　③に同じ。

⑱　多々納弘光氏の御教示による。

⑲　堀内秀樹「「統制番号」のついた陶磁器について」『東京大学構内遺跡調査研究年報 2　1997年度』東京大学埋蔵文化財調査室 1999
土岐津町誌編纂委員会『土岐津町誌 下／資料編』土岐市土岐口財産区 1999

⑳　⑲に同じ。

㉑　③に同じ。

㉒　⑱に同じ。

㉓　③に同じ。

第6章　まとめ（第14・15図）

2ヵ年におよぶ当該調査で得ることができた情報は、決して少ないものではなく、大きな成果があげられたことは、あらためていうまでもない。この得られたデータを整理して、調査の成果を主要な時代ごとに簡単にまとめておきたいと思う。

まず、縄文時代であるが、三井Ⅱ遺跡99－1区において、船元式、中津式、福田K2式などに含まれるものと思われる中期以降の土器と、晩期頃の所産と考えられる遺物を含む遺構を認めることができた。特にSD05は埋土から土器が細片ではあるが、多量に出土し、一括資料として貴重なデータを得ることができた。

次に、弥生時代であるが、杉沢Ⅲ遺跡00－1区、三井Ⅱ遺跡00－1区、三井Ⅱ遺跡00－4区において竪穴住居が検出された。杉沢Ⅲ遺跡00－1区のSB01、三井Ⅱ遺跡00－1区のSB01は直径が7.6m程度と比較的大きく、今回の調査対象範囲の中央を横断する町道杉沢線改良工事に伴い平成4年度から実施された発掘調査によって検出された竪穴住居とほぼ同規模である。いずれも中期後半頃の所産と思われる土器が出土している。ただし、三井Ⅱ遺跡00－4区のSB01については他の三つと比較して、規模が5.2mとやや小型である。立地的な制約による大きさかもわからないが、周辺部から、わずかに後期頃の時期の土器が出土していることから判断して、中期後半～後期と考えられる。この他に方形の竪穴住居である三井Ⅱ遺跡00－1区のSB02は、周壁溝内より弥生土器の細片が出土し、埋土上面からは古墳時代中頃の所産と思われる土師器が検出されていることと、弥生時代中期後半頃のSB01との切り合い関係から判断して、弥生時代後期～古墳時代前期頃のいずれかの時期に営まれていたものと思われるが判然としない。これまでに調査によって確認された円形の竪穴住居は調査対象範囲内で散見されることから、かなり大規模の弥生集落の存在が想定できる。

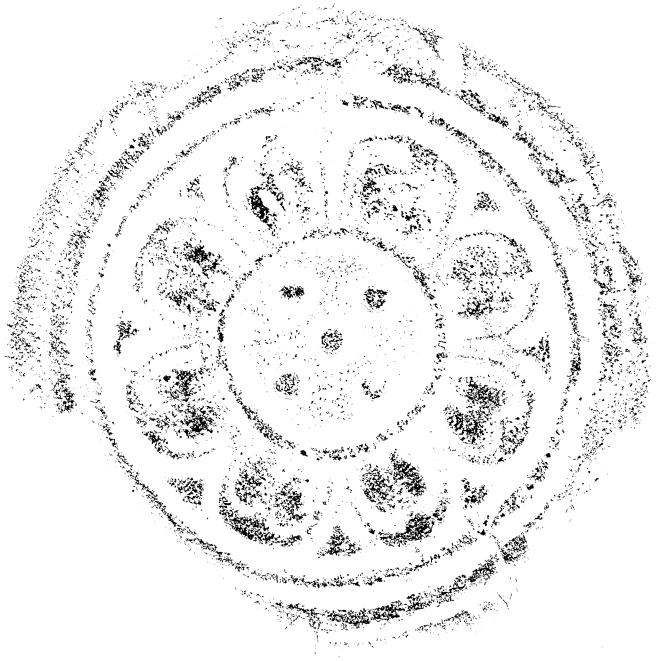
古墳時代には、後期頃の遺物が各調査区で認められるものの、この時期の遺構として明確に判断できるものは、一括で出土遺物が確認された三井Ⅱ遺跡99－1区のSK02が唯一である。

奈良時代・平安時代としては、堀切Ⅰ遺跡00－1、堀切Ⅰ遺跡00－2区、三井Ⅱ遺跡00－1区において検出された掘立柱建物は、概ね奈良時代後半～平安時代前期のいずれかの時期に営まれたものと思われる。概ねではあるが、方形のピットの時期と、円形のピットの時期の二時期に分類できると考えられるが、ピット内からの出土遺物によれば、さほど大きな時期差は感じられない。なかでも、堀切Ⅰ遺跡00－1区で検出されたSB01は今回の調査で確認された最も大型の建物である。南面に庇が付くものか、現段階では明らかではないが、ピットや床面積の規模で判断すれば、有力者の居館あるいは象徴的な建物かもしれない。堀切Ⅰ遺跡00－2区の斜面を切り盛りして築かれた建物群については、地盤が堅緻で平坦な地形が少ないという地形的な制限によって、斜面にまで建物が及んだ可能性もあるが、堀切Ⅰ遺跡00－2区とその下に位置する三井Ⅱ遺跡99－2区および谷続きの三井Ⅱ遺跡99－1区において、炉壁片が出土していることから、金属工房である可能性が推測できる。製錬した金属については、厳密には自然科な分析によらなければ判断しがたい[①]。

また、奈良時代頃のもので、三井Ⅱ遺跡00－4区で検出された横口式の炭窯は宍道湖南岸の玉湯町布志名大谷Ⅱ遺跡[②]、宍道町白石大谷Ⅰ遺跡[③]に次いで島根県内では3例目の発見例である。この種の

炭窯は製鉄に使用する上質の炭を生産するものと考えられている。しかし、生産した炭が用いられる先は今回の調査によって確認された遺構の中に含まれているのかどうかは明らかではない。

三井Ⅱ遺跡00－４区12トレンチで検出された瓦窯１号窯は完掘しなかったが、灰原付近に想定される13トレンチから出土した軒丸瓦は文様から判断して、奈良時代頃のものと思われる。また、この軒丸瓦は、平成３年の台風19号来襲によって三つの井戸の一つである福井そばの椿の木が倒れた際に、その根元において御井神社宮司の稲田氏が発見した[4]ものと同文様であり、この文様は広島県三次市の寺町廃寺と同じ系統と思われ、斐伊川対岸に位置する出雲市の神門寺境内廃寺でも出土している。残念ながら瓦の供給先については、今回の調査では確認されなかった。



第14図　福井付近出土の軒丸瓦（１：２）

こうしてみると、生産に関連する遺構が多く認められ、奈良時代から平安時代前期のある時期に専業者集団とまでいってよいものがどうかは別として、ある種の職能をもった集団が存在するコンビナートであったといえるのではないだろうか。

また、三井Ⅱ遺跡99－１区において「三井」、「井」、「総」、「両」など15点の墨書土器が検出された。いずれも奈良時代後半から平安時代前期の所産と思われる。「三井」については、出土地の小字名が「三井」であり、御井神社周辺の三つの井戸、つまり生井、福井、綱長井に由来する。そのため、地名を示すものあるいは、推測に過ぎないが周辺部の集落の首長である氏族名を示すものかもしれない。「井」はおそらく井戸そのもので施設を指すものと考えられる。また、「三井」、「井」については、そのほとんどが器の内面に記されている。そのために祭祀的な要素が強いものとして指摘される。「総」、「両」と確実に読めるものについては外面に書かれている。しかし、何を示すものかは現在のところ明らかではない。

これらの墨書土器の他に、三井Ⅱ遺跡99－１区出土の瓦や転用硯と思われるもの、三井Ⅱ遺跡00－２区出土の円面硯などの寺院や官衙でよく認められるもの、三井Ⅱ遺跡99－１区出土の経筒の蓋のような銅製品、三井Ⅱ遺跡99－２区出土の三足が付く骨蔵器のような形態の須恵器壺など、仏教的な要素が伺える遺物が見受けられる。

『正倉院文書』の中に漆治郷に関連する優婆塞貢進文が見られる。これは出雲郡漆治郷の戸主出雲臣大国の家族である日置部君稲持が、仏典の修行を行い、俗生活を営みつつ仏道に帰依する者、すな

わち優婆塞になったことが記載されている。今回の調査では直接的にこの記載内容と結びつく成果はあがっていない。しかし、この周辺部にかなり仏教文化が浸透していたことが、この文書で垣間見ることができ、仏教色のある遺物が出土することも納得できる。

筑紫街道の推定ルート上に位置する三井Ⅱ遺跡00－3区及び00－4区における調査は、天神伝承が残る筑紫街道がいつの時代まで遡ることができるのかという一つの目的があった。立証できるのは文政6年の記銘がある「漆治郷下直江村絵図」によって近世頃の存在は明らかである。発掘調査によって尾根上の谷のような凹んだ部分に、土を入れて閉め固めた痕跡が認められた。これは古代の版築とは様相が異なり、古代の版築工法と区分するために、本書では便宜的に版築状とした。結論としてはかなり大がかりな工法によって手が加えられていることがわかったものの、この工法が施された時期については残念ながら明確な査証を得ることができなかった。また、三井Ⅱ遺跡00－4区SD01は断面形が「V」字状で、弥生時代の円形竪穴住居であるＳＢ01との位置関係から、一見すると弥生の環濠のような様相ではあるが、7トレンチの壁面において版築状の層中層あたりに切り込み、その壁面の埋土内より須恵器片が1点出土しているため、掘り返しあるいは版築状の工法が弥生時代に施されていない限りその時期まで遡ることはできない。

謹解　　申貢優婆塞事
合弐人　　並出雲国
日置部君稲持、年肆拾、出雲郡漆治郷戸主出雲臣大国戸口
　　誦最勝王経壱部　　唱礼具

（中　略）

師主薬師寺僧平註
　　天平十五年正月八日
　　出雲国守従五位下勲十二等多治比真人国人

第15図　『正倉院文書』優婆塞貢進状

今回の調査では大きなミスを犯している。杉沢Ⅲ遺跡の00－1区のSB01と三井Ⅱ遺跡00－4区12トレンチの瓦窯1号窯はいずれも平面検出段階で遺構を見極めることができなかった。その結果、土層の堆積を観察するための直交する断面を破壊してしまうこととなった。これは、調査を担当した自らの調査技術の未熟さから生じたことは否定できない。このことは、自らの戒めを込めてここに加筆しておきたい。調査技術が着実に進歩している状況の下で、自己研鑽の必要性をいまさらながら再認識している次第である。

先述したとおり、今回の調査で得られたデータは決して少ないものではない。しかし、遺跡のより鮮明な歴史像を浮かび上がらせるためには、まだ不十分であることは否定できない。今後の周辺部を含む調査・研究に期待したいと思う。

最後に、人の手によって世の中は今日に至るまで時間とともに、目ざましい文化の向上を遂げてきたことはいうまでもない。しかし、その過程を知らずして本当に発展したといえるであろうか。我々は、遺跡のもつ情報を収拾し、遺跡の性格解明によって世の中の進化と向上の足跡を検証するという重い責務を負っていることを再確認して筆をおきたい。

註　①　穴澤義功氏は銅の可能性があると指摘している。

②　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡　一般国道9号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4』1997

③　島根県教育庁文化財課『埋蔵文化財センター年報Ⅴ』1997

④　堀切瓦出土地

参考文献

倉敷考古館『倉敷考古館研究集報　第7号　里木貝塚』1971

永峯光一『縄文土器大成　第2巻―中期』1981

野口義磨『縄文土器大成　第3巻―後期』1981

鈴木公雄・林　謙作『縄文土器大成　第4巻―晩期』1981

小林達雄『縄文土器大観　3　中期Ⅱ』1988

小林達雄『縄文土器大観　4　後期　晩期　続縄文』1989

奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始篇』1993

東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報1　1996年度』1998

東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報2　1997年度』1999

九州陶磁文化館『九州陶磁の編年』2000

九州陶磁文化館『柴田コレクション（Ⅳ）』1998

千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会『千駄ヶ谷五丁目遺跡調査報告書』1997

第１表　杉沢Ⅲ遺跡00－1区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	第1図	弥生土器	甕か？	復元口径 19.6	ＳＢ０１埋土	外面：口縁部に凹線 内面：ナデか？	焼成：普通　色調：浅黄橙色 胎土：１㎜以下の砂粒を少量含む。
2	第1図	弥生土器	甕か？	底部径 6.4	ＳＢ０１埋土	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　浅黄橙色～橙色　外　橙色～黒褐色 胎土：１㎜以下の砂粒を多量に含む。

第２表　堀切Ⅰ遺跡00－1区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	PL. 5	縄文土器	鉢	――	表土層	外面：縄文地に指頭圧痕による刻み目凸帯　内面：ナデか？	焼成：普通　色調：内　にぶい橙色　外　にぶい赤褐色　胎土：３mm以下の砂粒を多量に含む。
2	PL. 50	弥生土器	壺 or 甕	復元底部径　8.4	表土層	磨滅により不明	焼成：良好　色調：内　にぶい橙色　外　にぶい橙色～にぶい赤褐色　胎土：２mm以下の砂粒を多量に含む。
3	PL. 50	土師器	壺	復元口径　18.2	第２層～第４層	口縁部：内側はタテ方向のナデ 外面：頸部以下はタテ方向のナデ 内面：不明	焼成：普通　色調：内　黒褐色　外　褐色　胎土：２mm以下の砂粒を微量含む。
4	PL. 50	須恵器	蓋	復元口径　18.6	第２層～第４層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　灰白色　胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
5	PL. 50	須恵器	蓋	復元口径　15.9	Ｐｉｔ25 埋土	天井部外面：回転ナデ一部ヘラケズリ 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
6	PL. 50	須恵器	蓋	復元口径　13.9	Ｐｉｔ51 埋土	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
7	PL. 50	須恵器	蓋	――	ＳＢ０１ Ｐｉｔ９ 埋土	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。
8	PL. 50	須恵器	杯	復元口径　12.2	地山直上層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：0.2mm以下の砂粒を微量含む。
9	PL. 50	須恵器	杯	復元口径　10.4	第２層～第４層	底部外面：回転糸きりか？ 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。
10	PL. 50	須恵器	杯	復元口径　11.2	第２層～第４層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。
11	PL. 50	須恵器	杯	――	ＳＢ０１ Ｐｉｔ５ 埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.3mm以下の砂粒を含む。
12	PL. 50	須恵器	杯	――	ＳＢ０１ Ｐｉｔ11 埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：密
13	PL. 50	須恵器	杯	――	Ｐｉｔ51 埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：密
14	PL. 50	須恵器	杯	――	Ｐｉｔ54 埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　青灰色　外　褐灰色～灰色　胎土：密
15	PL. 50	須恵器	杯	復元口径　18.0	遺構面精査時	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。
16	PL. 50	須恵器	杯	復元底部径　7.7	ＳＢ０１ Ｐｉｔ９ 埋土	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：内　明オリーブ灰色　外　灰色　胎土：0.5mm以下の砂粒を多量に含む。
17	PL. 50	須恵器	杯	復元底部径　7.0	ＳＢ０１ Ｐｉｔ５ 埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　淡青灰色　外　青灰色　胎土：0.5mm前後の砂粒をやや多く含む。
18	PL. 50	須恵器	杯	復元底部径　8.2	Ｐｉｔ51 埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。なかには２mm大のものもある。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
19	PL. 50	須恵器	杯	復元底部径　7.6	北側第４層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：内　暗灰色　外　灰色　胎土：１mm以下の白色砂粒を微量含む。
20	PL. 50	須恵器	杯	復元底部径　5.7	Ｐｉｔ25埋土	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5 mm以下の砂粒を微量含む。
21	PL. 50	須恵器	壺か？	復元口径　21.6	第３層～第４層上面	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　赤褐色　外　灰色　胎土：１mm以下の白色砂粒を微量含む。
22	PL. 50	須恵器	高杯	復元口径　16.0	第３層～第４層上面	杯部底部外面：回転ナデ 杯部底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰白色～灰褐色　外　灰赤色　胎土：２mm以下の砂粒を少量含む。

第３表　堀切Ⅰ遺跡00－2区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	PL. 51	土師器	甕	復元口径 34.6	テラス０２ 埋土上面	外面：ナデ 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ 口縁部：ナデ	焼成：やや不良　色調：褐色 胎土：２mm以下の砂粒を少量含む。
2	PL. 51	土師器	甕	復元口径 29.0	テラス０２ 埋土上面	外面：ナデ 内面：不明 口縁部：ナデ	焼成：普通　色調：褐色 胎土：1.5mm以下の砂粒を少量含む。
3	PL. 51	土師器	甕	復元口径 28.6	テラス０１ 埋土下層	外面：ハケ調整 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ 口縁部：ナデ	焼成：普通　色調：にぶい褐色 胎土：１mm前後の砂粒を多量に含む。
4	PL. 51	土師器	甕	復元口径 29.6	テラス０１ 埋土下層	外面：ハケ調整 内面：頸部はハケ調整、以下は横方向のヘラケズリ　口縁部：ナデ	焼成：やや不良　色調：黄灰白色 胎土：1.5mm以下の砂粒を多く含む。
5	PL. 51	土師器	甕	復元口径 23.6	第３層	外面：ハケ調整 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ 口縁部：ナデ	焼成：普通　色調：褐色 胎土：５mm以下の砂粒を多量に含む。
6	PL. 51	土師器	甕	復元口径 16.6	テラス０１ 埋土下層	口縁部：ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を多量に含む。
7	PL. 51	土師器	甕	復元口径 28.6	テラス０１ 埋土下層	外面：磨滅により不明 内面：頸部以下はヘラケズリ 口縁部：ナデ	焼成：やや不良　色調：にぶい橙色 胎土：２mm以下の砂粒を多量に含む。
8	PL. 51	須恵器	蓋	復元口径 13.8	テラス０２ 埋土上面	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：暗青灰色 胎土：0.5mm前後の砂粒を多量に含む。
9	PL. 51	須恵器	蓋	復元口径 12.0	テラス０２ 埋土	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：淡青灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を比較的多く含む。
10	PL. 51	須恵器	蓋	復元口径 12.8	第３層	天井部外面：回転ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒を微量含む。
11	PL. 51	須恵器	蓋	復元口径 20.2	第２層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
12	PL. 51	須恵器	蓋	――	テラス０２ 埋土上面	天井部外面：回転ナデ 天井部内面：回転ナデののちナデ つまみ部分：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　淡灰色　内　青灰色　胎土：0.5mm前後の砂粒を多量に含む。
13	PL. 51	須恵器	蓋	――	テラス０１ 埋土上面	天井部外面：回転ナデ 天井部内面：回転ナデののちナデ つまみ部分：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒を微量含む。
14	PL. 51	須恵器	蓋	――	テラス０１ 埋土上層	天井部外面：回転ナデ 天井部内面：回転ナデののちナデ つまみ部分：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
15	PL. 51	須恵器	蓋	――	テラス０１ 埋土上面	天井部外面：回転ナデ 天井部内面：回転ナデののちナデ つまみ部分：回転ナデ	焼成：不良　色調：赤褐色 胎土：0.2mm以下の砂粒を微量含む。
16	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 9.8	テラス０２ 埋土上面	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：灰色 胎土：２mm以下の砂粒を少量含む。
17	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 11.4	テラス０２ 埋土上面	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
18	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 12.4	テラス０２ 埋土上面	底部外面：回転糸きり？ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
19	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 11.0	テラス01 埋土下層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色～褐色 胎土：密
20	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 13.4	テラス02 埋土上面	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：褐色 胎土：2mm以下の砂粒を含む。
21	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 11.8	テラス02 埋土下層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：浅黄橙色 胎土：2mm以下の砂粒を多量に含む。
22	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 12.4	テラス01 埋土上面	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：外　灰白色　内　灰色　胎土：1mm以下の砂粒を含む。
23	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 16.0	テラス01 埋土上層	底部外面：回転糸きり一部ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
24	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 11.8	テラス02 埋土上面	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：灰褐色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。
25	PL. 51	須恵器	杯	復元底部径 9.2	テラス02 埋土上面	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：1mm以下の砂粒を多量に含む。なかには5mm程度のものもある。
26	PL. 51	須恵器	杯	復元底部径 9.0	テラス01 埋土	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5mm前後の砂粒を含む。
27	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 12.6	第2層～第3層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　暗灰色　胎土：0.3mm以下の砂粒を微量含む。
28	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 12.2	第2層～第3層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒を少量含む。
29	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 15.2	第3層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1～2mm大の砂粒を含む。
30	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 13.8	テラス02 埋土上面	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒を少量含む。
31	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 15.6	SB03 Pit2 埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を含む。
32	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 13.0	SX03 埋土上面	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2mm以下の砂粒を少量含む。
33	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 14.6	テラス02 埋土上面	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　暗灰色　胎土：1.5mm以下の砂粒を微量含む。
34	PL. 51	須恵器	杯	復元口径 11.0	テラス02 埋土下層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　青灰色　外　黒褐色　胎土：0.5mm以下の砂粒を含む。
35	PL. 52	須恵器	杯	復元口径 13.2	テラス01 埋土上層	底部外面：ナデ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：1mm大の砂粒を多量に含む。
36	PL. 52	須恵器	杯	復元口径 14.4	SB03 Pit1 埋土	底部外面：ナデ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.3mm以下の砂粒を少量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
37	PL. 52	須恵器	杯	復元底部径　7.6	第3層	底部外面：不明 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ一部自然釉がかかる	焼成：普通　色調：内　灰白色　外　淡黄色　胎土：1mm前後の白色砂粒を含む。
38	PL. 52	須恵器	杯	復元底部径　8.6	テラス01埋土上面	底部外面：回転糸きり？ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　オリーブ灰色　外　暗オリーブ灰色　胎土：1～2mmの白色砂粒を含む。
39	PL. 52	須恵器	杯	復元底部径　8.8	第3層	底部外面：静止糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：暗灰色 胎土：2.5mm以下の砂粒を多量に含む。
40	PL. 52	須恵器	杯	復元底部径　9.4	テラス02埋土	底部外面：ナデ 底部内面：回転ナデののちナデ？ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
41	PL. 52	須恵器	杯	復元底部径　7.6	第2層	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5mm程度の白色砂粒を含む。
42	PL. 52	須恵器	杯	復元底部径　7.4	第3層	底部外面：不明 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：内　灰色　外　灰褐色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
43	PL. 52	須恵器	皿	復元口径　19.4	テラス02埋土上面	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を多量に含む。
44	PL. 52	須恵器	皿	復元口径　21.4	テラス01埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。
45	PL. 52	須恵器	皿	復元口径　21.4	テラス02埋土上面	底部外面：回転糸きり？ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：不良　色調：灰白色 胎土：1mm以下の砂粒を含む。
46	PL. 52	須恵器	高杯	復元口径　22.2 器高11.8	テラス01埋土上面	杯部底部内面：回転ナデののちナデ 杯部底部外面：回転ナデののちヘラケズリその他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
47	PL. 52	須恵器	壺か？	復元底部径　12.4	テラス01埋土上面	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を少量含む。
48	PL. 52	須恵器	壺か？	復元底部径　11.3	第3層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：灰色 胎土：2.0mm以下の砂粒を微量含む。
49	PL. 52	須恵器	甑か？	復元口径　20.0	遺構面精査時	外面：タタキ 内面：当て具痕をナデで消す その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：3mm以下の砂粒を多量に含む。
50	PL. 52	須恵器	甑か？	――	テラス01埋土上層	外面：タタキ 内面：当て具痕をナデで消す その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5mm前後の砂粒を含む。
51	PL. 52	土師質	皿	復元口径　22.4	テラス02埋土上面	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：不良　色調：橙色 胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
52	PL. 52	土師質	皿	復元口径　18.8	テラス02埋土上面	底部外面：ナデ 底部内面：ナデか？ その他：回転ナデ	焼成：不良　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を比較的多量に含む。
53	PL. 52	土師質	皿	復元口径　20.4	テラス02埋土上面	磨滅により不明	焼成：不良　色調：赤褐色 胎土：0.5mmの砂粒を微量含む。
54	PL. 52	土師質	皿	復元底部径　15.4	テラス02埋土上面	磨滅により不明	焼成：不良　色調：浅黄橙色 胎土：1mm大の白色砂粒を微量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
55	PL．52	土師質	皿か？	復元底部径 11.0	第3層	つまみ部分：ナデ　天井部外面：回転ヘラケズリ　天井部内面：ナデ　その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：内　黄橙色　外　橙色　胎土：1㎜大の砂粒を含む。
57	PL．52	土師質	支脚	口径 9.0	テラス02埋土	全体にナデ一部ヘラケズリ	焼成：良好　色調：外　灰白色　内　灰色　胎土：1㎜以下の白色砂粒を含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	材質	器形・形状	口径 cm	器高 cm	底径 cm	出土層位又は遺構	成形	胎土	釉薬	文様	装飾特徴	推定製作地	備考
56	PL．52	陶器	丸形碗	(12.4)	5.1	(5.4)	揚げ土	轆轤・見込：目跡×1	黄褐色	透明釉	——	貫入	布志名系	
58	PL．52	瓦質	五徳有三足	(21.0)	4.5	21.8	表土層	轆轤・貼付	褐灰色	——	胴：一重圏線	沈線・外面磨き	在地系大津	二次焼成

第４表　三井Ⅱ遺跡99－1区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	PL. 53	縄文土器	深鉢	――	C10 褐灰色土上層	外面：沈線 内面：ナデまたはケズリ	焼成：普通　色調：にぶい褐色 胎土：３㎜以下の砂粒を多量に含む。
2	PL. 53	縄文土器	深鉢	――	D7 谷地形埋土中層	外面：沈線 内面：ナデか？	焼成：普通　色調：橙色 胎土：３㎜以下の砂粒を多量に含む。
3	PL. 53	縄文土器	深鉢	――	B12 谷地形埋土中層	外面：沈線 内面：一部に条痕	焼成：普通　色調：内　黒褐色　外　暗赤褐色　胎土：２㎜以下の砂粒を多量に含む。
4	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	C12杭周辺遺構面精査時	外面：沈線か？ 内面：不明	焼成：普通　色調：にぶい赤褐色 胎土：１㎜以下の砂粒を多量に含む。
5	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：縄文地に沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　黒色　外　黒褐色　胎土：１㎜以下の砂粒を多量に含む。
6	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E9 谷地形埋土上層	外面：沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：にぶい橙色 胎土：３㎜以下の砂粒を少量含む。
7	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	B12 谷地形埋土中層	外面：縄文地に沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　橙色～褐灰色　外　にぶい赤褐色～灰褐色　胎土：３㎜以下の砂粒を多量に含む。
8	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：縄文地にタテ方向の沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　黒色　外　黒褐色　胎土：１㎜以下の砂粒を微量含む。
9	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：縄文地にタテ方向の沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　にぶい赤褐色～黒色　外　明赤褐色～灰褐色　胎土：１㎜以下の砂粒を多量に含む。
10	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：縄文地に沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　暗赤褐色　外　明赤褐色～暗赤褐色　胎土：３㎜以下の砂粒を多量に含む。
11	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：一条の沈線 内面：不明	焼成：良好　色調：暗赤褐色　胎土：３㎜以下の砂粒を少量含む。
12	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：口縁端部付近は縄文地でヨコ方向へ一条の沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　黒色　外　黒褐色　胎土：３㎜以下の砂粒を少量含む。
13	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：口縁端部付近は縄文地でヨコ方向へ一条の沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　黒色　外　黒褐色　胎土：１㎜以下の砂粒を少量含む。
14	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	B11 谷地形埋土上面	外面：口縁端部付近は縄文地でヨコ方向へ一条の沈線 内面：不明	焼成：不良　色調：内　灰褐色　外　にぶい赤褐色　胎土：２㎜以下の砂粒を多量に含む。
15	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：縄文地で沈線 内面：不明	焼成：普通　色調：内　にぶい赤褐色　外　にぶい橙色　胎土：１㎜以下の砂粒を少量含む。
16	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 谷地形埋土中層	外面：縄文 内面：不明	焼成：普通　色調：内　極暗赤褐色　外　黒褐色　胎土：１㎜以下の砂粒を少量含む。
17	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 SD05 埋土	外面：縄文 内面：不明	焼成：普通　色調：内　褐色～黒褐色　外　褐色　胎土：２㎜以下の砂粒を多量に含む。
18	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 SD05 埋土	外面：刻み目凸帯 内面：不明	焼成：やや不良　色調：橙色 胎土：３㎜以下の砂粒を多量に含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
19	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E10 SD05 埋土	外面：刻み目凸帯 内面：不明	焼成：不良　色調：内　灰褐色～橙色　外　灰褐色　胎土：3㎜以下の砂粒を多量に含む。
20	PL. 53	縄文土器	深鉢か	復元 口径23.6	B12 谷地形埋土中層	外面：ヨコ方向に条痕 内面：不明	焼成：普通　色調：明赤褐色～褐灰色　胎土：3㎜以下の砂粒を多量に含む。
21	PL. 53	縄文土器	鉢	――	B12 谷地形埋土中層	外面：不明 内面：ヨコ方向に条痕	焼成：普通　色調：浅黄橙色　胎土：2㎜以下の砂粒を多量に含む。
22	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E8 SD04 埋土	外面：ヨコ方向に条痕 内面：不明	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　黒色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
23	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	B12 谷地形埋土中層	外面：ヨコ方向に条痕 内面：ヨコ方向に条痕	焼成：普通　色調：内　灰褐色～明赤褐色　外　灰褐色～にぶい赤褐色　胎土：1㎜大の砂粒を多量に含む。
24	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	西側 側溝掘削時	外面：ヨコ方向に条痕 内面：不明	焼成：普通　色調：灰褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
25	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E8 SD04 埋土	外面：不明 内面：ヨコ方向に条痕か？	焼成：良好　色調：浅黄橙色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
26	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E8 SD04 埋土	外面：不明 内面：ヨコ方向に条痕	焼成：普通　色調：黄色っぽい灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を多量に含む。
27	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E7杭辺 SD02 埋土下層	磨滅により調整不明	焼成：普通　色調：にぶい褐色～黒褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
28	PL. 53	縄文土器	深鉢か	――	E8 谷地形埋土上層	外面：縦横に刻み目凸帯 内面：不明	焼成：普通　色調：内　明赤褐色～褐灰色　外　明赤褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
29	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 8.0	黒色土下層～褐灰色土上面	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　浅黄橙色　外　にぶい黄橙色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
30	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 6.6	E9 SD04 埋土	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　褐灰色～橙色　外　赤褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
31	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 10.0	E10 谷地形埋土中層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　暗赤褐色　外　にぶい赤褐色　胎土：2㎜以下の砂粒を多量に含む。
32	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 7.0	B11 褐灰色土上層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　にぶい褐色　胎土：1㎜大の砂粒を多量に含む。
33	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 9.2	E9 谷地形埋土上層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：にぶい赤褐色　胎土：3㎜以下の砂粒を多量に含む。
34	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 12.6	E10 谷地形埋土中層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　橙色～にぶい橙色　外　明褐灰色～褐灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
35	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 10.8	E10 谷地形埋土中層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　にぶい赤褐色～黒褐色　内　暗赤褐色　胎土：3㎜以下の砂粒を多量に含む。
36	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 7.6	E10 谷地形埋土中層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　暗赤褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
37	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 5.2	B15 側溝掘削時	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　にぶい赤褐色～黒褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
38	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 10.6	E10 谷地形埋土上層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　灰褐色～褐灰色　外　にぶい橙色～褐色　胎土：3㎜以下の砂粒を少量含む。
39	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 8.4	B15 谷地形埋土中層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　明赤褐色～暗赤褐色　胎土：3㎜以下の砂粒を多量に含む。
40	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 7.6	E10 谷地形埋土中層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　灰褐色～明赤褐色　外　にぶい赤褐色～暗赤褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
41	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 8.0	E10 谷地形埋土中層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：暗赤褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
42	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 6.6	E10 谷地形埋土中層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　暗赤褐色～にぶい赤褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
43	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 7.0	E8 SD04 埋土	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　にぶい赤褐色　外　暗赤褐色　胎土：3㎜以下の砂粒を多量に含む。
44	PL. 53	縄文土器	鉢	底部径 15.0	B11 褐灰色土上層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：灰褐色～にぶい褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
45	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 7.6	D8 谷地形埋土上層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　灰褐色～明赤褐色　外　にぶい橙色～褐灰色　胎土：3㎜以下の砂粒を多量に含む。
46	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 5.8	D7 SD02 埋土中層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　にぶい橙色～褐灰色　外　にぶい橙色　胎土：3㎜以下の砂粒を少量含む。
47	PL. 53	縄文土器	深鉢か	底部径 5.0	E8 谷地形埋土上層	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：にぶい橙色～黒色　外　灰褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
48	PL. 54	弥生土器	甕か？	復元口径 17.6	C12 褐灰色土中層	外面：口縁部の一部ケズリ、その他はナデ 内面：ナデ	焼成：良好　色調：灰褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
49	PL. 54	土師器	壺	復元口径 18.8	D12 褐灰色土下層	口縁部：ヨコ方向のナデ 外面：ヨコ方向のナデ 内面：頸部以下はヘラケズリ	焼成：普通　色調：灰褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
50	PL. 54	土師器	甕	復元口径 20.0	D6 褐灰色土下層	口縁部：ナデ 外面：ナデ 内面：頸部下はヨコ方向のヘラケズリ	焼成：普通　色調：内　浅橙色　外　浅橙色～灰褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
51	PL. 54	土師器	甕	復元口径 30.0	E6 褐灰色土下層	口縁部：ナデ 外面：ナデ 内面：頸部下はヨコ方向のヘラケズリ	焼成：普通　色調：内　にぶい橙色～灰褐色　外　黒色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
52	PL. 54	土師器	甕	復元口径 33.6	黒色土下層～褐灰色土上面	口縁部：ナデ 外面：ナデ 内面：頸部以下はヘラケズリ	焼成：普通　色調：内　にぶい黄橙色　外　浅黄橙色～黒色　胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
53	PL. 54	土師器	甕	復元口径 33.6	C8 SK02 埋土	口縁部：ナデ 外面：ナデ 内面：頸部以下はヘラケズリ	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　黒褐色　胎土：1㎜以下の砂粒・雲母を多量に含む。
54	PL. 54	土師器	甕	復元口径 16.6	C8 褐灰色土最下層	口縁部：ナデ 外面：ナデ 内面：頸部下はヨコ方向のヘラケズリ	焼成：普通　色調：内　にぶい赤褐色～にぶい橙色　外　にぶい赤褐色～黒褐色　胎土：1㎜以下の砂粒を含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
55	PL. 54	土師器	甕	復元口径 23.0	D6 褐灰色土下層	口縁部：ナデ 外面：ナデ 内面：頸部下はヨコ方向のヘラケズリ	焼成：普通　色調：淡橙色 胎土：2㎜以下の砂粒を多量に含む。
56	PL. 54	須恵器	蓋	口径 12.6	E7 褐灰色土中層	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰白色　外　灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
57	PL. 54	須恵器	蓋	復元口径 10.8	E7 褐灰色土上層	天井部外面：ヘラ切りののちナデ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を多量に含む。
58	PL. 54	須恵器	蓋か？	復元口径 11.8	E7 褐灰色土中層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰黄褐色～灰色　外　褐灰色　胎土：密
59	PL. 54	須恵器	蓋	復元口径 12.4	E6 褐灰色土中層	天井部外面：回転ナデ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を微量含む。
60	PL. 54	須恵器	蓋	復元口径 12.6	黒色土下層～褐灰色土上面	天井部外面：回転ナデ一部ヘラケズリ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：密、1㎜以下の砂粒を微量含む。
61	PL. 54	須恵器	蓋	――	D7 褐灰色土中層	つまみ部分：回転ナデ　天井部外面：回転ナデののちナデ　天井部内面：回転ナデののちナデ　その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　緑灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
62	PL. 54	須恵器	蓋	――	C10 褐灰色土上層	つまみ部分：回転ナデ　天井部外面：回転ナデ　天井部内面：回転ナデののちナデ　その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：暗褐灰色　胎土：密
63	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 12.0	東側南 褐灰色土上層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰白色～褐灰色　外　明褐色～褐灰色　胎土：密
64	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 9.8	D8 褐灰色土中層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　褐灰色～にぶい赤褐色　胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
65	PL. 54	須恵器	杯	口径13.5 器高 3.8	F7 褐灰色土中層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　灰白色～灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
66	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 11.4	E7 褐灰色土中層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　オリーブ灰色　外　オリーブ灰色～灰色　胎土：1㎜大の砂粒を少量含む。
67	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 13.3	E6 褐灰色土上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を微量含む。
68	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 11.0	E7 褐灰色土上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を微量含む。
69	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 9.0	C8 褐灰色土最下層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を微量含む。
70	PL. 54	須恵器	杯	口径13.6 器高 4.0	E7 褐灰色土上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰白色　胎土：3㎜以下の砂粒を少量含む。
71	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 9.8	C8 褐灰色土最下層	底部外面：回転ヘラケズリののちナデ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
72	PL. 54	須恵器	杯	口径12.7 器高 4.0	F7 褐灰色土中層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　灰色　外　灰色～灰白色　胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
73	PL. 54	須恵器	杯	口径10.3 器高 3.4	C8 SK02 埋土上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：2mm以下の砂粒を微量含む。
74	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 8.6	C8 褐灰色土 最下層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　褐灰色～明褐灰色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
75	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 10.0	D7 褐灰色土 中層	底部外面：回転ヘラケズリののちナデ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　淡橙色～褐灰色　胎土：3mm以下の砂粒を微量含む。
76	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 12.8	E7 褐灰色土 中層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　灰色～黒褐色　胎土：密
77	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 10.6	褐灰色土 中層～淡 黄灰色砂	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　オリーブ灰色　外　灰白色～オリーブ灰色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
78	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 11.2	褐灰色土 中層～淡 黄灰色砂	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　灰色～灰オリーブ色　胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
79	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 11.2	F7 褐灰色土 上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　灰白色～オリーブ灰色　胎土：密
80	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 14.2	F6 褐灰色土 上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　緑灰色　外　オリーブ灰色～灰色　胎土：5mm以下の砂粒を微量含む。
81	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 12.0	E6 褐灰色土 上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
82	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 12.0	E7 SD02 埋土上層	底部外面：回転ヘラケズリ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　にぶい黒褐色～褐灰色　外　褐灰色　胎土：3mm以下の砂粒を少量含む。
83	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 13.8	C9 褐灰色土 中層	底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ナデ（付着物あり） その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐色　外　灰黄褐色～褐灰色　胎土：密
84	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 14.6	C9 褐灰色土 中層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　褐灰色　外　褐灰色～黒褐色　胎土：2mm以下の砂粒を少量含む。
85	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 12.0	F5 褐灰色土 上層	底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　胎土：1mm程度の砂粒を微量含む。
86	PL. 54	須恵器	杯	復元口径 14.0	C10 褐灰色土 上層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　灰褐色　外　にぶい褐色～灰色　胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
87	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 12.4	D9 遺構面直 上層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色　胎土：密
88	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 11.0	D11 褐灰色土 上層	底部外面：糸切り？ののちナデ 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　褐灰色～灰色　胎土：1mm以下の砂粒を多量に含む。
89	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 15.8	C10 褐灰色土 上層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色～灰色　外　灰色　胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。なかには3mm大のものあり。
90	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 14.8	D7 褐灰色土 中層	底部外面：糸切りで一部ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：明褐灰色～褐灰色　胎土：1mm以下の砂粒を多量に含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
91	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 15.2	C9 褐灰色土下層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：明緑灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
92	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 15.6	C9 褐灰色土下層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：緑灰色　胎土：密
93	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 11.8	C9 遺構面精査時	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：密
94	PL. 55	須恵器	杯	復元底部径 7.4	C9 遺構面直上層	底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　オリーブ灰色　外　オリーブ灰色～暗オリーブ灰色　胎土：密
95	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 13.0	D12 褐灰色土中層	底部外面：回転糸切りののちナデ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：緑灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
96	PL. 55	須恵器	杯	復元底部径 9.0	D9 褐灰色土上層	底部外面：回転糸切り（付着物あり、墨か？）　底部内面：回転ナデののちナデ　その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　褐灰色～黒色　胎土：1㎜以下の砂粒を多量に含む。
97	PL. 55	須恵器	杯	復元底部径 8.4	黒色土下層～褐灰色土上面	底部外面：糸切りののちナデ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
98	PL. 55	須恵器	皿か？	復元底部径 12.4	D8 褐灰色土中層	底部外面：糸切り（ヘラ記号「×」） 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰褐色　外　褐灰色　胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
99	PL. 55	須恵器	皿	復元口径 14.2	C8 褐灰色土中層	底部外面：ヘラ切りのちナデ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色～緑灰色　胎土：密
100	PL. 55	須恵器	皿	復元口径 14.0	F7 褐灰色土上層	底部外面：静止糸切り 底部内面：回転ナデのちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰白色　外　灰色～灰白色　胎土：2㎜以下の砂粒を微量含む。
101	PL. 55	須恵器	皿	復元口径 15.0	C9 褐灰色土中層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデのちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　黒褐色～褐灰色　外　褐灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
102	PL. 55	須恵器	皿	復元口径 12.4	F3 褐灰色土中層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデのちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　灰色　外　灰色～にぶい橙色　胎土：密
103	PL. 55	須恵器	皿	復元口径 22.4	F7 褐灰色土上層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　緑灰色～オリーブ灰色　外　灰色～暗灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
104	PL. 55	須恵器	皿	復元口径 18.2	G3 褐灰色土上層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：外　灰色　内　白色　胎土：1㎜以下の砂粒を含む。
105	PL. 55	須恵器	杯	復元底部径 8.8	黒色土下層～褐灰色土上面	底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
106	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 16.2	F8 褐灰色土上層	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：緑灰色 胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。なかには8㎜のレキを含む。
107	PL. 55	須恵器	杯	復元口径 16.2	西側側溝掘削時	底部外面：糸切り 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
108	PL. 55	須恵器	高杯か	復元口径 15.6	C8 褐灰色土最下層	杯部の底部内外面：不明　その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
109	PL. 55	須恵器	高杯か	復元口径 13.2	E7 SD02 埋土上層	杯部の底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　暗オリーブ灰色　外　オリーブ灰色～灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
110	PL. 55	須恵器	高杯	――	C8 SK02 埋土	杯部の底部内面：回転ナデののちナデ 杯部の底部外面から脚部にかけての一部：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
111	PL. 55	須恵器	甕	――	C8 SK02 埋土	外面：回転ナデ一部ヘラケズリ 内面：不明 口縁部内外面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2㎜以下の砂粒を微量含む。なかには5㎜程度のものあり。
112	PL. 55	須恵器	壺	復元口径 7.6	C8 SK02 埋土	外面：不明 内面：不明 口縁部内外面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　暗青灰色　外　暗緑灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
113	PL. 55	須恵器	壺	復元底部径 11.2	F5 褐灰色土 上層	底部外面：回転糸切り 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　明緑灰色～灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
114	PL. 55	須恵器	壺か？	復元底部径 8.6	D7 褐灰色土 上層	底部外面：糸切り 底部内面：自然釉がかかり不明 その他：回転ナデ一部ヘラケズリ	焼成：良好　色調：灰白色 胎土：3㎜以下のレキを少量含む。
115	PL. 55	須恵器	甕か？	復元口径 35.8	E5 褐灰色土 上層	外面：回転ナデ（波状文あり） 内面：不明 口縁部内外面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰白色～オリーブ灰色　外　オリーブ灰色～灰色 胎土：密
116	PL. 55	須恵器	甕	復元口径 19.8	F8 褐灰色土 上層	外面：タタキ 内面：押当具痕ナデ消し 口縁部内外面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰白色～青灰色 胎土：1㎜大の砂粒を微量含む。
117	PL. 58	須恵器	甕	復元口径 16.2	F3 褐灰色土 中層	外面：不明 内面：不明 口縁部内外面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　オリーブ灰色　胎土：密
118	PL. 58	須恵器	甕	復元口径 18.0	F8 褐灰色土 上層	外面：タタキ 内面：ナデ 口縁部内外面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰白色～灰色 胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
119	PL. 58	須恵器	甕	復元口径 17.6	F7 褐灰色土 上層	外面：回転ナデ 内面：ナデ 口縁部内外面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　緑灰色　外　オリーブ灰色　胎土：密
120	PL. 56	須恵器 墨書「三井」	杯	復元底部径 9.6	E7 褐灰色土 上層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰黄褐色 胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
121	PL. 56	須恵器 墨書「三井」	蓋	復元口径 15.6	E7 褐灰色土 上層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
122	PL. 56	須恵器 墨書「□〔三ヵ〕井」	杯	復元底部径 8.2	黒色土下層～褐灰色土上層	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：明オリーブ灰色 胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
123	PL. 56	須恵器 墨書「井か？」	杯	復元底部径 8.2	F5 褐灰色土 上層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ一部ヘラケズリ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
124	PL. 56	須恵器 墨書「井か？」	杯	復元底部径 11.0	西側北側溝掘削時	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：不明	焼成：良好　色調：灰白色 胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。
125	PL. 56	須恵器 墨書「井か？」	杯	――	D8 褐灰色土 中層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデ その他：不明	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：密
126	PL. 56	須恵器 墨書「井？」	杯	――	D10 褐灰色土 上層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：不明	焼成：普通　色調：内　明褐灰色　外　灰色　胎土：密

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土地区及び出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
127	PL. 56	須恵器 墨書「井」	杯	――	D7 側溝掘削時	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：不明	焼成：良好　色調：明褐灰色 胎土：密
128	PL. 56	須恵器 墨書「井」	杯	復元底部径　13.8	D7 褐灰色土上層	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：褐灰色 胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
129	PL. 57	須恵器 墨書「総」	杯	口径15.0	F7 褐灰色土上層	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰褐色～灰色　外　褐灰色　胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。中には3mm大のものあり。
130	PL. 57	須恵器 墨書「総」	杯	口径11.4	F8 褐灰色土上層	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　にぶい褐色～灰色　胎土：1mm以下の砂粒を多量に含む。3mm大のものあり。
131	PL. 57	須恵器 墨書「両か？」	杯	口径12.0	C9 褐灰色土上層	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　褐灰色　外　褐灰色～黒色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
132	PL. 57	須恵器 墨書「両か？」	杯	復元底部径　12.0	E8 褐灰色土上層	底部外側：糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　にぶい橙色～灰褐色　外　褐灰色～黒色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
133	PL. 57	須恵器 墨書「木or両？」	杯	復元底部径　13.8	G4 褐灰色土上層	底部外側：糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
134	PL. 57	須恵器 墨書「□〔三カ〕井□」	杯	復元底部径　8.0	F8 褐灰色土中層	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：褐灰色 胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
135	PL. 58	土師質	杯	復元口径　12.4	北壁崩落土	底部外側：糸きり？ののちナデ 底部内側：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：明褐灰色 胎土：1mm以下の砂粒を多量に含む。
136	PL. 58	土師質	杯	復元口径　12.4	中央部北側溝掘削時	底部外側：糸きり？ののちナデ 底部内側：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：明褐灰色～にぶい褐色　胎土：密
137	PL. 58	土師質	杯	復元口径　11.4	D8 褐灰色土中層	底部外側：糸きり？ののちナデ 底部内側：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：にぶい橙色 胎土：密
138	PL. 58	土師質	杯	復元口径　15.6	黒色土下層～褐灰色土上面	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデ（ヘラ記号あり） その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　にぶい赤褐色　外　にぶい橙色　胎土：密
139	PL. 58	土師質	杯	復元底部径　7.4	黒色土下層～褐灰色土上面	底部外側：ナデ 底部内側：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：にぶい橙色 胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
140	PL. 58	土師質	杯	復元底部径　6.8	E11黒色土～褐灰色土上面	底部外側：回転糸きり 底部内側：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：暗灰色 胎土：1mm以下の砂粒をごく微量含む。
142	PL. 58	須恵質	平瓦	――	E9 褐灰色土上層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　灰色　外　オリーブ灰色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
143	PL. 58	須恵質	平瓦	――	G5 褐灰色土上層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　灰色　外　褐灰色　胎土：1.5mm以下の砂粒を微量含む。
144	PL. 58	須恵質	平瓦	――	G3 褐灰色土上層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：良好　色調：内　灰色　外　明緑灰色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	材質	器形・形状	口径 cm	器高 cm	底径 cm	出土層位又は遺構	成形	胎土	釉薬	文様	装飾特徴	推定製作地	備考
141	PL. 58	磁器	桶型猪口	(7.0)	——	——	中央部側溝掘削時	轆轤	白色	呉須・透明釉	外：矢羽根 内口縁：二重圏線	染付	肥前系	

第５表　三井Ⅱ遺跡99－2区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	PL. 67	弥生土器	甕	復元口径 18.0	第７層	外面：タテ方向のハケ調整 内面：下から上へのタテ方向にケズリ後にナデ	焼成：普通　色調：内　灰黄褐色 暗灰黄色　胎土：１～２mm程度の白色砂粒を含む。
2	PL. 67	弥生土器	壺 or 甕	復元底部径　6.2	第４層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：浅黄橙色 胎土：２mm以下の砂粒を比較的多く含む。
3	PL. 67	須恵器	蓋	復元口径 16.8	西側第６層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：２mm以下の砂粒を含む。
4	PL. 67	須恵器	蓋	――	第６層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の白色砂粒を含む。
5	PL. 67	須恵器	杯	復元口径 13.4	第４層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5 mm以下の砂粒をごく微量含む。
6	PL. 67	須恵器	杯	――	第６層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の白色砂粒を含む。
7	PL. 67	須恵器	杯	復元口径 11.2	第４層下層	底部外面：不明 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：灰色 胎土：１mm以下の白色砂粒を多量に含む。
8	PL. 67	須恵器	杯	復元底部径　7.6	第６層	底部外面：ヘラ切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の白色砂粒を含む。
9	PL. 67	須恵器	杯	復元底部径　8.4	第５層	底部外面：ヘラ切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰黄色　外　灰色　胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
10	PL. 67	須恵器	杯	復元底部径　8.6	第４層下層	底部外面：ヘラ切り 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：２mm以下の砂粒を微量含む。
11	PL. 67	須恵器	杯	復元底部径　8.0	第６層上面	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の黒色砂粒を含む。
12	PL. 67	須恵器	杯	復元底部径　8.8	第５層	底部外面：不明 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
13	PL. 67	須恵器	甕か？	復元口径 17.8	第４層	口縁部：回転ナデ（自然釉かかる） 外面：不明 内面：不明	焼成：良好　色調：淡灰色 胎土：２mm以下の白色砂粒を多量に含む。中には４mm程度のものもある。
14	PL. 67	須恵器	壺	復元口径 10.6	第４層～第５層・第６層	口縁部：回転ナデ 外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰白色　外　灰色　胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。中には３mm程度のものもある。
15	PL. 67	須恵器	壺	――	第４層～第５層・第６層	底部外面：ヘラ切りののちナデ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ一部ヘラケズリ	焼成：良好　色調：灰色～褐灰色 胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。中には３mm程度のものもある。
16	PL. 67	土師質	杯	復元底部径　13.2	第６層	底部外面：糸きりののちナデ 底部内面：ナデ その他：回転ナデか？	焼成：良好　色調：内　にぶい黄橙色～褐色　外　にぶい黄橙色　胎土：１mm以下の黒色砂粒を微量含む。
17	PL. 67	土師質	杯	復元底部径　12.0	第５層	底部外面：磨滅により不明 底部内面：ナデ その他：不明	焼成：不良　色調：内　明褐色　外　茶褐色　胎土：１mm以下の砂粒をごく微量含む。
18	PL. 67	須恵質	平瓦	――	第４層・第４層下層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：やや不良　色調：灰白色 胎土：１mm以下の白色砂粒をごく微量含む。

第６表　三井Ⅱ遺跡00－1区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	PL. 68	弥生土器	甕	復元口径 26.6	中央部第３層下層	口縁部：外面に３条の凹線 外面：頸部に刻目突帯 内面：不明	焼成：良好　色調：明褐色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
2	PL. 68	弥生土器	甕	復元口径 15.2	中央部 SD01周辺第５層	口縁部：外面に４条の凹線 外面：頸部に貼付突帯（刻目か？） 内面：不明	焼成：良好　色調：明褐色 胎土：１mm以下の砂粒を比較的多く含む。
3	PL. 68	弥生土器	甕	復元口径 13.0	中央部第５層	口縁部：外面に４条の凹線 外面：不明 内面：不明	焼成：普通　色調：浅黄橙色～にぶい黄橙色　胎土：１mm以下の白色砂粒を含む。
4	PL. 68	弥生土器	甕	――	西側落ち込み付近第３層	口縁部：外面に４条の凹線 外面：頸部に貼付突帯（刻目か？） 内面：不明	焼成：良好　色調：内　にぶい黄色　外　黄灰色　胎土：１mm以下の砂粒を多く含む。
5	PL. 68	弥生土器	甕	復元口径 21.6	中央部第４層	口縁部：外面に凹線 外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：やや不良　色調：褐色 胎土：１mm以下の砂粒を含む。
6	PL. 68	弥生土器	甕	復元底部径　5.0	ＳＢ０１畦内	磨滅により不明	焼成：やや不良　色調：内　浅黄橙色　外　浅黄橙色～橙色　胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。３mm大を含む。
7	PL. 68	弥生土器	甕 or 壺	復元底部径　6.2	西側落ち込み第３層下層	磨滅により不明	焼成：良好　色調：内　灰黄色　外　淡黄色　胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
8	PL. 68	弥生土器	甕 or 壺	復元底部径　6.2	中央部第５層	口縁部：不明 外面：ハケののち一部ミガキか？ 内面：ナデか？	焼成：普通　色調：内　にぶい黄橙色　外　黒褐色　胎土：１mm以下の白色砂粒を多量に含む。
9	PL. 68	弥生土器	壺 or 甕	復元口径 15.1	西側落ち込み付近第３層	口縁部：ヨコ方向のナデ 外面：ナデか？、頸部下に竹管文 内面：ナデか？、頸部上に竹管文	焼成：やや不良　色調：内　淡黄色～灰白色　外　浅黄橙色　胎土：２mm以下の砂粒を比較的多く含む。
10	PL. 68	土師器	壺 or 甕	復元口径 22.8	第２層～第３層上層	口縁部：ヨコ方向のナデ 外面：不明 内面：不明	焼成：良好　色調：黄褐色 胎土：0.2 mm以下の砂粒を少量含む。
11	PL. 68	土師器	甕	復元口径 19.6	中央部第５層	口縁部：磨滅により不明 外面：ナデ 内面：頸部以下はヘラケズリ	焼成：良好　色調：浅黄色 胎土：２mm以下の砂粒を少量含む。
12	PL. 68	土師器	甕	復元口径 13.8	中央部第５層	口縁部：ナデ 外面：不明 内面：頸部以下は横方向のヘラケズリ	焼成：やや不良　色調：内　浅黄橙色　外　浅黄橙色～黄橙色　胎土：３mm以下の砂粒を多く含む。
13	PL. 68	土師器	甕	復元口径 14.8	東側第３層下層	口縁部：ヨコナデ 外面：不明 内面：不明	焼成：やや不良　色調：暗褐色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
14	PL. 68	土師器	甕	復元口径 24.6	第２層	口縁部：ナデ 外面：縦方向のハケ調整 内面：不明	焼成：やや不良　色調：褐色 胎土：１mm以下の長石・雲母を少量含む。
15	PL. 68	土師器	甕	復元口径 23.0	東側第３層下層	口縁部：ヨコ方向のナデ 外面：ヨコ方向のナデ 内面：不明	焼成：良好　色調：褐色 胎土：1.5 mm以下の長石・雲母を少量含む。
16	PL. 68	土師器	甕	復元口径 18.6	東側第３層下層	口縁部：ヨコ方向のナデ 外面：不明 内面：不明	焼成：やや不良　色調：明褐色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を比較的多く含む。
17	PL. 68	土師器	甕	復元口径 17.8	中央部第５層	口縁部：不明 外面：不明 内面：頸部以下はヘラケズリ	焼成：やや不良　色調：浅黄橙色 胎土：３mm以下の砂粒を多量に含む。
18	PL. 68	土師器	高杯	復元口径 17.0	中央部第４層	磨滅により不明	焼成：やや不良　色調：橙色 胎土：0.5 mmの砂粒を多量に含む。中には３mm大のものもある。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
19	PL. 68	土師器	高杯	復元口径 17.8	Pit 51 埋土下層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　明黄褐色　外　橙色～にぶい黄橙色　胎土：0.5 mm前後の白色砂粒を多量に含む。
20	PL. 68	土師器	高杯	復元口径 15.0	東側第4層	磨滅により不明	焼成：やや不良　色調：褐色 胎土：2mm以下の砂粒を少量含む。
21	PL. 68	土師器	高杯	復元脚部径 9.6	中央部第4層	磨滅により不明	焼成：やや不良　色調：内　淡黄色　外　浅黄橙色～橙色　胎土：1mm以下の砂粒を多く含む。3mm大もあり。
22	PL. 68	土師器	高杯	復元脚部径 9.6	中央部第3層中層	脚部外面：ナデか？ 脚部内面：ナデか？一部ヘラケズリか？	焼成：やや不良　色調：褐色 胎土：2mm以下の白色砂粒を含む。
23	PL. 68	土師器	低脚杯	復元脚部径 8.8	東側第3層中層	脚部外面：ナデ 脚部内面：ナデ	焼成：やや不良　色調：内　暗赤褐色　外　灰黄褐色～にぶい黄橙色　胎土：2mm以下の砂粒を多く含む。
24	PL. 68	須恵器	蓋	口径13.4 器高 4.7	第2層～第3層	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2mm以下の砂粒を多量に含む。
25	PL. 68	須恵器	蓋	口径10.6 器高 4.3	南側第2層	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
26	PL. 68	須恵器	蓋	口径 9.3 器高 3.7	東側第3層	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を微量含む。
27	PL. 68	須恵器	蓋	口径10.6 器高 3.9	東側第3層	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
28	PL. 68	須恵器	蓋	復元口径 12.0	東側第4層	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を微量含む。なかには6mmのものも含まれる。
29	PL. 68	須恵器	蓋	復元口径 10.2	東側第3層中層	天井部外面：ヘラケズリののちナデ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰色　外　茶褐色　胎土：1mm程度の白色砂粒を多量に含む。
30	PL. 68	須恵器	蓋	復元口径 12.6	中央部第4層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を少量含む。
31	PL. 68	須恵器	蓋	復元口径 11.2	北側壁面掘削時	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ、外面に2条の沈線	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
32	PL. 68	須恵器	蓋	復元口径 13.0	東側第3層中層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の砂粒を微量含む。
33	PL. 68	須恵器	蓋	復元口径 11.0	中央部第5層	天井部外面：ヘラケズリ 天井部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：淡灰色～灰色 胎土：1mm大の砂粒をごく微量含む。
34	PL. 68	須恵器	蓋	復元口径 14.2	第2層～第3層上層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：黄橙色 胎土：1mm以下の砂粒を極微量含む。
35	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 14.0	東側第3層下層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　明灰色　外　暗灰色　胎土：1mm以下の砂粒を比較的に多く含む。
36	PL. 69	須恵器	杯	復元底部径 8.6	中央部第5層	底部外面：ヘラケズリ 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5 mm前後の白色砂粒を多量に含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
37	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 9.7	中央部SB03北側付近第３層	底部外面：ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
38	PL. 69	須恵器	杯	口径12.0	西側拡張部第３層	底部外面：ヘラケズリ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：２mm以下の白色砂粒をごく微量含む。
39	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 8.7	南側拡張部第２層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の白色砂粒を微量含む。
40	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 9.6	東側第３層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
41	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 10.2	東側第３層下層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の白色砂粒を微量含む。
42	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 9.8	東側第２層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
43	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 10.2	東側拡張部第２層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
44	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 9.8	南側拡張部東側第３層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：密
45	PL. 69	須恵器	杯	復元口径 10.8	南側拡張部第３層	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：淡青灰色 胎土：0.5 mm以下の砂粒をごく微量含む。
46	PL. 69	須恵器	杯	復元底部径 5.6	中央部第３層中層	底部外面：回転ヘラ切りか？ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　茶褐色　外　暗灰色　胎土：１mm以下の白色砂粒を比較的に多く含む。
47	PL. 69	須恵器	杯	復元底部径 7.4	第２層～第３層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：茶褐色 胎土：0.5 mm以下の砂粒を微量含む。
48	PL. 69	須恵器	杯	復元底部径 6.8	東側第３層	底部外面：切り離しののちナデ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：暗青灰色 胎土：0.5 mm以下の白色砂粒を多く含む。
49	PL. 69	須恵器	杯	復元底部径 7.4	ＳＢ０４Ｐｉｔ５埋土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.3 mm前後の砂粒を少量含む。
50	PL. 69	須恵器	高杯か	復元口径 16.4	東側第３層	杯部底部外面：不明 杯部底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：密
51	PL. 69	須恵器	高杯か	復元口径 15.4	南側拡張部第３層	杯部底部外面：不明 杯部底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：２mm以下の砂粒を少量含む。
52	PL. 69	須恵器	高杯か	復元口径 16.6	南側拡張部第３層	杯部底部外面：不明 杯部底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：淡青灰色 胎土：0.5 mm前後の白色砂粒を含む。
53	PL. 69	須恵器	高杯か	復元口径 13.8	東側第３層下層	杯部底部外面：不明 杯部底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：普通　色調：内　灰色　外　暗灰色　胎土：１mm以下の白色砂粒を微量含む。
54	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 11.4	中央部第３層中層	脚部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の白色砂粒を微量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
55	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 10.0	南側拡張部第２層	脚部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の砂粒を少量含む。
56	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 8.9	南側拡張部第３層	脚部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：淡青灰色 胎土：0.5 mm以下の白色砂粒を多量に含む。
57	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 10.8	東側第３層下層	脚部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.2mm以下の砂粒を少量含む。
58	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 9.4	東側第３層下層	脚部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の砂粒・雲母を極微量含む。
59	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 10.8	東側第２層	脚部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.2mm以下の砂粒を少量含む。
60	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 10.0	第３層	脚部外面：回転ナデ一部ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒を少量含む。
61	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 8.8	東側第３層	脚部外面：回転ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
62	PL. 69	須恵器	高杯	復元脚部径 10.0	南側拡張部第３層	脚部外面：回転ナデ一部ナデ 脚部内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。
63	PL. 69	須恵器	壺 or 甕	復元口径 14.8	第２層～第３層	口縁部：回転ナデ 外面：不明 内面：不明	焼成：やや不良　色調：灰色 胎土：１mm以下の白色砂粒を少量含む。
64	PL. 69	須恵器	壺	復元口径 13.0	ＳＢ０４ Pit4埋土 Pit7埋土	口縁部：回転ナデ 外面：不明 内面：不明	焼成：良好　色調：淡青灰色 胎土：0.5mm前後の白色砂粒を少量含む。
65	PL. 69	須恵器	壺	復元口径 7.2	東側第４層下層	口縁部：回転ナデ 外面：不明 内面：不明	焼成：良好　色調：内　灰色　外　暗灰色　胎土：1.2 mm以下の砂粒を少量含む。
66	PL. 69	須恵器	甕	復元口径 28.4	表土層	口縁部：回転ナデ、外面全体に波状文　外面：不明　内面：不明	焼成：良好　色調：暗灰色 胎土：1.5 mm以下の砂粒少量含む。
67	PL. 69	須恵器	甕	復元口径 33.0	東側拡張部第２層	口縁部：回転ナデ、外面に波状文　外面：不明　内面：不明	焼成：やや不良　色調：暗灰色 胎土：２mm以下の砂粒を少量含む。
68	PL. 69	土師質	杯	復元底部径 8.0	東側第３層	底部外面：回転糸きり 底部内面：ナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：暗褐色 胎土：0.5mm以下の砂粒を微量含む。
69	PL. 69	土師器ミニチュア	椀	口径 2.9 器高 2.2	南壁壁面削りだし時	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：普通　色調：内　浅黄橙色～黄褐色　外　明黄褐色～浅黄橙色　胎土：２mm以下の白色砂粒を含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	材質	器形・形状	口径 cm	器高 cm	底径 cm	出土位置又は遺構	成形	胎土	釉薬	文様	装飾特徴	推定製作地	備考
70	PL. 69	土師質	焙烙	(33.8)	—	—	東側第2層下層	轆轤・型・貼付・ナデ	褐色	—	—	—	在地系大津	二次焼成
71	PL. 69	磁器	浅丸型紅猪口	(6.6)	—	—	東側第3層下層	轆轤	灰白色	呉須・透明釉	外：不明（笹？）	染付	肥前系	被加熱変成
72	PL. 69	磁器	丸型皿底狭	—	—	(4.0)	東側第3層下層	轆轤・見込蛇ノ目釉剥・高台内兎巾	白色	呉須・透明釉	—	—	肥前系	
73	PL. 69	磁器	端反輪花丸型皿	(13.4)	2.7	(7.0)	第2層～第3層上層	轆轤・型打	白色	クロム青磁釉・呉須・クロム・鉄釉・朱	見込：竹笹・果樹	クロム青磁・釉下彩	岐阜県土岐郡駄知町	統制番号：岐 985

第７表　三井Ⅱ遺跡00－2区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	PL. 71	弥生土器	壺	復元口径 34.2	第３層下層	外面：タテ方向の刷毛目 内面：磨滅により不明	焼成：普通　色調：褐色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を比較的多く含む。
2	PL. 71	弥生土器	甕	復元口径 22.0	第５層	外面：ヨコ方向のナデ調整 内面：ナデ調整	焼成：普通　色調：にぶい橙色 胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
3	PL. 71	弥生土器	壺 or 甕	復元底部径 5.2	第３層下層	外面：ナデ 内面：磨滅により不明	焼成：やや不良　色調：内　浅黄橙色　外　黒褐色　胎土：１mm以下の白色砂粒を多量に含む。
4	PL. 71	弥生土器	壺 or 甕	復元底部径 7.0	第５層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　にぶい褐色　外　黒褐色　胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
5	PL. 71	弥生土器	壺 or 甕	復元底部径 4.6	揚げ土	外面：ナデ 内面：磨滅により不明	焼成：良好　色調：黄橙色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
6	PL. 71	弥生土器	壺 or 甕	復元底部径 8.0	南側第４層～第５層	外面：ヨコ方向のナデ 内面：ナデ	焼成：やや不良　色調：褐色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
7	PL. 71	弥生土器	高杯	復元脚部径 11.0	第５層	外面：ナデか？凹線文 内面：ケズリ一部ナデ	焼成：良好　色調：内　にぶい橙色～黒褐色　外　橙色～黒褐色　胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
8	PL. 71	土師器	壺	復元口径 20.0	南側第４層～第５	外面：ヨコ方向のナデ 内面：ヨコ方向のナデ	焼成：普通　色調：褐色 胎土：1.5 mm以下の砂粒を少量含む。
9	PL. 71	土師器	甕	復元口径 16.6	第４層	外面：ヨコ方向のナデ 内面：ヨコ方向のナデ	焼成：普通　色調：褐色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
10	PL. 71	土師器	甕	復元口径 16.0	第４層	外面：ヨコ方向のナデ 内面：ヨコ方向のナデ	焼成：やや不良　色調：暗褐色 胎土：２mm以下の砂粒を微量含む。
11	PL. 71	土師器	甕	復元口径 16.4	第３層下層	口縁部：ヨコ方向のナデ 外面：頸部以下は刷毛目 内面：頸部以下はヘラケズリ	焼成：良好　色調：褐色 胎土：0.5 mm以下の砂粒を少量含む。
12	PL. 71	土師器	甕	口径11.6	第４層	口縁部：ヨコ方向のナデ内側は刷毛目 外面：頸部以下は刷毛目 内面：頸部以下はヘラケズリ	焼成：やや不良　色調：淡黄色 胎土：２mm大の白色砂粒をごく微量含む。
13	PL. 71	須恵器	蓋	復元口径 12.8	北側第３層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：暗灰色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
14	PL. 71	須恵器	蓋	復元口径 19.4	北側第３層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5 mm以下の砂粒を微量含む。
15	PL. 71	須恵器	蓋	復元口径 16.4	南側第３層下層	天井部外面：不明 天井部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
16	PL. 71	須恵器	杯	復元口径 10.4	北側第３層下層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：密
17	PL. 71	須恵器	杯	復元口径 11.4	揚げ土	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.2 mm以下の砂粒を少量含む。
18	PL. 71	須恵器	杯	復元口径 11.2	南側第３層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1.5 mmの砂粒を微量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
19	PL. 71	須恵器	杯	復元口径 11.8	第4層	底部外面：回転糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
20	PL. 71	須恵器	杯	復元口径 16.4	北側第3層下層	底部外面：不明 底部内面：不明 その他：回転ナデ一部ヘラケズリ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
21	PL. 71	須恵器	杯	復元底部径 9.6	第2層～第3層	底部外面：糸きり 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2.5 ㎜以下の砂粒を微量含む。
22	PL. 71	須恵器	杯	復元底部径 7.0	北側第3層下層	底部外面：磨滅により不明 底部内面：回転ナデののちナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。
23	PL. 71	須恵器	杯	復元底部径 8.5	第2層～第3層	底部外面：ヘラ切りか？ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ一部ヘラケズリ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：0.5 ㎜以下の砂粒を微量含む。
24	PL. 71	須恵器	杯	復元底部径 10.8	北側第3層	底部外面：回転糸きりか？ 底部内面：回転ナデののちナデ その他：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
25	PL. 71	須恵器	皿	復元口径 17.4	北側第4層	外面：回転ナデ一部ヘラケズリののちナデ　内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：暗灰色 胎土：2.5 ㎜以下の砂粒を微量含む。
26	PL. 71	須恵器	壺 or 甕	復元口径 35.2	第2層～第3層	口縁部：ヨコナデ 外面：回転ナデ、口縁部に一条の沈線と波状文　内面：回転ナデ	焼成：やや不良　色調：灰色 胎土：1㎜大の白色砂粒を微量含む。
27	PL. 71	須恵器	コップ型土器	復元口径 7.8	南壁第5層	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰色 胎土：2㎜以下の砂粒を少量含む。
28	PL. 71	須恵器	硯	復元口径 15.8	第4層	外面：回転ナデ（自然釉がかかる） 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　灰白色　外　灰白色～緑灰色　胎土：1㎜以下の砂粒を微量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	材質	器形・形状	口径 cm	器高 cm	底径 cm	出土層位又は遺構	成形	胎土	釉薬	文様	装飾特徴	推定製作地	備考
29	PL. 71	磁器	皿	——	——	(9.6)	表土層	轆轤・蛇ノ目凹型高台	白色	呉須・透明釉	見込：不明（鯛？）高台脇：二重圏線	染付	肥前系	

第８表　三井Ⅱ遺跡00－3区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	第９図	須恵器	蓋or杯	――	中央部第３層	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：内　暗灰黄色　外　灰オリーブ色　胎土：0.5mm前後の砂粒を含む。
2	第９図	須恵器	高杯か	復元底部径　8.2	北側SD01黒色土内	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。

第９表　三井Ⅱ遺跡00－4区出土遺物観察表

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
1	PL．72	弥生土器	甕	――	１トレンチＳＢ０１埋土	口縁部：二条の凹線 外面：ナデか 内面：ナデか	焼成：普通　色調：橙色 胎土：0.5 ～２mm大の砂粒を多量に含む。
2	PL．72	弥生土器	甕	復元口径 24.6	１トレンチ拡張部第２層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：橙色 胎土：0.5 ～１mm大の砂粒と0.5 mm大の雲母を多量に含む。
3	PL．72	弥生土器	甕or壺	復元底部径　6.6	１トレンチ拡張部第４層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　にぶい橙色　外　にぶい橙色～褐灰色　胎土：２mm以下の砂粒を多量に含む。
4	PL．72	弥生土器	甕or壺	復元底部径　4.0	１トレンチＳＢ０１埋土	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　灰黄白色～褐灰色　外　黄橙色　胎土：0.5 ～１mm大の砂粒を多量に含む。
5	PL．72	弥生土器	甕or壺	復元底部径　6.6	２トレンチ北側第２層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：内　にぶい橙色　外　褐灰色　胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
6	PL．72	軟質	平瓦	――	２－２トレンチ第３層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：やや不良　色調：赤褐色 胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
9	PL．72	弥生土器	甕	復元口径 18.2	４トレンチ北側第４層	口縁部：３条の凹線 外面：ナデか 内面：	焼成：やや不良　色調：暗褐色 胎土：白色粒を多量に含む。黒色粒を極微量含む。
10	PL．72	弥生土器	甕or壺	復元底部径　8.0	４トレンチ第２層下層	磨滅により不明	焼成：やや不良　色調：浅黄色 胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
11	PL．72	弥生土器	高杯	復元口径 16.4	７トレンチ下層黒色土	磨滅により不明	焼成：普通　色調：にぶい橙色 胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
12	PL．72	須恵器	蓋か？	――	７トレンチ褐色土層	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：灰白色 胎土：１mm以下の砂粒を微量含む。
14	PL．72	軟質	平瓦	――	９トレンチ第２層	凸面：格子タタキ 凹面：磨滅により不明	焼成：普通　色調：褐灰色 胎土：２mm以下の砂粒を微量含む。
16	PL．72	須恵質	平瓦	――	10トレンチ第２層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：良好　色調：内　暗オリーブ灰色　外　オリーブ灰色　胎土：２mm以下の砂粒を少量含む。
17	PL．72	須恵質	平瓦	――	10トレンチ表土層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：良好　色調：内　灰色～オリーブ灰色　外　オリーブ灰色　胎土：３以下の砂粒を微量含む。
18	PL．72	須恵質	平瓦	――	10トレンチ第２層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　明オリーブ灰色～明緑灰色　外　灰白色～灰色　胎土：２mm以下の砂粒を微量含む。
19	PL．73	須恵質	不明	――	12トレンチ第２層	外面：回転ナデか？ 内面：回転ナデか？	焼成：普通　色調：内　灰色　外　暗灰色　胎土：２mm以下の砂粒を多量に含む。
20	PL．73	須恵質	不明	――	12トレンチ第２層	ナデ調整か？	焼成：良好　色調：内　褐灰色　外　灰色　胎土：１mm以下の砂粒を少量含む。
21	PL．73	軟質	平瓦	――	12トレンチ地山直上	凸面：格子タタキ 凹面：磨滅により不明	焼成：やや不良　色調：褐色～黒褐色 胎土：１mm以下の砂粒を多量に含む。
22	PL．73	軟質	塼か？	――	12トレンチ窯埋土上層	ヘラケズリか？	焼成：良好　色調：黒褐色 胎土：0.5 mm程度の白色粒を多量に含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	種類	器種	法量（cm）	出土層位又は遺構	調　　整	焼成・胎土・色調
23	PL. 73	須恵器	杯か？	――	13トレンチ第2層～第3層	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好　色調：青灰色 胎土：1mm大の砂粒を微量含む。
24	PL. 73	土師質		――	13トレンチ第2層～第3層	ナデ調整か？	焼成：普通　色調：内　淡黄色　外　橙色　胎土：1mm以下の砂粒を多量に含む。
25	PL. 73	須恵質	軒丸瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	瓦当裏面：ナデか？ 瓦当側面：ナデか？	焼成：普通　色調：内　にぶい橙色　外　褐灰色　胎土：1mm程度の砂粒を多量に含む。なかに3mmのもの含む。
26	PL. 73	軟質	丸瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　淡黄色　外　灰色　胎土：2mm以下の砂粒を微量含む。
27	PL. 73	軟質	丸瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	凸面：磨滅により不明 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　にぶい黄橙色～明黄褐色　外　灰黄色　胎土：1mm以下の砂粒を極微量含む。
28	PL. 73	軟質	平瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　灰白色　外　灰黄色　胎土：1mm大の砂粒を少量含む。
29	PL. 73	須恵質	平瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：良好　色調：灰白色 胎土：1mm以下の砂粒を極微量含む。
30	PL. 73	軟質	平瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：淡黄色 胎土：0.5mm以下の砂粒を極微量含む。
31	PL. 74	軟質	平瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　灰白色　外　淡黄色　胎土：3mm大の砂粒を極微量含む。
32	PL. 74	軟質	平瓦	――	13トレンチ第2層～第3層	凸面：格子タタキ 凹面：布目痕	焼成：普通　色調：内　淡黄色　外　灰白色～淡黄色　胎土：1mm以下の砂粒を微量含む。
33	PL. 74	土師質		――	13トレンチ第2層～第3層	ナデ調整か？	焼成：普通　色調：淡黄色～にぶい橙色　胎土：1mm以下の砂粒を少量含む。
34	PL. 74	土師質		――	13トレンチ第2層～第3層	磨滅により不明	焼成：普通　色調：浅黄色～にぶい橙色　胎土：2mm以下の砂粒を少量含む。

遺物番号	挿図又は図版番号	材質	器形・形状	口径 cm	器高 cm	底径 cm	出土層位又は遺構	成形	胎土	釉薬	文様	装飾特徴	推定製作地	備考
13	PL. 72	陶器	筒型火入輪高台	――	――	4.8	9トレンチ表土層	轆轤・見込：環状痕	灰褐色	緑釉	――	――	布志名系	

第10表　文化財所在地名一覧表

番号	指定区分	種　　別	名　　称	所在地	指定年月日	所有者・保持者	備　　考
B 1	県	有形民俗文化財	富村の屋敷構え	富村	昭45.10.27	岡徳太郎	出雲平野における代表的な農家の屋敷構え、焼失
B 2	県	有形文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像	上庄原	昭56. 6. 9	荘厳寺	ヒノキ材の一木造、元徳２年（1330）在銘
B 3	県	有形民俗文化財	出雲平野の衣食住および生産用具1,087点	荘原町	平 7.10.27	斐川町	幕末から昭和初期にわたり、本町の生産・生活の実態を知る貴重な資料、平6.9.7に町指定。
C 1	町	記念物（天然記念物）	沖洲天満宮のクロマツ	沖洲	平 2.11. 5	沖洲天満宮	菅原道真の腰掛けの松
C 2	町	記念物（天然記念物）	武部のフジ	三絡	平 2.11. 5	石飛正蔵	幹囲2.7mの老木
C 3	町	有形文化財（彫刻）	木造十一面観音菩薩立像	学頭	平 3. 2. 7	永徳寺	カヤ材の一木造、平安時代の制作
C 4	町	有形文化財（彫刻）	木造天部形立像（大像小像）	出西	平 3. 2. 7	栖雲寺	ヒノキ材の一木造、平安時代後期の制作、県立博物館に保管
C 5	町	記念物（天然記念物）	今在家の築地松	今在家	平 4. 7. 7	三代良信	規模、風格、樹齢
C 6	町	記念物（天然記念物）	福富の築地松	福富	平 4. 7. 7	岡正明	〃
C 7	町	記念物（天然記念物）	原鹿の築地松	原鹿	平 4. 7. 7	勝部政則	〃
C 8	町	無形民俗文化財	直江一式飾り	直江町	平 4. 7. 7	直江一式飾り保存会	伝統技術の継承
C 9	町	記念物（天然記念物）	興林寺のタブノキ	直江町	平 6. 9. 7	興林寺	幹囲4.4mで町内１の巨木
C10	町	記念物（天然記念物）	長寿寺のクロマツ	名島	平 6. 9. 7	長寿寺	300年の大木で盆栽仕立て
C11	町	有形文化財（彫刻）	木造如来形坐像（伝薬師如来）	上直江	平10. 9. 2	岩野薬師	ヒノキ材の一木造、平安末期の様式
C12	町	有形文化財（建造物）	原鹿の旧豪農屋敷（江角家）	原鹿	平13. 1.12	斐川町・江角香子	近代の出雲平野における代表的な豪農屋敷

番号	指定区分	種　　別	名　　称	所在地	指定年月日	所有者・保持者	概　　要
32	国	記念物（史跡）	出西・伊波野一里塚	神氷　富村	昭12. 6.15	石飛鷹一郎	旧山陰道
124	国	記念物（史跡）	荒神谷遺跡	神庭　西谷	昭62. 1. 8	斐川町	銅剣358口、銅矛16口、横帯文銅鐸１口、袈裟襷文銅鐸５口（国宝）
8	県	記念物（史跡）	神庭岩船山古墳	神庭　中溝	昭43. 6. 7	斐川町	前方後円墳（現48m）・舟形石棺、円筒埴輪
6	町	記念物（史跡）	小丸子山古墳	学頭 上学頭	平 2.11. 5	諏訪神社	県下で９番目の円墳（32m）・礫床、直刀、カブト他

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
1	平野Ⅰ遺跡	散布地	上直江 平野	弥生土器、土師器、須恵器	
2	軍原古墳	古墳	学頭 軍原	(前方後)円墳・直刀、貝輪、櫛、管玉、小札他	一部消滅
3	軍原丘上古墳群	古墳群	学頭 軍原	3基・1号墳（方墳、箱式石棺、須恵器）、2号墳（方墳、箱式石棺）、3号墳（墳形不明、箱式石棺）	3号墳消滅
4	大井城跡	城跡	学頭 大井	山城・郭5、土塁1、空堀1、鉄釘、陶磁器他	大半消滅
5	大倉横穴群	横穴群	学頭 大倉	6穴以上・須恵器	
6	小丸子山古墳	古墳	学頭 上学頭	円墳・礫床2、直刀、カブト、祝部式土器他	町指定
7	大井古墳	古墳	学頭 大井		消滅
8	神庭岩船山古墳	古墳	神庭 中溝	前方後円墳・舟形石棺、円筒埴輪	県指定
9	神庭古墳群	古墳群	神庭 岩野原	8基・円墳、方墳	
10	岩野原古墳群	古墳群	上直江 平野	5基	
11	剣山横穴群	横穴群	上直江 平野	4穴・直刀、須恵器	
12	外ケ市古墳	古墳	神氷 外ケ市	横穴式石室、須恵器他	
13	出西小丸古墳群	古墳群	出西 随心	3基・1号墳（横穴式石室、「卄」状陽刻の閉塞石、子持壺）、2号墳（横穴式石室）	2号墳は旧栖雲寺山古墳
14	岩野原横穴群	横穴群	上直江	3穴	
15	稲城古墳群	古墳群	出西 後谷		外形消滅
16	山ノ奥横穴群	横穴群	出西 山ノ奥	23穴以上	
17	海の平横穴群	横穴群	出西 上出西	3穴	
18	八幡宮横横穴	横穴	出西		半壊
19	岩樋上横穴	横穴	出西 上出西		
20	岩海横穴群	横穴群	出西 上出西	4穴	
21	岩海古墳	古墳	出西 上出西	円墳	消滅
22	高野古墳群	古墳群	阿宮 高野	3基・1号墳（円墳、横穴式石室）、2・3号墳（横穴式石室）	2・3号墳は封土流失
23	武部遺跡	散布地	三絡 武部西~東	柱穴、縄文土器、須恵器、土師器、石鏃他	一部消滅
24	武部西遺跡	住居跡	三絡 武部西	掘立柱建物、須恵器、土師器、石斧他	一部消滅
25	布子谷古墳	古墳	阿宮 下阿宮	横穴式石室	
26	横手古墳	古墳	阿宮 下阿宮		消滅
27	下阿宮古墳	古墳	阿宮 下阿宮		外形消滅
28	阿宮公民館後古墳	古墳	阿宮 下阿宮		外形消滅
29	墓田横穴群	横穴群	阿宮 井田	3穴	
30	高瀬城跡	城跡	神庭～学頭	山城・甲の丸、二の丸、鉄砲立	
31	狼山城跡	城跡	直江	山城・古銭	
32	出西・伊波野一里塚	一里塚	出西～伊波野	2基	国指定

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
33	沢田横穴群	横穴群	出西 沢田		
34	出西岩樋跡	水路跡	出西 岩樋	水門跡	
35	御射山古墳群	古墳群	荘原 御射山	3基・1・2号墳（円墳）、3号墳（墳形不明）・須恵器、刀、耳環	1号墳は旧佐支多神社裏古墳
36	上学頭古墳群	古墳群	学頭 上学頭	円墳4基、方墳3基・須恵器、玉	1基外形消滅
37	軍原千人塚古墳	古墳	学頭 軍原	円墳	半壊
38	鍛冶屋横穴	横穴	三絡 武部東	須恵器	消滅
39	西光院横古墳	古墳	三絡 羽根西	横穴式石室	
40	武部西古墳群	古墳群	三絡 武部西	円墳2基・横穴式石室	1基半壊
41	結城古墳	古墳	直江 結本谷	横穴式石室	封土流失
42	貴船古墳	古墳	三絡 貴船	横穴式石室、須恵器、埴輪	外形消滅
43	コモゴ山横穴群	横穴群	上直江 八頭	2穴・須恵器	別名八頭横穴群
44	後谷古墳	古墳	出西 後谷	円墳	
45	登道古墳	古墳	出西 後谷	円墳	
46	稲城横穴	横穴	出西 後谷		所在不明
47	御射山横穴群	横穴群	荘原 御射山	2穴・1号穴（須恵器）、2号穴（直刀、刀子、鉄鏃、金環、須恵器）	
48	亀山横穴	横穴	上直江 平野	須恵器	消滅
49	後谷東古墳群	古墳群	出西 後谷	円墳2基	
50	武部東古墳	古墳	三絡 武部東		消滅、別名カジカ古墳
51	白塚古墳	古墳	三絡 羽根東		半壊
52	水越古墳	古墳	阿宮 下阿宮	横穴式石室	所在不明
53	城平山城跡	城跡	阿宮～加茂町	山城	
54	城山古墳群	古墳群	神氷 城山	15基・1～7号墳（方墳）、11・12号墳（円墳）、8～10・13～15号墳（墳形不明）、2号墳（剣片、砥石他）	
55	平野古墳群	古墳群	上直江 平野	4基以上	一部消滅
56	三井古墳	古墳	直江 三井	方墳	
57	結遺跡	古墳群 住居跡	直江～三絡	古墳29基・11号墳（方墳・礫槨、蛇行鉄剣、鉄鏃、刀子）、10号墳（円墳・割竹形木棺、小剣）、17号墳（円墳・円筒埴輪、須恵器）、建物3ヶ所、縄文土器、石鏃、石匙、石斧他	大半消滅 古墳現存10基
58	西光院裏古墳群	古墳群	三絡 羽根西	2基	
59	結西谷Ⅰ遺跡	散布地	直江 結西谷	須恵器、磁器	

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
60	結西谷Ⅱ遺跡	散布地	直江 結西谷	須恵器、磁器	
61	直江石橋Ⅰ遺跡	住居跡	直江 結西谷	焼土壮壙、須恵器、土師器、石鏃他	消滅
62	結西谷古墳群	古墳群	直江 結西谷	2基・1号墳（墳形不明）、2号墳（円墳）	消滅
63	西古墳群	古墳群 土壙墓	三絡 西	2基・1号墳（方墳・鉄刀、須恵器、土師器）、2号墳（方墳）土壙墓（鉄製短刀、鎌、鉄器、土師質土器）	消滅
64	欠ノ元城跡	城跡	学頭 大井	山城・郭4以上	
65	湯谷城跡	城跡	学頭 大井	山城・郭5以上	
66	中前古墳	古墳	直江	方墳か	
67	結本谷Ⅰ遺跡	散布地	直江 結本谷	須恵器	
68	結本谷Ⅱ遺跡	散布地	直江 結本谷	須恵器、土師器	
69	西中学校横遺跡	散布地	直江	須恵器	
70	本谷遺跡	散布地	直江 石橋	須恵器、土師器	一部消滅
71	石橋古墳群	古墳群	直江 石橋	2基・1号墳（方墳）、2号墳（円墳か）	消滅
72	堀切古墳群	古墳群	直江 堀切	2基・1号墳（円墳）、2号墳（墳形不明）	
73	堀切Ⅰ遺跡	散布地	直江 堀切	須恵器	
74	堀切Ⅱ遺跡	散布地	直江 堀切	須恵器	
75	堀切Ⅲ遺跡	散布地	直江 堀切	須恵器、石鏃	
76	新屋敷古墳	古墳	直江		
77	新市Ⅰ遺跡	散布地	直江 新市	土師器	
78	新市横穴群	横穴群	直江 新市	3穴以上	1穴開口
79	斐川公園内古墳群	古墳群	直江	2基・1号墳（円墳）、2号墳（方墳か）	外形消滅
80	平野Ⅱ遺跡	散布地	上直江 八頭	須恵器	
81	神守古墳群	古墳群	神氷 神守	円墳2基	
82	氷室Ⅰ遺跡	散布地	神氷 氷室	須恵器	
83	氷室Ⅱ遺跡	散布地	神氷 氷室	須恵器	
84	神氷古墳群	古墳群	神氷 神守	5基・1・5号墳(円墳)、2～4号墳(方墳)	
85	神守Ⅰ遺跡	散布地	神氷 神守	土師器	
86	和西Ⅰ遺跡	散布地	神氷 和西	土師器、須恵器	
87	城山東古墳群	古墳群	神氷 氷室	方墳4基以上	
88	外ヶ市Ⅰ遺跡	散布地	神氷 外ヶ市	須恵器、土師器	
89	神守Ⅱ遺跡	散布地	神氷 神守		
90	新在古墳	古墳	神氷		
91	長者原古墳群	古墳群	出西 後谷	9基（可能性含む）・帆立貝状の前方後円墳、円墳	
92	上出西Ⅰ遺跡	散布地	出西 上出西	土師器	

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
93	上出西Ⅱ遺跡	散布地	出西 上出西	須恵器	
94	剣先横穴群	横穴群	出西　剣先	2穴以上	旧青木勝四郎宅横穴群
95	後谷横穴群	横穴群	出西　後谷	3穴	
96	後谷Ⅰ遺跡	散布地	神氷　氷室	須恵器	
97	後谷Ⅱ遺跡	散布地	出西　後谷	須恵器、磁器	
98	後谷Ⅲ遺跡	散布地	出西　後谷	須恵器	
99	後谷Ⅳ遺跡	散布地	出西　後谷	須恵器、土師器	
100	神氷三メ田古墳群	古墳群	神氷　神守	2基以上	
101	中出西Ⅰ遺跡	散布地	出西 中出西	土師器、土師質土器	
102	山ノ奥Ⅰ遺跡	散布地	出西 山ノ奥	土師器、須恵器	
103	沢田Ⅰ遺跡	散布地	出西　沢田	青磁、土師質土器	
104	下阿宮Ⅰ遺跡	散布地	阿宮 下阿宮	須恵器、土師器	
105	下阿宮Ⅱ遺跡	散布地	阿宮 下阿宮	須恵器、土師器	
106	立栗山城跡	城跡	阿宮 下阿宮	山城	
107	後谷町道脇古墳	古墳	出西　後谷	横穴式石室	封土流失
108	吉成古墳群	古墳群	三絡　吉成	円墳2基、方墳1基	
109	貴船Ⅰ遺跡	散布地	三絡　貴船	須恵器	
110	古殿古墳群	古墳群	三絡　西	2基・1号墳（円墳）、2号墳（方墳）	
111	奥古墳	古墳	三絡　奥	円墳	
112	佐利保谷遺跡	散布地	神庭 神庭谷	須恵器	一部消滅
113	神庭西谷古墳群	古墳群	神庭～三絡	9基・1・3～5・8号墳（方墳）、2・6・7・9号墳（円墳）	
114	諏訪神社前遺跡	散布地	神庭	須恵器	
115	宇屋谷遺跡	散布地	神庭 宇屋谷	須恵器	
116	氷室Ⅲ遺跡	散布地	神氷　氷室	須恵器、土師器	
117	神庭西谷Ⅰ遺跡	散布地	神庭　西谷	青磁	
118	神庭西谷Ⅱ遺跡	散布地	神庭　西谷	白磁	
119	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	併川神立～出雲市	弥生土器、古式土師器	出雲市と同一
120	神庭谷Ⅰ遺跡	散布地	神庭 神庭谷	土師器	
121	神庭谷Ⅱ遺跡	散布地	神庭 神庭谷	須恵器、青磁	
122	西谷古墳群	古墳群	神庭　西谷	円墳2基	
123	西谷遺跡	散布地	神庭　西谷	溝状遺構、弥生土器、古式土師器、須恵器	
124	荒神谷遺跡	青銅器埋納地	神庭　西谷（通称畑ノ奥）	銅剣、銅鐸、銅矛、須恵器	国指定

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
125	神庭丘陵北遺跡	散布地	神庭～荘原		
−1	御射山地区	散布地	荘原 御射山	土師器、須恵器、青磁	
−2	岡地区	散布地	神庭 岡	土師器、須恵器	
−3	中溝地区Ⅰ	散布地	神庭 中溝	須恵器	
−4	中溝地区Ⅱ	散布地	神庭 中溝	青磁	
126	上学頭Ⅰ遺跡	散布地	学頭 上学頭	須恵器	
127	上学頭Ⅱ遺跡	散布地	学頭 上学頭	須恵器	
128	大倉Ⅰ遺跡	散布地	学頭 綿田原	須恵器	
129	大倉Ⅱ遺跡	散布地	学頭 大倉	須恵器、青磁	
130	大倉Ⅲ遺跡	散布地	学頭 大倉	青磁	
131	大倉Ⅳ遺跡	散布地	学頭 大倉	溝状遺構、須恵器、土師器、碧玉、砥石他	
132	綿田原Ⅰ遺跡	散布地	学頭 綿田原	須恵器、青磁	
133	綿田原城跡	城跡	学頭 綿田原	山城・郭5以上、堀切	
134	綿田原古墳群	古墳群	学頭 綿田原	3基・1・2号墳（円墳）、3号墳（方墳）	
135	三分市館跡	館跡	三分市 堀ノ内	天野氏館跡	所在不明
136	寿山窯跡	窯跡	神庭 中溝		
137	岡瓦窯跡	窯跡	神庭 西谷大垣	石見瓦他	
138	岡田瓦窯跡	窯跡	神庭 中溝		
139	平野横穴群	横穴群	上直江 平野	横穴19穴・鉄刀、鉄製轡、刀子、鉄鏃、金環、勾玉、須恵器、土師器他	消滅
140	新市Ⅱ遺跡	散布地	直江 新市	須恵器、磁器	
141	新市Ⅲ遺跡	散布地	直江 新市	須恵器、土師器	
142	福富遺跡	鏡出土地	福富 内代	鏡、壺	
143	氷室Ⅳ遺跡	散布地	神氷 氷室	弥生土器、須恵器、土師器	
144	三絡Ⅰ遺跡	散布地	三絡 羽根東	須恵器、磁器	
145	三絡Ⅱ遺跡	散布地	三絡 武部東	須恵器、土師器、石鏃	
146	三絡Ⅲ遺跡	散布地	三絡 武部東～西	須恵器、青磁	
147	三絡Ⅳ遺跡	散布地	三絡 武部西	須恵器	
148	三絡Ⅴ遺跡	散布地	三絡 武部西	須恵器、土師器、石鏃	
149	三絡Ⅵ遺跡	散布地	三絡 羽根西	須恵器、土師器	
150	三絡Ⅶ遺跡	散布地	三絡 吉成	須恵器	
151	結西谷Ⅲ遺跡	住居跡	直江 結西谷	須恵器、土師質土器、黒曜石	消滅
152	軍原Ⅰ遺跡	散布地	学頭 軍原	須恵器、陶器	
153	八斗蒔Ⅰ遺跡	散布地	直江 三井	須恵器、磁器	
154	八斗蒔Ⅱ遺跡	散布地	直江 三井	須恵器、土師器	
155	田中古墳群	古墳群	学頭 上学頭	方墳4基	

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
156	天寺平廃寺	寺院跡	阿宮 下阿宮	基壇2、礎石、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、のし瓦、鬼瓦、塼	
157	三角点古墳	古墳	直江		消滅
158	稲城丘陵古墳群	古墳群	出西 稲木谷		
159	城山城跡	城跡	神氷 城山	山城	
160	狼山土師器出土地	散布地	直江	古式土師器壺	
161	鷹の巣城跡	城跡	神庭	山城	
162	尾田瀬遺跡	住居跡	神庭 尾田瀬	焼土土壙、須恵器、土師器他	消滅
163	佐利保谷Ⅱ遺跡	住居跡	神庭 佐利保谷	柱穴、須恵器、土師器他	消滅
164	結南遺跡	散布地	直江～三絡	須恵器、土師器	
165	直江石橋Ⅱ遺跡	散布地	直江 石橋	須恵器、土師器他	
166	有間谷遺跡	散布地	神氷 有間谷	須恵器	消滅
167	有間谷Ⅱ遺跡	住居跡	神氷 有間谷	柱穴、須恵器、土師器他	一部消滅
168	三井Ⅰ遺跡	住居跡	直江 三井	柱穴、須恵器、土師器他	消滅
169	門原池遺物散布地	散布地	三絡	須恵器、土師器	
170	西谷池遺物散布地	散布地	神庭 西谷	須恵器、土師器	
171	三斗蒔遺跡	古墳群 散布地	直江 三井	円墳4基、方墳3基・鉄刀、鉄剣、鉄鏃、須恵器、土師器他	消滅
172	西谷Ⅱ遺跡	散布地	神庭 西谷	溝状遺構、弥生土器、須恵器、土師器他	
173	亀山城跡	城跡	上直江 平野	山城	
174	神守城跡	城跡	神氷 神守	山城	
175	堀切瓦出土地		直江 堀切	軒丸瓦	
176	欠ノ元1号墳	古墳	学頭 大井	方墳	
177	大倉城跡	城跡	学頭 大倉	山城・郭7以上、土橋2	
178	宇屋谷城跡	城跡	神庭 宇屋谷	山城・郭7、堀切2	
179	宇屋谷Ⅱ遺跡	散布地	神庭 宇屋谷	須恵器	
180	神庭谷Ⅲ遺跡	散布地	神庭 神庭谷	須恵器、土師質土器	
181	尾田瀬Ⅱ遺跡	散布地	神庭 尾田瀬	土師質土器	
182	三絡Ⅷ遺跡	散布地	三絡 武部西	須恵器	
183	三絡Ⅸ遺跡	散布地	三絡 武部西	須恵器、陶磁器	
184	奥遺跡	散布地	三絡 奥	黒曜石	
185	三絡Ⅹ遺跡	散布地	三絡 武部東~西	須恵器、陶磁器、石鏃	
186	三絡Ⅺ遺跡	散布地	三絡 武部東	須恵器、陶磁器	
187	祇園原遺跡	散布地	直江 祇園原	須恵器、陶磁器	
188	結本谷Ⅲ遺跡	散布地	直江 結本谷	須恵器	
189	結城跡	城跡	直江 結本谷	山城・郭25以上、堀切1	

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
190	和西Ⅱ遺跡	散布地	神氷 和西	土師質土器、陶磁器	
191	小野遺跡	散布地	神氷 小野	須恵器、土師質土器、陶磁器、軒丸瓦、平瓦、鴟尾、弥生土器	
192	押屋古墳群	古墳群	出西 押屋	円墳3	
193	後谷丘陵古墳群	古墳群	出西 後谷	円墳1、方墳3	
194	中出西Ⅱ遺跡	散布地	出西 中出西	土師質土器、陶磁器	
195	海の平遺跡	散布地	出西 海の平	須恵器、土師器	
196	郡家（長者原）推定地	官衙跡	出西 稲木谷	須恵器、土師質土器、砥石他	
197	後谷遺跡	官衙跡	出西 後谷	礎石建物2ヶ所、竪穴住居、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師質土器、白磁他	旧・後谷Ⅴ遺跡
198	稲城遺跡	散布地	出西 稲木谷	呪符木簡、須恵器、土師器、軒丸瓦	
199	上阿宮Ⅰ遺跡	散布地	阿宮 上阿宮	土師器、土師質土器、陶磁器	
200	上阿宮Ⅱ遺跡	散布地	阿宮 上阿宮	須恵器、土師器、陶磁器	
201	原鹿Ⅰ遺跡	散布地	原鹿	土師器、土師質土器	
202	今在家Ⅰ遺跡	散布地	今在家	土師器、土師質土器	
203	新田畑Ⅰ遺跡	散布地	学頭 新田畑	集落遺構、縄文土器、黒曜石	
204	新田畑Ⅱ遺跡	散布地	学頭 新田畑	黒曜石	
205	三絡Ⅻ遺跡	散布地	三絡 武部西	周溝、土師器、須恵器	
206	杉沢遺跡	住居跡	直江 杉沢	竪穴住居、弥生土器	
207	有間谷Ⅲ遺跡	散布地	神氷 有間谷	溝状遺構、須恵器、土師器、黒曜石	
208	杉沢古墳群	古墳群	直江 杉沢	古墳4基、古式土師器、鉄剣	
209	杉沢Ⅱ遺跡	散布地	直江 杉沢	溝状遺構、須恵器、土師器、黒曜石	
210	大井遺跡	散布地	学頭 大井	須恵器、土師器、黒曜石、木製品	
211	杉沢横穴墓群	横穴群	直江 杉沢	3穴以上	
212	上ヶ谷遺跡	散布地	神氷 上ヶ谷	総柱建物1棟、溝状遺構、縄文土器、土師器、須恵器、石錘、磨製石斧、田下駄	
213	宮谷遺跡	散布地	三絡	弥生土器、石器、円筒埴輪1、陶磁器	
214	七日市遺跡	散布地	学頭 七日市	須恵器、黒曜石	
215	七日市古墳群	古墳群	学頭 七日市	円墳3基、弥生土器、須恵器、黒曜石	
216	三メ田遺跡	散布地	神氷 三メ田	掘立柱建物、須恵器、土師質土器、磨製石斧	
217	大井Ⅱ遺跡	散布地	学頭 大井	須恵器、土師器、陶磁器	
218	大井Ⅲ遺跡	散布地	学頭 大井	須恵器、土師質土器、陶磁器、青磁	
219	杉沢Ⅲ遺跡	住居跡	直江 杉沢	土師器、土製品、須恵器、石鏃	
220	三井Ⅱ遺跡	住居跡	直江 三井	竪穴住居、掘立柱建物、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、石鏃、紡錘車、砥石、石斧、石錘、下駄、鉄鏃	

番　号	名　　称	種　別	所 在 地	概　　要	備　考
221	富 村 正 法 遺 跡	住居跡	富村	掘立柱建物、須恵器、土師質土器、陶磁器	
222	井 田 横 穴 群	横穴群	阿宮　井田	2穴	
223	井　田　遺　跡	散布地	阿宮　井田	土師器	

付　　篇

「筑紫街道」についての一考察

――「出雲国風土記」駅路記事および地籍図遺称地名との関連から――

池　橋　達　雄

はじめに

斐川町ではこのところ直江結(むすび)地内の三井(みい)Ⅱ遺跡などの発掘調査が進められてきた。その一部に古来筑紫街道と呼ばれてきた道路遺構が含まれている。この筑紫街道が何であるかについて、報告書に所見を述べるよう依頼されたので、以下小稿を書く次第である。結論を先に述べると、筆者は、筑紫街道は8世紀に成立した「出雲国風土記」が記す古代山陰道駅路(うまやじ)の一部であると考える。

一、本稿の目的と考察方法

最近の10年間、古代律令制下の官道に関する研究が、歴史地理学と考古学の双方でたがいに刺激し補完し合うという形で急速に進んできた。無数といってよいほどの考古学側の発掘報告書はいまおいて、歴史地理学側からは、たとえば木下良編「古代を考える－古代道路」（吉川弘文館・平成8年）や木本雅康著「古代の道路事情」（吉川弘文館「歴史文化ライブラリー」・2000年）などがあって、このことについての研究の最近の状況を知るよい手引きの書物となっている。

しかし、いわゆる山陰道についての研究は遅れている。島根県では1995年に一般国道9号（松江道路）建設にかかわって松江市乃木福富町地内の松本古墳群Ⅰ区の発掘調査が行われた際、その一部として道路遺構が発見され、古代山陰道駅路であると確認された(1)。この事例以外には公式に古代山陰道遺構と確認された事例はないといった状況である。そして、松本古墳群の道路遺構も谷状の傾斜部分で長い間の浸食によって土砂が流出しており、明確な断面構造も判明しない状況である。

周知のように、出雲には「出雲国風土記」（以下「風土記」と略称する）という古代地誌が唯一完本の形で伝えられており、その中には詳しい古代道路の記述がある。このような絶好の文献的手がかりを持ちながら、出雲での古代道路の実証的研究が歴史地理学・考古学いずれの面でも進捗していないのは残念である。

私は、「風土記」を手がかりにフィールド＝ワークを行い、それによって得た見解をいくつか発表してきた。それぞれ「古代の伯耆出雲国境付近山陰道と中世の四十曲越陰陽連絡道について」(1993)(2)、「飯梨地区の古代山陰道」(1994)(3)、「宍道町西部の古代山陰道をめぐって」(1998)(4) で、出雲国内の古代山陰道のルートを東から西へ追っていく形をとっている。

「風土記」の出雲(いずも)郡は、現在の宍道町西部一部と斐川町（東北部の当時未沖積であったところを除く）と平田市西部一部と出雲市北部一部と大社町の大部分からなり、宍道町・斐川町を東西に貫いて

「筑紫街（海）道」と呼ばれる道があり、部分的にその遺構を残している。斐川町は、私の生地住地であり、筆者は1990年ごろから「風土記」を読み返しつつ、斐川町地内を走っていたに違いない古代山陰道のルートを考えてきたが、その筆者にきわめて強い刺激を与えたのが、文政6年（1823）の「漆治郷下直江村絵図」に描かれている「筑紫海道」であった[5]。この絵図を知ったのは1996年のことであったが、翌1997年から絵図に示されている直江結から神氷神守にかけてのこの道を踏査し、この部分は「風土記」の山陰道駅路にちがいないと推定するようになった。また、それ以前に入手していた神氷地内の地籍図（後述）に記されている地名の中に、古代道路そのほか「風土記」記事にかかわりがあると思われる地名を発見することができた。

「風土記」の記事と伝承の筑紫街道のルートと地籍図に残るいくつかの地名、これら三つのものが整合することが証明されるのであれば、そのことによって三つのものそれぞれが真実性をもった存在になる。従って、以下、「風土記」記事を点検し、筑紫街道ルートを踏査し、地籍図記載の地名を照合する作業を行っていきたい。

二、「出雲国風土記」の駅路記事

「風土記」記事については、伝本による相違をめぐって過去論議が重ねられてきたが、駅路についても同様である[6]。しかし、この稿ではそのことには立ち入らず、テキストとして加藤義成『出雲国風土記参究』（初版昭和32年）と同氏考注『出雲国風土記』（初版昭和40年）とを用いる。出雲郡内に関してはこれら二つの書物の駅路記事は信頼できると考えるからである。

「風土記」は、古代道路を三段階にして記載している。第一は駅路で、巻末の「駅路」の項に述べられ、第二は伝路で、巻末の「道度」の項に述べられ、第三は通路で、各九郡記事の終りのところに述べられている。通路には伝路・駅路が含まれ、伝路には駅路が含まれているので、いわば同心円的な関係となっているが、本稿でとり上げるのは中心に近い円内に位置する駅路である[7]。

「風土記」には駅路は二本記されている。一は、伯耆出雲国境から出雲石見国境へ至るもので、国庁から西は「正西道」と呼ばれているが、山陰道本道である。二は、国庁から北に分かれて千酌へ至る隠岐への道で、「枉北道」と呼ばれている。以下に扱うのは山陰道本道である。

これについて、「風土記」は四か所でその総距離を述べている。五種の数字が出ており、それらのうち一致するのは二種である。

ア、巻首の総記	137里019歩
イ、巻中の意宇・出雲・神門郡末の「通路」記事の計（出雲河と神戸川の幅は補う）	139里134歩
ウ、巻末「道度」の項の総計	139里134歩
ここに国庁から西への部分計が106里244歩と出ているので、これを採用すると	148里124歩
エ、巻末「駅路」の項の総計	139里109歩

「風土記」の編纂は、郡からの記録の上申を国庁でまとめるという方法で行われた。そのことから出雲国内駅路＝山陰道の距離はまずイが信頼でき、それをまとめたウも信頼できるということになる

が、この数字についても筆者は疑問をもっている。後でふれたい。

なお、当時の里・歩・丈・尺のメートル法への換算は表1によってできる。

「風土記」記載の数字のうち、ウの道度の項の数字を表示し、総計にメートル法での換算数字を添えると、表2のようになる。

しかし、本稿のしごとは出雲郡内の駅路を明らかにすることである。出雲郡以外の数字については今は措きたい。

表1．里・歩・丈・尺のメートル換算

1尺（大尺）		0.356m
（小尺の1尺は		0.297m）
5尺	＝1歩	1.78m
10尺	＝1丈	3.56m
300歩	＝1里	534.54m

表2．「出雲国風土記」道度の項に記す駅路

国の東の境（手間剗）～野城橋	20里180歩		
野城橋		長30丈7尺・幅2丈　6尺	
（渡橋して）～十字街	21里		
十字街　～野代橋	12里		
野代橋		長　6丈　・幅1丈　5尺	
（渡橋して）～玉造街	7里		
玉造街　～来待橋	9里		
来待橋		長　8丈　・幅1丈　3尺	
（渡橋して）～佐雑崎	14里	30歩	
佐雑崎　～出雲郡家	13里	64歩	
出雲郡家　～出雲河	2里	60歩	
出雲河		50歩	
（渡橋して）～神門郡家	7里	25歩	
（神戸）河		25歩	
（渡橋して）～国の西の崎（多伎々山）	33里		
3つの橋の長さを除く	総計139里	134歩	（74546m）

そこで、「風土記」のイの郡ごとの駅路記載記事の中から意宇郡西部と出雲郡の部分について表示すると、表3のようになる。ここに出て来る九か所の地点のうち、東西に距離を測っていく基点としてよいのは佐雑崎である。加藤義成氏は、この佐雑崎を宍道町大字佐々布と同大字伊志見の境をなす尾根の先端（当時宍道湖中に突出していたと考えられる）の付近とされているが、筆者は先端から約800メートル南の尾根上の字大道の地点とみる。あとで図1に示す。

表3によると、佐雑崎から西へ13里64歩（7064m）のところに出雲郡家があることとなる。出雲郷庁は「郡家に属けり」と「風土記」は記すが、これは出雲郷の中にあるということで、それが郡家の東にあったか西にあったかは記事では分からない。漆治郷庁は郡家から東へ5里270歩（3157m）、健部郷庁は郡家から東へ12里224歩（6817m）のところにあると記されるが、それぞれの郷庁がいまの

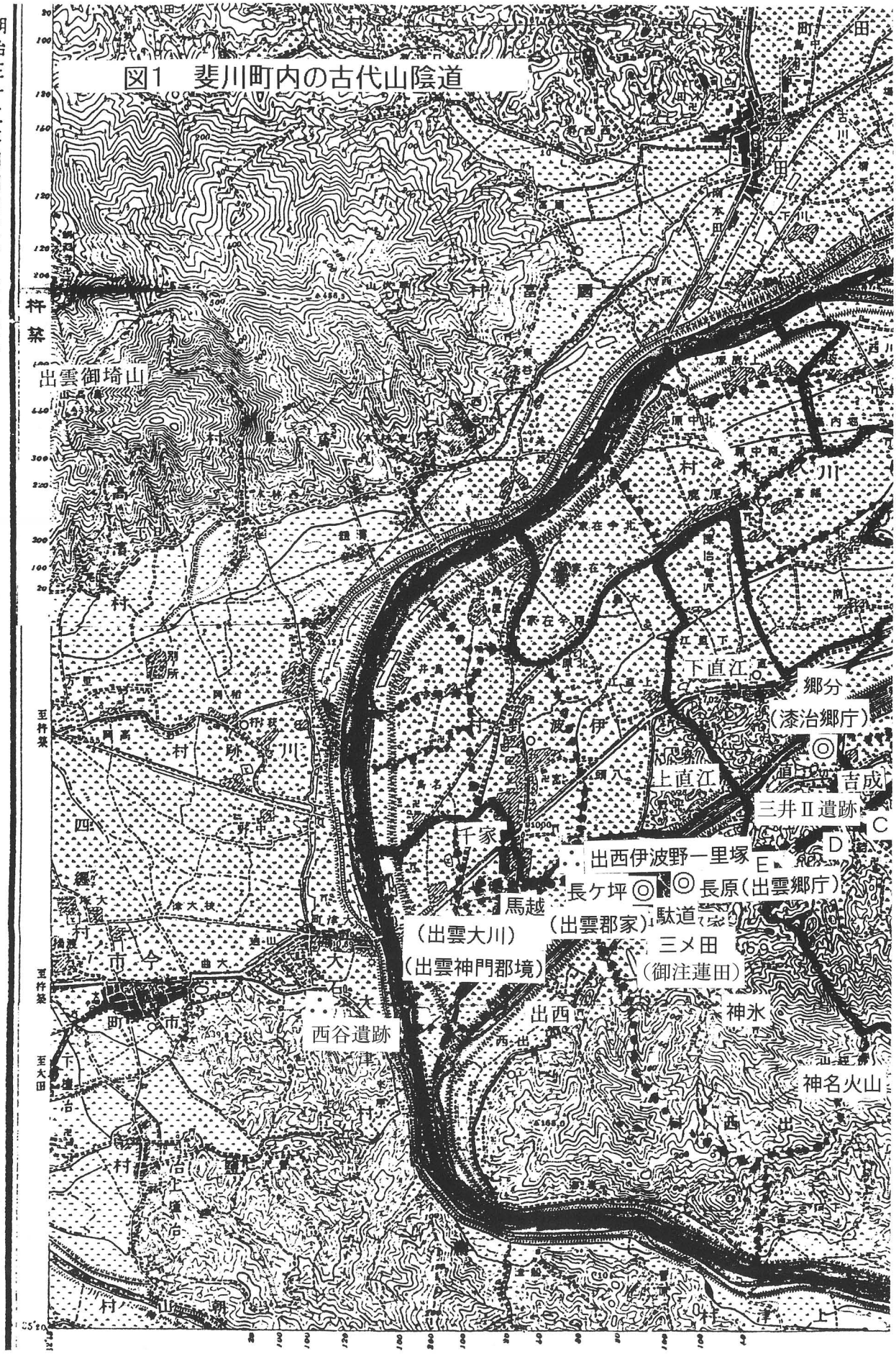


図1　斐川町内の古代山陰道

明治三十二年測圖同三十五年製版

大日本帝國陸地測量部

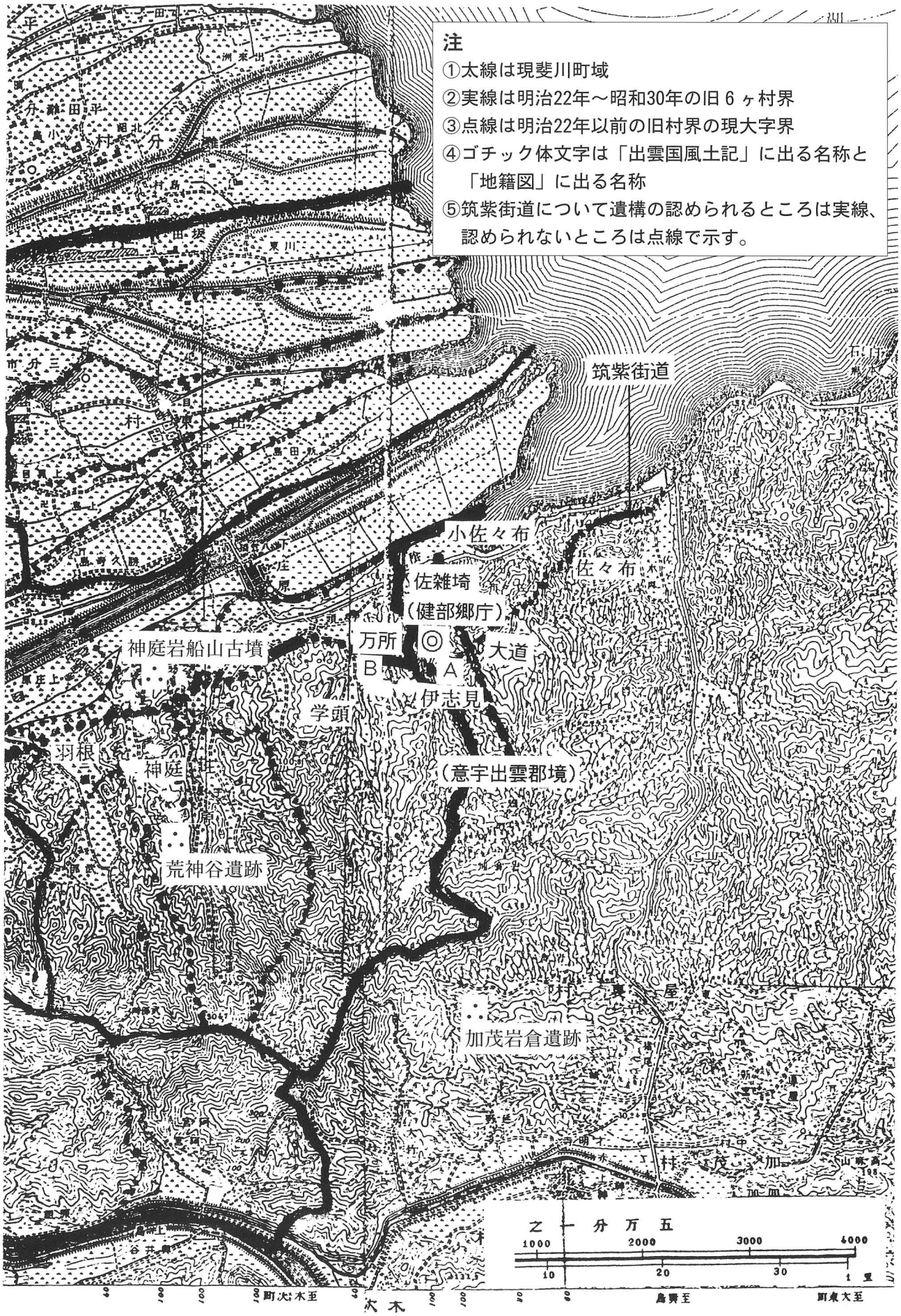
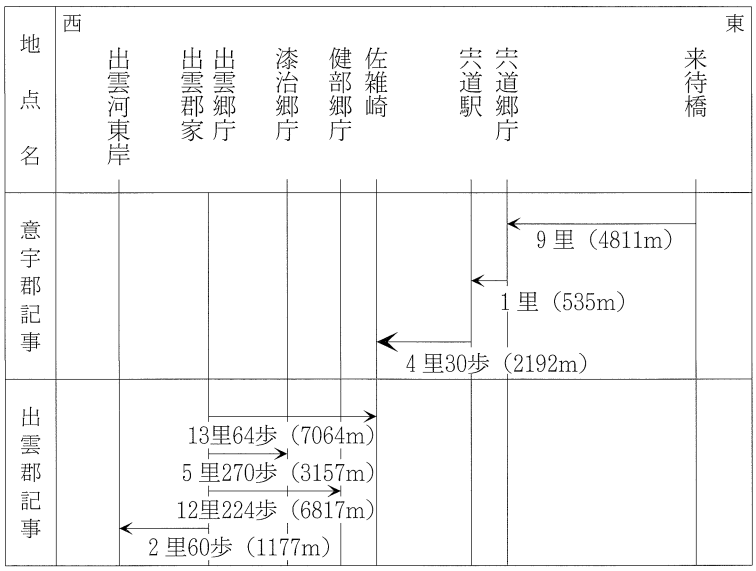

注
①太線は現斐川町域
②実線は明治22年～昭和30年の旧６ヶ村界
③点線は明治22年以前の旧村界の現大字界
④ゴチック体文字は「出雲国風土記」に出る名称と「地籍図」に出る名称
⑤筑紫街道について遺構の認められるところは実線、認められないところは点線で示す。
筑紫街道
小佐々布
佐々布
佐雑埼
（健部郷庁）
万所
大道
B
A
伊志見
神庭岩船山古墳
学頭
羽根
神庭
（意宇出雲郡境）
荒神谷遺跡
加茂岩倉遺跡
五万分之一
1000
2000
3000
4000
10
20
30
1 里

表３．意宇郡西部・出雲郡の記事の距離記載



どの地点に比定されるか、郡家の位置とともにのちに考えてみたい。

次に、「風土記」の記す駅路の幅員についてみたい。

古代道路の等級については、「令義解」廐牧令第二三に「凡諸道駅馬、大路（山陽道、太宰府までの西海道）二〇疋、中路（東海道、東山道）一〇疋、小路五疋」と出ている。大路・中路・小路は、馬の数の違いによるだけではなく、設置されている駅の規模の格付けを伴うものであるし、また、道路の幅員のある程度の格付けも伴うものであったであろう。「風土記」は、小路である山陰道の幅員についてはまったくふれるところがない。表２には、野城橋・野代橋・来待橋の三橋が示されているが、幅員については、それぞれ２丈６尺（大尺で9.3m・小尺で7.7m）、１丈５尺（大尺で5.3m・小尺で4.5m）、１丈３尺（大尺で4.6m・小尺で3.9m）と示されている[8]。野城橋の２丈６尺というのは、大尺にせよ小尺にせよ、非常に大きいが[9]、他の二つの橋の幅から山陰道駅路の幅は大体４～５ｍとみて妥当ではないであろうか。

さきに考古学的にも確認された唯一の例として紹介した松江市の松本古墳群内の山陰道遺構についても幅員は不明である。近世になると、道路の実用面である馬踏と、それを作るための側溝や法面を含めた道敷が区別して記録に書かれるようになる。上記松本古墳群内の遺構の場合、たしかに道敷に相当する部分は10mを越えているが、馬踏にあたる部分は測定不能であった。

木本氏は、前掲書で、平安期には幅員が6m程度に縮小される例を挙げながらも、古代律令国家では幅９～12m程度はある直線的な大道を国内にはりめぐらしていたと述べておられるが、そのようにいい切るためには山陰道を含めてもう少し実証的な研究が必要なのではあるまいか。山陰道の幅員についてはのちにまたふれたい。

古代道路の構造についても近年研究が進み、伯耆・出雲でも波板状凹凸工法や版築様工法などの例が報告されつつあるが、このことについては本報告でも三井Ⅱ遺跡の発掘にかかわってのちに言及することにしたい。

三、伝承の筑紫街道

筑紫街道という呼称は、いうまでもなく出雲からははるかに西方の北九州の筑紫を意識してそこに至る道という意味でつけられたものである。ちなみに、近世の山陰道は、出雲では東へ向かっては伯州街道、西へ向かっては石州街道と呼ばれ、直接隣り合う隣国が意識されていた。筑紫街道は、山陰道という呼称が濃く生きていた古代の呼称を伝えている可能性が強いと思われる。

近世の筑紫街道の遺構として伝承されている部分は図1に示しているA・Bの間とD・Eの間である。

A・Bの間については、後藤蔵四郎氏が大正15年(1926)刊の『出雲国風土記考証』で、「今の伊志見神社より西南四町に於いて、伊志見と庄原村との線を横切る道路は、昔筑紫街道と名づけて居った。そんな所が天平時代の通路であったであらう」と述べている[10]。

D・Eの間については、前述の文政6年の下直江村絵図に「筑紫海道」として明示されている。

以下、東から西へ筑紫街道をたどってみる[11]。

A・B区間について道路遺構が残っているのは、写真1・写真2に見える尾根越部分だけである。尾根まではおそらく地辷(じすべ)りによって原状は変っており、また尾根から先は浸食によって路面、両側法面とも形を変えており、幅員を確認することができない。

B・C区間についてみる。学頭大倉(おおくら)地内では写真3のように遺構の一部と覚しきところをみることができる。学頭綿田原(わたたばら)からの道は、写真4にみるように、水田中をまっすぐ西進し、同地内を南から北に伸びる尾根の最低地点を越えていくが、尾根に達するまでの道は、左の学頭上学頭(かみがくとう)と右の神庭中溝(なかみぞ)の境界となっている。尾根越えの部分には手前に上の山池と呼ばれる二段の溜池が築造されており、向う側にも小さい溜池が一つあり、道の遺構は消えている。尾根を越えると写真5の道があるが、この道は左側の神庭西谷(さいだに)と右側の三絡羽根(みつがねはね)との境界となっている。この先は道の遺構と確認できる部分を見つけてはいない。

C地点から三絡吉成(よしなり)地内に入る。このところには道遺構が色濃く残っている。東から香取神社までは畠の帯状地割や尾根先端の切り通しを認めることができ、また香取神社の西の方でも写真6に見るように、いわゆる道敷全体が畠として残っていると考えられるところを通過する。

D・Eの下直江村絵図に記載されている筑紫街道は、ほぼその全部分をたどることができる。

吉成の尾根を横切ると水田を隔ててすぐ前方に低い

写真1　宍道町伊志見地内。伊志見川を隔てて西方斐川町学頭との境界尾根を望む。左方の低いところを道が越える。
（撮影　2001年3月26日）

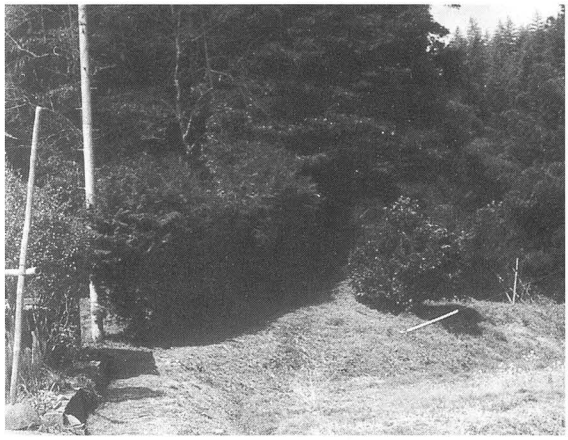


写真2　写真1の低い尾根越え道の入り口。この部分では筑紫街道の呼称が残っている。
（撮影　写真1に同じ）

写真3　学頭大倉地内。遠方の尾根は学頭綿田(わたた)原(ばら)地内。道はまっすぐ西へ進んでいたと考えられる。　（撮影　写真1に同じ）

丘陵があって左方（南）から右方（北）へ延びている。それまでの水田中の道は消えているが、まっすぐの丘陵上に中世の武将の墓と伝えられる五輪塔が立っている。その手前の丘陵の縁を南から北へ延びる小路が健部郷と漆治郷との境界となっている。筑紫街道は五輪塔の前を西へ直進してから尾根にとりつくが、それまでのところの舗装された道は筑紫街道の遺構である。尾根に登る手前で道は二軒の民家の間を右へ折れまた左に曲がる形となり、いわゆる稲妻型に屈折するが、これは山崩れなどの地形変化に伴うもので、もとの道はまっすぐ尾根へ上っていったものと考えられる。

尾根に上ると、約400mほどは水平平坦となって続いていたはずであるが、44.0m三角点から先、水平平坦部分のまんなかが先年建設された杉澤道路で切断されている（写真８）。昨年、三井Ⅱ遺跡調査の一部として、この尾根部分の調査が行われ、切断面の西の塞の神付近と切断面の東でそれぞれ横トレンチが掘られ、西の部分では縦トレンチも掘られた。調査を担当した松本堅吾氏から、横トレンチの上層では、版築様の工法が見られ、幅員は約４ｍで側溝を伴う道路遺構が認められること、また、縦トレンチによって平坦にみえる尾根筋にはかなりの起伏があったが、土盛りによって平坦にされたものであることなどを告げられ、私も現地で確認した。しかし、これらのことは主報告で正確精密に述べられることであるので、私も実見したということを付記して、それ以上は記すのを略したい。

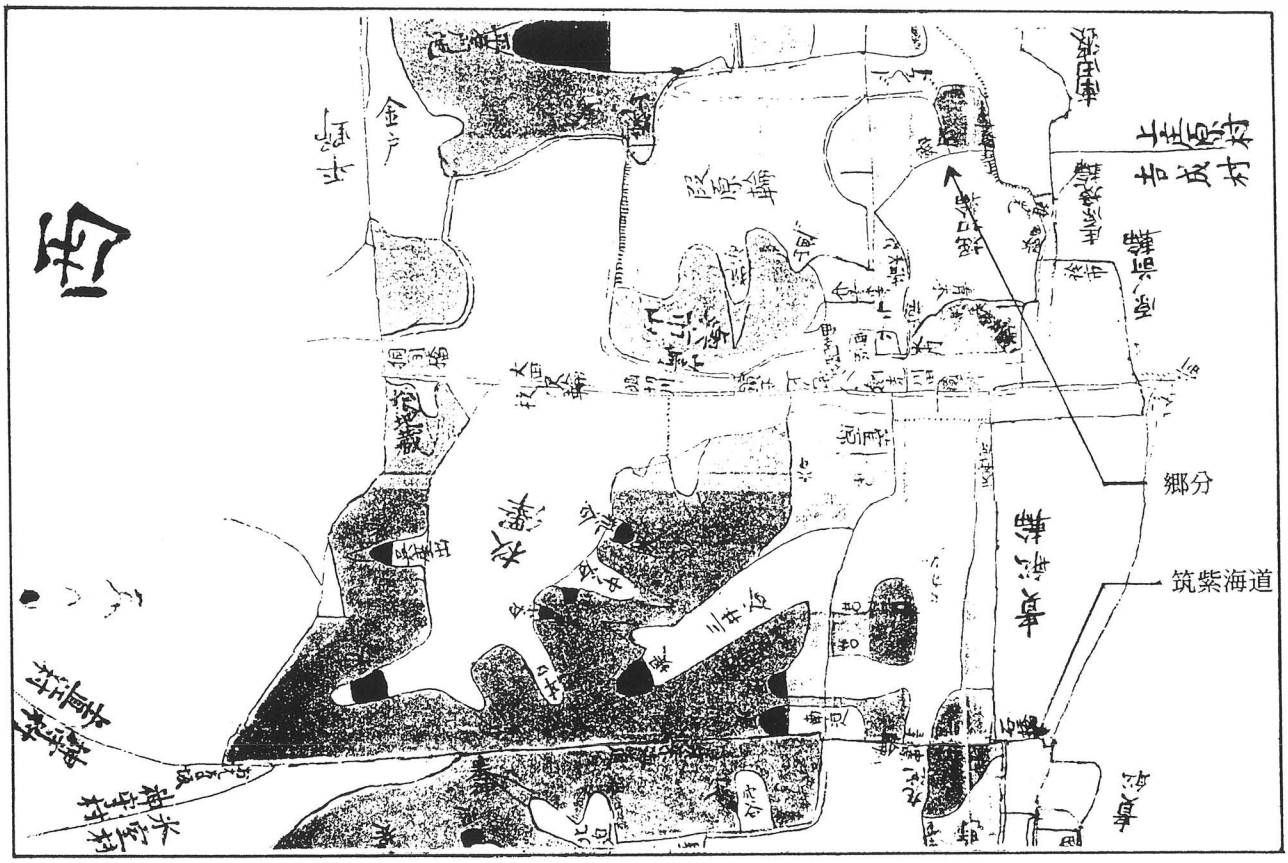
この尾根部分は、太平洋戦争後に開拓されて畠や果樹園が造成された。そのため現状は変っているが、いまそれ以前の状態を調査しておく必要があろう。道路遺構についても、荷駄隊の行き違いのための複線的な道路構造があったかも知れず、また、行き違いや休憩のための広場が付設されていたかも知れない。道路遺構以外にも種々の発掘成果があったときくが、ここでは略したい。

写真４　学頭綿田原から西方神庭中溝（なかみぞ）地内の尾根を望む。道は尾根の鞍部を越えていく。
（撮影　写真１に同じ）

写真５　手前の舗装された部分が筑紫街道遺構と考えられる。この部分の左が神庭西谷（さいだに）地内、左が三絡羽根（みつがねはね）地内。
（撮影　写真１に同じ）

写真６　三絡吉成（よしなり）地内の香取（かとり）神社西方での尾根越え。広い道敷が畠として残っている。
（斐川町教委パンフレット「古代の道トーク＆ウォーク」から）

図２　文政六年「漆治郷下直江村絵図」（部分）



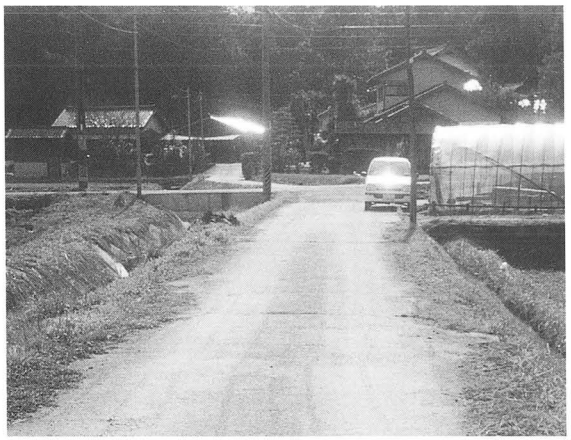
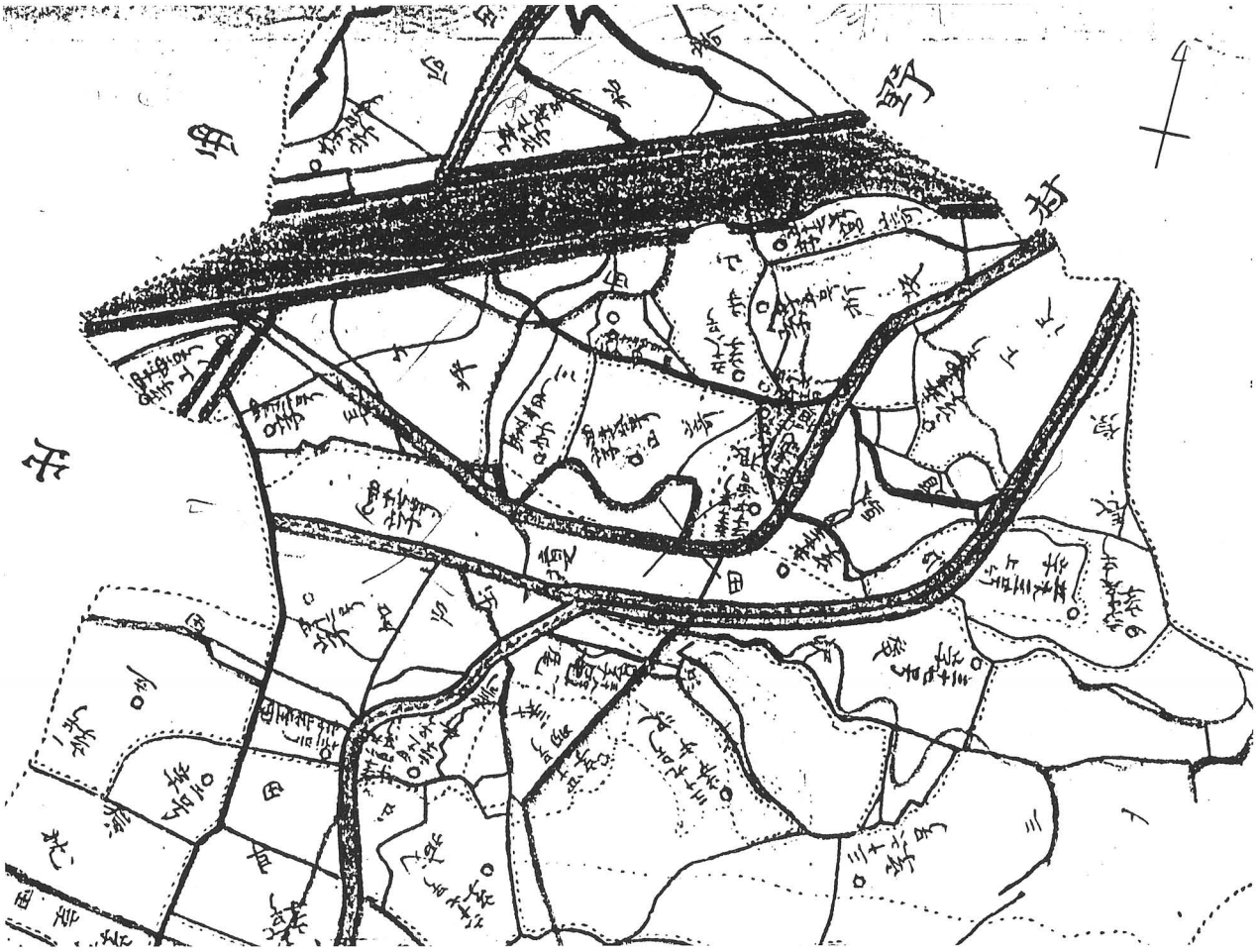


写真７　直江結（むすび）地内。道は先で少しずれるが、向こうの山の上へほぼまっすぐ登っていく
（撮影　写真１と同じ）

写真８　直江結地内。近年建設された杉澤道路が南北に貫ぬいて筑紫街道を横断するが、筑紫街道は、右の送電塔のところから左の樹木の見えているところへ尾根の上を走っていた。　（撮影　写真１と同じ）

図１のＥ地点にある塞の神から西へ道はゆるやかに尾根を下っていくが、道を境界に左側（南）は神氷氷室（かんびひむろ）、右側（北）は下直江結からまもなく上直江平野（かみなおえひらの）となる。そして尾根の尽きたところで神氷神守（かんもり）に入る。

図３　明治23年「出雲郡出西村大字神氷全図」（原尺）



この付近からは、図３に掲げる明治23年（1890）の地籍図「出雲郡出西村大字神氷全図」を手がかりとすることができる[12]。この図はカラーで、道路は赤色、水路は青色で描かれている。ここに掲げる白黒コピーでは明瞭ではないが、筑紫街道は、図の右端（東）から字長原を通り、字駄道を通り、字長ケ坪の上方（北）へ出ているはずである。

道は、長ヶ坪のところで天保２年（1831）から翌年にかけて開削された新川の右岸（南）堤防によって切断されている。道は新川の左岸（北）堤防の先でふたたび姿を現わしていたはずであるが、近代に入って行われた耕地整理事業によって痕跡を消している。昭和12年（1937）国史跡に指定された出西伊波野一里塚を含め近世の山陰道は昭和戦後期まで残っていた[13]。その後の区画整理事業のためこれも姿を消している。この近世の街道の一部は富村と求院との境界の塞の神付近にいまもわずかに姿を残しており、地籍図を調べると、その部分の求院に字馬越と呼ばれるところがある[14]。筑紫街道もこの部分を通り、字馬越はこのところで筑紫街道が出雲河（斐伊川）を渡っていたからの地名ではないかと、筆者は推定している。

以上、伝承されている筑紫街道を、それは全ルートがかならずしも明確な遺構を残しているわけではなかったが、消滅しているところは想定で補って、東から西へたどってきたが、ここでいくつかのことを押さえておきたい。一は、図１にみるように、この道が直線的性格をもっていることであり、

二は、遺構を残しているところのかぎりでは幅員が大体4～5mほどであることであり、三は、この道が中世後期から近世初期に行われたと考えられる「村切り」の境界となっていることである。

四、地籍図にみえる遺称地名

島根県では明治8年（1875）から翌9年にかけて地租改正事業が行われ、その結果土地台帳と付図が作成された[15]。そして、明治19年（1886）から22年にかけて地租修正事業が行われた。この修正事業に伴って明治23年までにふたたび土地台帳と付図が作成された。これら両度にわたって作成された付図を一般に地籍図と呼んでいる。

出雲郡では地租改正に際して明治8年に近世の32村が24村に統合整理された。本稿で関係する部分について述べると、羽根・武部・吉成の三村が三絡村に、神守・氷室の二村が神氷村に、千家・神立の二村が併川村となっている。

村によっては、この明治8年、字（小字）の統合整理を行っている。神氷村は、それまで氷室・神守合わせて68あった字を8にまで減じている。「皇国地誌」[16] 出雲郡村誌の神氷村の項をみると、次の通りである。よみがなも同村誌が付してある通りとする。木ノ下・島田・三貫田・加名手・長坪・折坂・向田・松崎。明治22年（1889）4月、町村制により神氷村は他の諸村と合併して出西村となり、その大字神氷となる。大字神氷には翌23年に作成された地租修正事業に伴う地籍図が残っている[17]。その一部分を図3に示しているが、古代条里制の名残りの見える図である。ところで、この地籍図には、一度統合整理された68の字名が復活している。統合が過ぎるとマイナス効果も生じたらしく、他村の場合にも同じような例がある。上掲の字名8も今度は字名68となって全部出ている。表記・よみがなにも違いがある場合がある。「皇国地誌」の村誌は地縁の薄い戸長役場職員によって編纂されたものであり、「大字神氷全図」は地もとの人びとによって作成されたものであり、この方が信頼できる。ふりがなは記されていないが、筆者の調べたところで前記と違うところは次の通りである。木ノ下・島田・三メ田・加名出・長ヶ坪・折坂・向田・松崎。とくに三メ田と長ケ坪に留意されたい。

さきの図1には三メ田と長ヶ坪の位置を示しておいた。

また、図1には、前掲「漆治郷下直江村絵図」にみえる郷分、「宍道町歴史史料集（地名編）」にみえる万所も掲げておいた[18]。

五、総合的考察

「風土記」記事の駅路と筑紫街道と地籍図の遺称地名を総合的に検討してみる。

考察は「風土記」記事の駅路と筑紫街道は同一のものではないかという仮定から論を進める。

「風土記」出雲郡の記事は、表3にみたように、意宇郡の境である佐雑崎から13里64歩（7064m）のところに出雲郡家があるとしている。図1に記載した筑紫街道を西へ測っていくと、神氷神守の字長ケ坪に達する[19]。さらに西へほぼ直進するように求院と富村との境の求院馬越地点まで進み、この間をみると、表3の2里60歩（1177m）を読むことができる。そこに出雲河（斐伊川）本流が当時は

あったはずである。

実は、出雲郡家・出雲河の位置は、西の神門郡からも測って来る必要がある。しかし、出雲河以西については筆者は「風土記」記事がまだ納得できないでいる。神門郡家は同郡古志郷にあったはずであるが、出雲河の渡50歩（89m）とそこから神門郡家までの距離として「風土記」の記事７里25歩（3486m）を足しても古志郷へは達しない。「風土記」の道度の項の国庁から出雲石見国境までの距離は計算すると97里254歩となる筈であるが 、「風土記」は「惣（す）べて国を去る程（みちのり）」として106里244歩とし、この間に８里290歩（4793m）の差がある。もしこの距離をさきの７里25歩に加えると出雲河から古志郷までの距離として妥当である。しかし、いまは出雲河以西のことについて言及することは控えておく。

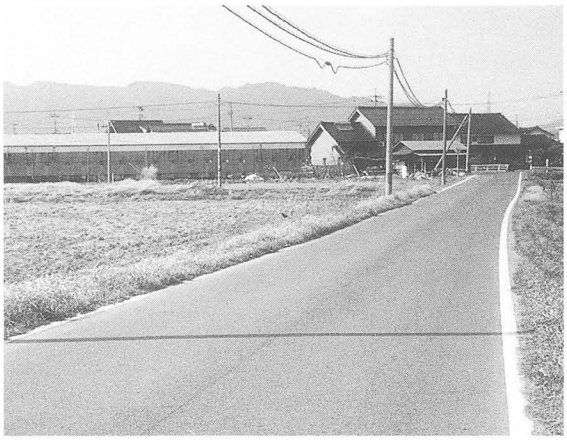


写真９　南から神氷の字長ケ坪を望む。舗装道路は、県道木次直江停車場線。

（撮影　写真１と同じ）

さて、今度は出雲郡家（長ケ坪）から東へ戻る方向で表３を見ていく。出雲郷庁は郡家と同じ出雲郷内にあるはずである。とすると、筑紫街道を東へ少し進んだ長原あたりかと考えられる。その先は街道は山の尾根に入ってしまう。

漆治郷庁は郡家から東へ５里270歩（3157m）であるが、この距離をそのまま街道上で進んでいくと、健部郷の三絡吉成地内へ入ってしまう。そこで、さきにみた五輪塔の付近から北へ漆治郷健部郷境の道を左（北）へ折れて、５里270歩のところまで進むと、そこに郷分（ごうぶ）という地名のところがある。健部郷庁は郡家から東へ12里224歩（6817m）である。街道上をこの距離進むと伊志見川の谷底に下りてしまう。そこで、約200m引き返した地点で街道を左（北）へ折れ、その距離だけ進むと、そこに万所（まんどころ）という地名のところがある。郷分・万所は、図１の地形図に記入しておいた。

ここで、地籍図記載の地名の検討に入る。

長ヶ坪（ちょうがつぼ）は、「庁ケ坪」で官衛のあったところを意味すると考えられる。坪は周知の如く方一町である。郡家が占める面積として適当である。出雲郡家は「風土記」が成立した当時はここに存在したのであろう。長原（ながばら）は「庁原」で、この庁は出雲郷庁ではなかろうか。この長原の南隣に広大な三メ田（みしめでん）があるが、これは「御注連田（みしめでん）」で、郡衙の郡司たちが神祇官の管掌する出雲郡五八社を祀る神饌（しんせん）が栽培される神聖な注連（しめ）を張った田ということではなかろうか。

直江の郷分は、漆治郷庁のあったところ、伊志見の万所（政所）は、健部郷庁のあったところではなかろうか。

いずれの郷庁もそれぞれの郷の東端に位置しているのも興味がある。

以上、「風土記」記事と筑紫街道と地籍図地名が密接不可分へ関係にあるらしいことを見てきた。また、そのことによって、三つのものがいまに伝える意味に改めて真実味があることを見てきた。絶対確実なものから論証していく演繹的な方法でなく、いくつかのことから帰納していく方法をとったが、本稿の場合はこの方法がもっともよい方法であったとも思う。

おわりに

関連して述べたいことがいろいろあるが、本稿ではここまでにしたい。

読者各位のご批判をいただきたいが、このような主題については、とくに在地の皆さんのご批判が貴重である。本稿は、筆者の単なるデスクワークではなく、かなりのフィールドワークによっているが、考古学的立場からの実証を欠いては、所詮「論」に止まる。考古学の立場の皆さんが興味を示して下されば幸いである。

本稿は、平成13年（2001）3月10日斐川町中央公民館で行われた「古代出雲の道」トークで発表したことを整理したものであることを付記する[20]。

注

（1）建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会「松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群」（一般国道9号松江道路西地区建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3・1997年）

（2）山陰歴史研究会「山陰史談26」1993年所収

（3）飯梨公民館『飯梨郷土誌』1994年所収

（4）宍道町教育委員会『宍道町歴史叢書2』1998年所収

（5）この絵図の存在が初めて公開されたのは、フォト直江刊行委員会『フォト直江100年－明治・大正・昭和・平成の写真集－』（平成8年）のカラー表紙として刊行されたときである。絵図の所蔵者は斐川町大字直江町の原弘氏で、私は刊行委員会を通じて絵図全図のカラーコピーをいただくことができた。

（6）「出雲国風土記」の駅路の距離をめぐる論文としては、朝山皓「出雲国風土記に於ける郡家中心里程考」（「歴史地理」第66巻第4号・1935年）、水野祐「出雲古道里程考」（「史蹟」第65、66、67号、昭和37年）が代表的なものであろう。本論でテキストに使用する加藤義成『出雲国風土記参究』もこの問題を詳しく論じている。

（7）「風土記」には「伝路（でんろ）」という名称は出ていないが、今日の研究では古代道路は駅路・伝路・通路の三段階に分けて考えられている。筆者も便利な考え方と考えるので、この区分に従う。伝路は伝馬の通る路という意味からつけられている。前掲『古代の道路事情』参照。

（8）「令集解」田令第九の注釈は、大宝令（781）雑令で「地を度（はか）るには5尺をもって1歩にせよ」と、大尺を用いるよう命じているのを和銅6年（713）2月の格（きやく）で「6尺をもって1歩にせよ」と小尺を用いるように改めたが、養老2年（718）の養老令でふたたび大尺に復するよう命じた、と記している。「出雲国風土記」の編纂は和銅6年5月の命を受けて始められ天平5年（733）に終えられた。「風土記」の道路距離は里歩で記されているので大尺小尺の問題はないが、橋は丈尺で記されており、これが大尺か小尺かは問題である。橋は構造物建造物であり、通して小尺であったという見解が有力で、前掲加藤氏著書もこれをとっている。

（9）野城橋の幅員の広さについては疑問をもつ見方もあるが、筆者は、野城橋の幅員は風土記記載の通りで当然という立場である。

(10) 後藤蔵四郎『出雲国風土記考証』(大岡山書店・大正15年) 246ページ。「庄原村」は正しくは荘原村で、明治22年から昭和30年まで存在した斐川町の旧6か村の一つである。

(11) 以下に記す筑紫街道のルートの一部については1997年に斐川町大字上庄原在住の富岡義雄氏の教示案内を受けた。記して感謝する。

(12)「出雲郡」の変遷について説明しておく。古代の「出雲郡」は、この稿の初めに記したように、大体当時の西流していた出雲河(斐伊川)の右岸を区画とし、「いずもごおり」と呼ばれていた。中世のある時期にこの郡は二分され、西部は神門郡の一部となり、東部は「出東郡」となって「しゅっとうごおり」と呼ばれるようになった。近世に入り、「雲陽大数録」によると、万治元年(1658)に改めて「出雲郡」32か村が編成されたが、呼び方は「しゅっとうごおり」であった。現在の斐川町域にあたる。近代に入り、明治29年(1896)楯縫(たてぬい)・出雲(しゅっとう)・神門(かんど)の三郡が合併して簸川(ひかわ)郡となって、郡名としての出雲は消えた。

(13) 松江地方法務局出雲支局に蔵されている。

(14) この近世山陰道は、昭和30年発行の国土地理院五万分の一地形図(明治32年測図、昭和9年第2回修正測図之縮図及修正測図同28年応急修正)には記入されている。

(15) 地租改正事業は全国的には明治6年(1873)から行われたが、島根県(このときは出雲一国を管轄)では6年7年と連年水害が続き、8年からの実施に延期された。

(16)「皇国地誌」は太政官の命によって全国的に編纂が行われたもので、明治9年1月1日現在の全国町村の土地・人口・産業等を記録している。国へ提出されたものは東京大学で保管されていたが、大正12年(1923)の関東大震災で焼失した。島根県は控用の一部を県立図書館に蔵している。

(17) 松江地方法務局出雲支局に蔵されている。

(18) 黒田祐一編著「宍道町歴史史料集(地名編)」(宍道町教育委員会・1995年) 60ページ。

(19) 計測は、2万5000分の1地形図に、筆者の想定する筑紫街道ルートを記し、それをキルビメーターでたどるという方法によった。

(20) この会では、木本雅康氏(長崎外国語短期大学助教授)、私、勝部昭氏(島根県教育委員会文化財課長)の3人が、この順で発表を行った。この記録も斐川町教育委員会から別に発行されることになっている。

(2001年3月)

出雲国宍道・狭結両駅間の古代駅路

木　本　雅　康

本稿は、歴史地理学の立場から、出雲国宍道・狭結両駅間の古代駅路について、復原的に考案するものである。

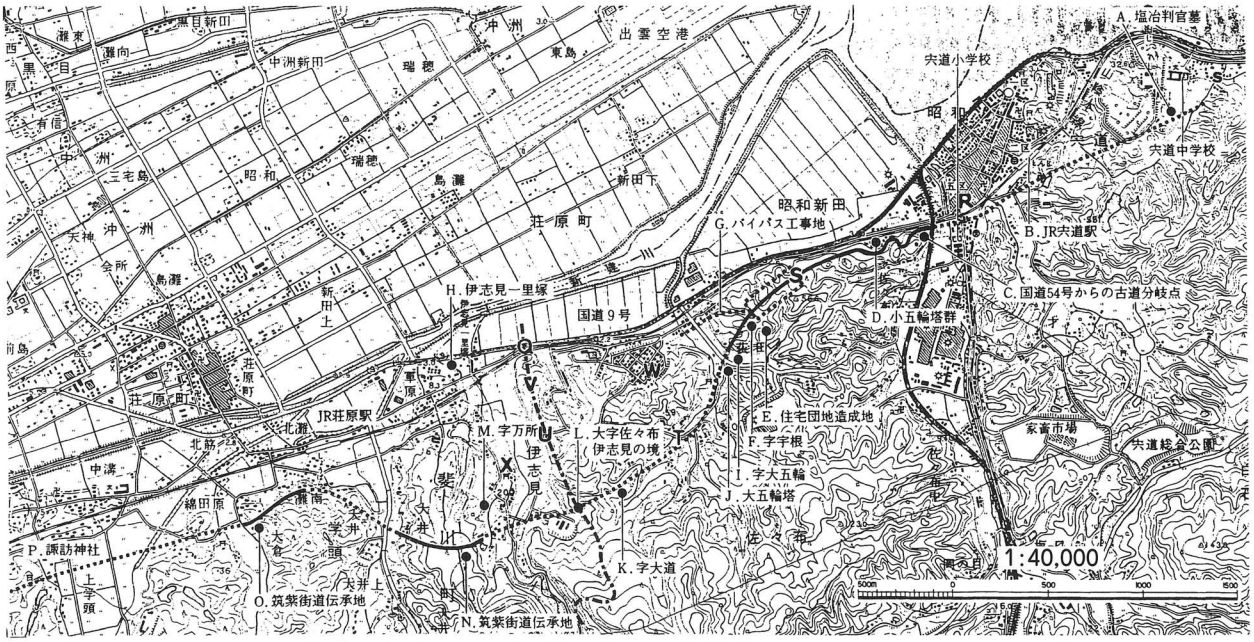


図１　宍道駅想定地付近（『宍道町歴史叢書２』２～３頁に加筆）

宍道駅の位置について、中林保[1]は、『風土記』に見える宍道郷を、現在の宍道町宍道に比定し、『風土記』によると、宍道駅は、これより西一里の地に置かれたことになるから、宍道町佐々布付近とした。服部亘[2]は、さらに駅の比定地を絞りこんで、佐々布の小字「蔵敷」（図１Ｄ）の地であるとした。その根拠は、①当駅の位置が、『風土記』によれば、意宇・出雲郡境の佐雑埼から東に４里30歩の地点になることから、佐雑埼をＱ点に比定した上で、近世山陰道が古代駅路のルートを踏襲していると見なして、佐雑埼から距離をはかると、大よそこの地点に来ることと、②Ｄの地点がこの付近で唯一駅舎を置けるような平地であることである。また服部は、ここから１里東にある「宍道郷家」について、さらに距離をはかることによって、Ｒ点付近に比定し、当時の宍道湖の水位においても、ここは陸地であったことを考証した。

以上のような服部の想定は、佐雑埼からの距離を近世山陰道によっている点についてやや問題があるが、確かに付近に駅舎を置けるような地勢の場所が無いことや、宍道郷との位置関係からしても、極めて有力であると言えるだろう。その後、池橋[3]は、後述するように、佐雑埼を服部とは別の地点（Ｌ）に比定して、そこから池橋自身の復原による想定駅路を、東に４里30歩はかると、やはり蔵敷付近が宍道駅の想定地になるとしている。なお、蔵敷の地名は、服部[4]によれば、藩政時代に郷

倉が置かれたことによるらしく、直接古代の駅家と関係するものではないようである。

次に、狭結駅を、後述するように、出雲市古志町に比定して、その間の経路について検討する。

池橋達雄[5]は、蔵敷付近の近世山陰道は、古代駅路を踏襲していると見る。すなわち、C点より台地上に上がり、丘陵の北裾に沿って西進するのが近世山陰道のルートである。特に、蔵敷付近では、現在道の北側に沿って、帯状の畑が続いており、南側の丘陵のカット面からの下幅は、約12メートルに達する。これだけの幅は、近世の街道には広すぎると考えられ、したがって、近世山陰道が古代駅路を踏襲した可能性が高い。

そして、池橋は、近世山陰道と古代駅路が重なるのは、塞の神が祀られていたF点までとし、ここから尾根道を通って、小字「大五輪」（I）に降りたとする。この間のS—F間は、住宅団地の造成によって消滅してしまったが、事前に宍道町教育委員会が発掘調査を行なっている[6]。それによると、S—F間に、10ヶ所のトレンチを入れた所、幅4～5メートル程度の平坦面からなる道路遺構が検出されている。側溝はほとんど確認されていないが、一部褐色粘質土と黒色土の互層からなる版築状遺構も検出されている。また、F点付近のトレンチからは、寛永通宝と磁器片が出土しており、塞の神関係の遺物と考えられている。F—I間にも5ヶ所のトレンチが設定され、道路遺構と考えられる平坦面が検出されたが、幅はF点以東より、さらに狭くなっている。これらの道路の造成時期は不明である。

以上の成果を検討すると、道幅がやや狭い点は気になるものの、意図的に平坦面を作り出したり、版築を行ったりしていることから、これらが駅路の遺構である可能性はあると言えよう。ただし、F点以西の部分は、あまりにも幅が狭いので、なお検討する必要がある。

さて、池橋[7]によれば、小字「大五輪」にあった五輪塔は、位置をJ点に移されている。この小字「大五輪」のすぐ西に小字「深田」があり、池橋は、『太平記』巻21に見える、塩冶高貞が自害した後、家来の木村源三がその首級を埋めた佐々布付近の深田を、この地に比定し、五輪塔は、やはりこの地で自害した木村源三を供養するために建てられたのではないかと推測している。

さて、斐川町内には、菅原道真が通ったという伝承のある「筑紫街道」と称する古道が存在し、池橋は、この道が全面的に古代駅路を踏襲したものと見る。まず、斐川町内で、最も東の筑紫街道の伝承地は、宍道町との境界付近のN点で、南北に通る尾根を、東西に切り通している。ここには、近世の道標があり、少なくとも近世には、ここに東西道が存在し、また加茂町方面への分岐点でもあったことがうかがえる。次に、東から数えて2番目の筑紫街道の伝承地は、O点である。池橋は、I点からの駅路ルートについて、小字「大道（だいだ）」（K）付近を経てN点に達し、今度は方位を北寄りに変えてO点に到達するとしている。すなわち、筑紫街道は、宍道町伊志見の谷部を、かなり南寄りに迂回して通っていることになる。その理由について池橋は、古代において宍道湖が大きく南に湾入していたためとする。当時の正確な汀線の復原はされていないが、やや南方に迂回しすぎるような感じもする。たとえば、T点から西に丘陵を切り通して進む現在道（T—U）も、O点を最短距離で指向するという点では注目されよう。

また、現在は、宍道町と斐川町の境界が郡界となっているが、『風土記』の当時は、宍道町伊志見は、出雲郡健部郷に比定されており[8]、『風土記』に意宇・出雲の郡界と記す佐雑埼は、伊志見の小

字「大境」（V）という地名がある丘陵をさすという解釈が一般的である[9]。『風土記』は、駅路と同じ道であったと考えられる通道（伝路）が佐雑埼を通ったと記している。したがって、T—L道を駅路とするとL点が、T—U道を駅路とするとU点が、それぞれ通道の郡界となる。この場合、佐雑埼がどこまでを指すかが問題となるが、L点を通道の郡界とすると、やや「埼」という表現にふさわしいかどうか気になる所である。もっとも、『風土記』出雲郡の通道の項では、意宇郡との境を「佐雑村」と表現しており、そちらの方では問題が無かろう。なお、筑紫道という名称は、宍道町内では、上来待の菅原神社付近にもあるが[10]、同地は山間部で、宍道湖沿いを走る駅路とは、かけ離れた所にある。したがって、筑紫（街）道が、必ずしも駅路と結びつくとは限らないことは注意を要する。

たとえば、嘉暦4年（1329）および至徳3年（1368）の年紀を有する「法隆寺領播磨国鵤荘絵図」には、それぞれ「筑紫大道」と記す東西道が記されているが、古代の駅路は、ほぼこれと並行して、より山側を通っており、発掘調査の結果からも、筑紫大道は、13世紀後半に敷設されたことが証明された[11]。N点の筑紫街道は、山間部を通って、上来待の筑紫道につながることも考えられる。

現段階では、池橋の示したI—L—O道を、駅路の第一候補とするが、T—U道なども含めて、今後も検討の必要があろう。なお、W点の荻田遺跡[12]は、古墳時代中期から平安時代初めにかけての集落跡で、6棟の竪穴住居が検出されており、その中には、鍛冶を行なっていた形跡も見られる。また、建物配置は不明であるが、多数の柱穴が見つかったことから、掘立柱建物も数棟存在していたと推測される。また、X点の伊甚神社は、『風土記』出雲郡条の伊自見社に比定されている[13]。さらに、池橋[14]は、M点の小字「万所」について、「健部郷庁」の遺称である可能性を指摘している。

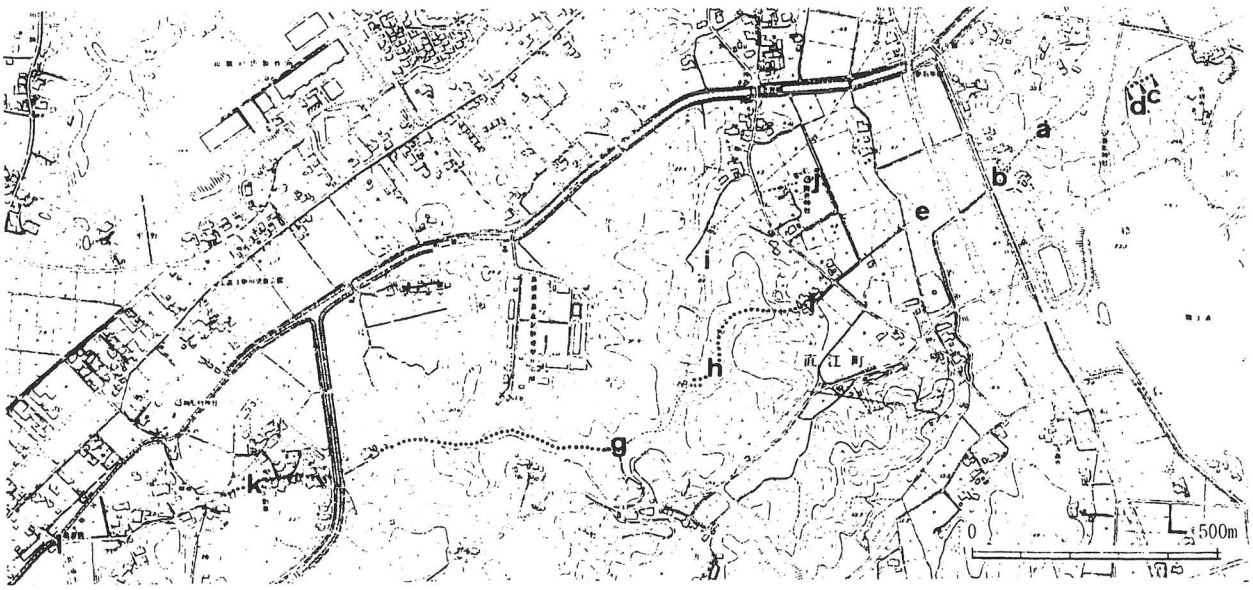


図2　斐川町の筑紫街道（1／1万「斐川町基本図2」より）

さて、O点の筑紫街道伝承地は、南から伸びる丘陵を超える部分で、西側には若干の切通が存在する。次に伝承が残るのは、池橋によれば、図2 a－bの三絡（みつかね）丘陵を横切る切通で、筆者の計測によれば、幅約7メートルの大規模なものである。切通の中間南斜面には、塞の神が祀られている。また、この切通のやや東のc区間にも、やはり池橋が指摘する幅約9メートルの切通が存在する。こちらの場合は、南から北へ伸びる小丘陵の先端付近を切っており、少し北へ道を通せば、わざわざ切通を作

らなくてすむところを、あえて直線性にこだわっていると見受けられ、古代駅路の性格にふさわしい。なお、この切通の西側のｄ区間には、テラス状の平坦地があり、これも道路の痕跡である可能性が高い。

図３　漆沼郷下直江村絵図（部分、上が北）（原弘所蔵、斐川町教育委員会写真提供）

次に、ａ－ｂの切通を西南へ延長すると、ｅ点で三絡から直江町の領域に入るが、ここは近世の下直江村に当たる。文政６年（1823）の「漆沼郷下直江村絵図」（原弘所蔵・図３）が残っており、その中に「筑紫海道」が描かれている。この絵図の中で、筑紫街（海）道がきわめて直線的に記されているのが注目されるが、絵図のｅ－ｆ部分が、図２のｅ－ｆに当たり、この間は、実際に直線的である。次に、絵図の「塞神」が、図２のｇ点に当たり、ここには現在でも塞の神が祀られている。先の図２のｅ－ｆ道を、そのまま西へ延ばせば、この塞の神が祀られている場所（ｇ）へ達するが、この間の筑紫街道は、尾根に沿って、尾根のやや下を蛇行しながら進む。しかし、この絵図を描いた人には、ｆ－ｇ間も、ほぼ直線として認識されていたと思われ、デフォルメがはたらいている。

この尾根に沿った筑紫街道は、幅約９メートル程度の平坦地として続いており、その内図２ｈの地点で、平成12年（2000）に斐川町教育委員会が発掘調査を行なった[15]。その結果、北側溝と考えられる溝と、その南側に路面と考えられる幅４メートルの平坦面が検出され、一部に版築状遺構も確認された。また、ここから北に丘陵を下った三井Ⅱ遺跡[16]（ｉ）では、８世紀の掘立柱建物跡や、墨書土器も多数確認されている。墨書土器の中には「三井」と記すものがあるが、ｊ点は御井神社で、『風土記』の「御井社」および『延喜式』の「御井神社」に比定されている[17]。

ｈ点より西は、道路建設のため、筑紫街道は分断されているが、ｇ点のやや東付近を、やはり平成12年（2000）に斐川町教育委員会が発掘調査を行ない、側溝の可能性がある溝や、ｈ点と同様の版築遺構を検出している[18]。古代の駅路で版築が確認されたのは、東京都国分寺市の恋ヶ窪谷低地[19]や、

愛知県豊川市の上ノ蔵遺跡[20]の例があるが、それらに比べて、築紫街道の版築は、非常にきめが細かいのが特徴である。また、国分寺市や豊川市の例が、低湿地に築かれた土堤状の道路であるのに対し、筑紫街道の場合は、むしろ尾根付近に当たり、尾根に小さな谷が入ってくる所を埋めて、安定させる意味があるようである。古代の例ではないが、近世、石見銀山へ向う銀山街道が、尾根道を安定させるための版築工法を行なっている[21]。

塞の神（g）付近で、筑紫街道は、やや方位を変え、尾根に沿って進むが、塞の神以西では、幅約12メートル程度の平坦面がしばらく続いている。そこでも、斐川町教育委員会が発掘調査を行ない、南側側溝と考えられる溝を検出している[22]。また、絵図に見るように、塞の神以西は、筑紫海（街）道が、近世において、下直江村と氷室村、下直江村と神守村、上直江村と神守村の、それぞれの村界となっていた。現在は、池橋[23]が指摘するように、一部が直江村と神氷の大字界となっている。

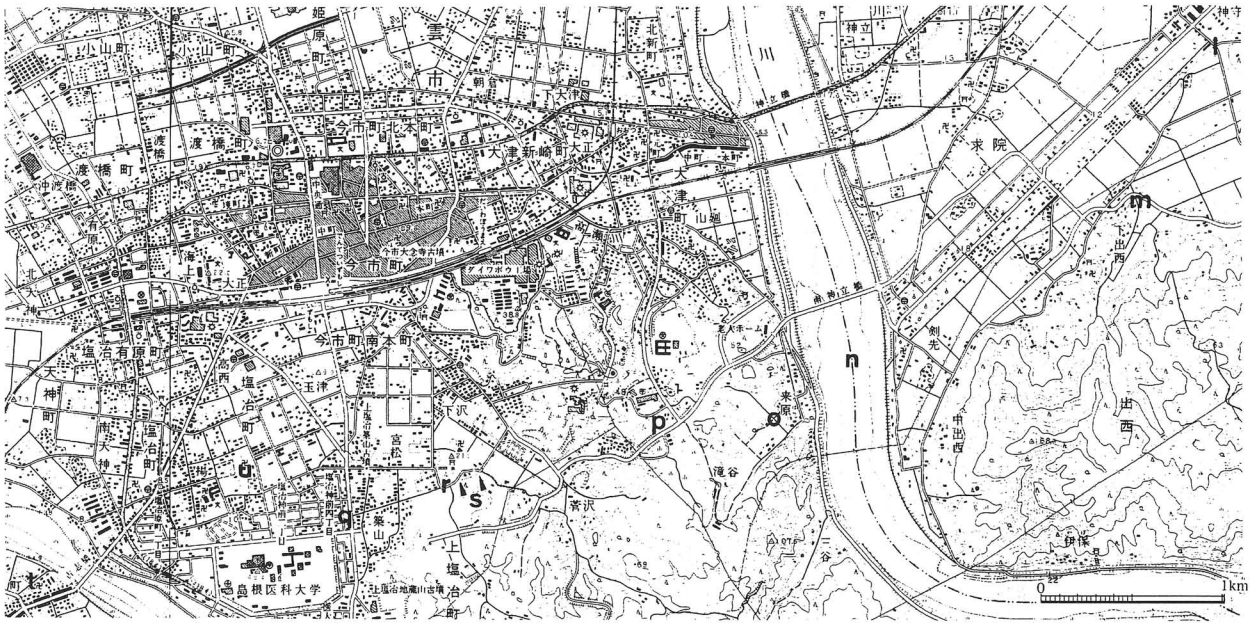


図４　斐伊川渡河点付近の想定駅路（１／2.5万地形図「出雲今市」「大社」より）

さて、筑紫街道は、いったん尾根を降りて、新建川を渡った後、再び尾根に上がり、池橋によれば、小字「駄道」（図２ｋ）を通って、１点に達する。池橋は、この部分の小字が「長ヶ坪」と称することから、ここに出雲郡家の政庁を想定している。ところで、出雲郡家については、後谷Ｖ遺跡[24]（図４ｍ）で、８～９世紀代の掘立柱建物や礎石建物が検出され、正倉に比定されているが、政庁については未確認である。出雲郡家は、『風土記』巻末の道度条から、意宇郡家より至る伝罵路に沿っていたことがわかり、里程から駅路も同じルートであったことになるので、すなわち駅路に沿っていたと見なされる。

さて、ここまで斐川平野を通る駅路の復原において、筑紫街道がそれを踏襲したとする池橋の見解にしたがって見てきたが、池田敏雄[25]は、筑紫街道は、平安時代ごろからの道で、駅路はより南側の丘陵の裾付近、すなわち現在の宍道湖南部広域農道付近を通っていたとする。その根拠は、このルートに沿って、東から神庭に「馬捨場」、結に「うば捨山」（馬捨の転訛か）、「せき馬場」、神氷に「馬背」「有馬谷」、出西に「駄捨場」といった馬に関する地名が並び、また『風土記』出雲郡条の神代社

に比定される神庭の神代神社や、同じく出雲郡条の曽伎乃夜社に比定される神氷の曽枳能夜神社のような古社が、大体このルート沿いにあることを指摘している。そして古代の駅路は、湿気が多い平坦地や沼地の近く、海辺（湖辺）沿いではなく、地盤がしっかりした所を通っていたとする。

確かに古代の駅路は、一般的には池田が述べるような地形の所を通る場合が多いが、それでは斐川平野の場合、8世紀ごろに筑紫街道のルートが通行困難だったかどうかについては、必ずしもそうではなかったような印象を受ける。厳密には、当時の宍道湖の汀線など古地形の復原を行なわなければならないが、たとえば筑紫街道より北に、佐支多社、御前社、御井社、加毛利社等の『風土記』に見える神社や、古墳時代中期の神庭岩船山古墳[26]や、年代不明の白塚古墳などが存在する。また、中澤[27]によれば、神氷や三絡にも、圃場整備以前まで条里地割が存在した。もちろん条里地割の形成は、時代が下がるケースもあるが、神氷の場合は、出雲郡家の想定地付近なので、古いものである可能性が高い。したがって、筑紫街道のルート付近は、古代においてある程度は、すでに安定化していたのではないだろうか。

確かに、先入観なしに、地形図を見ながら線を引くと、池田のルートの方が駅路として一般的な感じがするが、出雲国の場合、宍道湖岸のような通常では駅路が通らないような場所も、『風土記』の記述によれば、間違いなく駅路が通過しているので、斐川平野の場合も、通常よりやや北寄りに、駅路を想定してもよいのかもしれない。また、筑紫街道には、幅7～9メートルを超えるような切通や道形が存在することや、かなり直線的な経路をとること、あるいは、この道の近くに三井Ⅱ遺跡のような8世紀代の遺跡が存在することからも、筑紫街道が、古代駅路を踏襲している可能性はかなり高いと思われる。

ただし、池橋説の問題点は、筑紫街道の西端が、現在、斐川郡家の正倉に比定されている後谷Ⅴ遺跡（m）に対して、やや北に出てくることである。池橋は、先述したように「長ヶ坪」（l）を政庁に比定するが、駅路の斐伊川渡河点は、後述するように南神立橋のやや上流付近（n）と考えられる。『風土記』出雲郡条および巻末の道度条によれば、出雲郡家から斐伊川に比定される出雲（大）河までの距離は、2里60歩（約1.176キロメートル）である。ところが「長ヶ坪」から渡河点までの距離は、直線でも2.5キロ程度ある。それに対して後谷Ⅴ遺跡から渡河点までは、1.5キロ程度である。したがって、政庁の位置は、長ヶ坪付近ではなく、後谷Ⅴ遺跡周辺の方が適当なのではないだろうか。ちなみに、松江市竹矢町にも小字「丁ヶ坪」があり、石田茂作[28]は、ここに出雲国府の国庁を想定していたが、発掘調査の結果、国庁は別地で検出された。『風土記』によれば、意宇郡家も国庁に近接していたことになるので、ここの場合、丁ヶ坪が国庁や郡家の政庁であるとは言えない。また、鹿島町北講武にも「丁ヶ坪」の小字名があるが、ここも少なくとも郡家の地ではあり得ない。

後谷Ⅴ遺跡付近を、出雲郡家の政庁とすると、長ヶ坪付近へ出てきた筑紫街道は、南西方向へやや屈曲しなければならず、その理由についての説明が必要であろう。その点、池田のルートは、出雲郡家周辺では、きわめてスムーズであるとは言える。このように、若干の問題が残るが、筆者は、現時点では、筑紫街道が古代駅路を踏襲した可能性が高いとし、長ヶ坪で屈曲して、後谷Ⅴ遺跡付近にあったと推測される出雲郡家の政庁を通って、南神立橋付近で斐伊川を渡河したと考えておきたい。さて、『風土記』に「出雲（大）河」と記す斐伊川の渡河点は、巻末の道度条によれば「25歩」の幅があり、

渡船が一つ置かれていた。その位置は、西側から丘陵が張り出している現在の南神立橋の上流300メートル付近が適当ではないだろうか。この南の来原（くりはら）の水田地帯は、『日本書紀』崇神天皇60年７月条に見える「止屋（やむや）の淵」の伝承地[29]（ｏ）であり、古代は低湿地で、渡河点としては不適当であろう。また、『風土記』巻末条によると、神門郡家の正東７里に神門軍団が置かれており、加藤[30]は、出雲市大津町の長者原に比定している。『風土記』神門郡条および巻末条によれば、神門郡家から出雲（大）河（斐伊川）までの距離が７里25歩であるから、神門軍団は、斐伊川左岸から25歩（約44.5メートル）の至近距離に置かれたことになるので、斐伊川の西まで台地が張り出している南神立橋の上流付近が渡河点として適当であろう。

斐伊川以西については、まずｐ点に、８世紀後半ごろの創建とされる長者原廃寺[31]が位置し、その付近を駅路が通過していたと考えられる。そして、ｑ―ｒ間には、直線的な現在道が通っており注目される。これを東北東に延長すると、長者原廃寺や、筆者の斐伊川渡河点付近に達する。特に、ｓの地点では、南側の丘陵をカットして、幅約６メートルの平坦面を作り出している。このラインを、そのまま西南西に延長すると、神門郡家に比定される古志本郷遺跡[32]（ｔ）付近に、ほぼ達するのである。したがって、神戸川の渡河点は、古志橋の上流100メートルほどの所になるが、近世の古志橋は、ちょうどこの付近にあった[33]。「風土記」巻末の道度条によれば、神戸川に比定される「河」の渡は、25歩（44.5メートル）あり、渡船が一つ置かれていた。なお、ｕ点は、神門寺境内廃寺[34]で、『雲陽誌』[35]は、神門郡朝山郷新造院に比定している。

註

（１）中林保「出雲国」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅲ』大明堂、1978年。

（２）服部亘「『出雲国風土記』意宇郡宍道郷家・宍道駅家・宍道社の比定―山陰道の“復元”・宍道湖水位・考古学的遺跡を手がかりとして―」『風土記研究』14、1992年。

（３）池橋達雄「宍道町西部の古代山陰道をめぐって―「出雲風土記」記事と実地踏査から―」『宍道町歴史叢書　２』宍道町教育委員会、1998年。

（４）前掲註（２）。

（５）前掲註（３）。

（６）宍道町教育委員会「山陰道遺跡〔宍道・佐々布下―荻田〕発掘調査報告書」『宍道町歴史叢書　２』宍道町教育委員会、1998年。

（７）前掲註（３）。

（８）加藤義成『修訂出雲国風土記参究』松江今井書店、1992年、309頁。

（９）関和彦「『出雲国風土記』註論（その３）出雲郡条」『古代文化研究』６、1998年。

（10）きまち史話会編『きまち書留帳』きまち史話会、1997年、152頁。

（11）岡田章一「兵庫県における古代から中世の古道の調査」藤原良章・村井章介編『中世のみちと物流』山川出版社、1999年。

（12）村上勇「宍道・荻田住宅団地遺跡（Ⅰ）」『島根県埋蔵文化財調査報告書ＸⅡ』島根県教育委員会、1986年。同「宍道・荻田住宅団地遺跡（Ⅱ）」『島根県埋蔵文化財調査報告書ＸⅣ』島根県教

育委員会、1988年。

(13) 前掲註（8）、330頁。

(14) 前掲註（3）。

(15) 斐川町教育委員会松本堅吾の教示による。

(16) 前掲註（15）。

(17) 前掲註（8）329頁。

(18) 前掲註（15）。

(19) 上村昌男「東京都国分寺市恋ヶ窪谷低地の道路遺構」『古代交通研究』9、2000年。

(20) 林弘之「三河国府跡とその周辺の調査」『日本歴史』628、2000年。

(21) 邑智町教育委員会編『銀山街道「やなしお道」』邑智町教育委員会、2001年。

(22) 前掲註（15）。

(23) 前掲註（3）。

(24) 斐川町教育委員会編『後谷Ⅴ遺跡』斐川町教育委員会、1996年。

(25) 池田敏雄『斐川の地名散歩』斐川町役場、1987年、167～174頁。

(26) 近藤義郎編『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版社、1991年、51頁。

(27) 中澤四郎『隠岐・出雲・石見の条里』1991年、66～67頁。

(28) 石田茂作「出雲国分寺の発掘」『考古学雑誌』41―3、1956年。

(29) 『雲陽誌』巻10、神門郡石塚阿世利池の項。

(30) 前掲註（8）、472頁。

(31) 島根県教育委員会編『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会、1980年、144～146頁。

(32) 松尾充晶「古志本郷遺跡の官衙遺構―出雲国神門郡衙推定地の発掘調査から―」『条里制・古代都市研究』16、2000年。

(33) 島根県教育委員会編『歴史の道調査報告書　山陰道Ⅱ』島根県教育委員会、1996年、31頁。

(34) 出雲市教育委員会編『神門寺境内廃寺―第2次発掘調査概報―』出雲市教育委員会、1984年。

(35) 前掲註（29）、巻10、神門郡塩冶神門寺の項。

付記

本稿は、拙稿「出雲国西部の古代駅路」『出雲古代史研究』11、2001年の第3章を骨子としたものである。

古道と新道

池田敏雄

現在斐川町内で松江、出雲など、東西に通ずる大きな道路といえば、昭和40年に開通した国道９号線ですが、それまでは、どんな道が、いつの時代にどこを通っていたでしょうか、いままでにのこされている記録や地名、いい伝えなどによって、東西に通じていた道を、古代から順にさぐってみようと思います。

○「正西道」

出雲国風土記にしるされている道です。出雲国庁から石見の国に通じる奈良時代の末ごろまであったと思われる道です。

風土記によると、出雲の郡家（ぐうけとも読む・郡の役所）から郡境（ささふ村）まで、13里64歩（7.06キロ）、西の斐伊川まで、２里60歩（1.17キロ）とありますので、この道の長さは8.23キロメートルということになります。

郡家がどこにあったかについては、求院、求院と出西の中間、出西の随心、出西の稲城と諸説がありますが、この道が通っていたと思われる場所からすると、もっとも古い時代は稲城にあったと思われます。

古代は、徒歩が一般的ですが、富んだ人や役人は馬にのって通行しましたし、生産物などの物資の運ぱんを、多くは馬の背にのせて行なっていたので、地盤がしっかりしているところでないと通ることができませんでした。

ですから、湿気が多い平坦地、沼地の近く、海辺（湖辺）ぞいには道がなく、丘や山地の中に道が通じていました。

正西道がどこを通っていたかは明らかでありませんが、古代にもっとも使用していた馬に関係する地名、古くからまつられていた社、地形などから想定してみると、別図①のように通っていたように思われます。

馬に関連する地名を東からあげると、馬捨場（神庭谷）うば捨山（結）せき馬場（結）馬背（結・氷室境）有馬谷（氷室）駄捨場（出西）とあり、それがほぼ同じような間隔で位置しています。

古代における馬捨（うば捨・駄捨）というのは、乗馬者が馬からおりること、荷物をおろすことであり、せき馬場は剗馬場で、通路の警備所のある馬場（剗は奈良時代の用語）、馬背、有馬谷は字の通り、というように解すると一連の道を求めることができそうであります。

また、古くからまつられてあったと思われる社を、この一連の道との関連であげてみると、東から佐々布社　伊志見社（宍道）神代社（宇谷）諏訪社（神庭、元宮）波知社（羽根）波迦社（武部）実巽社（結）祇園社（結）曽枳能夜社（氷室）稲城社（出西）雲社（出西）の11社をあげることができます。

以上の二つを地形との関連で想定し、正西道を求めたものです。

○「筑紫街道」

筑紫というのは九州のことですから、京都から九州に通ずる道のことです。

これは、平安時代のころから通じていた道であるように思われます。天神さん（菅原道真＝平安時代）がお通りになった、とのいい伝えが残っている道です。

平坦地では道あとがわかりませんが、丘や山地の中では、その道の名と道あとがいい伝えられて残っているところがありますので、それを結んで筑紫街道を求めてみたのが、別図②です。

東から佐々布、伊志見、七日市、奥畑、守田畦、小丸子、後谷、綿田原、越田、西谷、羽根東、富士通予定地の北側、天神原、中平、駄畑、星田、随心、剣先、来原、のそれぞれの地を通っていたように思われます。

① 駄畑。九州の諸大名が参勤交代のときの休けい所があり、その時には、乗場や駄馬をこの地の原に放って休ませた、そのためこの地を駄畑という。また、結からここに通じる道を筑紫街道というが、昔大名が不動堂の前を乗馬して通ったら落馬したので、南の方へ道をかえた、かえたその道を駄道といまでもいっている（御大礼紀念調査書より）

② 随心。出西の中央にある地名。もとの字が随身であったとすれば、平安時代の郡家はこの地にあったと考えられる。

随身は、貴人が従者を従える、物品を携帯する、ということであり、この地には平安時代それに相当する郡司がいて、郡家で政治を行なっていたと思われる。

○「石州街道（旧山口街道）」

石州というのは石見地方のことをいいます。江戸時代のころ、松江方面から石見を通り、山口へ向かう道でもありましたから、山口街道ともいわれてきました。

斐川町と宍道町の境にあった伊志見の一里塚（国道９号線の脇にある）から軍原を西南へ登り、灘北（荘原駅の南）を通って北へ向かい、旧国道に出て荘原の町部を通り、西に曲って（新川がない時代）茅原に出ます。すぐにあった馬役の別所一里塚に至ったあとは、高瀬川の南岸を西へ進みます。直江町へ入っても高瀬川ぞいに西へ通じていますが、江戸中期以後は町部の繁栄によって、堀切道を北へ曲って町中へ出て西に向かうようになりました。そして岩野原の西から八頭へ通じ、出西・富村一里塚に至ります。やがて幸神松（いざり松）の下をぬけ、西に向かって斐伊川に至ります。（今の神立橋と鉄橋のほぼ中間）そして、すのこ橋を渡って大津の町へと続いていました。

慶応２年（1866年）松江藩が長州征伐に出陣したとき、この石州街道を武装した多くの武士たちが藩主を中にして笛や太鼓を高らかにならし、威風堂々と西に向かったが、征伐に失敗し、敗退してこの道を帰ってきたときは、実に無残な姿であった、といういい伝えが残っています。別図③が石州街道です。

○「新山口街道」・「国道」

明治22年に新道ができました。これを当初は新山口街道といっていましたが、大正９年に国道18号線に指定されてから、国道というようになりました。

これは国道９号線ができてからは、旧国道といわれるようになりました。その大部分は９号線となっ

ていますが、現状からいいますと、宍道町伊志見で9号線から南へわかれ、軍原―駅通り―荘原の町部―八雲橋―出東入口―茅原で9号線へ、そして、直江の町部へ入って、太才で9号線へ、神立橋東方500メートルの地点で南にわかれ旧神立橋、そして大津町の中を通っている旧道へと続いていました。別図④が新山口街道（旧国道）です。

○「国道9号線」（説明省略）

このように古代から現代までの間、東西に通じていた道路をみると、時代が進むにつれて、山地から平坦地へと移動していることがわかります。

縄文時代の山地の生活、弥生時代の稲作のはじまり、沖積平野の生成と人々の進出、町部の形成と経済交流、交通機関の発達、など、時代のうつりかわりを道路のうつりかわりが証明しているようで興味深く思われます。

それにしても、古代の正西道と思われるあたりに、現今、南部広域農道が通じるということは、今昔の感ひとしお、という気がします。

池田敏雄『斐川の地名散歩』昭和62年　より抜粋

斐川町内
古道と新道
①
②
③
④
⑤
剣先
駄捨場
岡心
星田
駄畑
不動田
有馬谷
馬背
せき馬場
馬捨場
天神原
0
1000m
① 正 西 道
② 筑 紫 街 道
③ 石 州 街 道
④ 新山口街道
⑤ 国道九号線

Reports on the Excavations at
Sugisawa Ⅲ Site, Horigiri Ⅰ Site,
Mii Ⅱ Site, with a development
of Hikawa Central Industrial Complex
(Hikawa Chūou Kougyō Danchi) in 1999 and 2000

A Report on Archaeological Research at Hikawa Town Vol.24

Contents

Opening color plates
Introduction
Acknowledgement
Explanatory Notes
Contents
Chapter 1 Details and Process to the Archaeorogical Investigations 1
Chapter 2 Location and Environment 2
Chapter 3 Excavation at Sugisawa Ⅲ Site 4
Section 1 Previous Researches 4
Section 2 Excavation in the 00-1 sector 4
Chapter 4 Excavation at Horigiri Ⅰ Site 6
Section 1 Previous Researches 6
Section 2 Excavation in the 00-1 sector 6
Section 3 Excavation in the 00-2 sector 8
Chapter 5 Excavation at Mii Ⅱ Site 13
Section 1 Previous Researches 13
Section 2 Excavation in the 99-1 sector 13
Section 3 Excavation in the 99-2 sector 22
Section 4 Excavation in the 99-3 sector 24
Section 5 Excavation in the 00-1 sector 25
Section 6 Excavation in the 00-2 sector 30
Section 7 Excavation in the 00-3 sector 33
Section 8 Excavation in the 00-4 sector 35

Chapter 6 Conclusion 55
Obsevation table of the artifacts
List of the cultural properties in Hikawa Town
Additional Articles
A Study of the Old Tsukushi- Kaido (Tsukusi-Road) — Related to the items of Ancient Road (Ekiro) mentioned in the Regional Gazetteer in Izumo Province, "Izumo no kuni Fudoki", and the unused geographical name in the land register map —
..... IKEHASHI Tatsuo… 97

Ancient Road(Ekiro) between Shinji Station and Sasou Station in Izumo Province
..... KIMOTO Masayasu… 111

Ancient Road and Modan Road
..... IKEDA Toshio… 119

Plates
Extracts of the report ..... End of a book

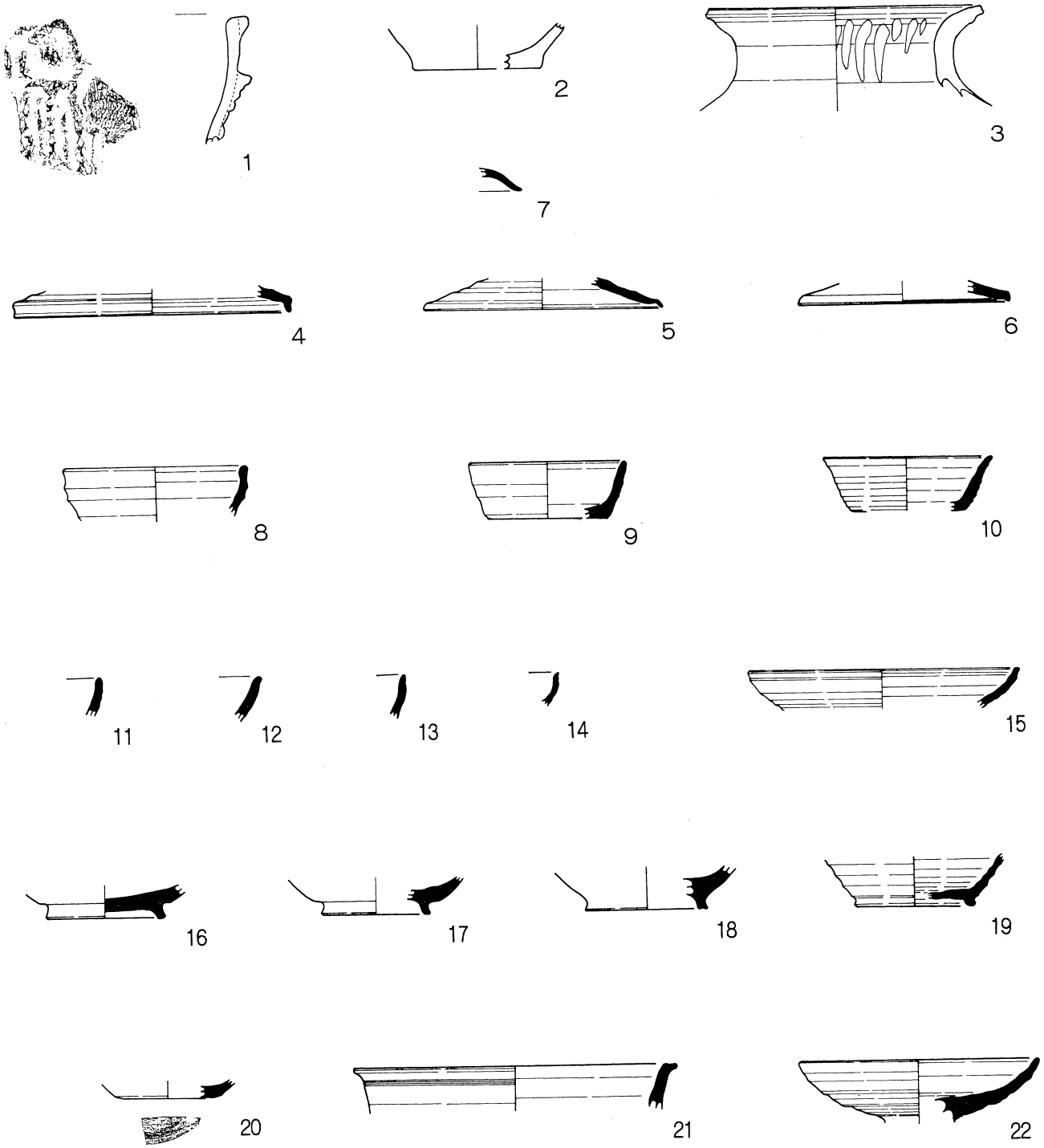
HIKAWA Municipal Board of Education,
Shimane Prefecture, Japan

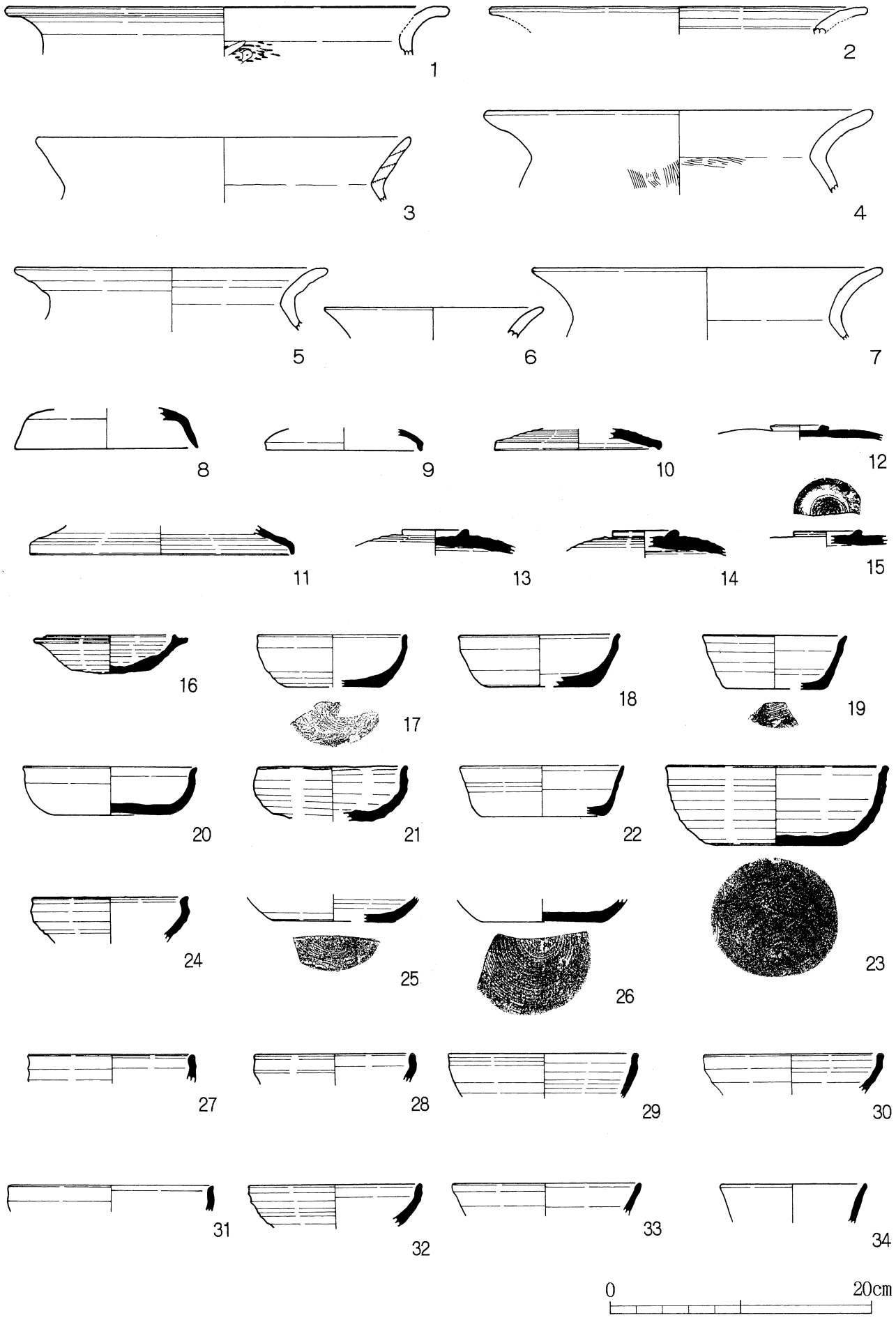
2001

Translation by Fumiko Tsuchie

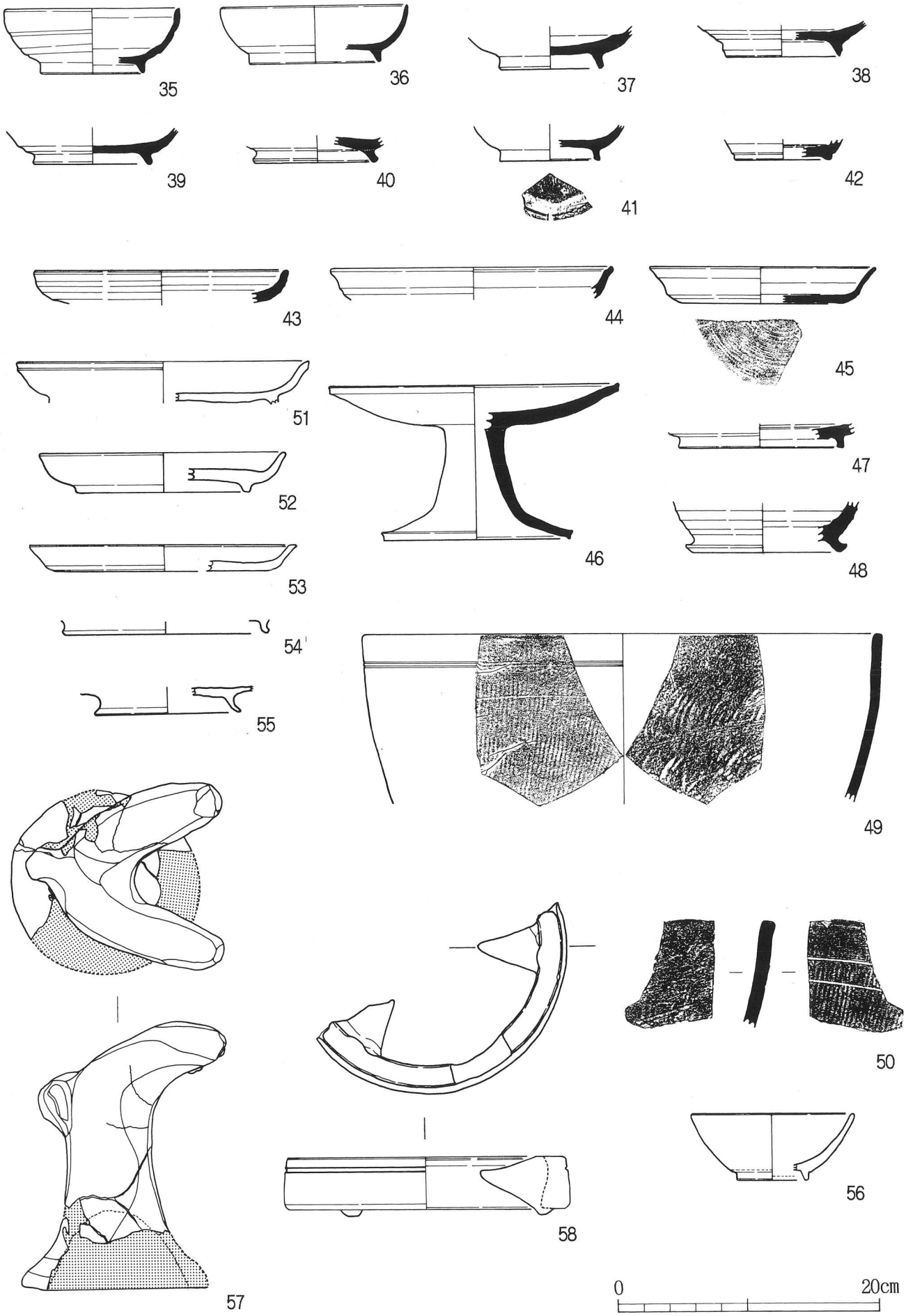
図　　版

PL.50　堀切Ⅰ遺跡00－1区出土の遺物

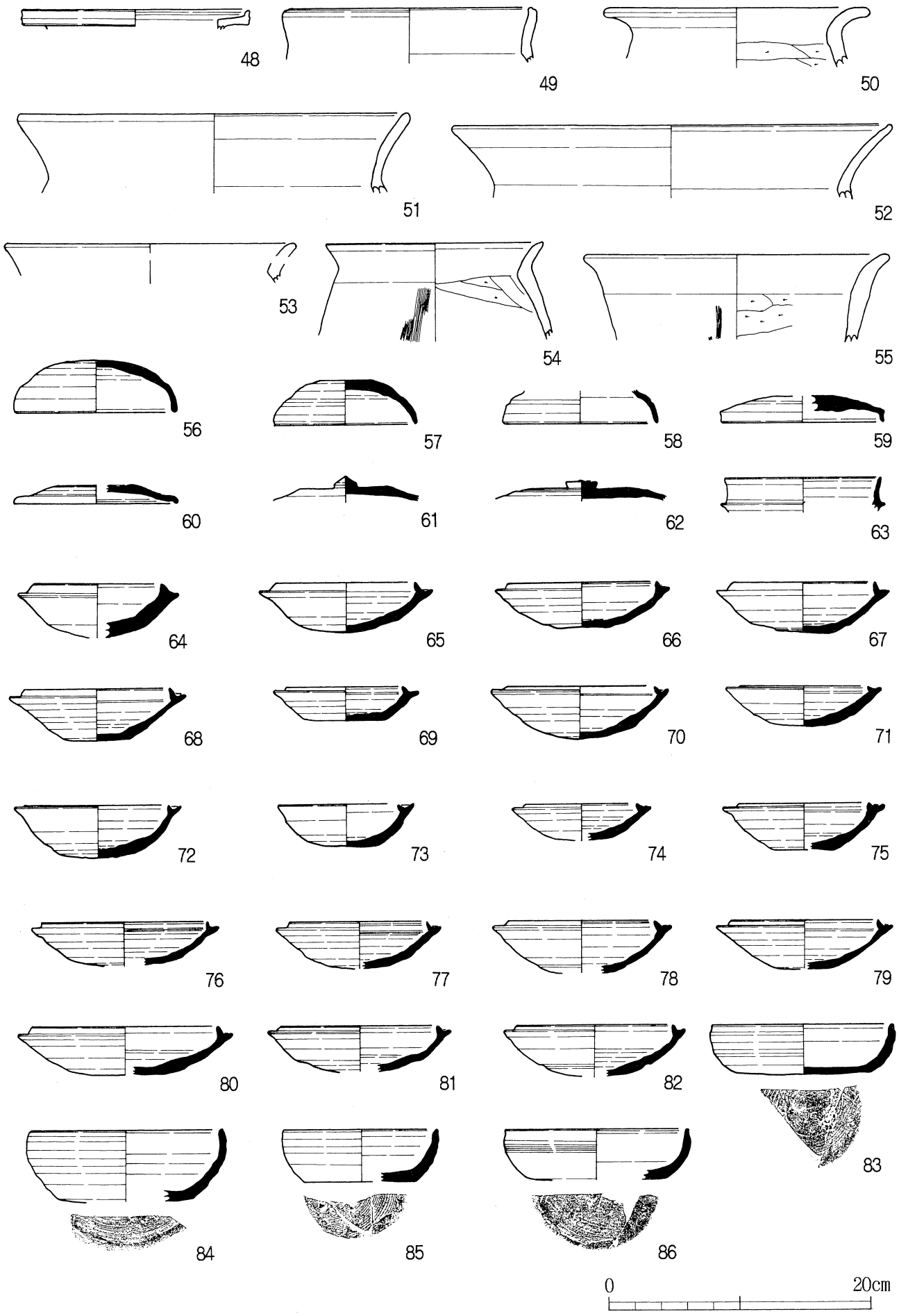


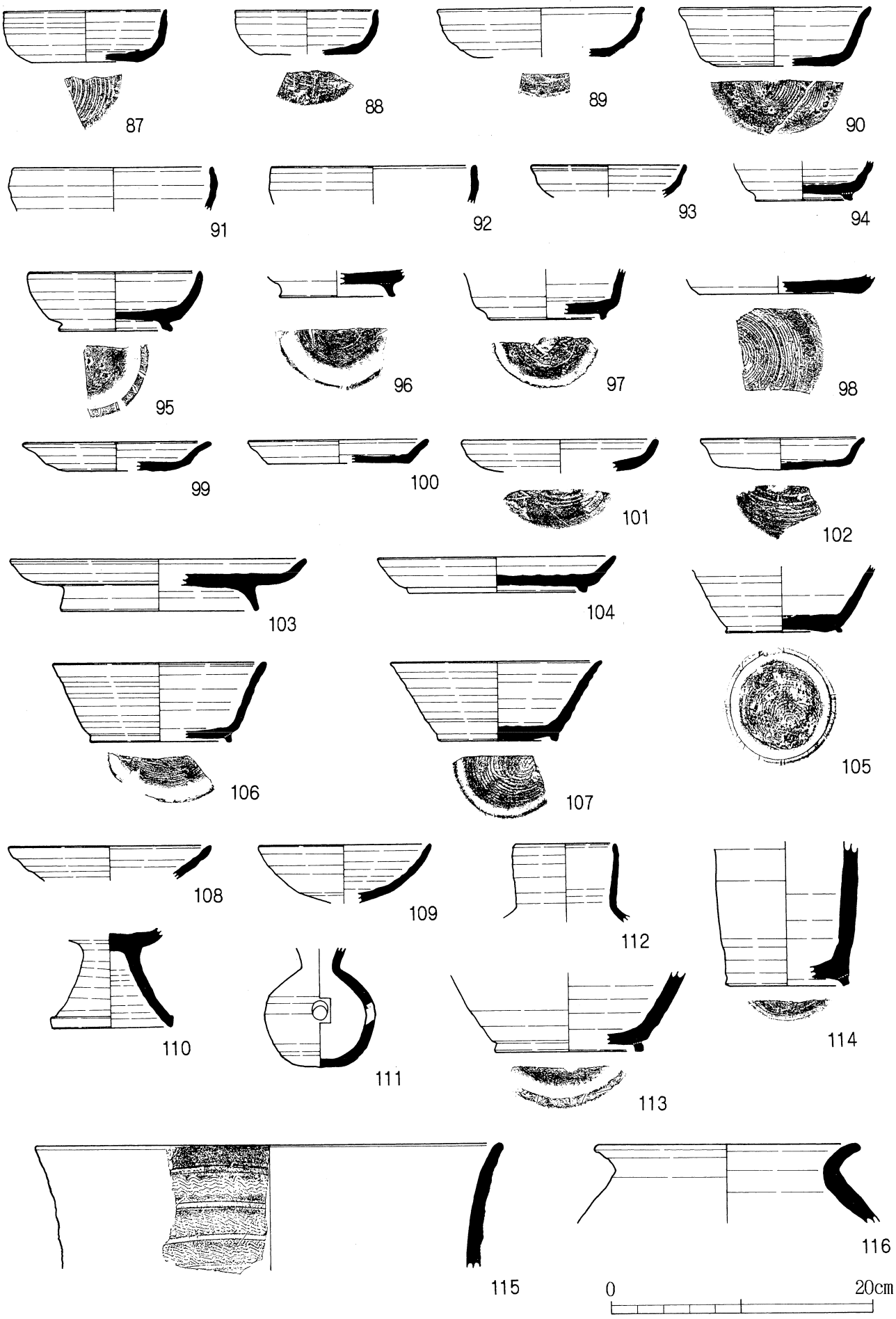

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
12
11
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
24
25
26
23
27
28
29
30
31
32
33
34
0
20cm

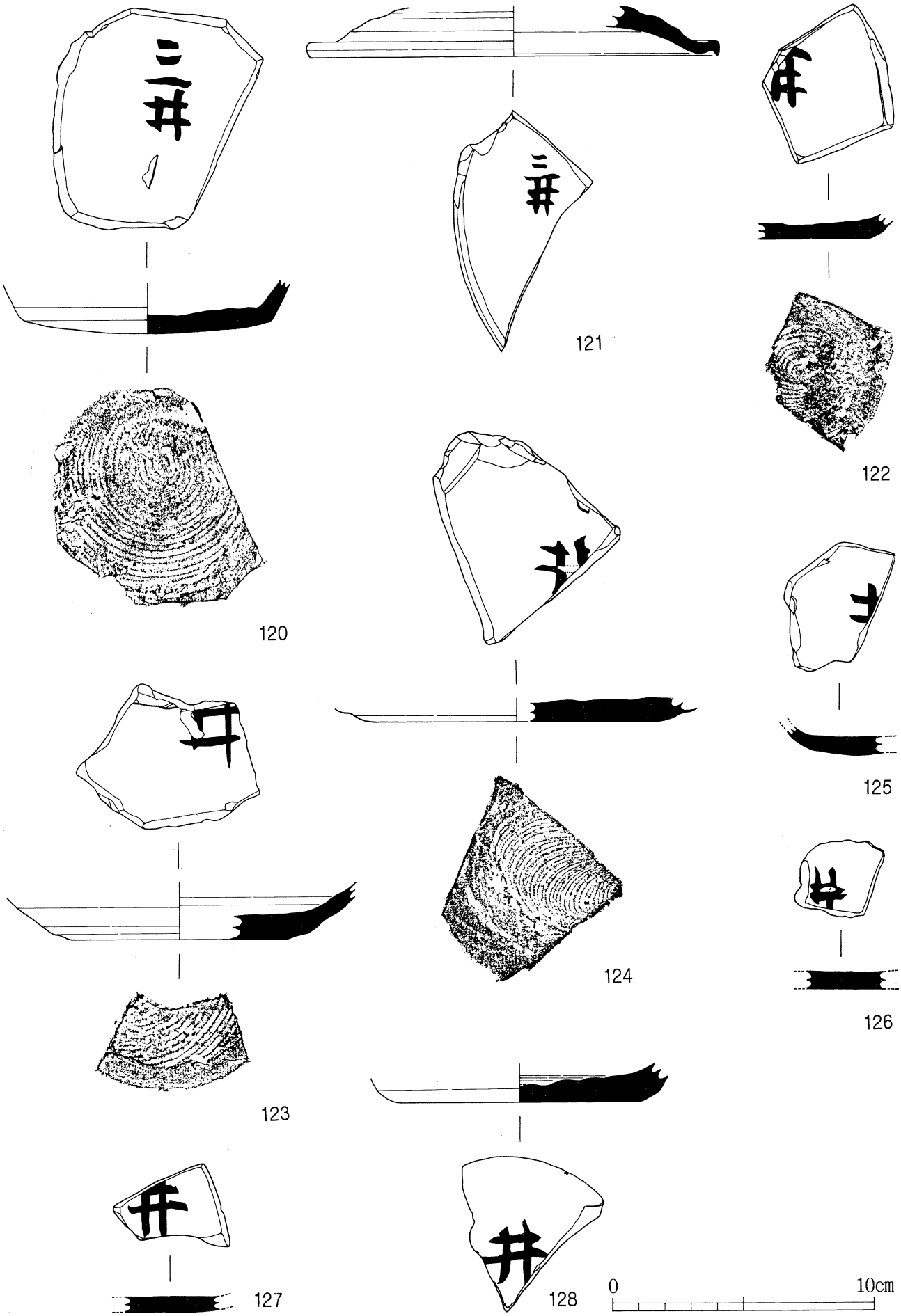
PL.52　堀切Ⅰ遺跡 00－2区出土の遺物②

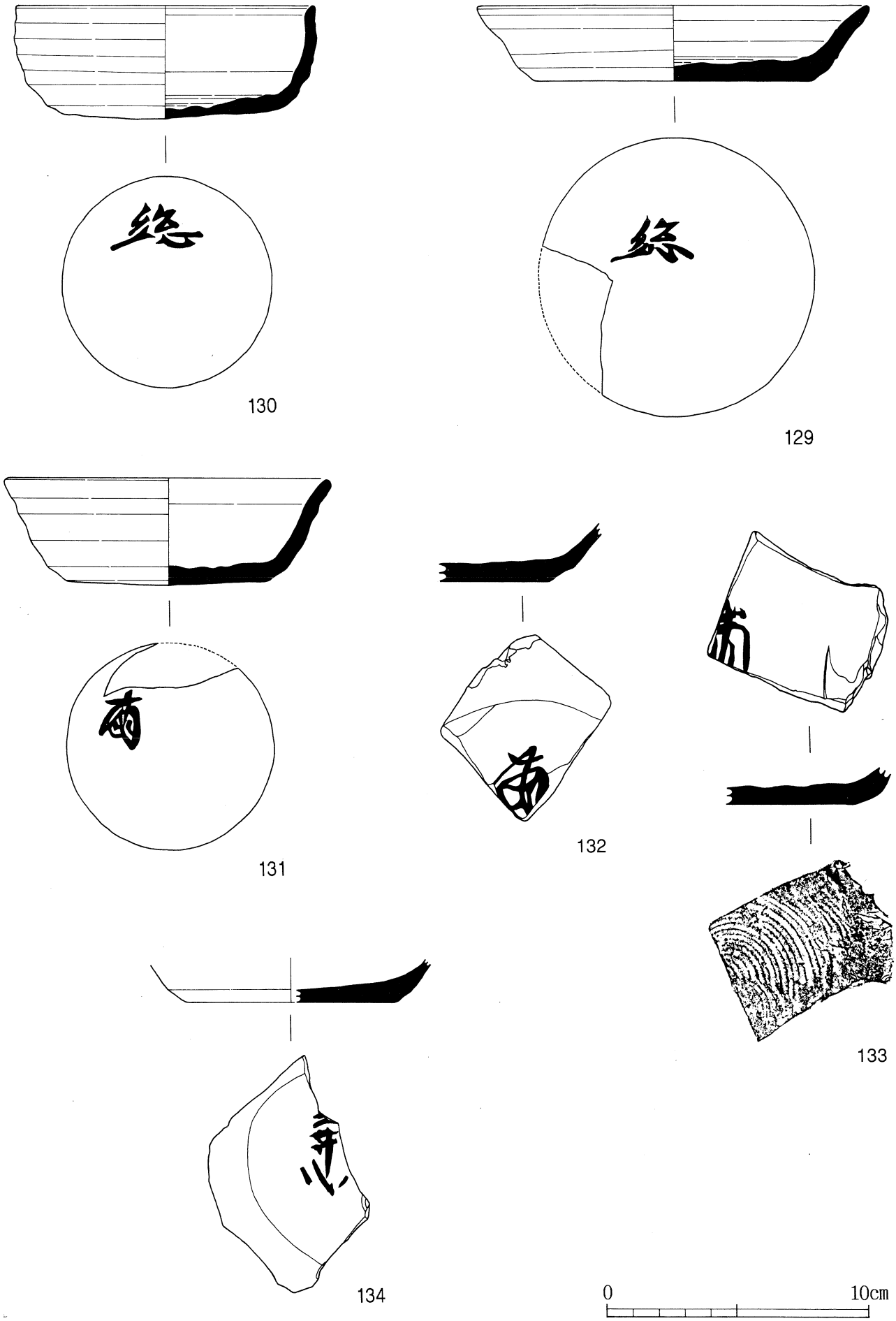


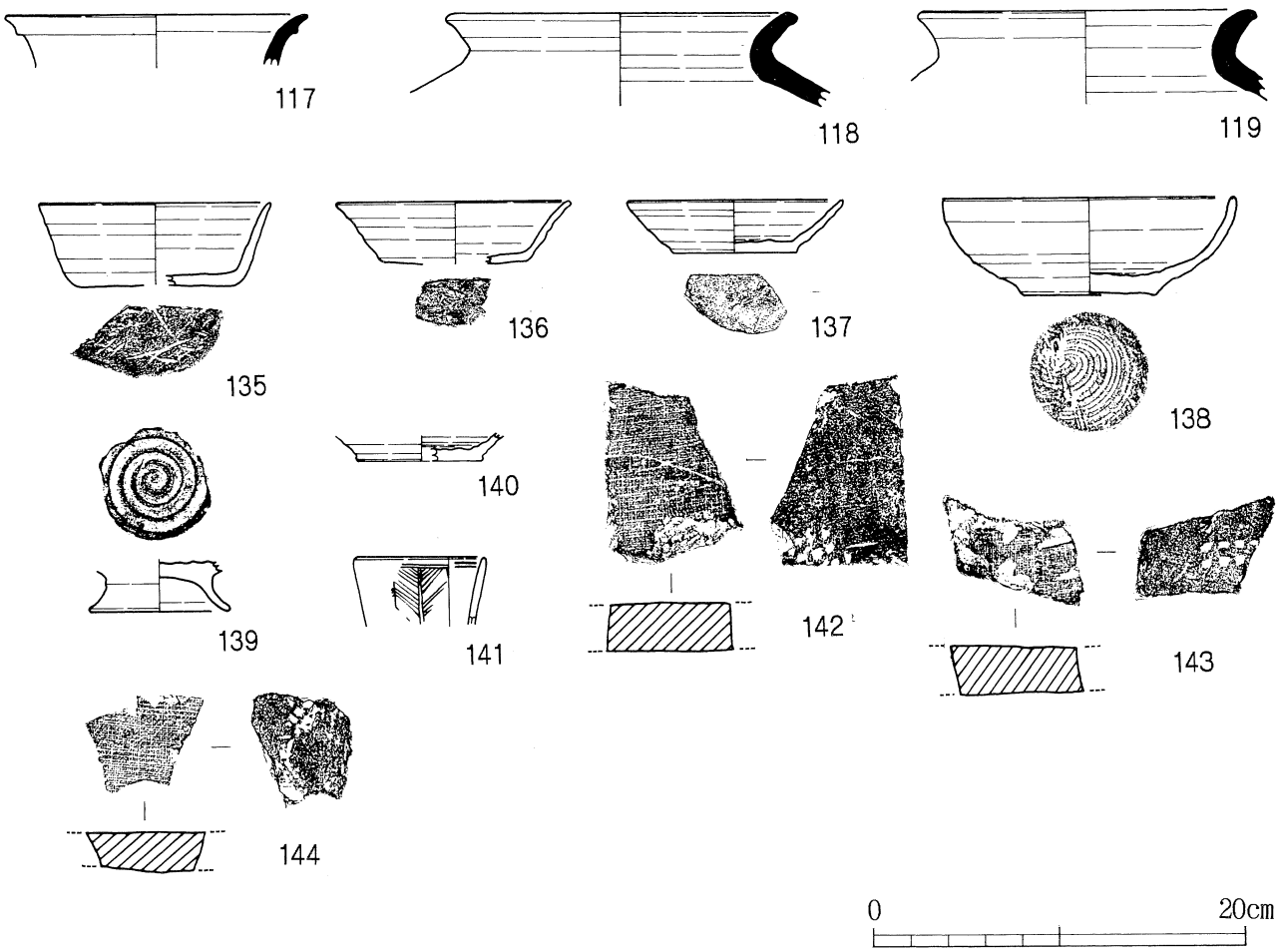
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
20cm

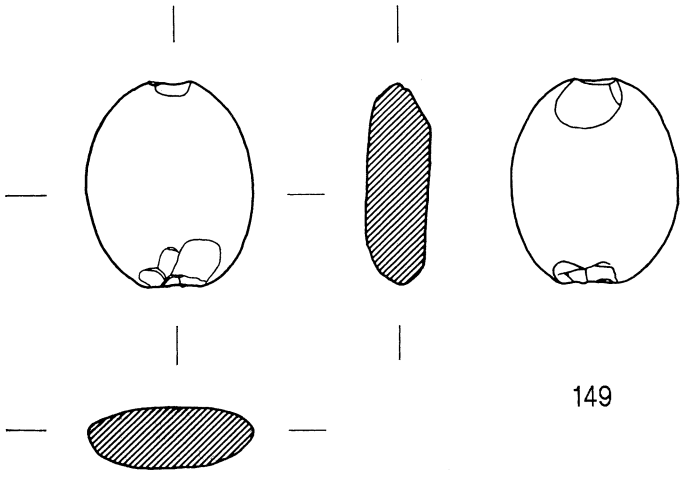

48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
0
20cm


87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
0
20cm

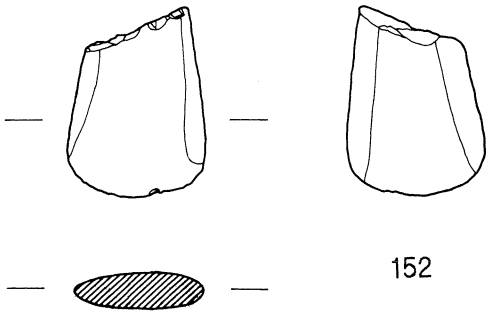

120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
10cm


130
129
131
132
133
134
0
10cm

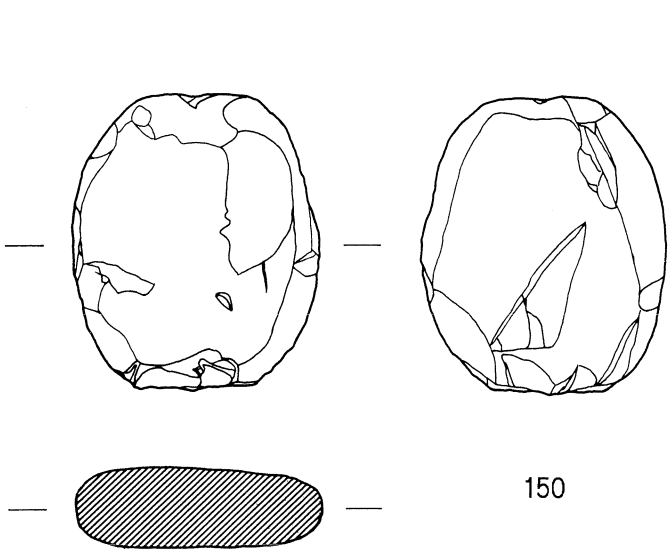

117
118
119
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
0
20cm



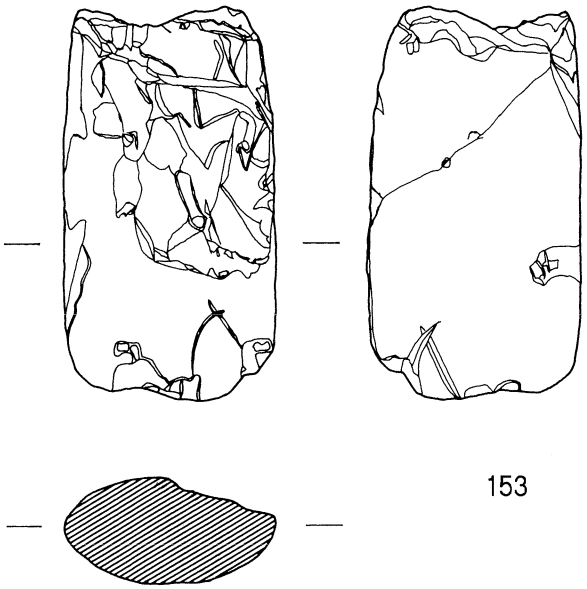
149



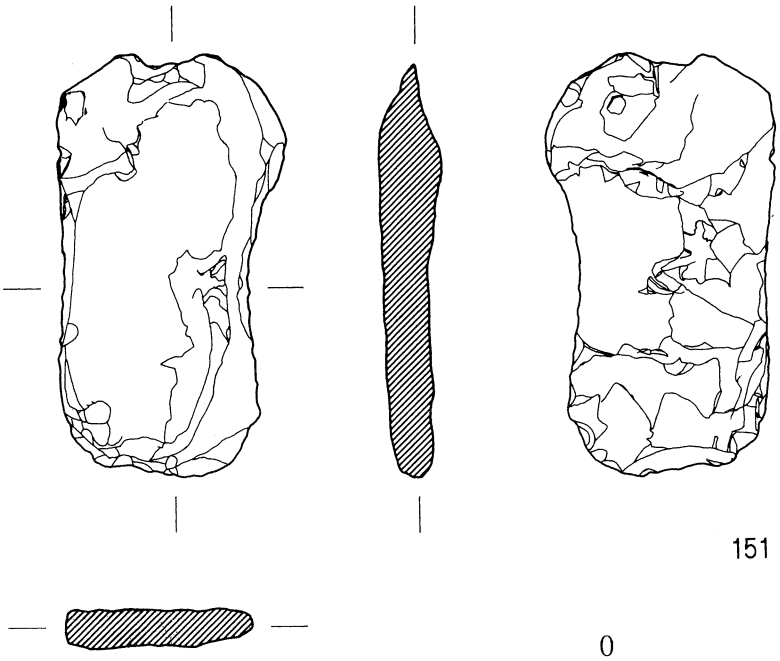
152



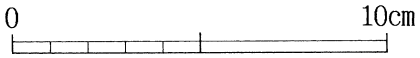
150

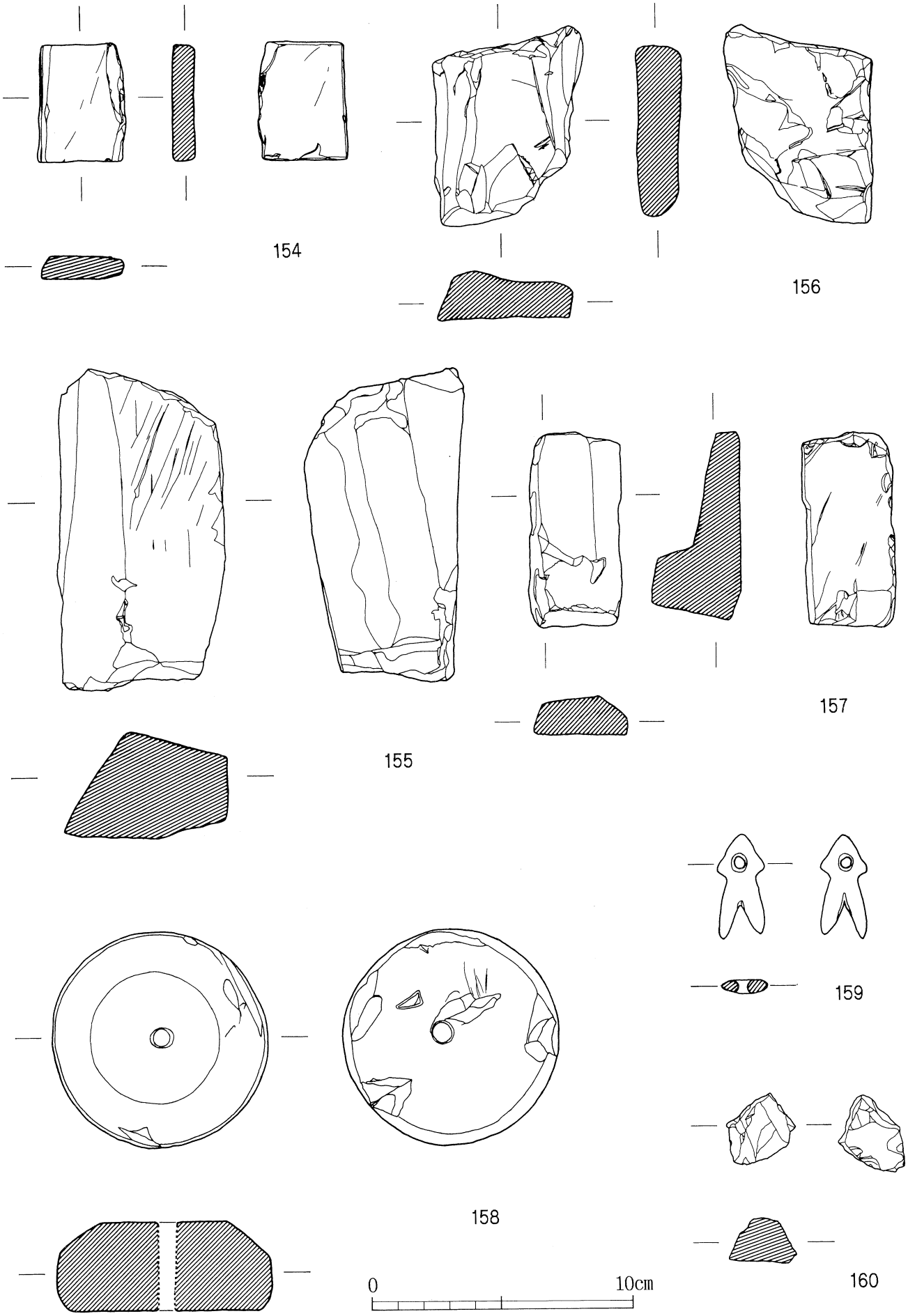


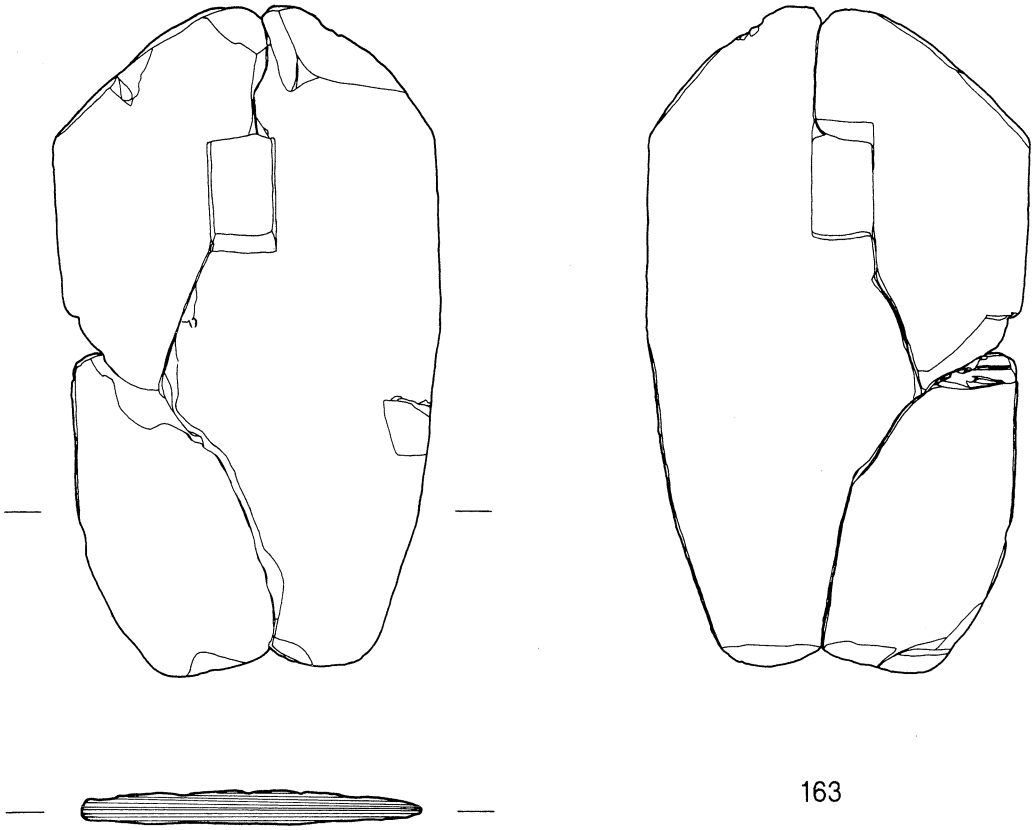
153



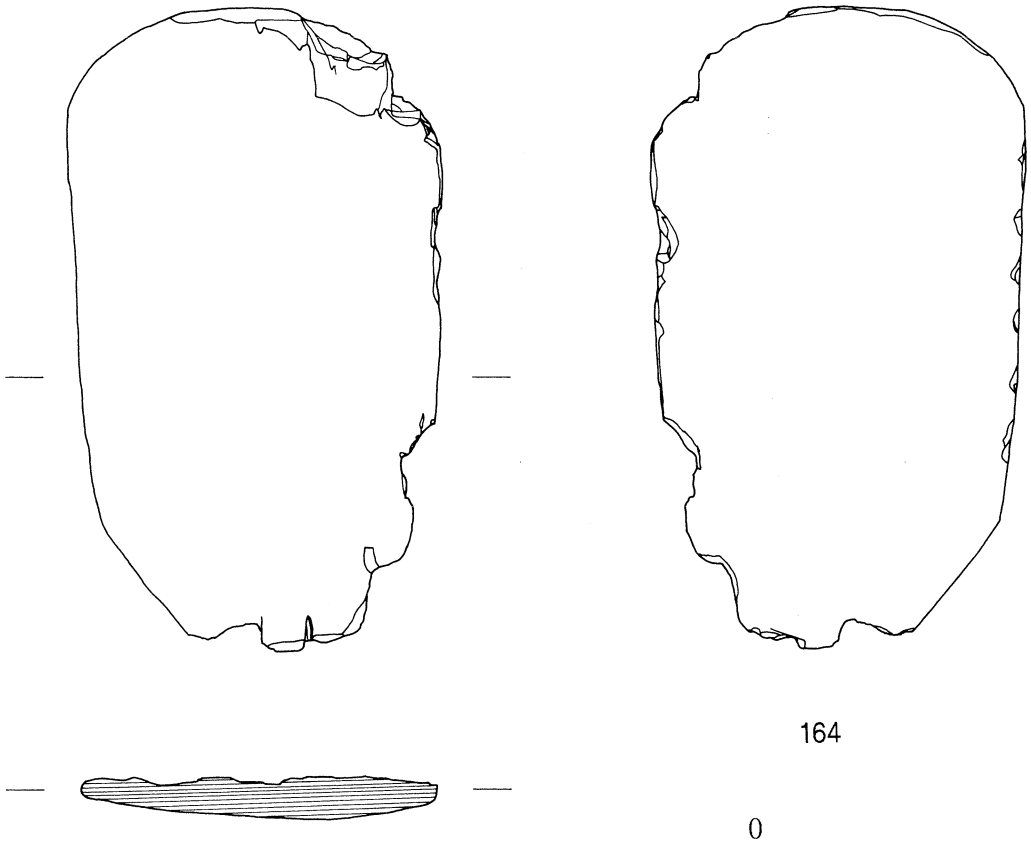
151




154
156
157
155
159
158
160
0
10cm

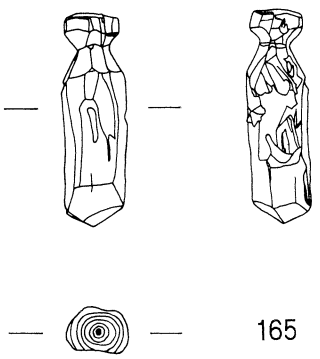


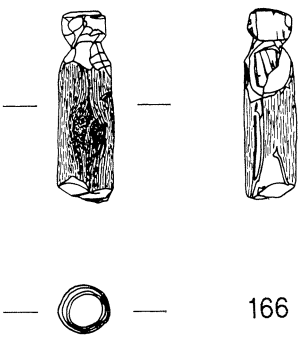
163

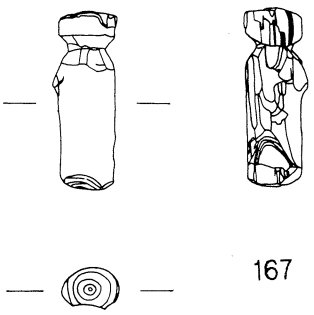


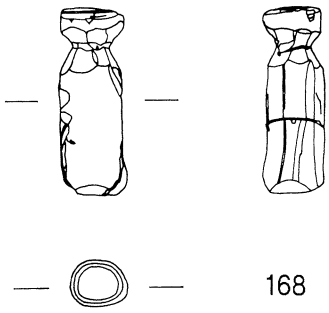
164

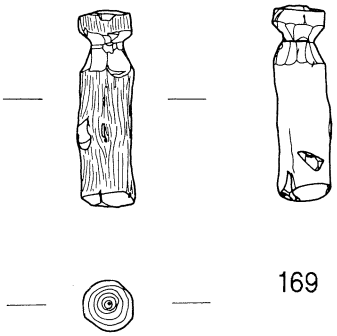
0　20cm

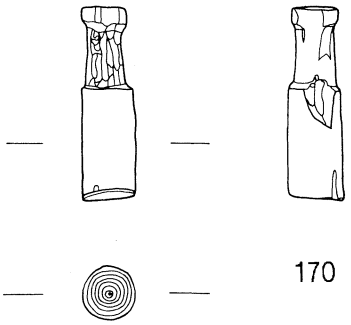

165

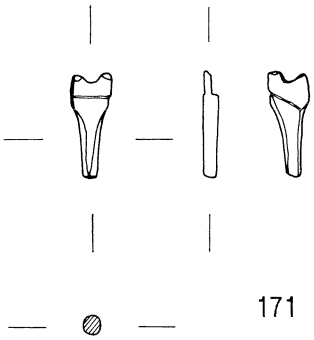

166

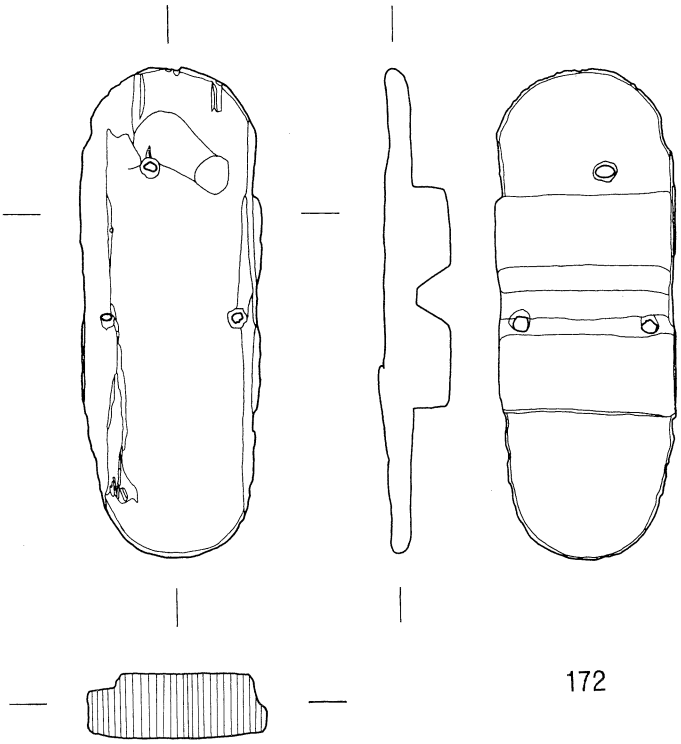

167

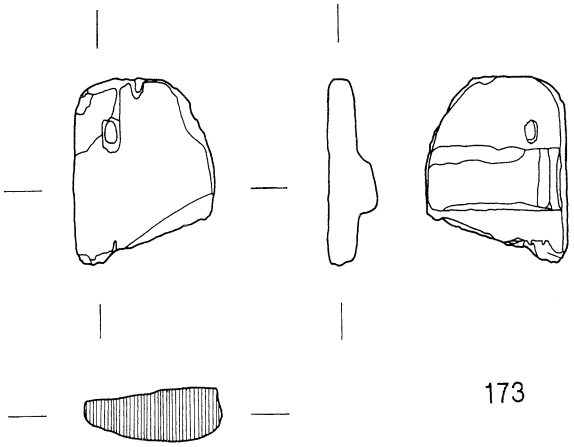

168

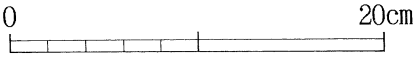

169

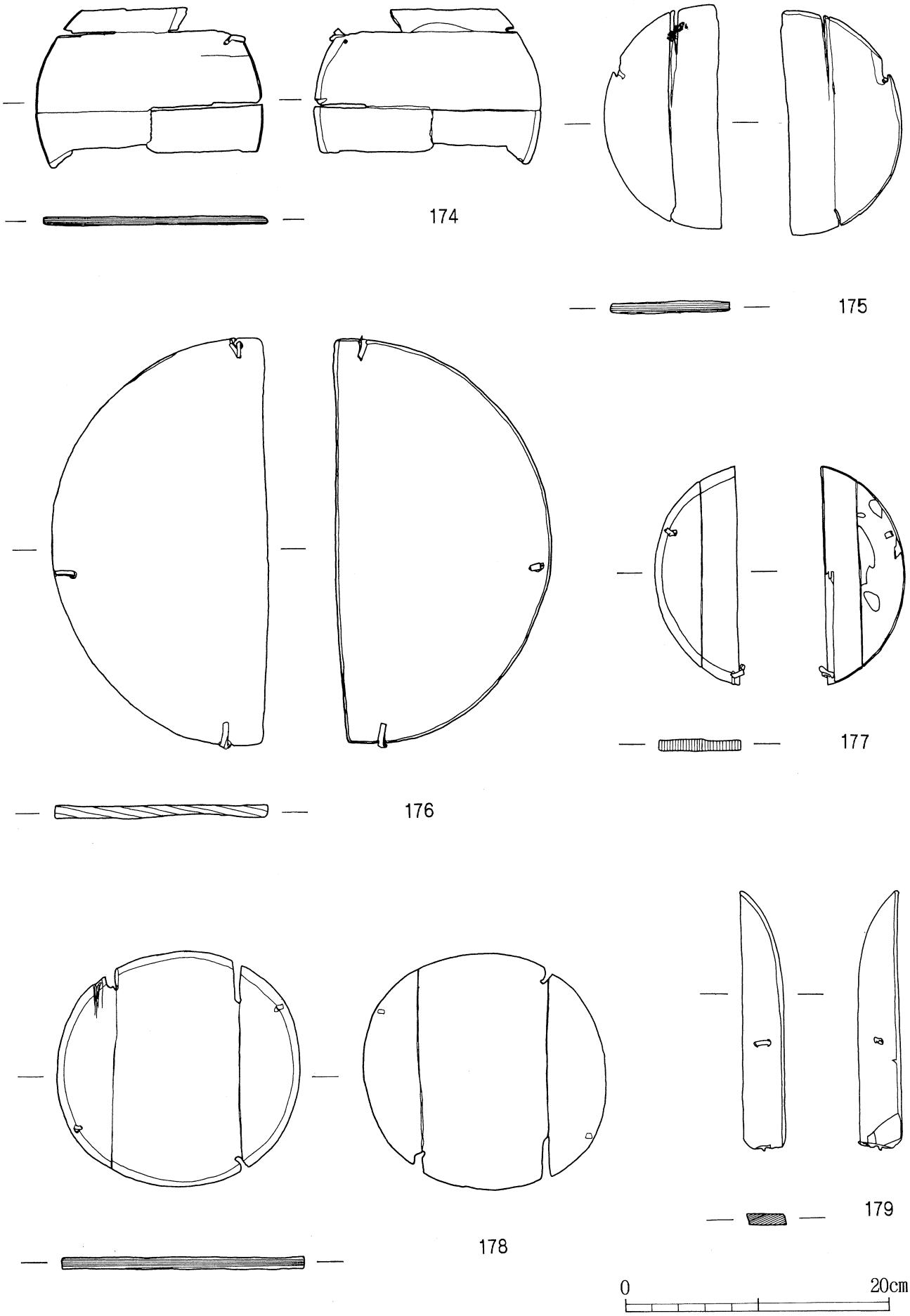

170

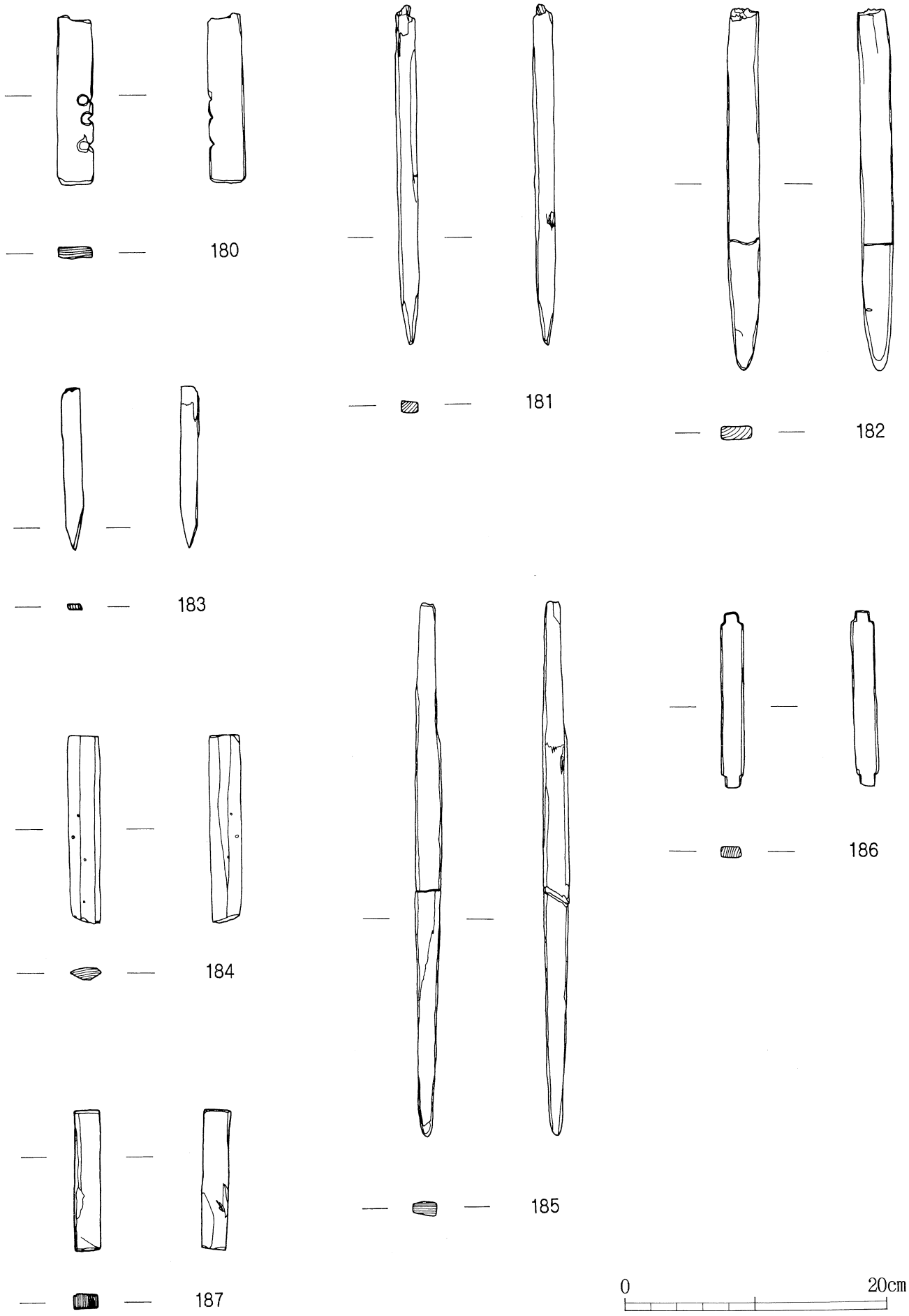

171

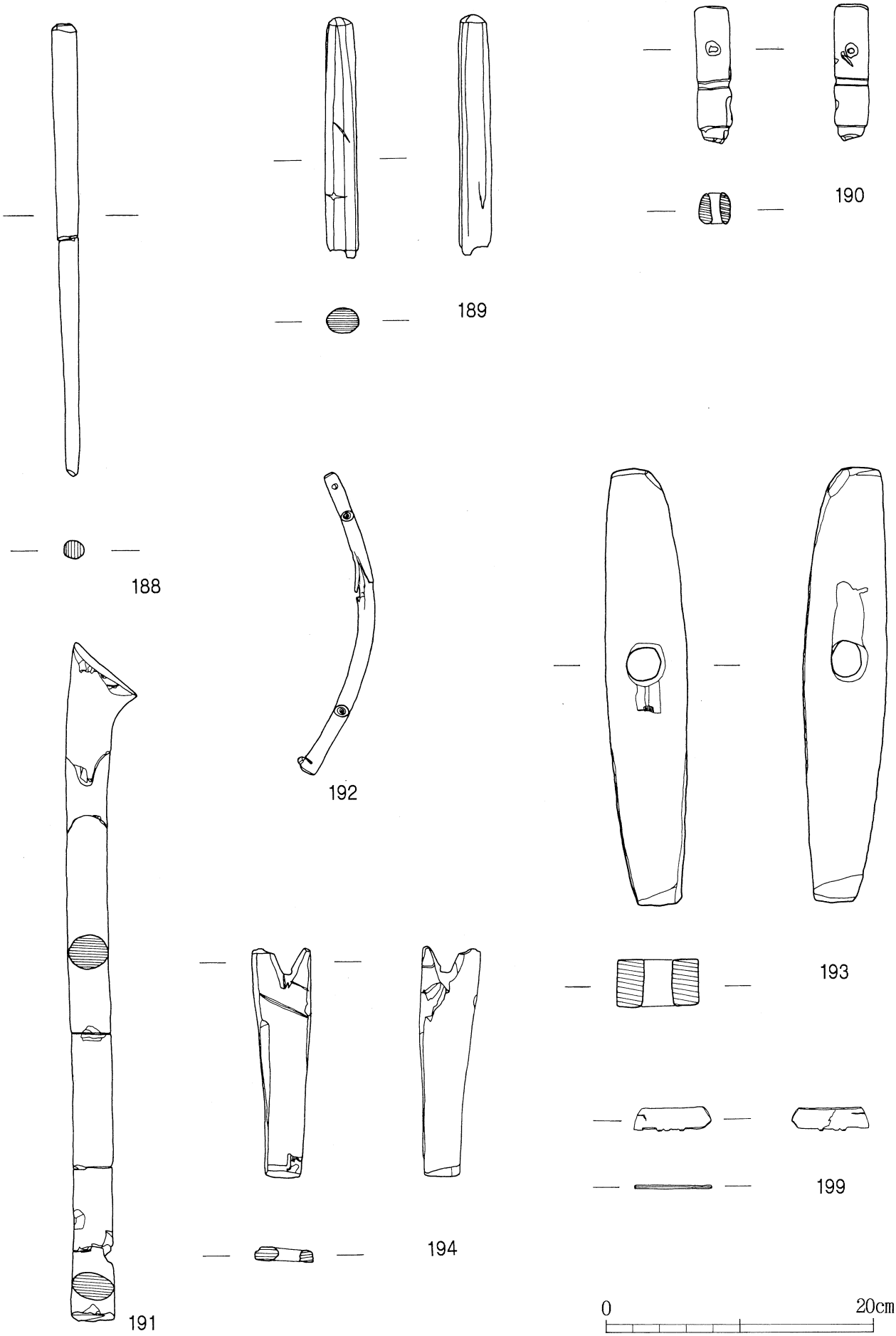

172

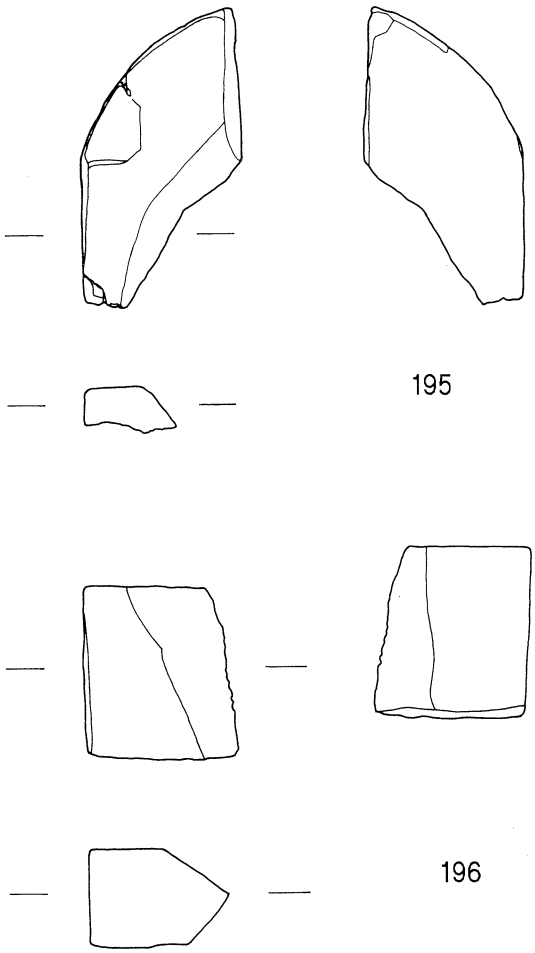

173

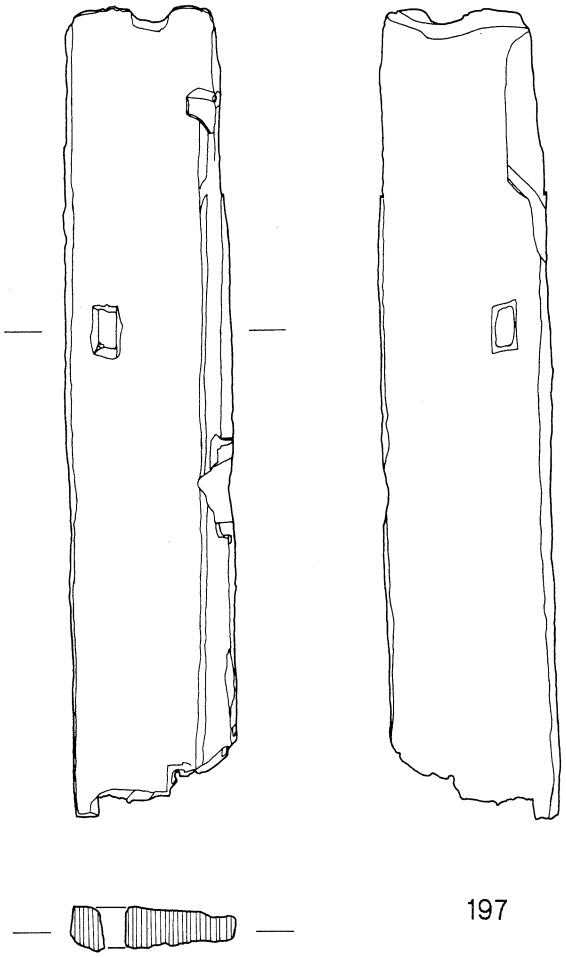


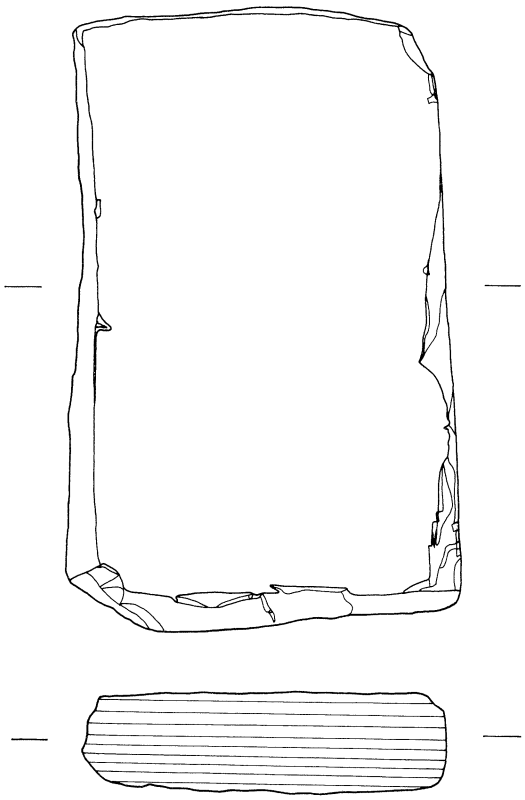

174
175
176
177
178
179
0
20cm

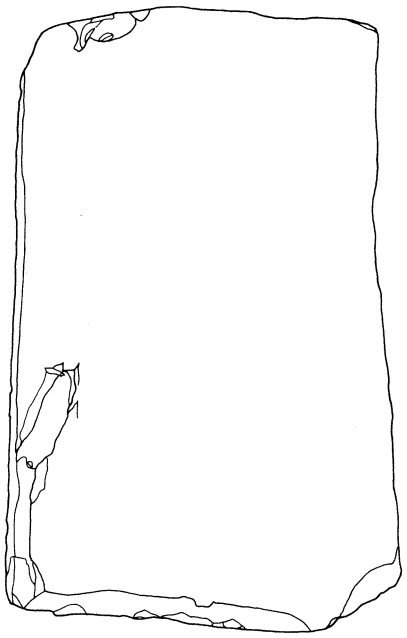

180
181
182
183
184
185
186
187
0
20cm


188
189
190
191
192
193
194
199
0
20cm

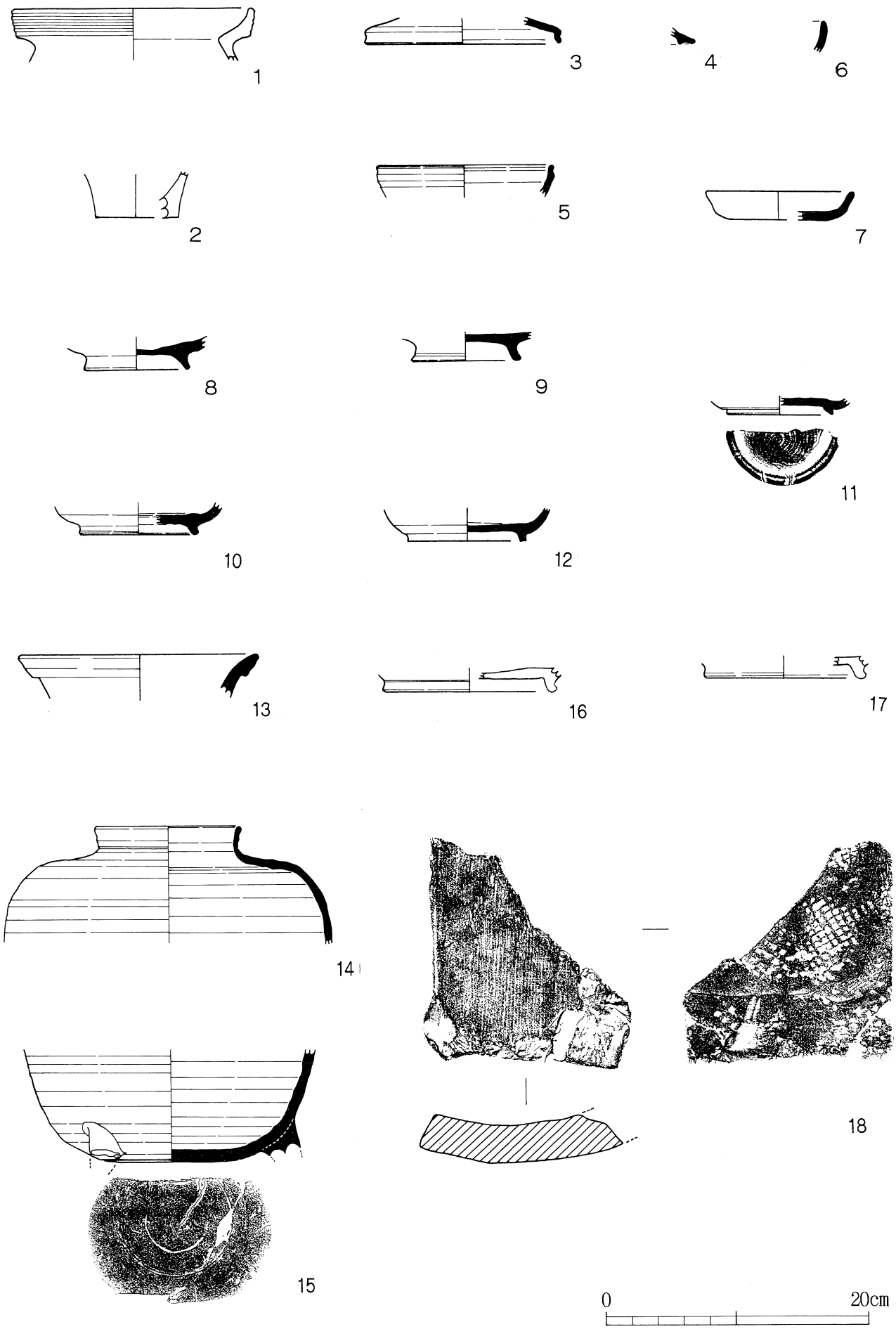


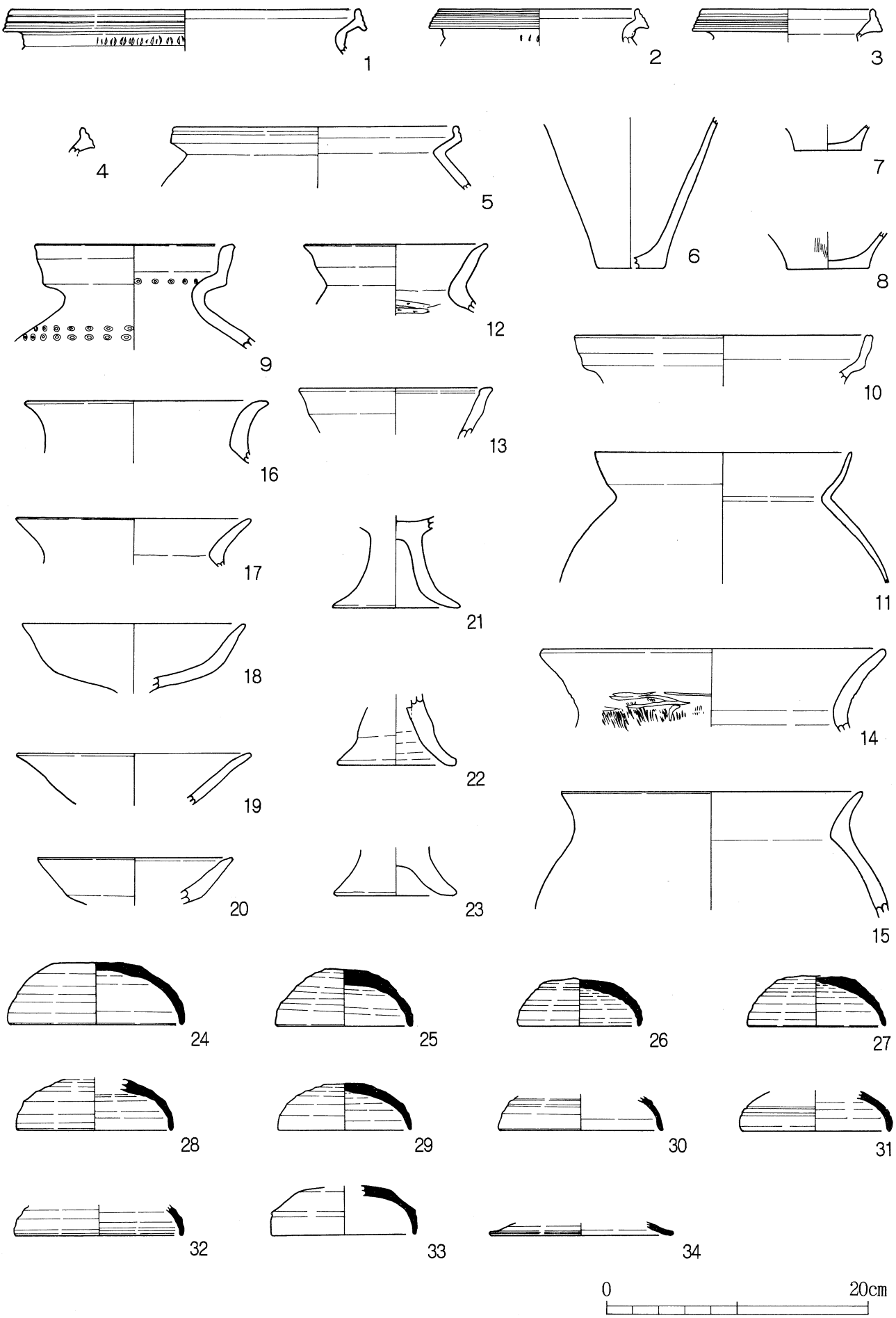


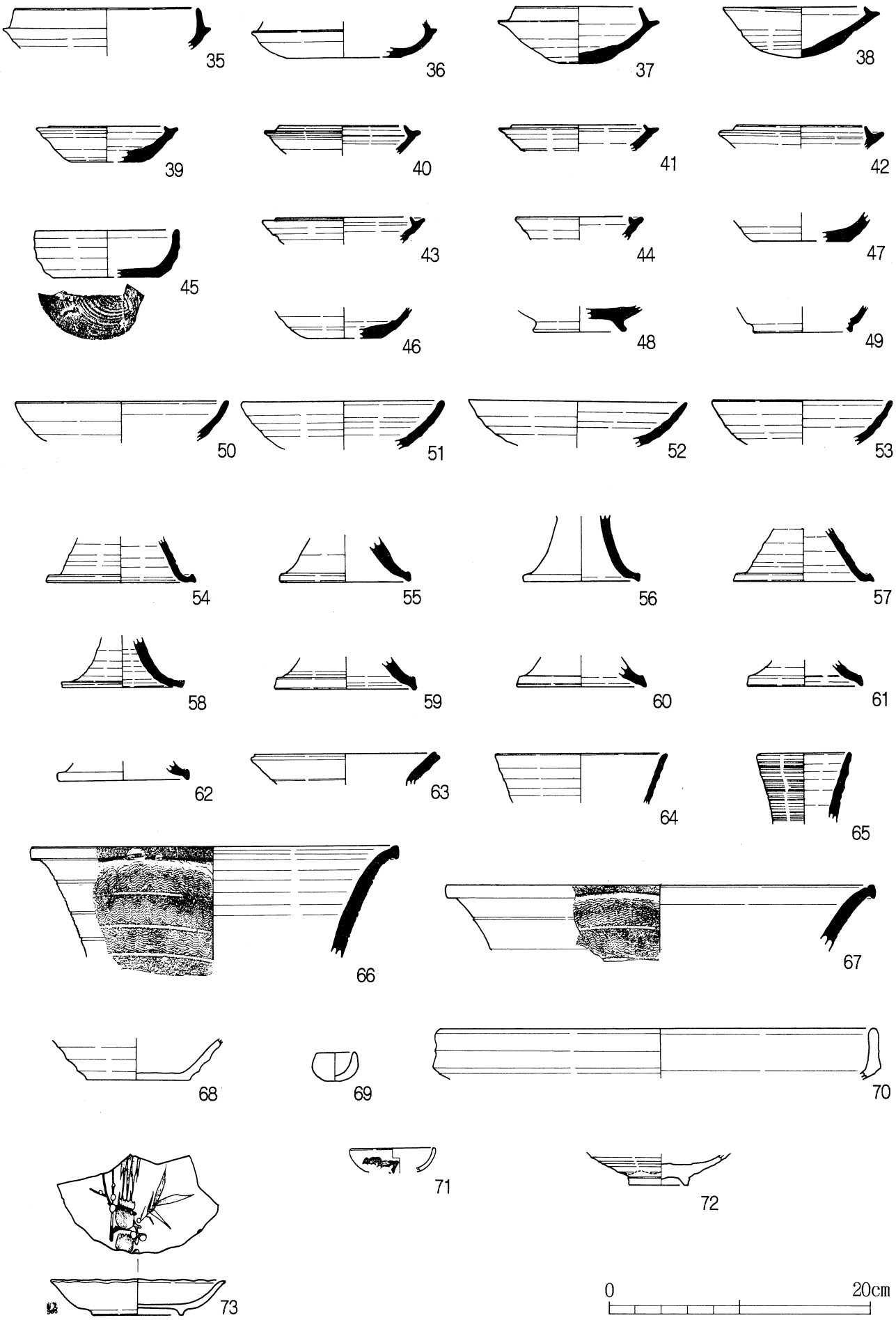


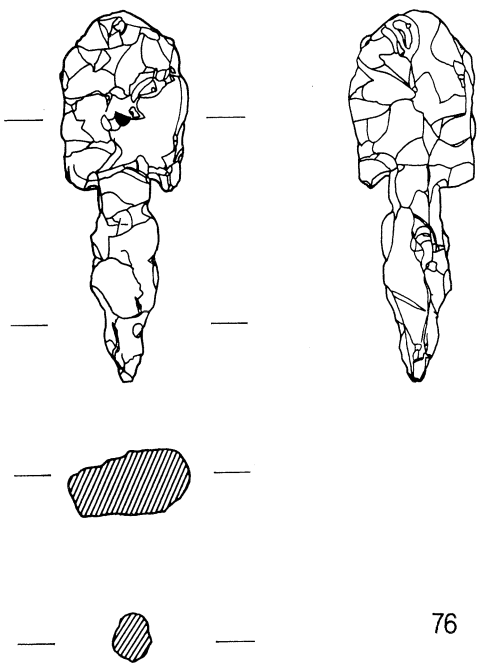


0　20cm

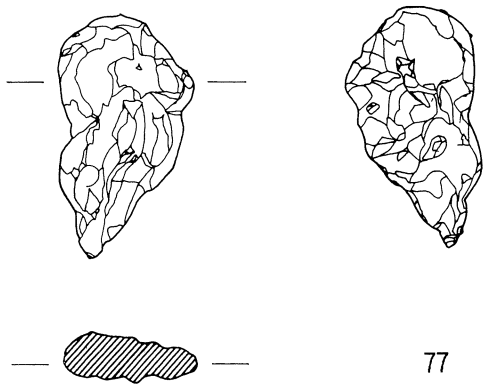

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0
20cm


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
20cm

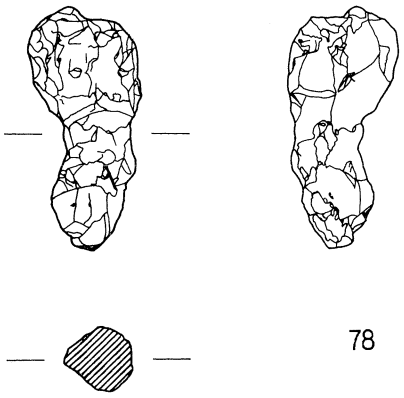

35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
47
45
46
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
0
20cm



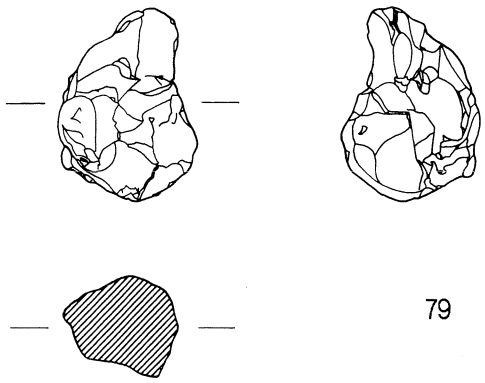
76



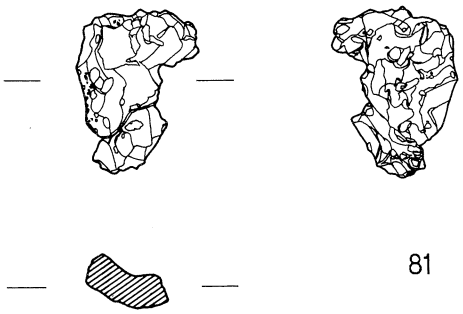
77



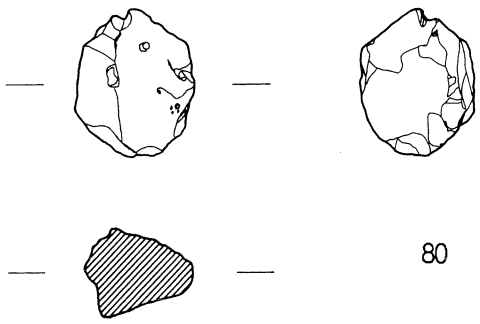
78



79

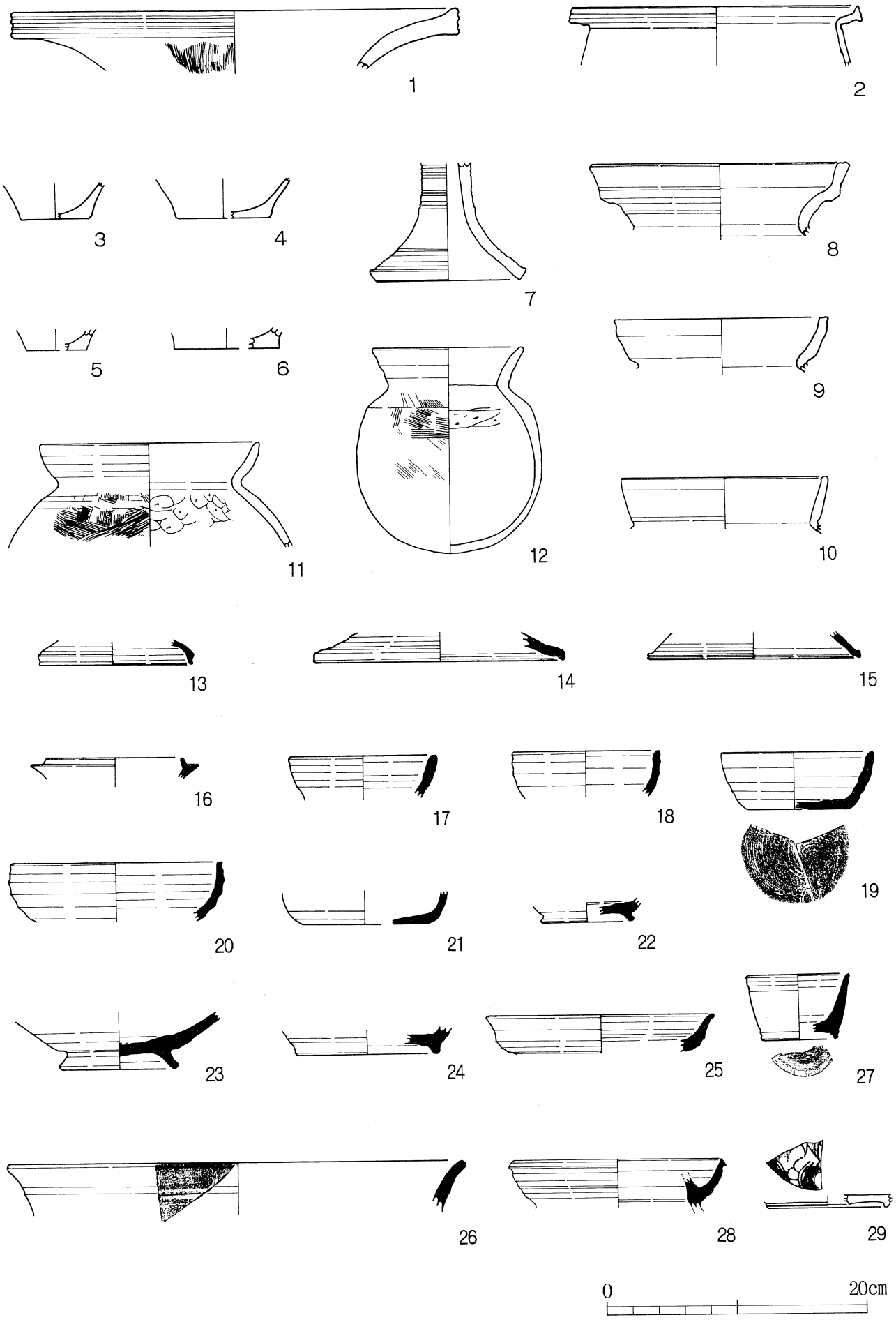


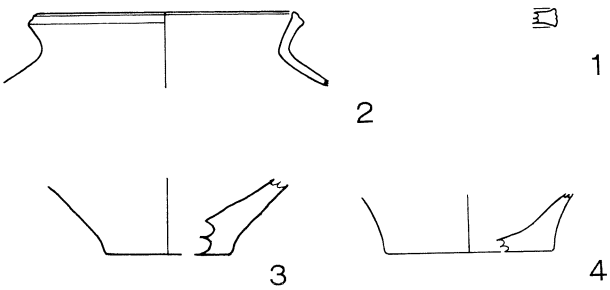
81



80

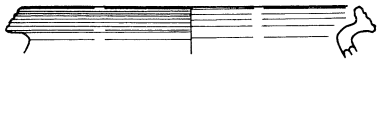
0　10cm

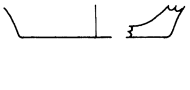

1
2
3
4
7
8
5
6
9
11
12
10
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
27
26
28
29
0
20cm



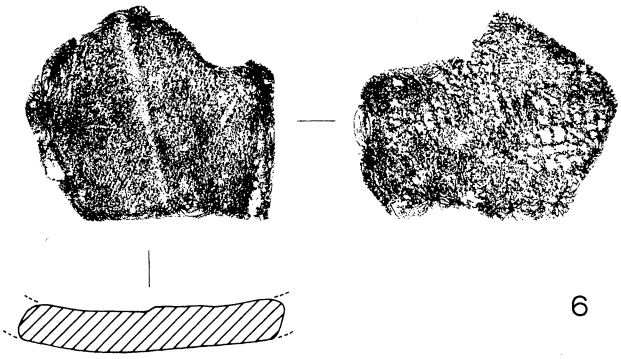
1トレンチ出土の遺物(1～4)

2トレンチ出土の遺物(5)

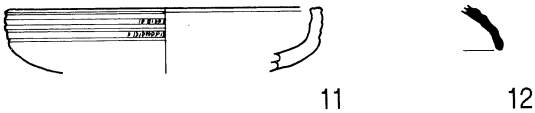




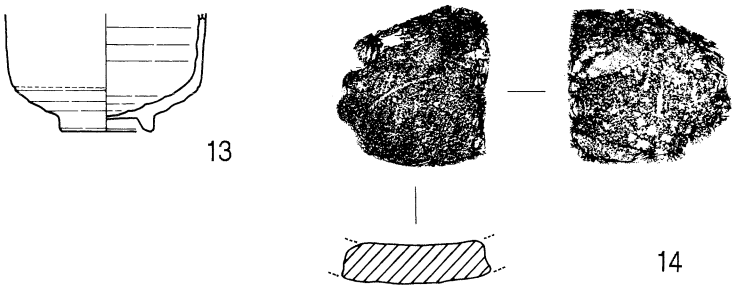
4トレンチ出土の遺物(9・10)



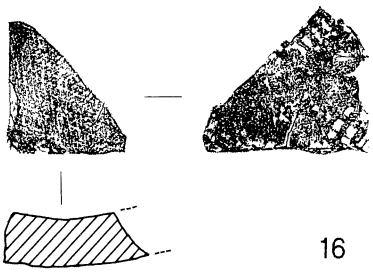
2－3トレンチ出土の遺物(6)

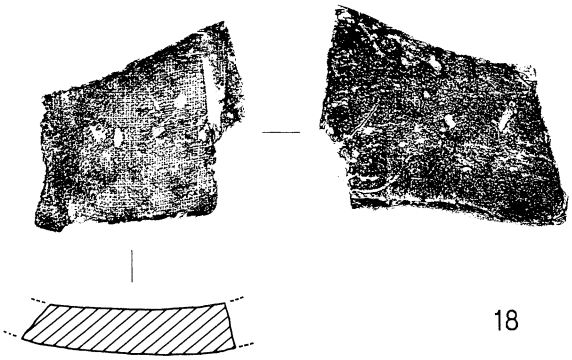


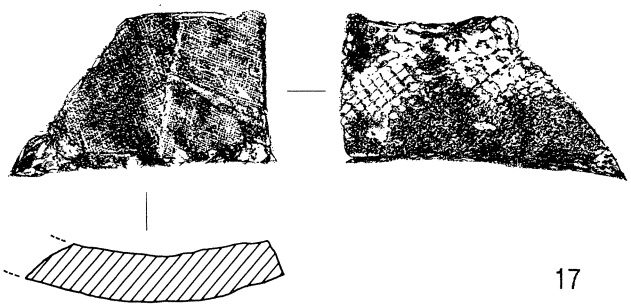
7トレンチ出土の遺物(11・12)



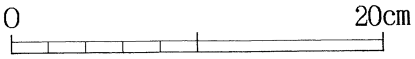
9トレンチ出土の遺物(13・14)

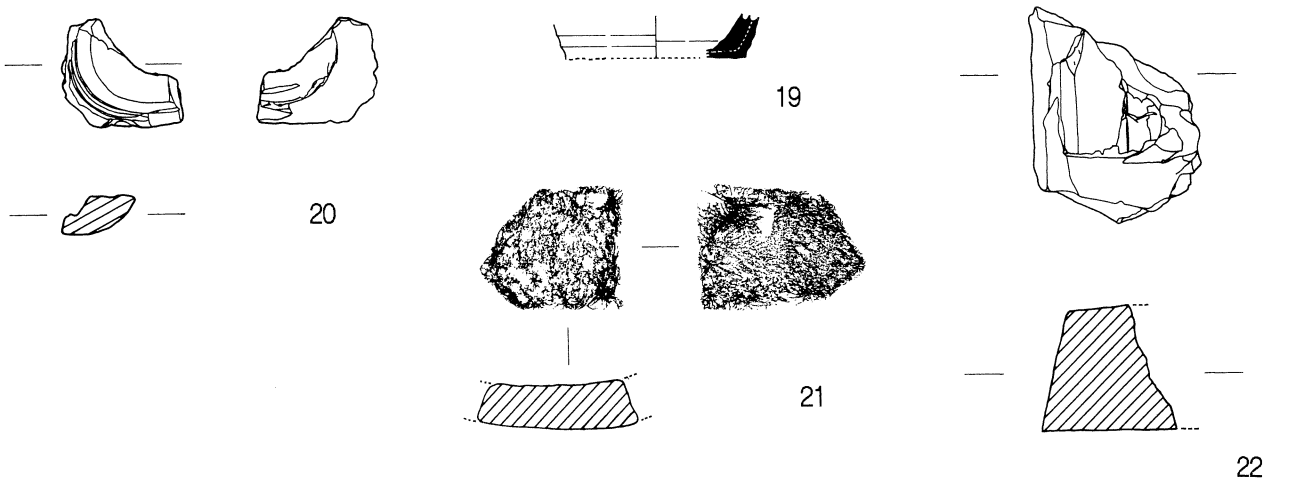




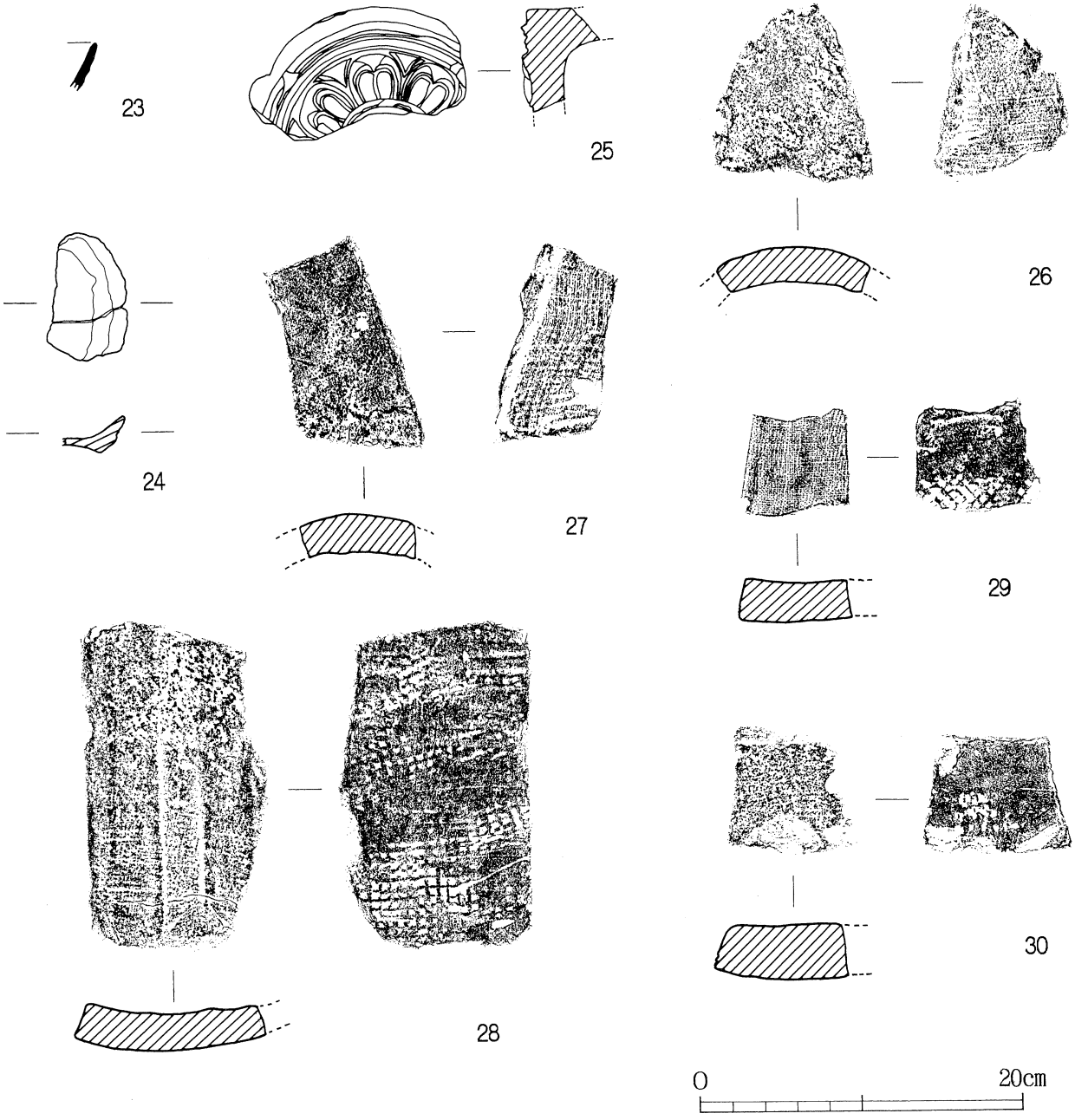


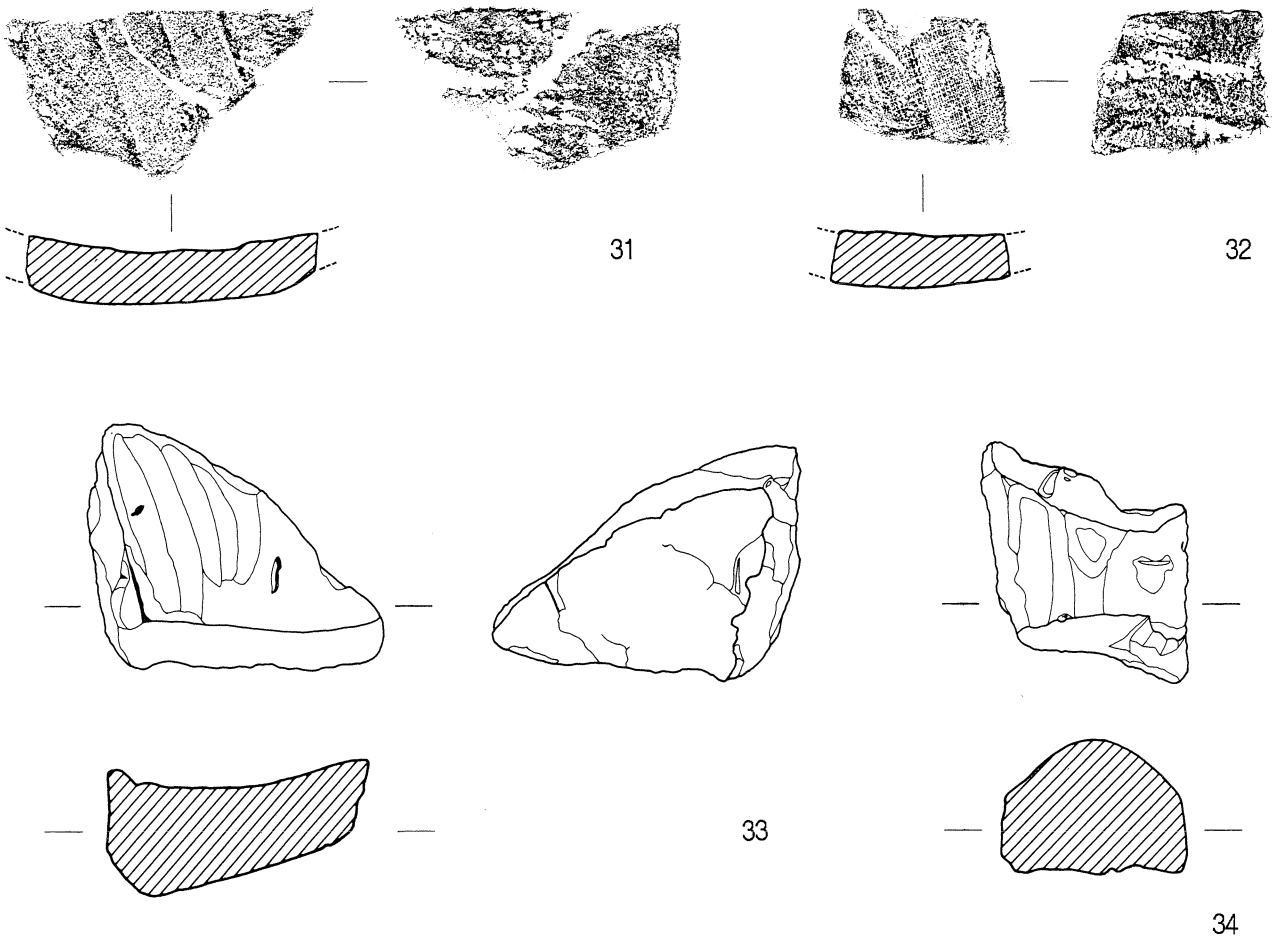
10トレンチ出土の遺物(16～18)



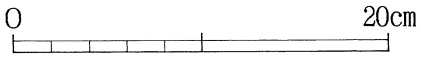


12トレンチ出土の遺物(19～22)

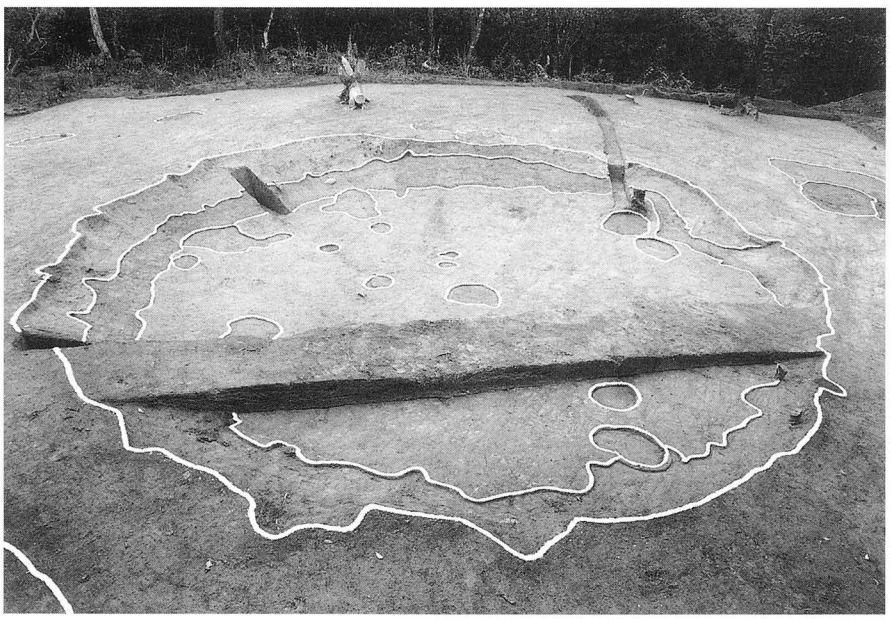




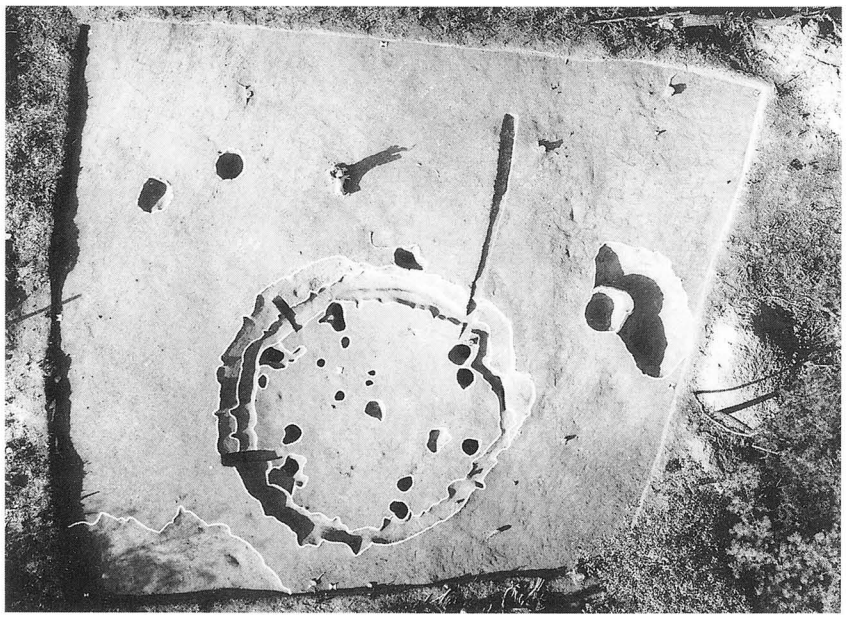
13トレンチ出土の遺物(23～34)



現況（南から）

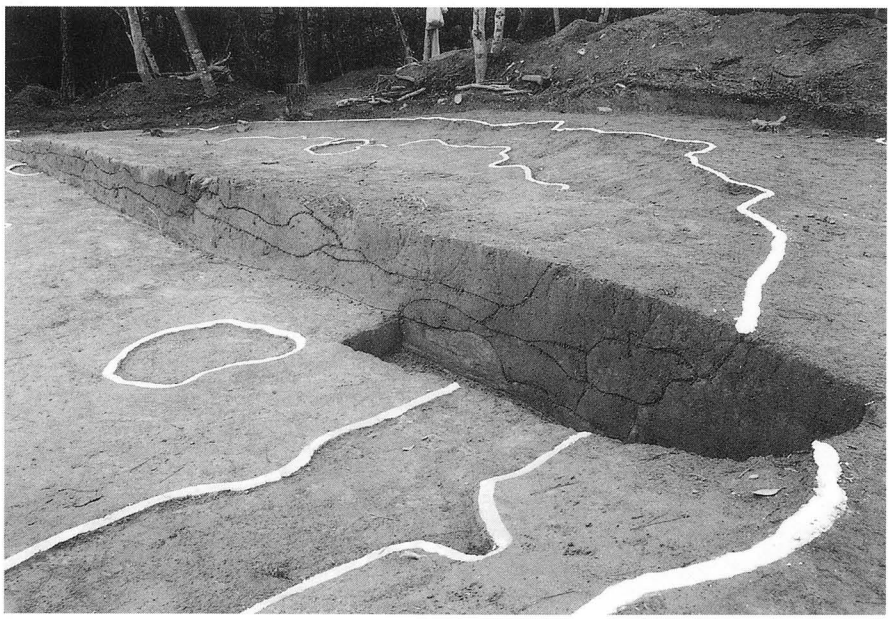


SB01 検出状況（南東から）



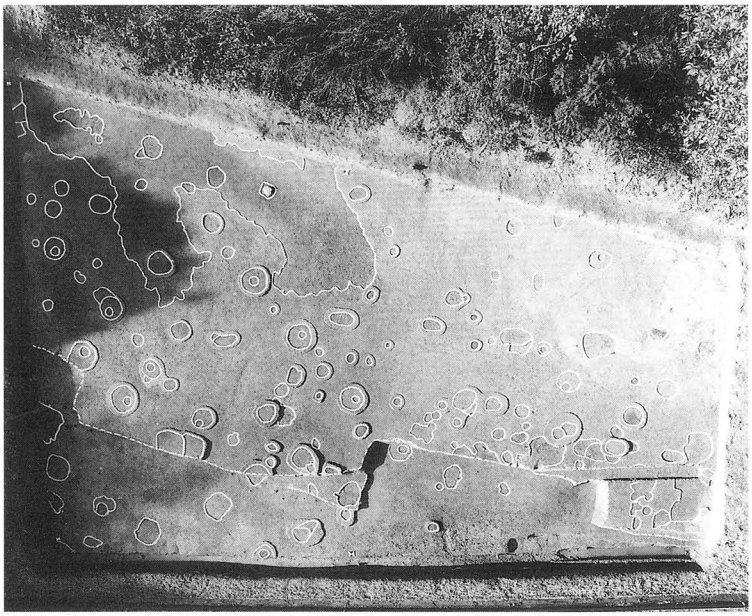
全景

調査区北東壁土層断面
（南から）



SB01 畦断面（西から）

現況（北東から）



遺構検出状況全景

遺構検出状況全景（南西から）

遺構完掘後全景

遺構完掘後全景（南西から）

調査区南西壁土層断面
（北西から）